

# 大萱古窯跡群発掘調査報告書 I

— 牟田洞古窯跡・大萱窯下古窯跡 —

大萱古窯跡群発掘調査報告書

I

— 牟田洞古窯跡・大萱窯下古窯跡 —

二〇一六

岐阜県 可児市教育委員会

2016

岐阜県 可児市教育委員会

# 大萱古窯跡群発掘調査報告書 I

— 牟田洞古窯跡・大萱窯下古窯跡 —

2016

岐阜県 可児市教育委員会



## 序

可児市東部の久々利（大萱地区）にある大萱古窯跡群は、安土桃山～江戸時代初期にかけての美濃桃山陶（黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部）の生産地として知られ、大窯（16-17C）の牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡、連房式登窯（17C）の弥七田古窯跡からなります。牟田洞古窯跡では、国宝志野茶碗「卯花塙」が焼かれたと言われるなど、過去の採集遺物からこれらの窯跡で焼かれた製品はある程度分かっています。しかし、遺跡の内容については不明な点が多くありました。

可児市では、荒川豊蔵資料館や土地の寄贈を機に、この敷地内にある牟田洞古窯跡の試掘調査を行うことにしました。また、大萱窯下古窯跡と弥七田古窯跡についても試掘調査を行い、古窯跡群として一体的に保護するために国史跡指定を目指すことにしました。本書は、平成24～27年にかけて実施したその調査成果の一部をまとめたものです。

この報告書の発刊を契機とし、後世に伝えるべき歴史遺産である大萱古窯跡群の保存を第一に考え、近接する荒川豊蔵資料館や人間国宝荒川豊蔵の足跡とともに、「美濃桃山陶の聖地」として整備活用していきたいと考えます。

最後になりましたが、調査にご理解を賜りました地権者の皆様、調査を指導頂きました調査指導委員会の先生方、文化庁並びに関係者の皆様に、厚くお礼を申し上げます。また、ご支援を賜りました地元の久々利及び大萱地区の皆様方にも、厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

可児市教育委員会  
教育長 籠橋 義朗





# 例 言

1. 本書は、岐阜県可児市久々利柿下入会352番地における大萱牟田洞古窯跡群（21214-07548）、可児市久々利313番地1外における窯下古窯跡（21214-04887）の保存目的の発掘調査報告書である。なお、牟田洞古窯跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として「大萱牟田洞古窯跡群」という名で登録されているが、県史跡の名は「牟田洞古窯跡」であり、地元の人々や過去の研究史、刊行物でも「牟田洞古窯跡」という名称が用いられているため、本書では「牟田洞古窯跡」として記載する。また、窯下古窯跡は「窯下」という名前がつく窯跡が他地域にもあり、混同を避けるため、本報告書では「大萱窯下古窯跡」という名称を用いる。
2. 発掘調査は可児市教育委員会が主体となり、愛知学院大学が協力している。市教育委員会の調査部分は長江真和が担当し、愛知学院大学調査部分は藤澤良祐が担当した。なお、愛知学院大学調査部分は本書にも載せるが、詳細は大学が刊行する報告書に記載される。
3. 調査は、平成24年度以降、年度ごとに文化庁の国庫補助金（市内遺跡発掘調査等）を受けて実施した。
4. 調査期間及び調査組織は下記のとおりである。

## 調査期間

平成24年度	牟田洞古窯跡（測量・磁気探査）	12月12日～2月28日
平成25年度	牟田洞古窯跡	8月23日～10月2日
	大萱窯下古窯跡	2月5日～3月24日
平成26年度	牟田洞古窯跡・大萱窯下古窯跡	8月18日～10月14日
平成27年度	牟田洞古窯跡	8月19日～10月2日

## 調査組織

教育長	籠橋 義朗
教育委員会事務局長	高木 美和
（教育）文化財課長	長瀬 治義
文化財係長	富賀見昌昭（平成25年度）
歴史資産整備係長（文化財係長）	大津 誠（平成26～27年度）
文化財係長	安藤 裕康（平成27年度）
主任	長江 真和（調査担当）
主事	織田 真琴（平成27年度）

## 指導組織

大萱古窯跡群調査・保存・整備指導委員会（平成25年4月1日設置）  
榎本 徹 岐阜県現代陶芸美術館（委員長）

田口 誠一	久々利自治連合会（副委員長）
藤澤 良祐	愛知学院大学（副委員長）
赤沼 多佳	三井記念美術館
福島 金治	愛知学院大学
小野 健吉	奈良文化財研究所
伊藤 嘉章	京都国立博物館（平成26年度までは東京国立博物館）
平尾 政幸	京都市埋蔵文化財研究所
原 憲司	可児陶芸協会（平成25・26年度）
守谷 宏一	可児陶芸協会・大萱組（平成27年度）
林 順一	土岐市教育委員会
岩井 立弥	多治見市教育委員会（平成25・26年度）
山内 伸浩	多治見市教育委員会（平成27年度）
加藤 匡子	大萱組（平成27年度）

5. 調査参加者は下記のとおりである。

石崎愛梨 石浜莉那 伊藤真央 上田悠太 宇佐美幸加 太田良平 加賀誠治 垣見太郎  
 片岡優歩 片山尚樹 加藤友也 亀谷汐莉 北岡久実 木藤穰 甕澤里奈 小林万容  
 小山美紀 佐藤美鈴 杉山敬亮 杉山康 鈴木愛実 堰上夏穂 高野夏姫 寺尾希美江  
 遠山皓一 遠山琴音 堂込健介 中村幸子 長谷川恵子 服部梓 濱崎健 半場千晴  
 日比野将之 廣瀬充人 福田真也 堀内有 堀部真弘 本田博志 松本奈穂 前田友子  
 水野テツ子 三ツ本樹純 宮田実歩 森秀人 森まどか 森村知幸 山本駿

6. 本書の執筆は主に長江真和が担当し、第1章の植生調査に関連のコメントについては、守谷啓子氏に原稿を依頼、愛知学院大学調査部分である牟田洞古窯跡の6・11～13トレンチは愛知学院大学が発行する『大萱古窯跡群 牟田洞窯跡』の文章・図面・写真を引用し、文章については了解を得て一部編集している。キャプションやレイアウト等に整合性がとれていないことについてはご容赦願いたい。また愛知学院大学調査部分は、執筆者名を各文末に記した。

編集は、文化財課長 長瀬治義の指導のもと長江が行った。市教育委員会の実測分は長江・本田・寺尾が行い、トレースは長江が行った。市教育委員会調査部分の遺構と遺物については、長江が写真撮影を行った。

7. 磁気・レーダー探査は奈良文化財研究所に、科学分析は(株)パレオ・ラボに、地形測量業務は株式会社イビソク、株式会社日建技術コンサルタントに委託した。

8. 遺物の図面及び写真は、口縁部や底部など土器の特徴がわかるものを選別して掲載し、小破片は掲載していない。

9. 現地調査及び整理作業の過程で、下記の各氏及び各機関に多大なるご指導とご協力を賜った。深く感謝する。

（敬称・肩書略、五十音順）

青山双男 荒川広一 有本空玄 石松智子 井上喜久男 今城未知 岩井理 梅田裕孝  
近江俊秀 小川貴司 小澤一弘 尾野善裕 海邊博史 加藤孝造 加藤憲彦 加藤緑  
加藤弥右衛門 河津哲行 黒岩達大 後藤秀樹 近藤大典 齊藤基生 佐野素子 鈴木蔵  
瀧口喜兵衛 高木典利 竹谷雅彦 立花昭 手島敦 豊場惺也 豊場佳子 永井宏幸  
中畷茂 ナワビ矢麻 西口和彦 禰宜田佳男 服部郁 張替清司 樋口雅之 平井義敏  
降谷哲男 松野晶信 三浦徹大 水野嘉夫 三輪晃三 武藤忠司 守谷啓子 山崎昌  
山本智子 吉田喜彦 可児陶芸協会 岐阜県立多治見工業高等学校 久々利自治連合会  
奈良文化財研究所 丸山組 元久々利組

10. 本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市教育委員会（可児郷土歴史館及び収蔵庫）で保管している。

## 凡 例

1. 遺物図版の縮尺は主に1/3であるが、一部1/4としている。
2. 遺物実測図中の一点破線は施釉範囲及び推定線を示す。
3. 遺物実測図中の黒塗りは鉄絵を示す。
4. 遺物観察表中の（ ）の数值は復元値や残存値を示す。
5. 遺物番号は、本文、遺物観察表、図版、写真図版の全てに共通する。
6. 今回の遺物名称は、出土資料をもとに過去に刊行されている報告書等を参考に、形態から下記のように分類した。  
茶碗……天目茶碗、丸碗、筒形碗、腰折碗、小天目茶碗（天目形の小杯）、小杯  
皿類……丸皿、端反皿、折縁皿、稜皿、襷皿、菊花形皿、輪花皿、灯明皿、中皿は直径15～20cmとし、直径20cm以上のものを口縁部の形態に関わらず大皿とする。口縁部の形態等が不明なものは「皿類」とする。  
鉢類……向付、鉢、片口鉢、挿鉢  
その他…茶入、壺、水滴、香炉、水指・建水、徳利

観察表では、器種名の前に「釉薬等」という欄を設け、それぞれの釉薬を記入している。桃山陶は、茶碗の形のみである瀬戸黒は「瀬戸黒筒形碗」、黄瀬戸は発色の良、不良に関わらず、線刻や胆礬、胴紐がみられるものや懐石食器であるものに「黄瀬戸」という名称を用いた。志野も発色の良、不良に関わらず、長石釉を施釉したものに志野という名称を用いている。

# 目 次

## 例 言

第1章 自然的・歴史的環境 .....	1
第1節 自然的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	1
第3節 牟田洞・大萱窯下古窯跡の過去の調査成果 .....	8
第2章 調査に至る経緯と経過 .....	11
第3章 牟田洞古窯跡 .....	16
第1節 踏査 .....	16
第2節 窯体の調査 .....	25
第3節 作業場の調査 .....	34
第4節 物原の調査 .....	64
第5節 過去採集資料 .....	80
第4章 大萱窯下古窯跡 .....	91
第1節 踏査 .....	91
第2節 窯体の調査 .....	99
第3節 物原の調査 .....	110
第4節 過去採集資料 .....	124
第5章 科学的調査 .....	132
第1節 磁気・レーダー探査成果 .....	132
第2節 大萱古窯跡群出土炭化材の樹種同定 .....	136
第3節 大萱古窯跡群より出土した陶器等の胎土および釉薬分析 .....	140
第6章 総括 .....	146
第1節 遺物 .....	146
第2節 窯跡の概要 .....	151
第3節 まとめ .....	152
第4節 大萱古窯跡群の重要性 .....	155

## 図版目次

図 1	周辺遺跡地図 (S=1/30,000) ……………	6
図 2	周辺遺跡地図 (S=1/2,500) ……………	7
図 3	小川栄一作成牟田洞図面……………	10
図 4	小川栄一作成大萱窯下図面……………	10
図 5	牟田洞・大萱窯下調査位置図……………	14
図 6	牟田洞古窯跡踏査概要図……………	18
図 7	牟田洞表採遺物 1 ……………	19
図 8	牟田洞表採遺物 2 ……………	20
図 9	牟田洞古窯跡地形測量図……………	22
図 10	牟田洞古窯跡 C-C' 横断図 ……………	23
図 11	牟田洞古窯跡 D-D' 横断図 ……………	23
図 12	牟田洞古窯跡 E-E' 横断図……………	24
図 13	10 トレンチ東壁土層図……………	27
図 14	10 トレンチ南壁土層図……………	27
図 15	10 トレンチ (1 号窯) 平面図……………	27
図 16	1 号窯左側壁見通図 ……………	27
図 17	1 号窯昇炎壁立面図 ……………	27
図 18	1 号窯右側壁見通図 ……………	27
図 19	1 号窯縦断図 ……………	27
図 20	牟田洞 10 トレンチ出土遺物 1 ……	28
図 21	牟田洞 10 トレンチ出土遺物 2 ……	29
図 22	7 トレンチ平面図 ……………	32
図 23	7 トレンチ東壁土層図 ……………	32
図 24	9-1、9-2 トレンチ南壁土層図……………	32
図 25	9-1 トレンチ北壁土層図 ……………	32
図 26	9-1、9-2 トレンチ平面図……………	32
図 27	9-1、9-2 トレンチ立面図……………	32
図 28	A-A' 土層断面図……………	32
図 29	9-1 トレンチ東壁土層図 ……………	32
図 30	牟田洞 7 トレンチ出土遺物 ……	33
図 31	牟田洞 9 トレンチ出土遺物 ……	33
図 32	8 トレンチ平面図 ……………	34
図 33	8 トレンチ東壁土層図 ……………	34
図 34	8 トレンチ南壁土層図 ……………	34
図 35	牟田洞 8 トレンチ出土遺物 ……	35
図 36	6 トレンチ遺構図 ……………	40
図 37	牟田洞 6 トレンチ出土遺物 1 ……	41
図 38	牟田洞 6 トレンチ出土遺物 2 ……	42
図 39	牟田洞 6 トレンチ出土遺物 3 ……	43
図 40	11 トレンチ遺構図……………	49
図 41	牟田洞 11 トレンチ出土遺物 1 ……	50
図 42	牟田洞 11 トレンチ出土遺物 2 ……	51
図 43	牟田洞 11 トレンチ出土遺物 3 ……	52
図 44	牟田洞 11 トレンチ出土遺物 4 ……	53
図 45	12 トレンチ遺構図……………	58
図 46	牟田洞 12 トレンチ出土遺物 ……	59
図 47	13 トレンチ遺構図……………	62
図 48	牟田洞 13 トレンチ出土遺物 ……	63
図 49	1 トレンチ平面図 ……………	67
図 50	1 トレンチ東壁土層図 ……………	67
図 51	1 トレンチ南壁土層図 ……………	67
図 52	2 トレンチ東壁土層図 ……………	67
図 53	2 トレンチ平面図 ……………	67
図 54	2 トレンチ南壁土層図 ……………	67
図 55	3 トレンチ平面図 ……………	67
図 56	3 トレンチ南壁土層図 ……………	67
図 57	3 トレンチ東壁土層図 ……………	67
図 58	4 トレンチ平面図 ……………	68
図 59	4 トレンチ北壁土層図 ……………	68
図 60	4 トレンチ東壁土層図 ……………	68
図 61	4 トレンチ南壁土層図 ……………	68
図 62	5 トレンチ北壁土層図 ……………	68
図 63	5 トレンチ東壁土層図 ……………	68
図 64	5 トレンチ平面図 ……………	68
図 65	牟田洞 1 トレンチ出土遺物 ……	69
図 66	牟田洞 2 トレンチ出土遺物 1 ……	70
図 67	牟田洞 2 トレンチ出土遺物 2 ……	71
図 68	牟田洞 3 トレンチ出土遺物 ……	72
図 69	牟田洞 4 トレンチ出土遺物 1 ……	72
図 70	牟田洞 4 トレンチ出土遺物 2 ……	73
図 71	牟田洞 5 トレンチ出土遺物 1 ……	74
図 72	牟田洞 5 トレンチ出土遺物 2 ……	75
図 73	牟田洞 5 トレンチ出土遺物 3 ……	76
図 74	牟田洞 5 トレンチ出土遺物 4 ……	77
図 75	牟田洞過去採集遺物 1 ……………	81
図 76	牟田洞過去採集遺物 2 ……………	82
図 77	牟田洞過去採集遺物 3 ……………	83
図 78	牟田洞過去採集遺物 4 ……………	84
図 79	牟田洞過去採集遺物 5 ……………	85
図 80	牟田洞過去採集遺物 6 ……………	86

図 81	牟田洞過去採集遺物 7	87
図 82	牟田洞過去採集遺物 8	88
図 83	大萱窯下古窯跡踏査概要図	93
図 84	大萱窯下古窯跡表採遺物 1	94
図 85	大萱窯下古窯跡表採遺物 2	95
図 86	大萱窯下古窯跡調査範囲図	96
図 87	大萱窯下古窯跡地形測量図	97
図 88	大萱窯下古窯跡 A-A' 縦断面図	98
図 89	大萱窯下古窯跡 B-B' 縦断面図	98
図 90	2 トレンチ平面図	102
図 91	2 トレンチ南壁土層図	102
図 92	6 トレンチ南壁土層図	102
図 93	6 トレンチ西壁土層図	102
図 94	6 トレンチ平面図	102
図 95	6 トレンチ平面図 (焼成室遺物除去後)	102
図 96	1 号窯断面図	102
図 97	大萱窯下 2 トレンチ出土遺物	103
図 98	大萱窯下 6 トレンチ出土遺物 1	104
図 99	大萱窯下 6 トレンチ出土遺物 2	105
図 100	大萱窯下 5 トレンチ出土遺物	107
図 101	5 トレンチ東壁土層図	108
図 102	5 トレンチ南壁土層図	108
図 103	5 トレンチ西壁土層図	108
図 104	5 トレンチ平面図	108
図 105	7 トレンチ平面図	108
図 106	7 トレンチ南壁土層図	108
図 107	大萱窯下 7 トレンチ出土遺物	109
図 108	1 トレンチ平面図	113
図 109	1 トレンチ南壁土層図	113
図 110	3 トレンチ平面図	113
図 111	3 トレンチ西壁土層図	113
図 112	4 トレンチ平面図	113
図 113	4 トレンチ西壁土層図	113
図 114	大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 1	114
図 115	大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 2	115
図 116	大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 3	116
図 117	大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 4	117
図 118	大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 5	118
図 119	大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 6	119
図 120	大萱窯下 3 トレンチ出土遺物	122

図 121	大萱窯下 4 トレンチ出土遺物	123
図 122	大萱窯下過去採集遺物 1	126
図 123	大萱窯下過去採集遺物 2	127
図 124	大萱窯下過去採集遺物 3	128
図 125	大萱窯下過去採集遺物 4	129
図 126	牟田洞古窯跡探査図	134
図 127	大萱窯下古窯跡の探査図	135
図 128	大萱古窯跡出土炭化材の走査型 電子顕微鏡写真	139
図 129	各元素分布図	144
図 130	分析対象となる土器、粘土と 土器の試料採取位置	145
図 131	牟田洞古窯跡概要図	153
図 132	大萱窯下古窯跡概要図	154

## 表目次

表 1	牟田洞古窯跡確認植物一覧	2
表 2	大萱窯下古窯跡確認植物一覧	3
表 3	大萱古窯跡群の周辺遺跡一覧	5
表 4	牟田洞表採遺物観察表	21
表 5	牟田洞 10 トレンチ遺物観察表	26
表 6	牟田洞 6 トレンチ遺物観察表	44
表 7	牟田洞 11 トレンチ遺物観察表	54
表 8	牟田洞 12 トレンチ遺物観察表	57
表 9	牟田洞 13 トレンチ遺物観察表	61
表 10	牟田洞 5 トレンチ遺物観察表 1	78
表 11	牟田洞 5 トレンチ遺物観察表 2	79
表 12	牟田洞過去採集遺物観察表 1	89
表 13	牟田洞過去採集遺物観察表 2	90
表 14	大萱窯下 2 トレンチ遺物観察表	101
表 15	大萱窯下 6 トレンチ遺物観察表	101
表 16	大萱窯下 5 トレンチ遺物観察表	107
表 17	大萱窯下 7 トレンチ遺物観察表	107
表 18	大萱窯下 1 トレンチ遺物観察表 1	120
表 19	大萱窯下 1 トレンチ遺物観察表 2	121
表 20	大萱窯下 3 トレンチ遺物観察表	121
表 21	大萱窯下過去採集遺物観察表 1	130
表 22	大萱窯下過去採集遺物観察表 2	131

表 23	大萱古窯跡群出土炭化材の樹種 同定結果 ……………	136	図版 28	大萱窯下古窯跡遺物写真 2
表 24	大萱古窯跡群出土炭化材の樹種 同定結果一覧 ……………	138	図版 29	大萱窯下古窯跡遺物写真 3
表 25	分析対象 ……………	140	図版 30	大萱窯下古窯跡遺物写真 4
表 26	胎土・粘土の蛍光 X 線分析結果 …	141	図版 31	大萱窯下古窯跡遺物写真 5
表 27	陶器釉薬の蛍光 X 線半定量分析結果	142	図版 32	大萱窯下古窯跡遺物写真 6
表 28	牟田洞古窯跡遺物集計表 ……………	149	図版 33	大萱窯下古窯跡遺物写真 7
表 29	大萱窯下古窯跡遺物集計表 ……………	150	図版 34	大萱窯下古窯跡過去採集 遺物写真 1
			図版 35	大萱窯下古窯跡過去採集 遺物写真 2
			図版 36	大萱窯下古窯跡過去採集 遺物写真 3

## 写真図版目次

図版 1	牟田洞古窯跡 1
図版 2	牟田洞古窯跡 2
図版 3	牟田洞古窯跡 3
図版 4	牟田洞古窯跡 4
図版 5	牟田洞古窯跡 5
図版 6	牟田洞古窯跡 6
図版 7	牟田洞古窯跡 7 大萱窯下古窯跡 1
図版 8	大萱窯下古窯跡 2
図版 9	大萱窯下古窯跡 3
図版 10	大萱窯下古窯跡 4
図版 11	牟田洞古窯跡遺物写真 1
図版 12	牟田洞古窯跡遺物写真 2
図版 13	牟田洞古窯跡遺物写真 3
図版 14	牟田洞古窯跡遺物写真 4
図版 15	牟田洞古窯跡遺物写真 5
図版 16	牟田洞古窯跡遺物写真 6
図版 17	牟田洞古窯跡遺物写真 7
図版 18	牟田洞古窯跡遺物写真 8
図版 19	牟田洞古窯跡遺物写真 9
図版 20	牟田洞古窯跡遺物写真 10
図版 21	牟田洞古窯跡遺物写真 11
図版 22	牟田洞古窯跡遺物写真 12
図版 23	牟田洞古窯跡遺物写真 13
図版 24	牟田洞古窯跡遺物写真 14
図版 25	牟田洞古窯跡遺物写真 15
図版 26	牟田洞古窯跡遺物写真 16
図版 27	大萱窯下古窯跡遺物写真 1



# 第1章 自然的・歴史的環境

## 第1節 自然的環境

可児市は岐阜県の中南部にあり、平成17年5月に可児郡兼山町と飛び地合併している。南は多治見市と愛知県犬山市に接し、東は御嵩町、土岐市と接している。また、北は木曾川を挟んで美濃加茂市、坂祝町、八百津町と境をなす。可児地域は美濃帯中生層を基盤とし、新第三紀の瑞浪層群、瀬戸層群、第四紀の段丘堆積物などの堆積物が覆って各地に分布している。

大萱古窯跡群は可児市の東部、久々利の大萱地区に位置し、美濃帯や瑞浪層群平牧層が各所に露頭する。久々利の大萱地区は低山に囲まれ、久々利川を軸に谷状に平地が広がる。窯跡は平地との比高差20mほどの山の中腹、もしくは頂上付近に築かれている。

調査にあたり、牟田洞古窯跡、大萱窯下古窯跡の調査地内に希少な植物があった場合、移植等を検討するため、或いは他地域の植物の移入の有無を検討するため、有識者である守谷宏一、守谷啓子両氏に調査して頂いた。その成果は表1・2のとおりである。また、守谷啓子氏からは以下のコメントを頂いている。

「牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡は杉や桧、竹の林によって薄暗い林床ですが、地形によって植生が違っているように思いました。牟田洞古窯跡は西向きの急な斜面にあり、裾には沢が流れ、その向こう側も竹林の急斜面になっています。資料館付近は、日の光が入り、オケラやコウヤボウキといったやや乾いた所を好む植物が見られ、頭上にはウラジロノキやクスギ、アベマキなどの落葉高木が枝を広げ、ギフチョウも飛び里山の趣がありました。

牟田洞を流れる沢の向いの山が大萱窯下古窯跡のある所です。そこも急な北向きの斜面ですが、裾には草地が広がっているので、少し朝日がさし込みそうです。斜面の西側は谷筋により窪んでいます。その辺りには、湿地に見られるミズゴケがあり、湿った所を好むオトギリソウやハンショウヅルもみられました。小さな一角ですが、光と水に恵まれ色々な植物が見られました。」

## 第2節 歴史的環境

久々利地区には泳宮の伝承地（1）がある。泳宮は『日本書紀』の「景行天皇四年春二月甲子條」によると、景行天皇が美濃に滞在した際に八坂入彦命の娘の弟媛を見初め、池を造り、鯉を放って弟媛を呼び寄せた。弟媛は、姉の八坂入媛に後の座を譲るが、その場所が泳宮である。また、久々利の大萱地区には陵墓参考地になっている八坂入彦命墓（5）がある。墓域は東西26.5m、南北29mであり、周囲に幅2.0mの土堤を巡らせている。

久々利地区では突線鈕近畿式銅鐸が出土した銅鐸発掘の地があり、久々利川水系に100基以上の横穴墓が造られるが、その後鎌倉時代まで遺跡はみられない。可児市内では南部を中心に山茶碗の窯が築かれ、久々利にも10数基の窯が築かれる。

昭和58年に調査が行われた久々利奥磯山4号窯跡（36）は、全長12.6m、最大幅2.22m、焼成室の傾斜は25度である。碗、片口碗、皿、仏器、壺、蓋、陶丸などが出土している。

戦国時代には久々利城跡（4）が築かれる。築城時期は不明であるが、天正11年（1583）に城主土岐久々利頼興が金山城主森長可によって討たれ、その後森氏は家臣林長兵衛を城においたといわれ、その時期までは存続したと考えられる。城は東西二股の尾根上にあり、東側尾根は曲輪を階段状に配する城郭部分で、西側尾根は尾根の先端を方形に区画し尾根鞍部を掘り

科名	和名	備考
アカネ科	ヘクソカズラ	
アブラナ科	ウサビ	
イチヤクソウ科	イチヤクソウ	
	ギンリョウソウモドキ	
イネ科	ササガヤ	
	ササクサ	
	チヂミザサ	
イラクサ科	アカソ	
	ヤブマオ	
イワヒバ科	クラマゴケ	
ウマノスズクサ科	ヒメカンアオイ	
ウラボシ科	ノキシノブ	
	マメツタ	
カタバミ科	カタバミ	
カヤツリグサ科	タガネソウ	
ガガイモ科	コバノカモメツル	
キキョウ科	タニギキョウ	
キク科	アキノキリンソウ	
	オケラ	少数
	オヤマボクチ	
	シラヤマギク	
	センボンヤリ	少数
	ヒメガシクビソウ	
	ニガナ	
	ミヤマヨメナ	
	ヤブレガサ	少数
キンボウゲ科	ヒメウス	
サクラソウ科	オカトラノオ	
サトイモ科	マムシグサ	
シソ科	アキチヨウジ	少数
	アキノタムラソウ	
	キランソウ	
	タツナミソウ	
シシガシラ科	シシガシラ	
ショウガ科	ショウガ	
スミレ科	アギスミレ	
	ナガバノスミレサイシン	少数
	マキノスミレ	
セリ科	ノダケ	
	ミツバ	
センリョウ科	フタリシズカ	少数
タデ科	ミズヒキ	
チャセンシダ科	イトトラノオ	
ドクダミ科	ドクダミ	
ナデシコ科	ミヤマハコベ	少数
ハエドクソウ科	ハエドクソウ	
ハナヤスリ科	フユノハナウラビ	
バラ科	キンミズヒキ	
ヒカゲカズラ科	トウゲシバ	
ヒメハギ科	ヒメハギ	
ヒユ科	ヒカゲイノコズチ	
マメ科	ヌスビトハギ	
	ヤブマメ	
ムラサキ科	ヤマルリソウ	
ヤマノイモ科	ヤマノイモ	
ユキノシタ科	ユキノシタ	
ユリ科	アマドコロ	
ウバユリ科	ウバユリ	
	オオチゴユリ	記載なし
	オモト	
	カタクリ	
	ササユリ	
	シオデ	
	ショウジョウバカマ	
	ジャノヒゲ	
	タチシオデ	
	チゴユリ	
	ヤブラン	
	ヤマジノホトトギス	

科名	和名	備考
ラン科	キンラン	少数
	シュンラン	少数
	ミヤマウズラ	少数
	ムヨウラン?	果実のみ
リンドウ科	ツルリンドウ	
	センプリ	
アケビ科	アケビ	
	ムベ	
アウブキ科	アウブキ	少数
イヌガヤ科	イヌガヤ	
イネ科	モウソウダケ	
ウコギ科	キツタ	
	コシアブラ	
	タカノツメ	
	タラノキ	
ウルシ科	ヤマハゼ	
エゴノキ科	エゴノキ	
カエデ科	ウリカエデ	
	ヤマモミジ	
カキノキ科	カキノキ	
カバノキ科	アカシデ	
キク科	コウヤボウキ	
キョウチクトウ科	テイカカズラ	
クスノキ科	クロモジ	
	シロモジ	
	ダンコウバイ	
クマツツラ科	ムラサキシキブ	
クロウメモドキ科	クマヤナギ	少数
シキミ科	シキミ	
スイカズラ科	コバノガマズミ	
	ムシカリ	少数
スギ科	スギ	
ツツジ科	アセビ	
	コバノミツバツツジ	
	スノキ	
	ナツハゼ	
	モチツツジ	
ツバキ科	サカキ	
	チャノキ	
	ヤブツバキ	
ニシキギ科	ツリバナ	少数
	マユミ	少数
バラ科	アズキナシ	
	ウメ	
	ウラジロノキ	少数
	ピロードイチゴ	
	ヤマブキ	
ヒノキ科	ヒノキ	
ブナ科	アベマキ	
	コナラ	
	クヌギ	記載なし
	クリ	
ブドウ科	アマツル	
マツ科	アカマツ	
マメ科	ネムノキ	
	フジ	
ミカン科	イヌザンショウ	
	サンショウ	
ミズキ科	アオキ	
	ハナイカダ	
	ヤマボウシ	
メギ科	ナンテン	
モクセイ科	ヒイラギ	
モクレン科	ホオノキ	
モチノキ科	イヌツゲ	
	ソヨゴ	
ヤブコウジ科	ヤブコウジ	
ユキノシタ科	コアジサイ	
ユリ科	サルトリイバラ	
	サルマメ	少数

備考欄は2007年に発行された可児市史第4巻自然編を参考にした。

「少数」は可児市において、生育地に限られる種及び個体数が少ない種。

表1 牟田洞古窯跡確認植物一覧

科名	和名	備考	科名	和名	備考	科名	和名	備考
アカネ科	アカネ		科名	和名	備考	クスノキ科	アブラチャン	少数
	ヒメヨツバムグラ		セリ科	セリ			シロモジ	
	ヤエムグラ			ノダケ			ダンコウバイ	
アブラナ科	タネツケバナ			ミツバ		クワ科	ヒメコウゾ	
	マルバコンロンソウ	少数	ツツジ科	アセビ		ゴマノハ科	キリ	
	ワサビ	少数		コバノミツバツツジ		スギ科	スギ	
イネ科	コブナグサ			ヤマツツジ		スイカズラ科	ウグイスカグラ	
	ササクサ		センリョウ科	フタリシズカ			スイカズラ	
	チヂミザサ		タデ科	アキノウナギツカミ			ミヤマガマズミ	
	ヌカキビ			イタドリ		ツバキ科	チヤノキ	
	メヒシバ			ハナタデ			ヤブツバキ	
イラクサ科	アオミズ			ポントクタデ		ニシキギ科	ツルマサキ	
	アカソ			ミズヒキ			マユミ	
	コアカソ			ミソソバ		バラ科	アズキナシ	
	ヤブマオ			ヤノネグサ			ウラジロノキ	少数
ウマノスズクサ科	ヒメカンアオイ		チャセンシダ科	イワトラノオ			コジキイチゴ	
ウラボシ科	ノキシノブ		ツユクサ科	ツユクサ			オオウラジロノキ	少数
オシダ科	ジュウモンジシダ		ナデシコ科	ウシハコベ			ヤマザクラ	
	ベニシダ			オランダミミナグサ		ヒノキ科	ヒノキ	
	ヤブソテツ			ハコベ		ブナ科	アベマキ	
	リョウメンシダ			ノミノフスマ			アラカシ	
オトギリソウ科	オトギリソウ		ナス科	ヒヨドリジョウゴ			クヌギ	記載なし
	コケオトギリ		ハエドクソウ科	ハエドクソウ			クリ	
	トモエソウ	少数	ハナヤスリ科	フユノハナワラビ		ブドウ科	ノブドウ	
オミナエシ科	オトコエシ		バラ科	キンミズヒキ		マツブサ科	マツブサ	少数
ガガイモ科	コバノカモメヅル		ヒカゲカズラ科	トウゲシバ			ピナンカズラ	
キキョウ科	タニギキョウ		ヒユ科	ヒカゲノイノコズチ		マタタビ科	サルナシ	
	ツルニンジン		ベンケイソウ科	コモチマンネングサ		マメ科	ネムノキ	
キク科	アキノノゲシ		マメ科	フジカンゾウ			フジ	
	オニタビラコ			ヤブマメ		ミカン科	コクサギ	少数
	オヤマボクチ		ミズゴケ科	ミズゴケ			サンショウ	
	キツネアザミ		ムラサキ科	ヤマルリソウ			ミヤマシキミ	少数
	シロヤマギク		ヤマノイモ科	オニドコロ		ミズキ科	アオキ	
	シロヨメナ		ユリ科	アマドコロ	少数		ハナイカダ	
	ズスカアザミ			ウバユリ		メギ科	ナンテン	
	セイタカアワダチソウ			ジャノヒゲ		モクセイ科	ヒイラギ	
	セイヨウタンポポ			ショウジョウバカマ			ネズミモチ	
	ヒメジョオン			チゴユリ				
	ヒメムカシヨモギ			ヤブラン				
	ヒヨドリバナ			ヤマジノホトトギス				
	ベニバナポロギク		ラン科	クモクリソウ				
	ミヤマヨメナ			ムヨウラン	少数			
	ヤブタビラコ		リンドウ科	ツルリンドウ				
	ヤブレガサ	少数	アケビ科	アケビ				
キジノオシダ科	オオキジノオ		イヌガヤ科	イヌガヤ				
キツネノマゴ科	キツネノマゴ		イネ科	ネザサ				
キンポウゲ科	アキカラマツ			ハチク				
	ケキツネノボタン			モウソウチク				
	センニンソウ		モチノキ科	イヌツゲ				
	ハンショウヅル	少数		クロガネモチ				
ケシ科	クサノオウ	少数		ソヨゴ				
サクラソウ科	オカトラノオ		ヤブコウジ科	マンリョウ				
	コナスビ			ヤブコウジ				
サトイモ科	マムシグサ		ユキノシタ科	ウツギ				
シソ科	アキチヨウジ	少数		コアジサイ				
	アキノタムラソウ			ノリウツギ				
	イヌトウバナ		ウコギ科	オカウコギ				
	カキドウシ			キツタ				
	キランソウ			タラノキ				
	ツルニガクサ	少数	ウルシ科	ヤマハゼ				
	トウバナ			ヌルデ				
シシガシラ科	シシガシラ		エゴノキ科	エゴノキ				
スミレ科	タチツボスミレ		カバノキ科	イヌシデ	少数			
	ツボスミレ		カエデ科	ウリカエデ				
	ナガバナノスミレサイシン	少数	キョウチクトウ科	ティカカズラ				
	フモトスミレ		クマツツラ科	クサギ				
	チゴユリ			ムラサキシキブ				
	ヤブラン			ヤブラン				
	ヤマジノホトトギス			ヤマジノホトトギス				

備考欄は2007年に発行された可児市史第4巻自然編を参考にした。  
「少数」は可児市において、生育地が限られる種及び個体数が少ない種。

表2 大萱窯下古窯跡確認植物一覧

切っていることから、居館部として築かれたと想定され、横矢や枳形虎口、横堀などもみられる。この城跡と近い時期に、久々利の大萱と大平に大窯が築かれる。

可児市内に知られる大窯は、大萱古窯跡群に属す大萱窯下古窯跡（6）と牟田洞古窯跡（7）、大平古窯跡群に属す山之神古窯跡（44）と由右衛門古窯跡（42）、この両群の中間に位置する中古窯跡（22）、そして市内最古と考えられる浅間古窯跡（14）がある。可児市内の大窯の歴史は『大平窯由緒書』によれば、永禄六年（1563）、瀬戸の陶工加藤五郎右衛門景豊が美濃に良土を求めて、大平入りしたことから始まる。このとき、景豊は大平に窯を造ろうとするが、大勢の農民の抗議にあい、仕方なく立ち帰ったといわれ、天正元年（1573）、信長の朱印状をもって再び大平に移り住んだといわれる。浅間古窯跡や大平古窯跡群にある山之神窯跡がその時期に当てはまるが、定かではない。

大平古窯跡群には、大窯と連房式登窯の窯跡がある。連房式登窯と考えられるものには、清太夫古窯跡（48）、窯ヶ根古窯跡（45）、窯坂古窯跡（43）、紋右衛門古窯跡（41）、常右衛門古窯跡（52）などがあり、江戸時代～明治時代まで継続している。

山之神古窯跡の名称は窯跡付近の尾根に「山之神」が祀られていることに起因する。約30度の斜面に、約30m四方にわたって物原がみられる。時期は第3段階後半～第4段階前半と考えられており、天目茶碗、灰釉天目、鉄釉丸碗、灰釉丸碗、筒形碗、灰釉内禿皿、灰釉折縁皿、灰釉輪禿皿、鑄釉丸皿、灰志野丸皿、志野丸皿、鑄釉灯明皿、浅鉢形向付、筒形向付、半筒形向付、角形向付、鉄釉水注、徳利、播鉢、灰志野製品、瀬戸黒製品、黄瀬戸製品が出土する。

由右衛門古窯跡は、谷川からの比高差約15mのところ立地する。時期は第3段階後半～第4段階末と考えられ、天目茶碗、鉄釉丸碗、瀬戸黒茶碗、志野茶碗、志野丸皿、志野菊皿、志野木瓜形小皿、黄瀬戸印花文輪禿皿、灰釉丸皿、灰釉内禿皿、灰釉折縁皿、灰釉稜皿、志野向付、黄瀬戸半筒形向付、鼠志野脚付向付、志野水注、志野平鉢、志野大皿、志野浅鉢、黄瀬戸大皿が出土する。

浅間古窯跡は浅間山の北西斜面にあり、西窯と東窯の2基からなる。浅間西古窯跡は第3段階末～第4段階と考えられている。主な出土遺物は天目茶碗、筒形碗、灰釉折縁皿、鉄釉内禿皿、黄瀬戸丸皿、灰志野丸皿、筒形向付、角形向付、半筒形向付、灰志野鉢、黄瀬戸深鉢であり、志野製品は採集されていない。浅間東古窯跡は浅間西古窯跡と同様に黄瀬戸や瀬戸黒が多く、志野製品は採集されておらず、第4段階が主体と考えられている。輪高台の天目茶碗、体部外面がヘラ調整された瀬戸黒茶碗、灰釉丸皿、灰釉印花文折縁皿、灰釉内禿皿、鉄釉徳利がみられる。

中古窯跡は、東窯（表窯）2基と西窯（裏窯）1基がある。採集資料は窯ごとに分類できないため、中窯は一括してのべる。天目茶碗、志野天目茶碗、鉄釉丸碗、志野茶碗、瀬戸黒茶碗、灰釉内禿皿、鉄釉内禿皿、灰釉折縁皿、志野向付類、志野折縁中皿、黄瀬戸向付、黄瀬戸大皿、鑄釉大皿、志野大皿、志野浅鉢類、黄瀬戸徳利、掛け分け小壺などがみられ、第4段階と考えられている。

大萱古窯跡群は「由緒書」によると、景豊の二男加藤源重郎景成が、慶長六年（1601）には大萱に窯を開いたという。文政12年（1829）の「大平・大萱窯株数留」によれば、大萱には6カ所（牟田洞古窯跡、大萱窯下古窯跡、岩ヶ根古窯跡、向林古窯跡、若林古窯跡、八剣招古窯跡）11筋の窯があったとされる。現在は、大萱窯下古窯跡（6）、牟田洞古窯跡（7）、弥七田古窯跡（8）の3カ所が県史跡となっている。

大萱窯下古窯跡は、加藤唐九郎が昭和初期に文禄二年（1593）銘の黄瀬戸の皿の陶片を採集

したといわれ、優れた黄瀬戸を焼いた窯として全国的に知られるようになった。黄瀬戸、瀬戸黒、志野、灰釉製品などが焼かれ、第4段階に操業していたと推定される。窯跡の基数は2基といわれている。

牟田洞古窯跡には、大窯が3基あったといわれる。『豊蔵資料館研究紀要』の中で、齊藤基生が荒川豊蔵の採集した資料を報告しており、瀬戸黒、志野、黄瀬戸、美濃唐津などが焼かれ、第4段階の窯跡と想定されている。窯跡からは、国宝の志野茶碗である「卯花壺」や「住吉」、「若宮」などと類似した絵柄の破片がみつかり、志野の良品を焼いていたといわれる。荒川豊蔵と牟田洞古窯跡については後述する。

弥七田古窯跡は牟田洞、大萱窯下とは異なり、江戸時代初期に築かれた連房式登窯である。美濃窯の中でも独特な製品を生み出し、その意匠や絵具、釉調など作行き違いから、「弥七田織部」と区別される製品も焼成されている。

この他に向林古窯跡（9）、若林古窯跡（10）、岩ヶ根古窯跡（11）があったといわれており、それぞれの位置は不確かであるが、弥七田古窯跡の南側一帯と推定され、遺物も採集されている。『瀬戸市史』による過去の採集遺物の概要を記す。向林古窯跡は、天目茶碗、志野茶碗、瀬戸黒茶碗、灰釉丸皿、黄瀬戸向付、志野向付、灰釉折縁鉢、黄瀬戸輪花皿、黄瀬戸中皿、黄瀬戸大皿、黄瀬戸浅鉢、志野灯明具蓋などが採集されており、黄瀬戸製品が主体を占め、第4段階に位置づけられる。若林古窯跡は、天目茶碗、志野茶碗、灰釉内禿皿、灰釉丸皿、灰釉折縁皿、志野平鉢形向付、志野大皿、錆釉大皿、黄瀬戸菊皿、黄瀬戸輪禿皿、黄瀬戸折縁鉢、搦鉢、鉄釉水指などが採集されており、第4段階が主体と考えられる。岩ヶ根古窯跡は、元屋敷窯に類似した志野、美濃伊賀、織部、瀬戸黒、黒織部製品が焼成されているということから、第4段階終末以降に位置づけられる。

大萱では、連房式登窯は弥七田古窯跡以後には築かれませんが、大平では江戸時代末～明治時代に至るまで丘陵一帯に古窯跡が分布し、陶工の屋敷や寺や神社、墓地の跡も確認されている。

また、江戸時代には久々利城跡の南側に千村家屋敷跡（2）がみられる。慶長五年（1600）の関ヶ原合戦で徳川家康の命によって木曾谷を平定した千村良重は、その恩賞として可児・土岐・恵那に約4000石を与えられ、屋敷を置いた場所である。東西約300m、南北約270mの範囲に上屋敷と下屋敷が存在した。

番号	遺跡名称	番号	遺跡名称	番号	遺跡名称
1	泳宮	20	浅間山3号窯	39	久々利奥礪山5号窯跡
2	千村家屋敷跡	21	浅間山4号窯	40	青山磁器古窯跡
3	春秋園	22	中古窯跡	41	紋右衛門古窯跡
4	久々利城跡	23	奥馬坂古窯跡	42	由右衛門古窯跡
5	八坂入彦命墓	24	向平1号窯跡	43	窯坂古窯跡
6	大萱窯下古窯跡	25	向平2号窯跡	44	山之神古窯跡
7	牟田洞古窯跡	26	向平3号窯跡	45	窯ヶ根古窯跡
8	弥七田古窯跡	27	向平4号窯跡	46	大平陶工屋敷跡
9	向林古窯跡	28	向山4号窯跡	47	惣助古窯跡
10	若林古窯跡	29	向山1号窯跡	48	清太夫古窯跡
11	岩ヶ根古窯跡	30	向山2号窯跡	49	大平4号窯跡
12	牟田洞1号窯	31	向平5号窯跡	50	大平3号窯跡
13	牟田洞2号窯	32	久々利奥礪山3号窯跡	51	伊右衛門古窯跡
14	浅間古窯跡	33	久々利奥礪山1号窯跡	52	常右衛門古窯跡
15	浅間山1号墳	34	久々利奥礪山2号窯跡	53	大平1号窯跡
16	浅間山5号窯	35	青山北古窯跡	54	大平2号窯跡
17	浅間山1号窯	36	久々利奥礪山4号窯跡	55	久々利青山古窯跡
18	浅間山2号窯	37	西の洞1号窯跡	56	久々利黒岩1号窯跡
19	浅間山2号墳	38	西の洞2号窯跡	57	久々利黒岩2号窯跡

表3 大萱古窯跡群の周辺遺跡一覧



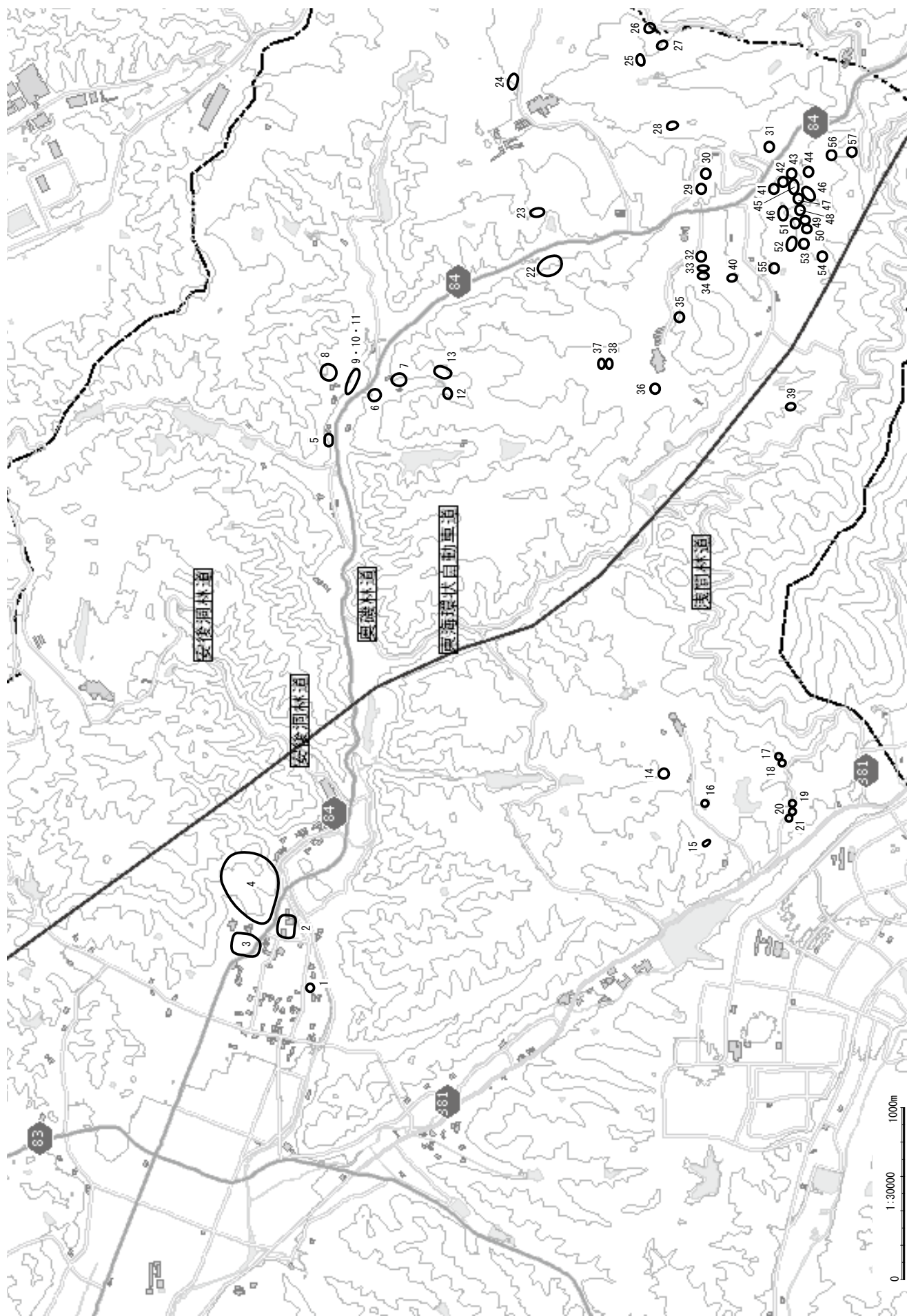


図1 周辺遺跡地図 (S=1/30,000) ((C) 岐阜県) の一部を改変

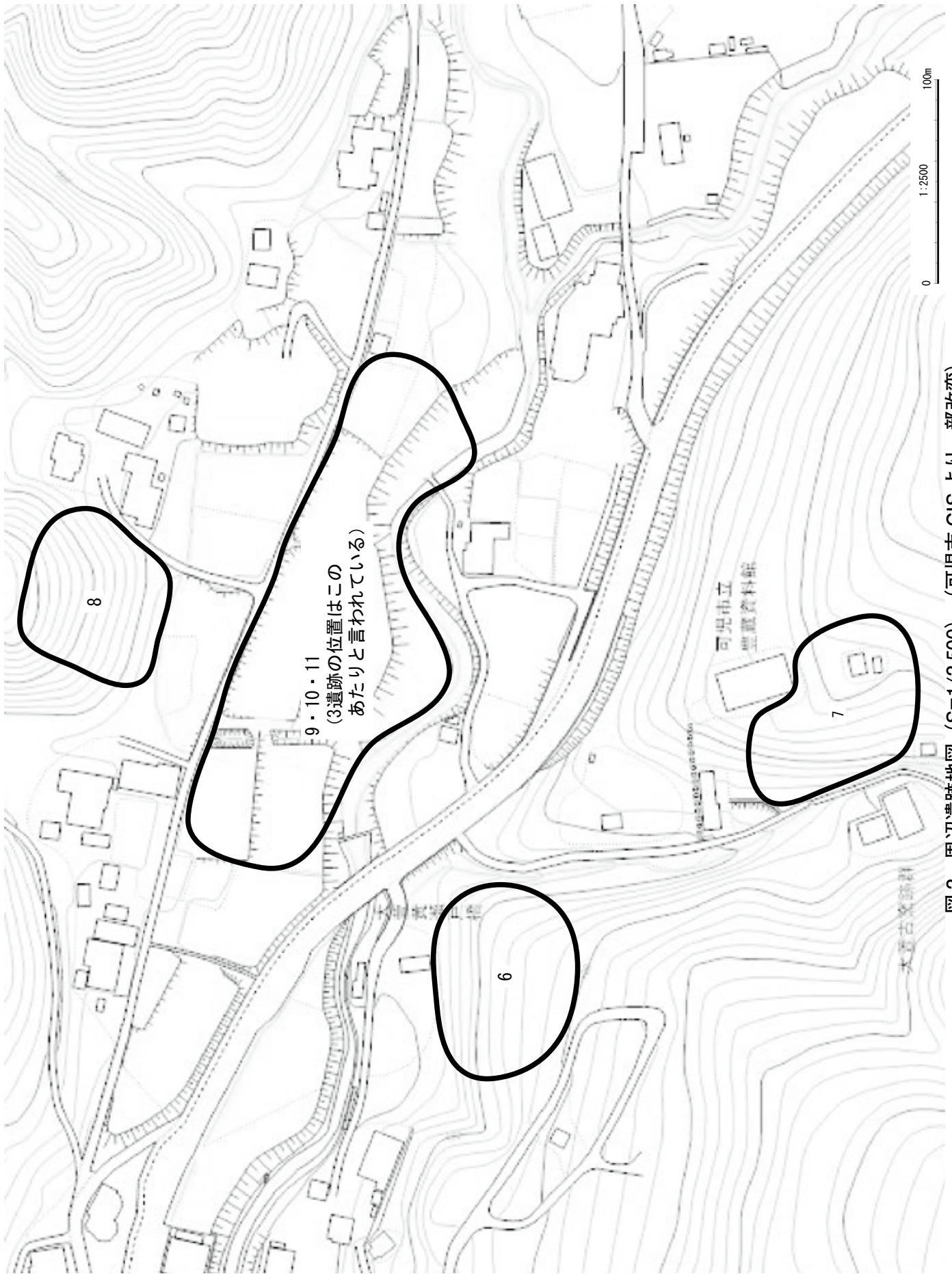


図2 周辺遺跡地図 (S=1/2,500) (可児市GISより一部改変)

### 第3節 牟田洞・大萱窯下古窯跡の過去の調査成果

#### 第1項 牟田洞古窯跡

牟田洞古窯跡は荒川豊蔵により瀬戸で焼かれていたと考えられていた桃山期の名陶が、実は美濃で焼かれていたと判明した窯跡である。荒川豊蔵は著書の中で次のように書いている。

「昭和五年（1930）五月、ちょうど名古屋で星ヶ岡窯展のあったときのことである。当時、関戸家にあった赤志野の香炉を、是非見たいものだと思い、それを横山五郎氏に依頼したところ、横山氏はこの香炉のほか、竹の子の絵のある筒茶碗と一緒に借りてきてくれた。この竹の子を二本、無雑作に描いた筒茶碗には、底にハマコロの痕が、赤い火色とともに、はっきりついている。そしてそこに付着している土をみると、色が非常に赤い。そのころ志野は、まだ瀬戸でつくられたと信じられていたが、どうもその土は、瀬戸にはない土である。どうもおかしい。それが気になって、その夜はとうとう一睡もできずにあれこれ考えた末に、ふと、むかし織部の破片を一つ、美濃でひろった思い出が頭をかすめた。そこで翌日、展示の仕末もそこに、さっそく多治見から高田へ、それから山越しに大平へと歩いて行った。そうして村人に、窯址のことを尋ねては探し、とうとう大萱の牟田洞で、ほんの前々日、名古屋でみたばかりの、関戸家の竹の子茶碗と、まったく同じ志野の破片を、掘り当てたのである。」（『志野』より部分抜粋）その後、豊蔵は金沢へ行く予定をキャンセルし窯跡調査を続行する。同年7月、星岡窯研究所での資料展示、「中外商業新報」（日本経済新聞の前身）がそれを報じた。続いて翌年、毎日新聞が大きく取り上げ、美濃は古窯跡発掘ブームにわきたった。豊蔵も鎌倉―美濃を往復し、窯跡の調査を進めた。

昭和8年、豊蔵は牟田洞古窯跡がある同地に居宅や窯を築いている。窯を築くにあたり、桃山期の窯跡や出土した陶片を参考にしたという記述もあり、牟田洞古窯跡のいずれかの窯を調査している可能性が考えられる。また、豊蔵がどのような調査を行い、どの場所を掘ったのかという記述は残されていないが、荒川豊蔵資料館には氏が収集した資料が保管されている。

また、敷地内には石碑や建物が建てられている。石碑は、昭和28年には「源十郎景成」、昭和39年に「随縁」碑、昭和54年に「黄瀬戸の壺」碑など、計12基が点在する。昭和54～55年には、谷を隔てて母屋の裏に離れが建てられている。その他、庭、風呂場、陶房、窯などの改変もあり、尾根付近は当時の地形に近いと思われるが、谷側については当時の地形とは異なっている。

昭和56年には、豊蔵資料館建設について現状変更等許可申請書が出され、その際の工事立会では、遺構は確認されなかった。

小川栄一も調査（踏査）を行い、図面を残している（図3）。窯は2基確認できたようであり、北側には「焼石土アリ窯巾1丈位崩ル」という記述があり、図面の位置からすると1号窯の可能性が高い。また南側の窯については、「巾下ニテー丈奥行一丈二尺 下一尺三寸釉カカル」という記述があり、窯の図面とともに、自然釉がかかっている部分は着色されている。これは3号窯のことと思われる。窯を含む斜線部分は遺物の分布範囲を現していると思われ、南北で20丈と思われる。窯より上部の丘側でも斜線部分が3カ所見られ、南側の部分は3丈×5丈の範囲が記される。遺物の分布の密度が高い部分であろう。また、「千」、「女」、「一」という記号のある遺物も出土していることも記載されている。

#### 第2項 大萱窯下古窯跡

大萱窯下古窯跡は、加藤唐九郎が昭和7年9月1日から11月末までの三ヶ月間にわたり調査



を行っており、『黄瀬戸』の中に調査内容が記されている。その概要について箇条書きで記す。

- ・窯下という名は、窯のある山裾に田があり、その田のことを地元の人が「窯の下の田」と呼んでいたことが由来である。
- ・崖の下では窯屑（物原）の堆積層が約4.5mに及んだ。
- ・志野、黄瀬戸、瀬戸黒等の種類を焼いていたが、特に黄瀬戸が多く、且つ優良であった。
- ・出土した黄瀬戸には文禄年銘が記された大鉢がある。
- ・志野は牟田洞とほとんど同様であるが、牟田洞よりも絵の種類は少なく、剛健。
- ・発掘品は石油箱51箱あり、代表的なものを選別すると黄瀬戸3箱、志野2箱、瀬戸黒1箱半であった。
- ・道具にはほとんど全部のエンゴロに、「千」や「/X\」等の記号があり、人名らしいもの、年号らしいもの、その他の文字が多くみられた。
- ・窯は半窖窯で半地上式であり、大部分が地上に現れている。
- ・窯室は縦3.9m、横3.0m、床面傾斜21度。小分炎柱が12本平行し、昇炎壁が約15cmみられ、窯室の中央には大柱が1本立っている。
- ・火前から45cmぐらいは強火力の還元焼成をしており、それから60cmくらいの間は中性焰で焼かれ、その次150cmぐらいは酸化焼成している。

窯体構造の詳細な記述があることから、大萱窯下古窯跡の中の少なくとも1基はこの時に掘られたか、ある程度露出していたと考えられる。窯室の縦3.9mという記述は従来の大窯より小さめであり、昇炎壁の記述があることから煙道部や焚口部分は含まず、焼成室のみの大きさを言っている可能性が考えられる。また、床面傾斜は定林寺西洞1号窯跡、東洞1号窯と近い値を示している。窯跡部分以外の記載で注目されるのは記年銘資料の存在であるが、この資料については『瀬戸市史』等の中で、文禄年銘の資料は窯下2号窯跡から出土したという記載がある。

今回の調査で確認された2基の窯跡のうち、東側にある窯跡は、一部床面が露出しており、西側にある窯跡は窯壁などが崩れている状況が確認できた。また、『美濃の古陶』の中で、窯下1号窯跡が西側、窯下2号窯跡が東側という記載がある。過去と今回の調査成果を踏まえ、西側にある窯跡を1号窯と呼称し、東側にある窯跡を2号窯と呼称することとする。

加藤唐九郎の調査以外には、豊蔵が志野の陶片を発見して以降、昭和初期には美濃のあちこちで「窯跡掘り」が行われた。当時、多治見工業学校（現多治見工業高等学校）の教諭であった高木康一は、美濃窯の桃山陶器が四散するのを憂い、井深捨吉校長ともはかって岐阜県から300円の予算をもらい、窯跡から膨大な陶片を収集した。その窯跡の一つに大萱窯下古窯跡があり、収集した資料の一部を第4章で掲載する。

小川栄一氏も牟田洞古窯跡と同様に調査を行い、図面を残している（図4）。窯の部分は×印で示してあり、略測されている。窯の下方の幅は11尺、上部で6尺を測る。図面からみるに焼成室の傾斜角は20度程度である。「ヘキ釉カカル」とあり、自然釉がかかった状況で窯壁が露出していたことがわかる。昇炎壁の高さが1.2尺、昇炎壁から煙道までの高さが4.2尺である。これは、2号窯のことと思われる。斜線部分は遺物の分布範囲を示していると思われ、窯の下側や東側の他に、窯から離れた部分でも2つの分布範囲がみられる。「千」、「/」という記号のある遺物も出土していることが記載されている。

大萱窯下古窯跡は、昭和49年に盗掘防止のための防護フェンスが設置されている。

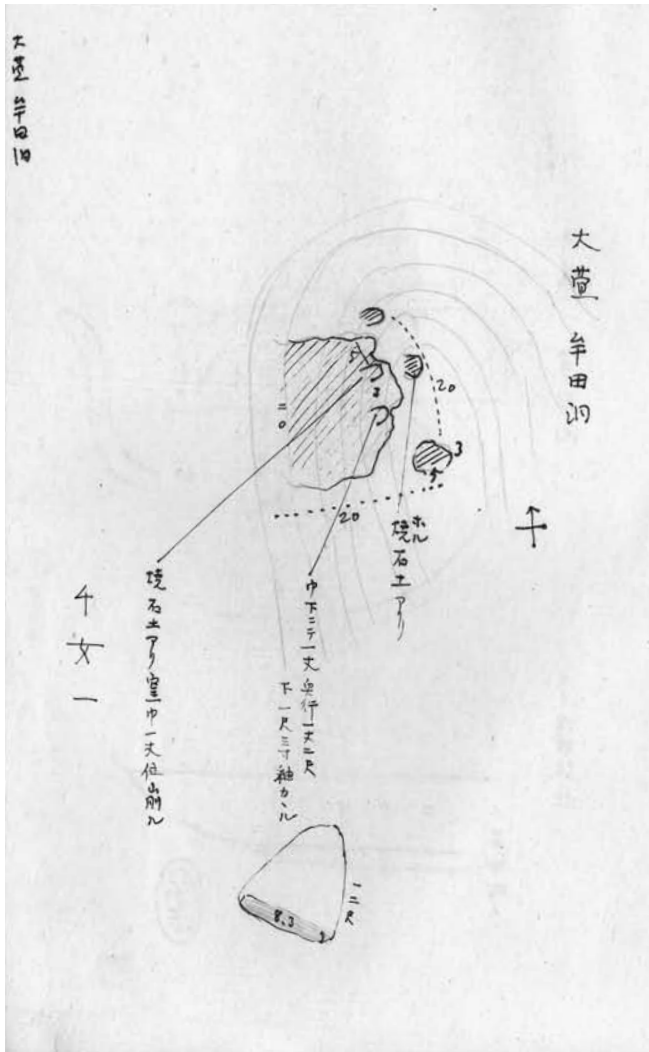


图3 小川栄一作成 牟田洞図面

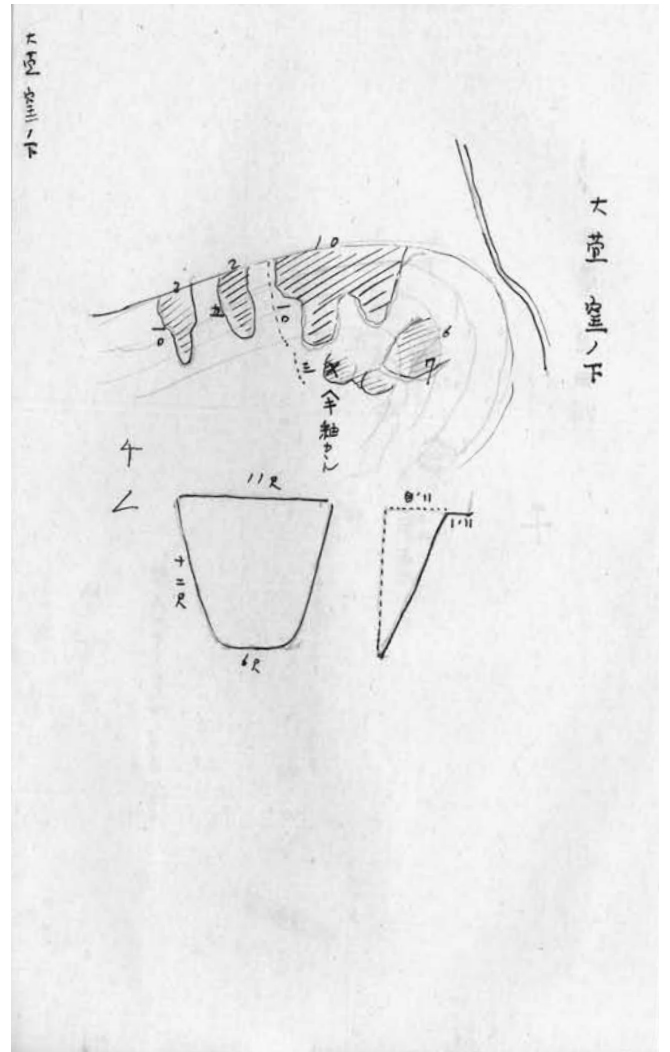


图4 小川栄一作成 大萱窟下図面

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 経緯

平成25年3月に、財団法人豊蔵資料館や関係者の方が資料館や収蔵品、土地、建物を可児市へ寄贈された。市はこれを機に、豊蔵資料館の改修を行って再オープンし、その周辺の整備計画を立てるとともに、同敷地内にある牟田洞古窯跡の国史跡へ向けた調査を行うこととした。

調査に際しては、平成25年4月に大萱古窯跡群調査・保存・整備委員会（以下委員会）を立ちあげ、指導を仰いだ。第1次、第2次、第3次と、調査の進展と併行して、岐阜県教育委員会、文化庁と協議を行って行く中で、牟田洞古窯跡とともに大萱窯下古窯跡や弥七田古窯跡についても調査を行い、大萱古窯跡群全体で国史跡指定を目指すことになった。調査は可児市教育委員会が主体となり、愛知学院大学の協力を得て実施した。各年度の調査個所は図5に記載する。

平成25年・26年度に愛知学院大学が担当した調査部分については、その該当で掲載するが、詳細な内容は後日愛知学院大学が刊行する本報告書に譲る。

### 経過

#### 平成24年度

平成24年12月12日～平成25年2月28日には、踏査の成果を加味しつつ牟田洞古窯跡の地形測量調査を行った。

平成25年2月18日～21日にかけては、愛知学院大学藤澤教授の指導のもと愛知学院大学の学生と可児市教育員会で牟田洞古窯跡、大萱窯下古窯跡、弥七田古窯跡の踏査を行った。踏査によっておおまかな遺物の範囲、露出している窯体部分、作業場の可能性がある平坦面などを確認した。

また、この期間には奈良文化財研究所の協力のもと、牟田洞古窯跡の磁気探査を行った。地形観察などで窯体の可能性が高い場所について、フラックスゲート式磁気探査機 FM-36を用いて磁気探査を実施した。探査の結果、3つの地点で4カ所の磁気異常部分を検出することができた。

#### 平成25年度

##### 牟田洞古窯跡

平成25年8月、試掘調査に併行して地元の有識者に牟田洞古窯跡の植物調査を依頼し、植生の把握を行った。

試掘調査は、8月23日～10月2日にかけて行った。磁気探査及び踏査の成果を基に、窯体の位置と数、遺跡の範囲や作業場を確認するために9本のトレンチを設定し、そのうち1本は愛知学院大学が担当した。

1号窯と3号窯については、地上観察で窯跡と確認できるため掘削を行わず、窯跡の確認のためには、7～9-1トレンチを設定し、窯体を確認した。7トレンチでは被熱面がみつき、2号窯が確認され、8トレンチでは窯体は検出されなかったが、造成された平坦面が検出された。9-1トレンチで確認された4号窯は、桃山期か豊蔵が築造したものか不確かな部分が残った。

遺跡の北側の範囲を確認するために1～3トレンチを設定した。1トレンチでは北側に行く

ほど遺物の出土が少なくなり、この辺りまでが遺跡の北側の範囲と想定された。また、2トレンチでは1号窯の灰層を確認している。3トレンチでは堆積土に遺物は含まれるが、遺構は確認されなかった。

遺跡の南側の範囲を確認するために、4・5トレンチを設定した。後世の流出や庭築造による改変があるが、桃山期の遺物を多く含み、物原の範囲と考えられる。

トレンチ調査及び踏査の成果により物原は南北に約60mに広がっていることが確認された。

6トレンチは、作業場遺構の検出を目的に設定した。緩い平坦面とともに、匣鉢などの窯道具が大量に廃棄された層が検出されたが、トレンチ内では遺構は検出されていない。

10月28日～平成26年1月31日には、昨年度行った測量図に調査成果を反映するため、地形測量を追加して行った。

市教委発	平成25年7月16日	教文第36号	現状変更許可申請書
県教委発	平成25年8月22日	社文第179号の7	現状変更許可書
市教委発	平成25年8月23日	教文第54号	埋蔵文化財発掘調査の報告
県教委発	平成25年9月10日	社文第9号の13	埋蔵文化財発掘調査(通知)
市教委発	平成25年10月11日	教文第73号	発掘調査終了報告書
市教委発	平成25年10月17日	教文第36号の4	完了届

#### 大萱窯下古窯跡

平成25年12月9日～12日にかけて、奈良文化財研究所の協力のもと大萱窯下古窯跡の磁気探査を行った。牟田洞古窯跡と同様に、地形観察などで可能性が高い場所について、フラックスゲート式磁気探査機 FM-36を用いて磁気探査を実施した。探査の結果、4カ所の磁気異常部を確認した。

平成26年2月には、試掘調査に先立って、地元の有識者に植物調査を依頼し、植生の把握を行った。植生調査は調査終了後の春以降も継続して行った。

2月5日～3月24日にかけて試掘調査を実施した。地表観察で確認できる2号窯を除き、磁気探査の成果を基に、窯体の位置と数を確認するために4本のトレンチを設定した。1・3・4トレンチでは遺物の堆積は確認できたが、窯体は確認できなかった。1トレンチからは近現代の鉄鎌が出土し、それが磁気探査で反応したと考えられる。2トレンチでは窯体の壁と床面が確認されている。これにより窯体は2基あることが確認できた。

同期間には、設置されているフェンス内を中心に地形測量を実施している。

市教委発	平成26年1月24日	教文第112号	現状変更許可申請書
県教委発	平成26年1月29日	社文第179号の18	現状変更許可書
市教委発	平成26年3月4日	教文第129号	埋蔵文化財発掘調査の報告
県教委発	平成26年3月10日	社文第9号の24	埋蔵文化財発掘調査(通知)
市教委発	平成26年3月26日	教文第138号	発掘調査終了報告書
市教委発	平成26年3月26日	教文112号の4	完了届

第1回委員会を6月23日、第2回委員会を9月20日、第3回委員会を12月23日に開催している。

## 平成26年度

8月18日～10月14日にかけて、牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡の試掘調査を行った。

### 牟田洞古窯跡

牟田洞古窯跡は、愛知学院大学が作業場遺構等の検出を目的とし、3カ所の平坦部にトレンチを設定した。11・13トレンチは、土の切り盛りによって平坦な作業場を造成しており、11トレンチでは、ロクロ作業の痕跡と思われる遺構を検出した。

市教育委員会は、窯の構造を確認するために1号窯に10トレンチを設定した。10トレンチでは、燃焼室と焼成室、昇炎壁を検出した。

### 大萱窯下古窯跡

大萱窯下古窯跡は、窯の構造を把握するために3本のトレンチ（5～7トレンチ）を設定し、前年度の2トレンチを拡張した。6トレンチでは、1号窯の燃焼室と焼成室、昇炎壁を検出した。遺物の出土状況から、焼成中に天井が崩落した可能性が考えられる。2号窯では、7トレンチの調査により煙道の形状が掘り抜き式である可能性が考えられる。

11月12日～平成27年3月10日にかけては、両古窯跡の地形測量を追加して行った。

市教委発	平成26年7月15日	教文第52号	現状変更許可申請書
県教委発	平成26年8月1日	社文第311号の4	現状変更許可書
市教委発	平成26年8月18日	教文第63号	埋蔵文化財発掘調査の報告
県教委発	平成26年9月8日	社文第49号の10	埋蔵文化財発掘調査（通知）
市教委発	平成26年10月20日	教文第138号	発掘調査終了報告書
市教委発	平成26年10月20日	教文52号の4	完了届

委員会は、第4回を7月6日、第5回を10月3日に開催している。

## 平成27年度

平成27年度は弥七田古窯跡と牟田洞古窯跡の調査を行ったが、弥七田古窯跡については調査を継続中であり、牟田洞古窯跡についての概略を述べる。

牟田洞古窯跡は、窯体の新旧が不確かである4号窯の縦軸に9-2トレンチを設定した。窯の床面や壁の被熱は全体的に弱く、窯の床面にみられる構築材は桃山期のものではなかった。調査により検出された窯体は、荒川豊蔵が造った窯と考えられた。床面の断ち割り調査も部分的に行ったが、この床面の下にも桃山期の床面は確認できなかった。

市教委発	平成27年7月10日	教文第37号	現状変更許可申請書
県教委発	平成27年7月17日	社文第96号の2	現状変更許可書
市教委発	平成27年8月17日	教文第48号	埋蔵文化財発掘調査の報告
県教委発	平成27年8月24日	社文第59号の13	埋蔵文化財発掘調査（通知）
市教委発	平成27年10月14日	教文第59号	発掘調査終了報告書
市教委発	平成27年10月14日	教文37号の3	完了届

委員会は、第6回を6月21日に、第7回を9月27日に開催している。



図5 牟田洞古窯跡・大萱窯下古窯跡調査位置図



## 第3章 牟田洞古窯跡

### 第1節 踏査

平成24年度に、愛知学院大学の協力を得て現地踏査を行った。踏査は、主に遺物の分布範囲と露出している遺構の確認を目的に行い、試掘確認調査の基礎資料を得るためのものである。また、この地を古くから熟知する関係者にも聞き取り調査を行った。

以下に踏査の概要を記すが、地点を示すアルファベットは地表観察により確認できた場所であり、平成25・26年度の試掘調査とは異なる結果の場合もある。

現地踏査で窯体と想定された個所はA、B、Cの3地点である。大窯は、地上部に造られた天井や壁が崩れるため、現地表面より盛り上がっている地形が想定されるが、A地点は、凹んでいる地形が確認できた。急斜面に築造されているため、崩れた天井片や壁片が下方に流れているか、人為的に天井や壁が廃棄されていることが想定される。また、煙道部と想定される場所は通路となっている。左壁の一部が露出していることも確認された。

聞き取り調査によれば、この部分の谷側で多くの遺物が採集されたい。この下方には、陶片の他に匣鉢などの窯道具、窯壁片などが集中する1地点がみられる。集中的に見られることから自然に堆積したものに加え、過去に採集を行った人々により人為的に動いた可能性が高い。

B地点は、匣鉢が溶着した窯体の床面が露出している。露出部分の幅は約3.6mを測り、焼成室の最も広い部分と想定される。また窯壁の一部も露出しており、自然釉がかかって硬化している様子がみられた。煙道部分は現在の小道付近であり、残存しているかは不明である。谷の傾斜がかなり急であり、燃烧室や焚口付近は滅失している可能性も考えられる。残存している部分の長さは5.2m程度と想定された。

C地点は、A地点と同様に凹んでいる地形がみられるが、窯壁などの露出はみられない。聞き取り調査によれば、荒川豊蔵が初めて窯を築き、一度だけ焼いた窯跡がこの辺りだと言われているが、別の話ではもう少し谷の奥だとも聞かれた。

窯跡付近で確認できる平坦部は3地点(E～G)ある。この3地点は窯体と想定される場所の近くであることから、作業場等の可能性が高い場所である。E地点の平坦面には、匣鉢やトチンなどの窯道具が多くみられるL地点が含まれる。L地点には、他の平坦面よりトチンやヨリ輪などが多くみられることから、焼成後の製品の選別を行った場所である可能性が予想された。

窯から斜面の下方部分は、後世に改変が入っているため当時の状況は現在では分からない。

匣鉢が集中している地点は前述した2地点を含め、3地点(1～3)みられる。上方の窯からの落下による堆積と、人為的に動かされた可能性が考えられる。

地表観察により遺物の範囲が確認できたのは、南北70m程度の範囲である。製品はあまり見られないが、匣鉢やトチンが多く散乱している。川を挟んだ西側(旧荒川家付近)の斜面には遺物はみられない。

谷の奥へ入ったH地点でも匣鉢や窯壁片の散布がみられたが、付近の斜面に窯跡の痕跡や遺物も見られない。平坦地のみで遺物がみられる状況であり、人為的に運ばれた可能性が考えられる。D地点にも遺物の散布がみられ、上流からの流れ込みによる堆積の可能性が考えられた。



## 表採遺物

匣鉢集中地点1では、多くの遺物が採集された。天目茶碗が最も多く、ついで播鉢が多い。また、皿類では、折縁皿が多くみられた。匣鉢集中地点2では、同様に天目茶碗が多く、皿類では丸皿より折縁皿が多い。両地点ともに、桃山陶では志野の点数が多い。匣鉢集中地点3では匣鉢は多く見られるが、製品の数32点と少なかった。

1～30は、匣鉢集中地点1で採集されたものである。1～8は天目茶碗である。口唇部がS字状になるもの(2・4・5)、カーブがゆるく、直立し口縁部が外反するもの(1・3・6・7)がみられる。高台は削り出し輪高台(1)と削り出し内反り高台(4・8)がみられる。9は志野の小杯であり、体部に稜がみられ、口縁部が大きく外反する。10は削り出し高台の内禿皿である。底部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部は丸く収める。13は灰釉の折縁皿であり、底部外面に輪ドチが溶着する。14・15は志野の皿類であり、内面に下絵はみられない。16の大皿は底部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部は外側に開く。17の大皿は口縁部が折縁状となる。18～22は播鉢であり、口縁部を下方に引き出すもの(19)の他は、斜めに下方に垂れるもの(18・20・21)が多い。22は縁帯が形成されるが、下方に短く引き出すものであまりみられない形態である。24・25は、水指または建水であり、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、24は口縁部付近でやや内傾する。26～30は徳利であり、口縁部がラッパ状に外側へ開く。

31～37は、匣鉢集中地点2で採集されたものである。31・32は天目茶碗で、口唇部はS字状となる。33は灰釉の小杯であり、口縁部は水平方向に引き出される。37は大型の匣鉢であり、内面に「才」の窯記号がみられる。底部外面にトチンの一部が溶着し、トチンのはがれ痕がみられる。内面に長石釉が付着するため、志野製品を焼くために使用されている。

4号窯の焚口付近で、長石の小礫(自然遺物)が表採されている。採集した原憲司委員が、その一部を加熱試験したところ、良質な釉薬となる可能性が指摘された。人為的な移動によるものかは不明である。



左 表採小礫

右 加熱後

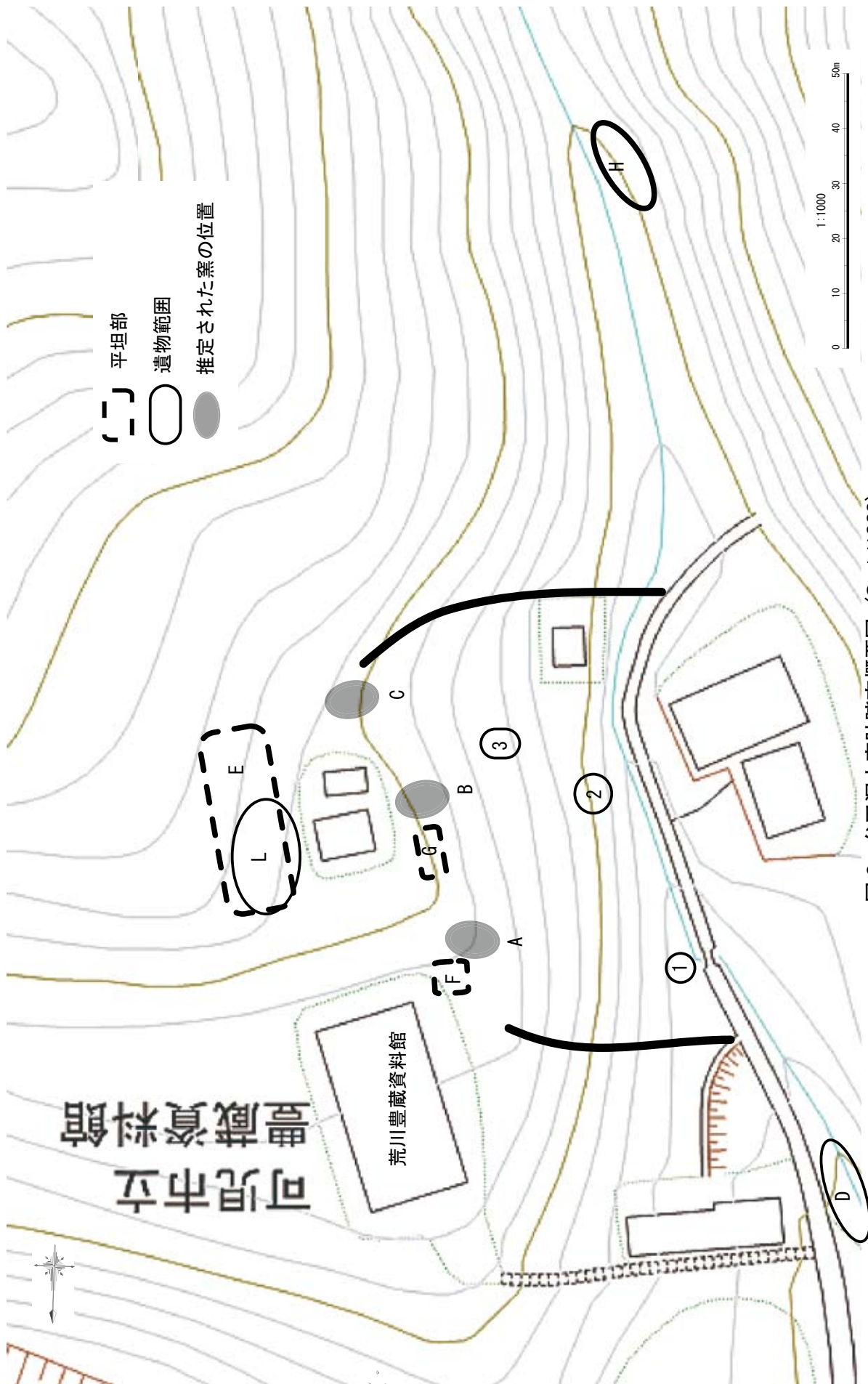
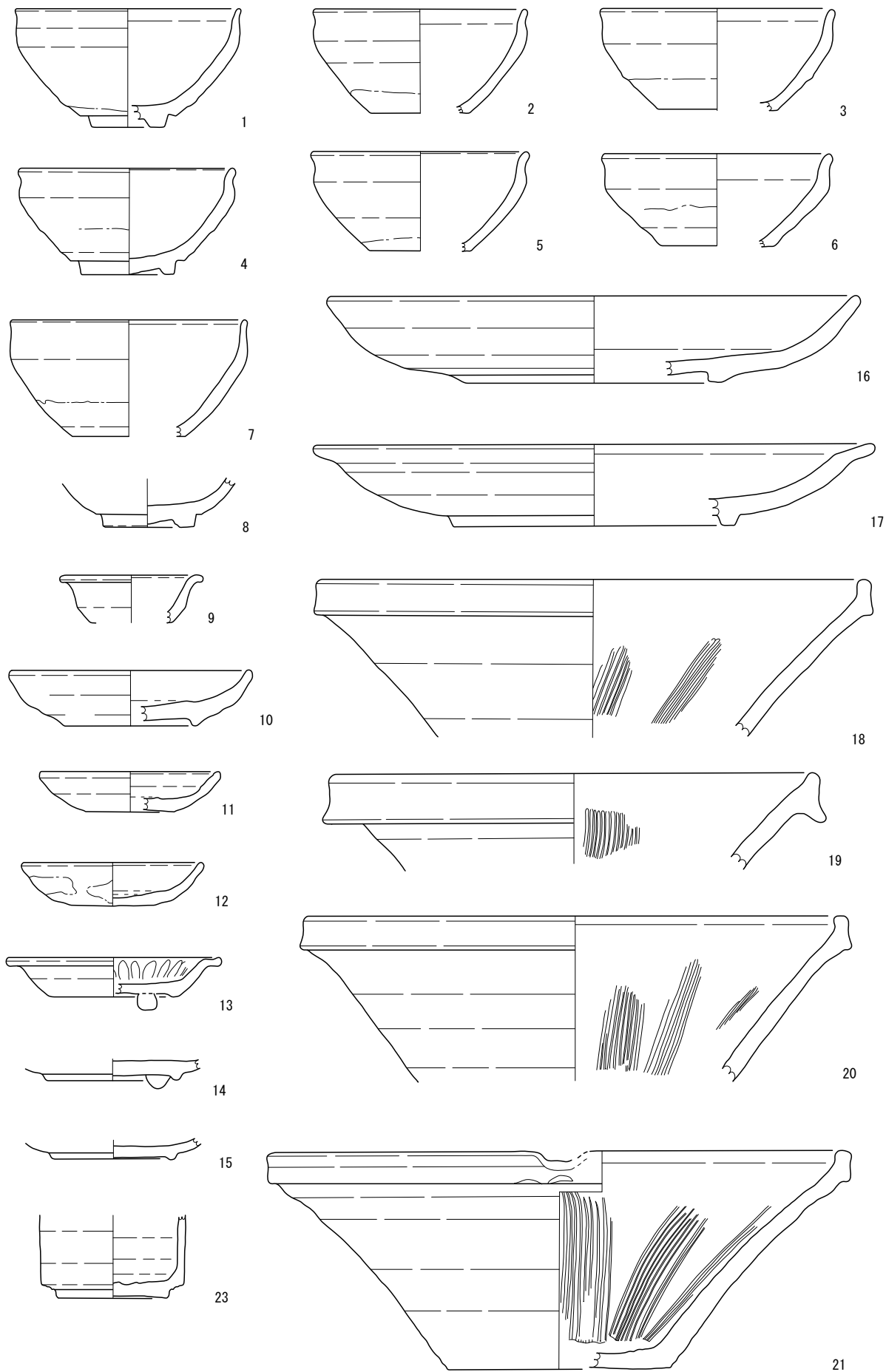


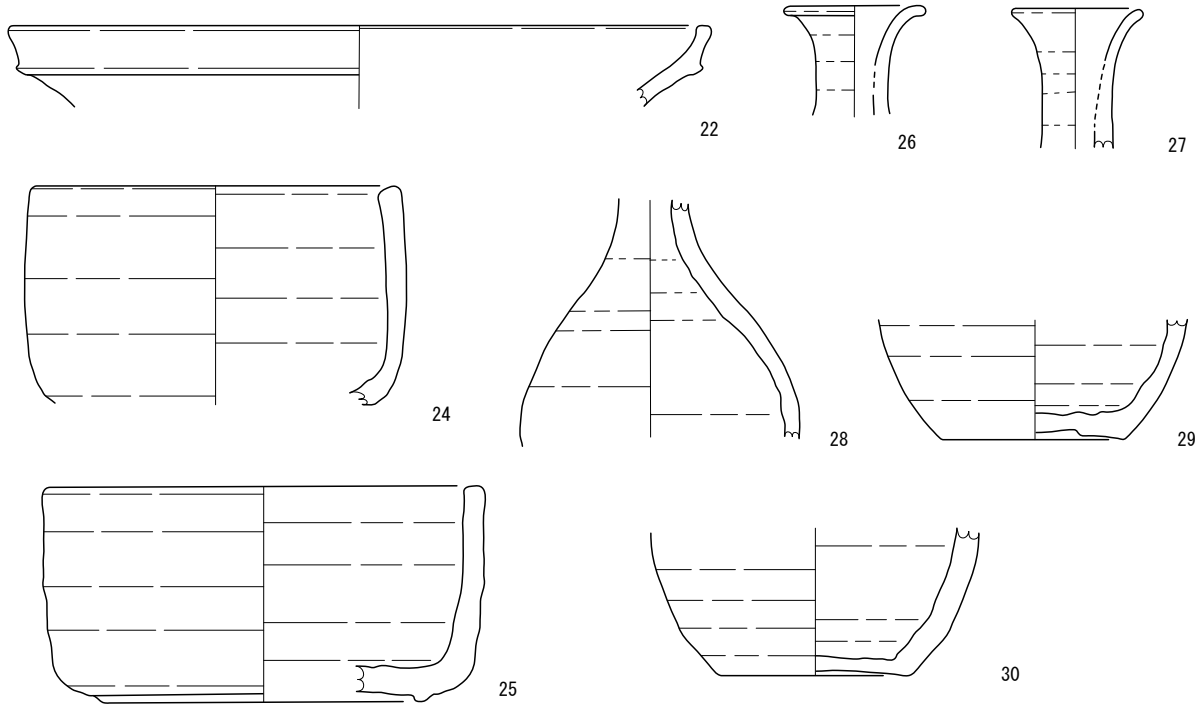
図6 牟田洞古窯跡踏査概要図 (S=1/1000)



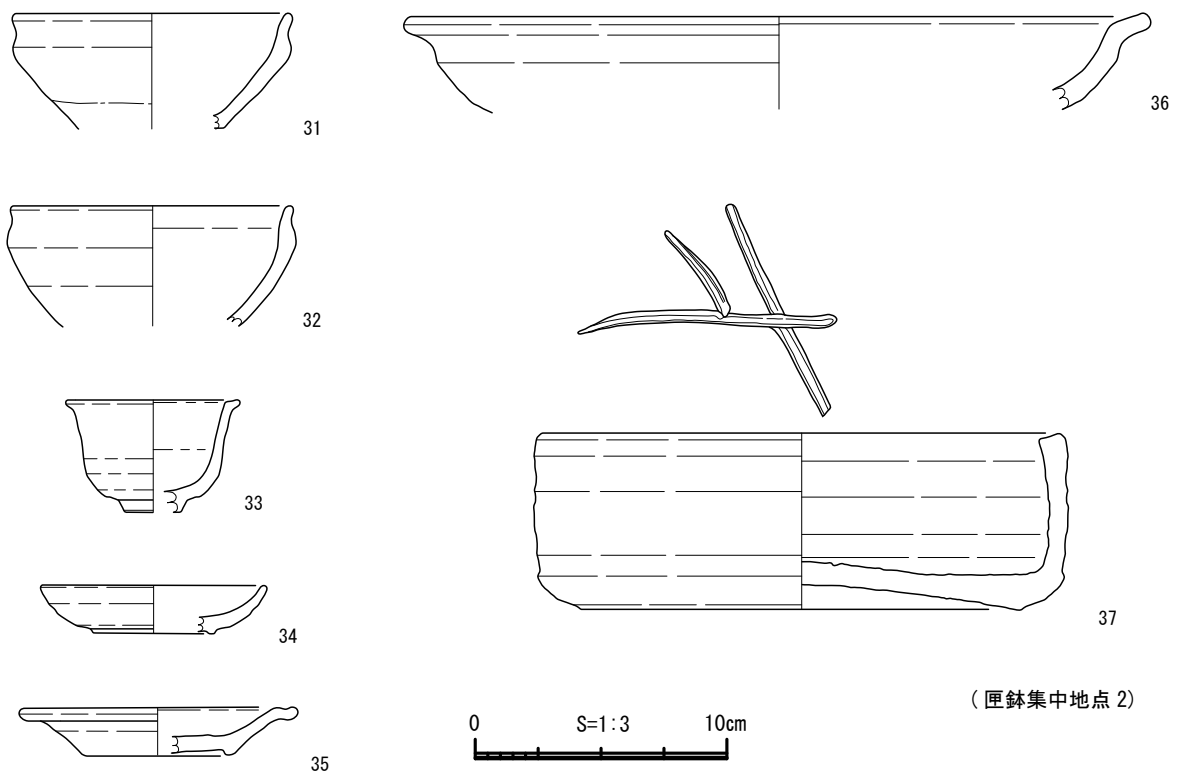
0 S=1:3 10cm

(匣鉢集中地点 1)

图7 牟田洞表採遺物 1 (S=1/3)



( 匣鉢集中地点 1 )



( 匣鉢集中地点 2 )

图 8 牟田洞表採遺物 2 (S=1/3)

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	表探	鉄釉	天目茶碗	(11.9)	6.5	(3.8)	
2		表探	鉄釉	天目茶碗	(11.1)	(5.6)		
3	3	表探	鉄釉	天目茶碗	(12.2)	(5.4)		
4		表探	鉄釉	天目茶碗	(11.3)	5.6	4.8	
5		表探	鉄釉	天目茶碗	(11.4)	(5.3)		
6	6	表探	鉄釉	天目茶碗	(11.9)	(5.0)		
7		表探	鉄釉	天目茶碗	(12.5)	(6.2)		
8		表探	鉄釉	天目茶碗	—	(2.6)	4.7	外面に重ね焼きの跡。
9	9	表探	(志野)	小杯	(7.0)	(2.6)		
10	10	表探	灰釉	内禿皿	(12.7)	3.0	(6.9)	削り出し高台。
11		表探	錆釉	灯明皿	(9.5)	2.2	(4.6)	
12	12	表探	錆釉	灯明皿	(9.5)	2.4	(4.4)	
13	13	表探	灰釉	折縁皿	(11.3)	2.1	(6.4)	削り込み高台。内ハゲ。ソギ入り。
14		表探	(志野)	皿類	—	(1.1)	(6.8)	削り出し高台。高台に円錐ピンが溶着。
15	15	表探	(志野)	皿類	—	(0.8)	(6.4)	削り出し高台。
16	16	表探	錆釉	大皿	(28.0)	(4.6)	(13.4)	削り込み高台。
17	17	表探	錆釉	大皿	(29.6)	(4.3)	(15.0)	削り出し高台。
18		表探	錆釉	擂鉢	(29.0)	(8.3)		櫛目は1単位8本以上
19		表探	錆釉	擂鉢	(25.5)	(5.2)		櫛目は1単位13本以上。
20	20	表探	錆釉	擂鉢	(28.5)	(8.8)		櫛目は1単位10本以上。
21	21	表探	錆釉	擂鉢	(30.3)	(11.7)	(11.7)	櫛目は1単位9本以上。底部外面に回転糸切痕。
22		表探	錆釉	擂鉢	(27.2)	(3.2)		
23	23	表探	灰釉	香炉	—	(4.4)	(5.7)	釉発色不良。
24	24	表探	鉄釉	水指・建水	(14.0)	(8.7)		
25	25	表探	鉄釉	水指・建水	(16.7)	8.5	(12.7)	
26	26	表探	鉄釉	徳利	(4.9)	(4.3)		
27		表探	鉄釉	徳利	(5.0)	(6.3)		
28		表探	鉄釉	徳利	—	(10.1)		胴部最大径(11.0)。
29		表探	鉄釉	徳利	—	(4.8)	(7.1)	
30	30	表探	鉄釉	徳利	—	(5.8)	(7.2)	
31		表探	鉄釉	天目茶碗	(10.8)	(4.6)		
32		表探	鉄釉	天目茶碗	(11.0)	(4.8)		
33	33	表探	灰釉	小杯	(6.8)	4.5	(2.2)	
34	34	表探	灰釉	丸皿	(8.8)	1.9	(4.8)	削り出し高台。
35		表探	灰釉	折縁皿	(10.8)	1.9	(5.4)	削り込み高台。内ハゲ。
36		表探	錆釉	大皿	(29.0)	(3.9)		
37	37	表探	窯道具	匣鉢	(20.5)	7.1	(17.2)	底部外面に窯記号と回転糸切痕。

表4 牟田洞表探遺物観察表

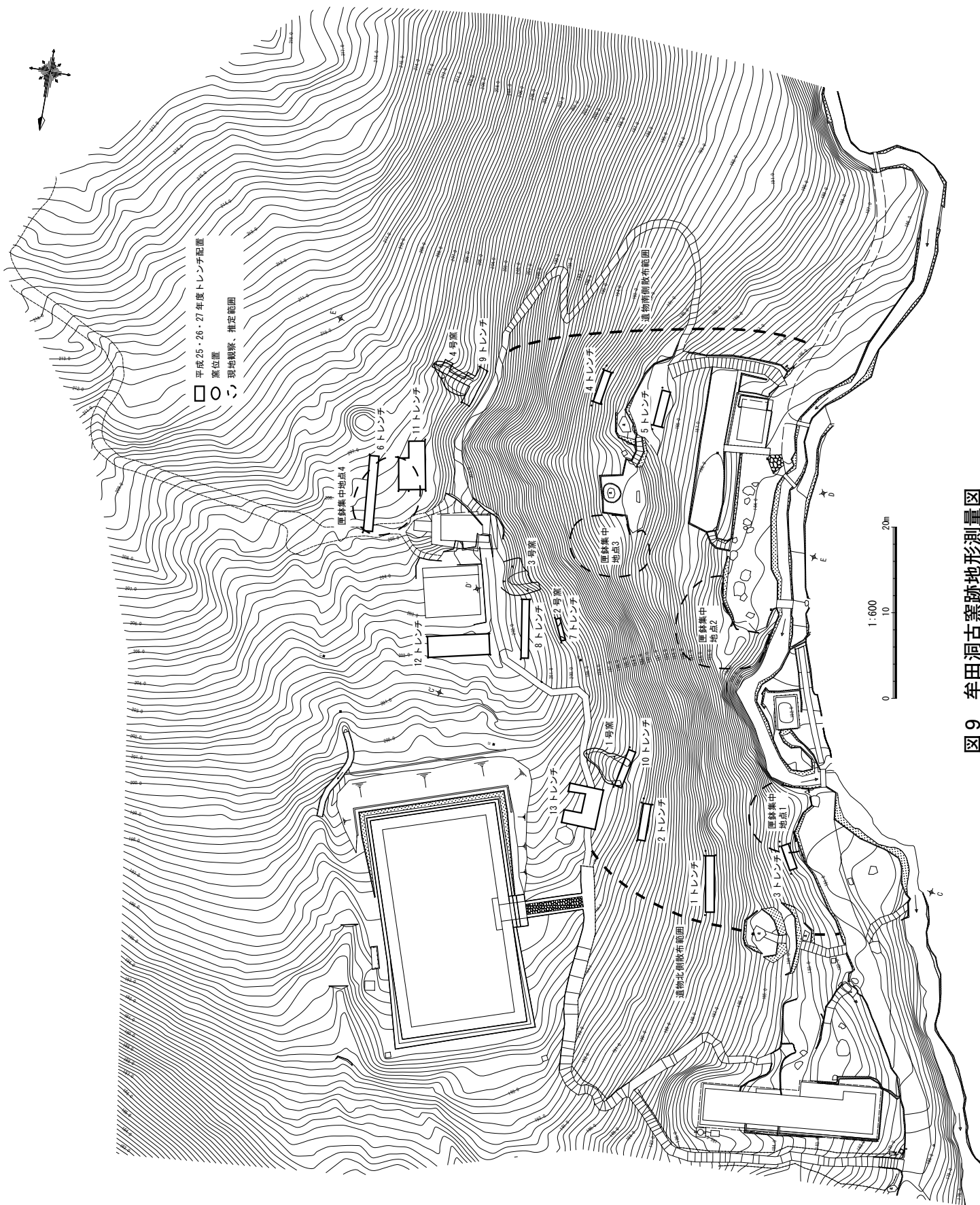


図9 牟田洞古窯跡地形測量図

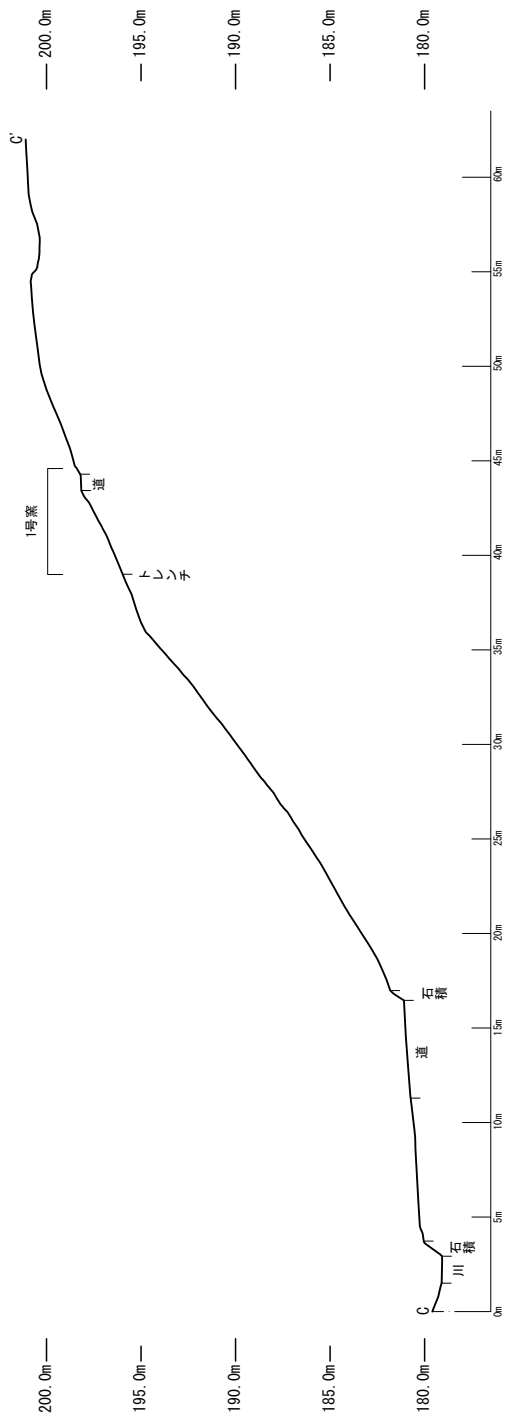


图 10 牟田洞古窯跡横断面 C-C' 横断面 (S=1/400)

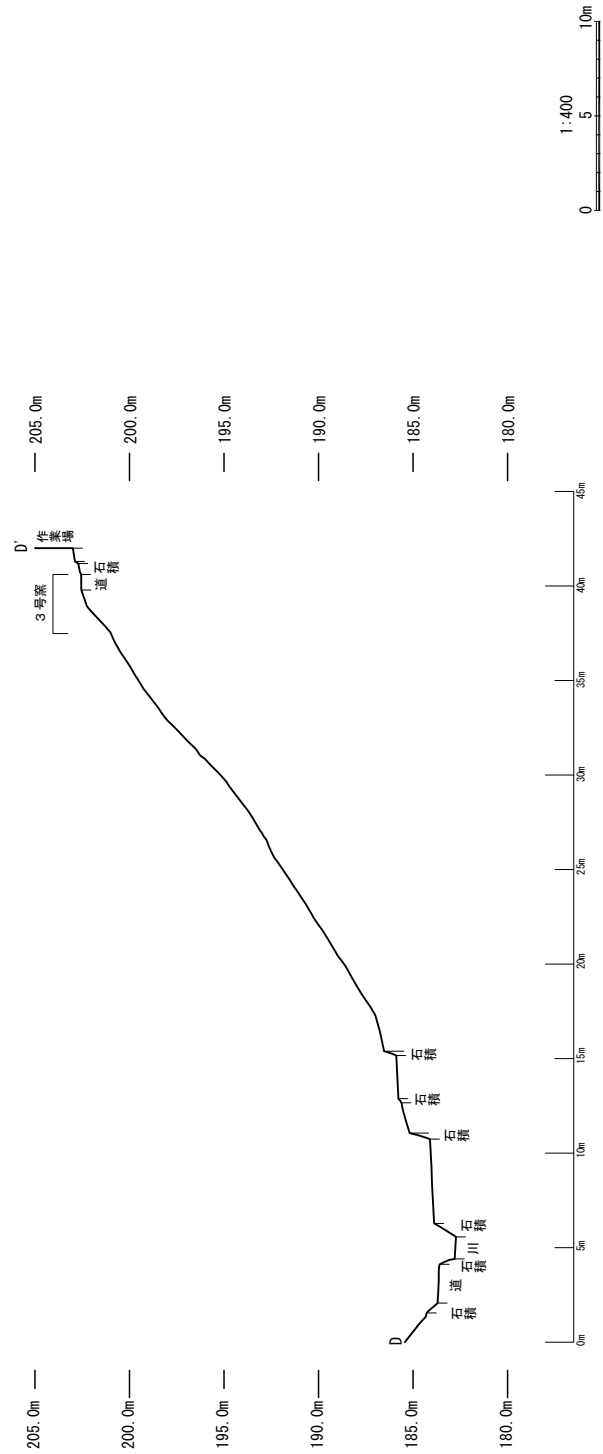


图 11 牟田洞古窯跡横断面 D-D' 横断面 (S=1/400)

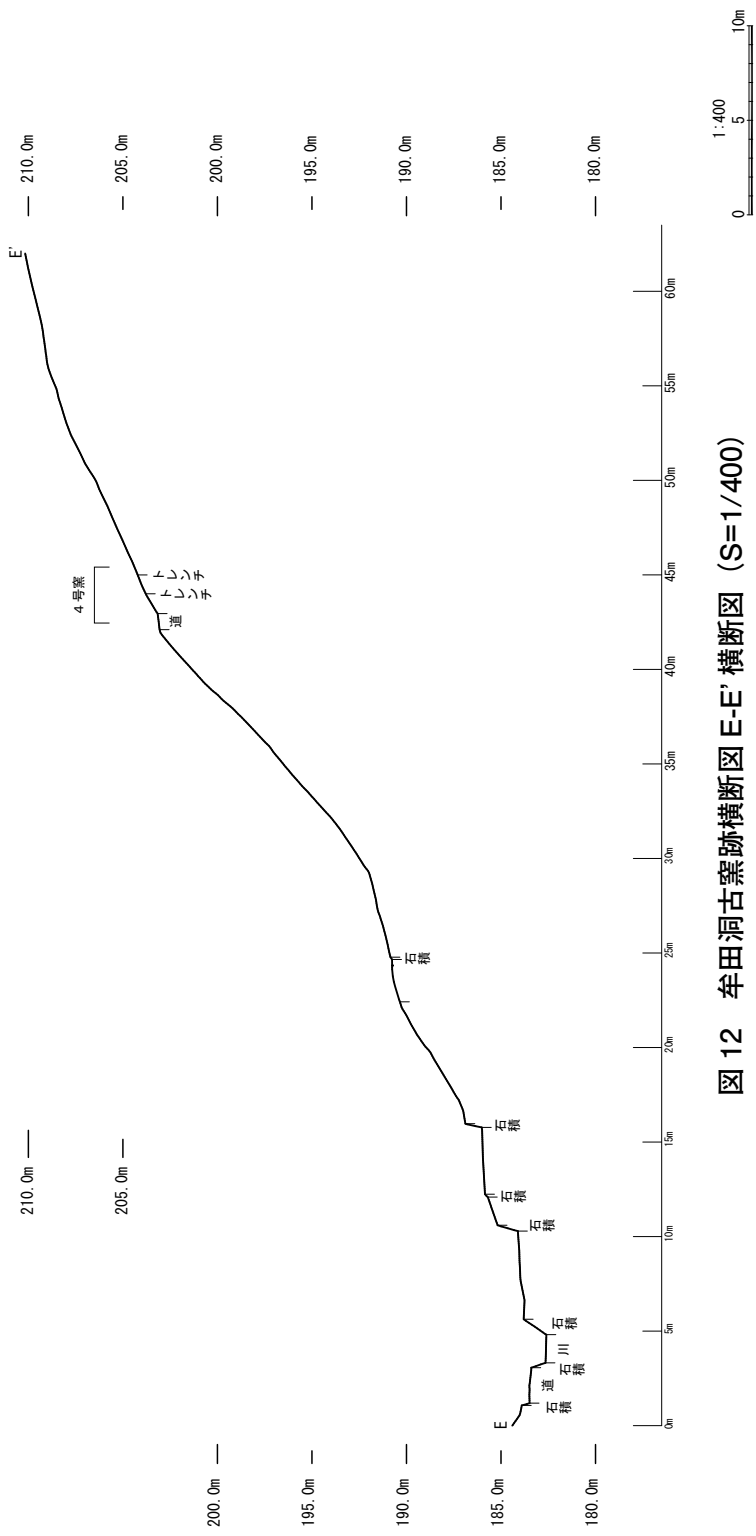


图 12 牟田洞古窯跡横断面 E-E' 横断面 (S=1/400)



## 第2節 窯体の調査

牟田洞古窯跡では、踏査や磁気探査によって窯跡の可能性がある部分が4カ所確認されている。窯壁が露出している1号窯は、窯の構造を確認するために長さ5.0m、幅1.0mのトレンチ(試掘溝)を設定し、2号窯と4号窯は、窯体の有無を確認するためにそれぞれトレンチを設定した。3号窯については試掘を行っておらず、詳細については第1節のとおりである。

### 1号窯 (10トレンチ) 図13～19

10トレンチでは、焼成室、燃焼室、昇炎壁などを確認した。現地表面から焼成室の床面までは、窯壁片や遺物、窯道具を含む崩落層が厚さ30cm程みられる。窯体の床面に近くなるにつれて、天井や壁の破片を多く含むようになる。窯は現地表面より約40cm掘り込んで、床面を構築している。

焼成室は幅3.2mであり、残存している床面部分は自然釉がかかり青灰色となり、床面がはがれ赤色被熱面が露出している部分もみられる。焼台をはがした痕跡はあるが、原位置を保つ焼台はみられない。右側壁及び左側壁の隅では、焼台や匣鉢が片付けられているかのような状況で出土した。燃焼室後部(火炎室)は、やや硬い黒色面が全体的にみられ、この部分は床面がはがれている。右側ではわずかに床面が残存する部分があるが、小分炎柱の痕跡はみられなかった。燃焼室では、発色不良の黄瀬戸向付(25)が出土している。分炎柱は中央よりわずかに左側に位置し、幅25cm、高さ18cmの基部のみが残存し、分炎柱付近は昇炎壁や床面ともに大きく欠損している。昇炎壁の高さは30～35cmで、貼り付けた粘土が部分的にはがれている。

右側壁は高さ15～60cm、左側壁は約60cm残存する。窯壁は内側に灰色で硬化した面があり、壁の裏には赤色の被熱面がみられ、焚口方向にむかってすぼまっていく。粘土等を用いた補修により、右側壁では40cm程度の厚さになっている部分もある。図18にあるように、焼成室の燃焼室に近い場所に右側壁の高さが約20cmと低くなっている部分があり、焼成室の出入口と考えられる。

1号窯の煙道部分は道の下となっており、焚口部分は10トレンチより谷側にわずかに続くようだが、それより下は滅失している可能性が高い。調査や現地地形から推定される1号窯の規模は、長さ6.7m、幅3.2m程である。

### 遺物 図20・21

10トレンチでは、製品の中では向付類が多い。1～5は表土から出土している。1は、鉄釉が施された小天目茶碗である。口唇部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。2は瀬戸黒筒形碗であり、体部から口縁部までは直線的で、内外面にボロが付着する。3の丸皿は、削り込み高台で体部は直線的に開く。4、9～11は灰釉の折縁皿である。器形は扁平。4には内面にソギがみられる。輪ドチの溶着や痕跡がみられることからこれを用いて重ね焼きされている。5の向付は削り込み高台で、口縁部は直線的にやや外側に開く。9は、内面の輪ドチ上面に釉がかかっている。法量の大小はあるが、同様の器形のものが12～20は崩落層から、25～28は床面直上から出土している。多くは、底部から口縁部にかけて直線的に伸び、端部が外反するが、12・26は口縁部が外反せず、外側にやや開く。13・25は体部にわずかなくぼみを有し、13は直線的に、25はやや外側に開く。全て焼成不良であるが、本来は黄瀬戸の発色になったと思われる。6は志野の向付であり、底部のみが残存する。高台は削り込み高台である。21は体部に孔が2カ所みられ、本来は貼り付けがあった可能性がある。発色不良であるが志野

であろう。22は灰釉の小壺であり、頸部がくびれ口縁部が肥厚する。23・32・33は焼台であり、23・33はヨリ輪の溶着がみられ、33は上面のヨリ輪に匣鉢の糸切痕が圧痕として残る。また、下部に溶着するトチンには植物の繊維の痕跡がみられる。床面の角度から考えると、23は焼成室の下方、32・33は焼成室の中央付近で使用されたと思われる。30の匣鉢は内面に鉄釉の付着がみられ、高台径約14.0cmの鉄釉製品を焼成するのに用いたと思われる。

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		表土	鉄釉	小天目茶碗	(6.3)	(2.2)		
2	2	表土	(瀬戸黒)	筒形碗	(12.7)	(4.7)		内外面にボロや石が溶着。
3	3	表土	灰釉	丸皿	(9.4)	1.8	(5.2)	削り込み高台。
4	4	表土	灰釉	折縁皿	(10.5)	2.2	(5.9)	削り込み高台。ソギ入り。底部外面にトチン痕。底部内面に陶器片が溶着。
5	5	表土	黄瀬戸	向付	(9.7)	2.5	5.8	発色不良。
6	6	堆積土	(志野)	向付	—	(1.9)	(8.6)	削り込み高台。
7		堆積土	錆釉	播鉢	(24.4)	(4.0)		
8	8	崩落層	(瀬戸黒)	筒形碗	(11.2)	(5.5)		やや発色不良。
9	9	崩落層	灰釉	折縁皿	(10.8)	2.2	(6.4)	削り込み高台。内ハゲ。内外面に輪ドチが溶着。
10		崩落層	灰釉	折縁皿	(11.0)	2.2	(6.2)	削り込み高台。内ハゲ。内外面にトチンが溶着。
11	11	崩落層	灰釉	折縁皿	(11.2)	2.4	(6.2)	削り込み高台。底部外面に輪ドチが一部溶着。
12	12	崩落層	灰釉	向付	(9.1)	2.5	(5.5)	削り込み高台。
13		崩落層	不明	向付	(9.6)	(2.5)		発色不良。おそらく灰釉。
14		崩落層	灰釉	向付	(11.0)	(3.5)		
15		崩落層	不明	向付	(11.6)	(2.9)		発色不良。おそらく灰釉。
16		崩落層	不明	向付	(12.8)	(3.3)		発色不良。おそらく灰釉。
17	17	崩落層	不明	向付	(13.6)	(4.5)		発色不良。おそらく灰釉。
18		崩落層	不明	向付	(14.0)	(4.8)		発色不良。おそらく灰釉。
19		崩落層	不明	向付	(15.0)	(4.1)		発色不良。おそらく灰釉。
20		崩落層	灰釉	向付	—	(3.0)		
21	21	崩落層	不明	向付	—	(3.6)		発色不良。体部に孔が2カ所みられる。はがれた可能性あり。
22		崩落層	灰釉	小壺	(5.9)	(2.3)		
23	23	崩落層		焼台	9.3×8.6×5.8			前面と後面に自然釉がかかり、よく焼けている。上面は8.2×8.0。
24		床面直上	(瀬戸黒)	筒形碗	(11.4)	(6.2)		発色不良。
25	25	床面直上	不明	向付	9.4	2.6	(5.2)	発色不良。おそらく灰釉。
26	26	床面直上	不明	向付	(12.5)	(3.2)	8.0	発色不良。おそらく灰釉。高台部外面にピンのはがれ痕が3カ所。
27	27	床面直上	不明	向付	(15.9)	(4.3)		発色不良。おそらく灰釉。
28	28	床面直上	灰釉	向付	—	(3.3)		黄瀬戸風。
29		床面直上		匣鉢	(14.5)	9.6	12.6	底部外面に回転糸切痕あり。
30	30	床面直上		匣鉢	(28.2)	12.3	(24.2)	内面に鉄釉がみられ、ピンのような痕が2カ所。
31	31	床面直上		匣鉢蓋	(19.7)	3.2		上面径10.6。天井部外面に回転糸切痕あり。内外面にわずかに自然釉がかかる。
32		床面直上		焼台	11.7×10.8×8.0			前面に自然釉がかかる。上面9.0×9.6。
33		床面直上		焼台	12.5×12.7×6.0			前面に自然釉がかかる。上面10.6×10.8。

表5 牟田洞10トレンチ遺物観察表

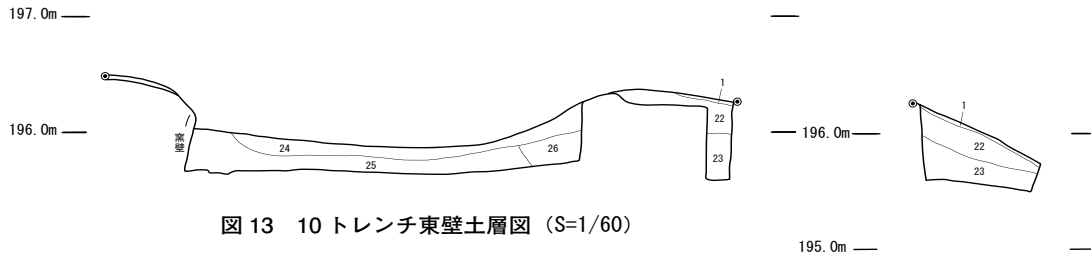


図 13 10 トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

図 14 10 トレンチ南壁土層図 (S=1/60)

- 22 褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い  $\phi 5 \sim 30$  mmの礫をわずかに含む〔窯壁片、炭を含む堆積土〕
- 23 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い  $\phi 5 \sim 30$  mmの礫を含む〔礫が集中的には入る部分がある窯の構築面〕
- 24 暗褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い  $\phi 5 \sim 20$  mmの礫を少量含む〔窯壁片、窯道具等を含む堆積土〕
- 25 褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い  $\phi 5 \sim 20$  mmの礫を少量含む〔窯壁片、窯道具等を含む崩落層〕
- 26 褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い  $\phi 5 \sim 20$  mmの礫を少量含む〔25 と同質の崩落層であるが、壁片が大きい〕

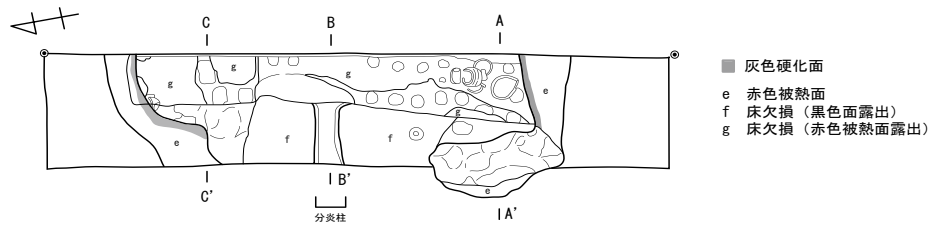


図 15 10 トレンチ (1号窯) 平面図 (S=1/60)

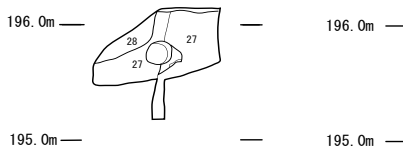


図 16 1号窯左側壁  
見通図 (S=1/60)

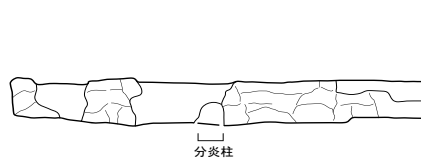


図 17 1号窯昇炎壁立面図 (S=1/60)

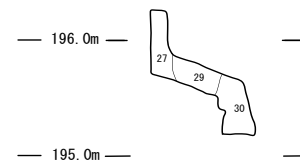


図 18 1号窯右側壁  
見通図 (S=1/60)

- 27 自然釉のかかって硬化化した窯壁
- 28 赤色被熱した窯壁
- 29 崩れかけた窯壁 (出入口下部分)
- 30 窯壁 (部分的に自然釉がかかり硬化化)

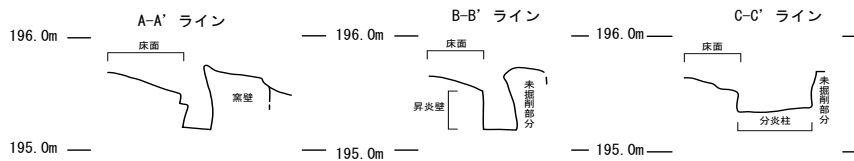
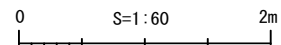
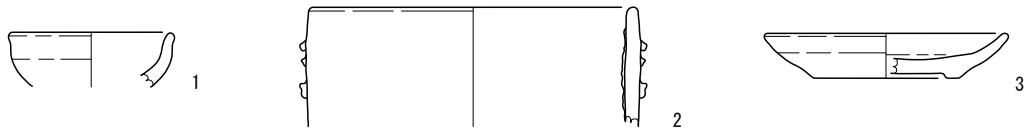
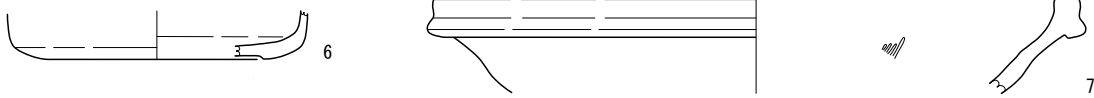


図 19 1号窯縦断面図 (S=1/60)

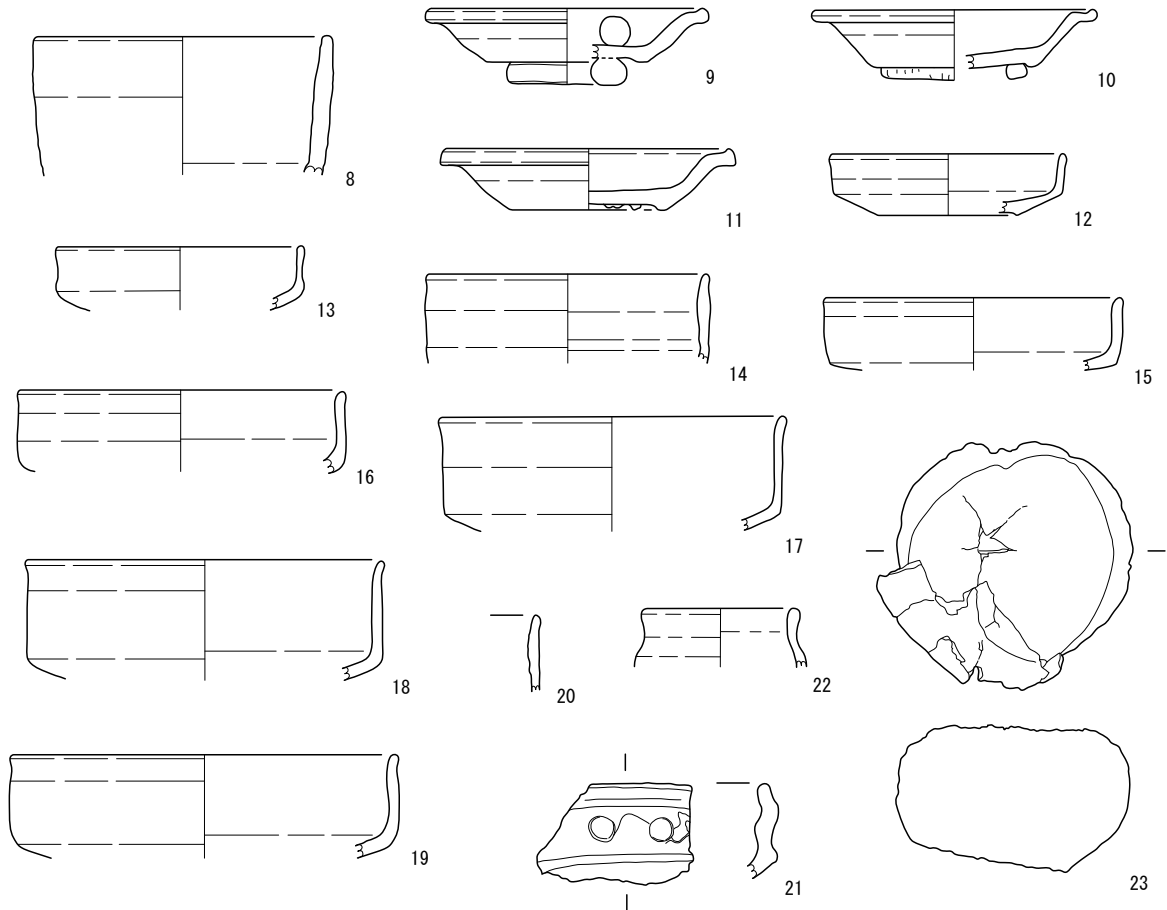




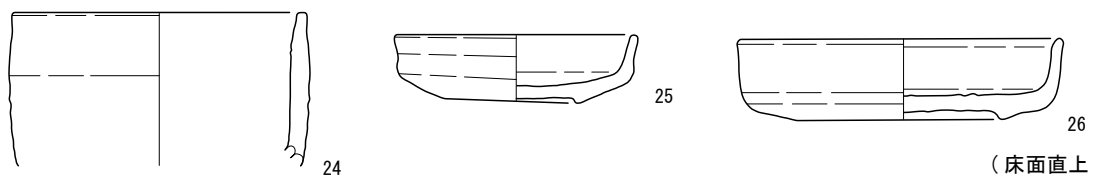
(表土)



(堆積土)

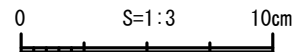


(崩落層)



(床面直上)

図 20 牟田洞 10 トレンチ出土遺物 1 (S=1/3)



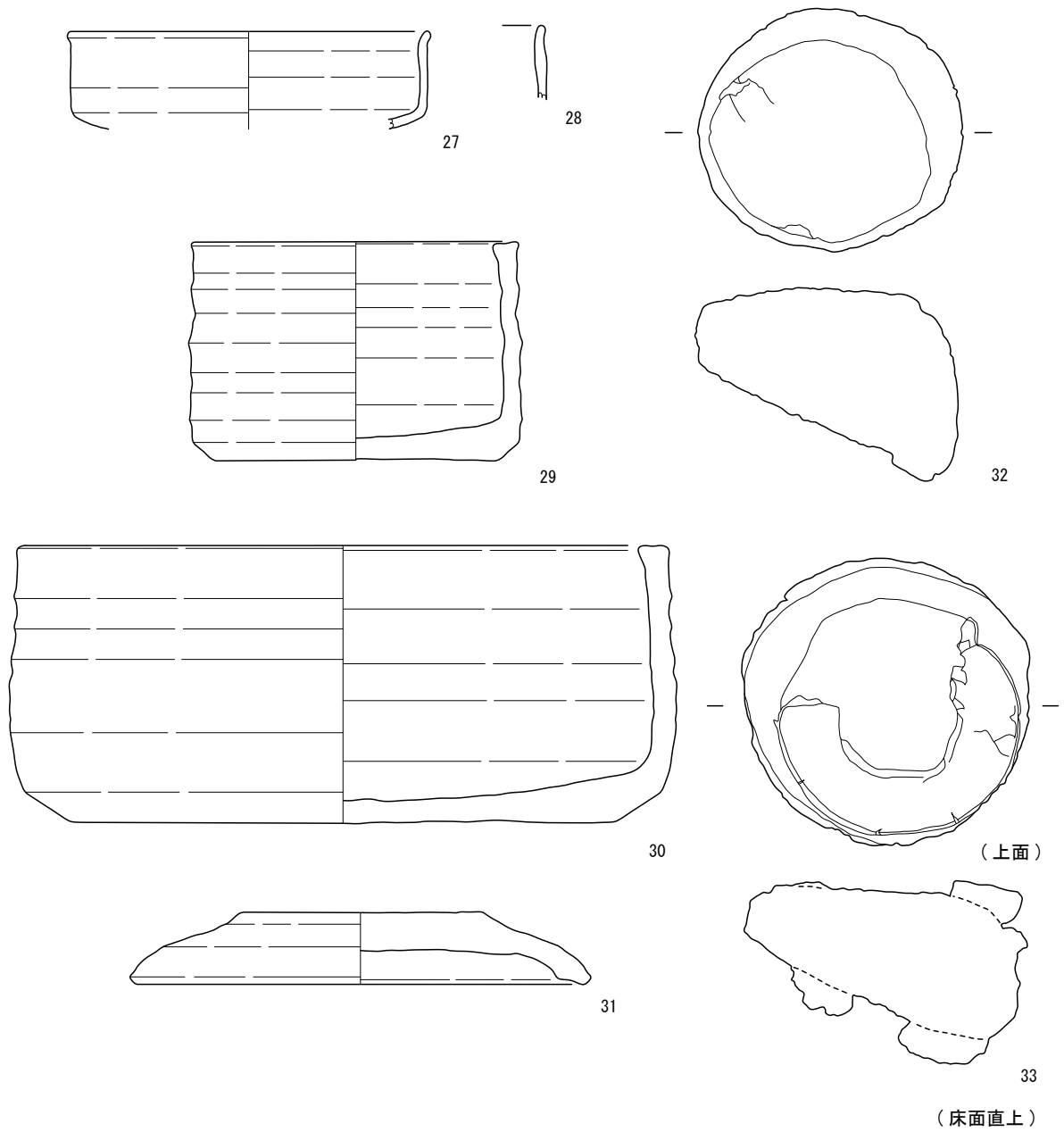


図 21 牟田洞 10 トレンチ出土遺物 2 (S=1/3)

0 S=1:3 10cm

## 2号窯 (7トレンチ) 図22・23

調査地は地形でややくぼんでいる部分である。現地表面より掘削深度5～20cmで赤色被熱し硬化した窯壁がみられた。赤色被熱した壁の平面の幅は約20cmであり、残存する壁の高さは20～30cmである。窯壁は、「ハ」の字状に山側から谷側へ広がり、粘土等を貼り付けた痕跡や自然釉がかかった様子はみられない。木根のカクランの影響により床面等の状況は不明瞭な部分はあるが、灰色に硬化した床面や焼台の痕跡等はみられない。被熱温度が弱いことや残存する窯壁の形状から、焼成室の上部、煙道に近い部分と想定される。現地形から推定される窯体の残存長は、2.5m程度である。

## 遺物 図30

7トレンチは遺物の出土数が少ない。1は端反皿であり、口縁部が外反する。発色不良であるが、おそらく灰釉と思われる。2は折縁皿であり、器高の高いものだろう。4は播鉢であり、口縁部の外側に縁帯が形成され、縁帯の下部が下方に引き出される。外面に焼けた土が溶着し、器面も荒れている。

## 4号窯 (9トレンチ) 図24～29

平成25年度に9-1トレンチ、平成27年度に9-2トレンチを設定した。

9-1トレンチ内では、右側に赤色被熱した右側壁が、左側には石と角形の粘土塊の列が確認された。右側壁は残存高20cm程度であり、地山が直接被熱している。左側には15～30cm程度の熱を受けて固まった黒色の粘土塊と、長径30～40cm大の石が並べられている。また、粘土塊の下にも並べられた石と同様の石材が並べられ、二段になっている。右側壁と左の石と粘土塊の列はトレンチの中央付近で狭くなり、その中には黒色の硬化面がみられる。黒色硬化面より西側は、地山面を削ってしまりのある硬い整地面がみられる。この西側部分はあまり熱を受けていないが、石と粘土塊の列より西側に一部被熱した部分がみられる。

検出状況から焼成室部分と判断し桃山期の大窯の可能性も考えられたが、①右側壁の被熱が弱いこと、②左側の石列が熱を受けていないこと、③7層に白色の粘土がみられること、④角形の窯の部材が大窯では知られないこと、4点から桃山期の大窯かどうか疑問がもたれたため、平成27年度に再調査することとなった。

9-2トレンチは、4号窯が桃山期の大窯であるかどうかを確認するために、窯の縦軸に設定した。トレンチ内では、焼成室床面や窯壁、昇炎壁が確認された。床面までの掘削深度は約30cmであり、他の窯の堆積土や崩落層では拳大以上の窯壁片が混じるが、このトレンチではかなり細かい破片が多いのが特徴であった。

窯壁はトレンチ上部で確認され、山側に向かってすぼまっていく形状である。9-1トレンチで確認されたのと同様に地山面が直接被熱し、粘土等の貼り付けはみられない。床面に近い位置で、匣鉢や現代の瓦片が出土した。

床面は貼床がされ、残存部分では赤色を呈しやや硬化している。上部では良好に残るが、焼成室中央付近では床面の上面は残りが悪く焼台、天井支柱などの痕跡もみられない。a'部分では被熱していない白色粘土が、長さ約50cm、厚さ10cm程度みられ、その粘土内から荒川豊蔵が色見に使用したと思われる小杯(図31 9)が出土した。トレンチ下方では、床面に被熱を受けていないしまりのある白色粘土(a)や粘土を薄く貼り被熱を受けた黒色硬化部分(b)、貼り床がはがれた赤色被熱部分(c)がみられた。窯壁にも粘土を貼り付けた痕跡がみられる。

その上には、9-1トレンチで検出された25cm程度の大きさの角形の粘土塊が、3つ並んで検出された。これら粘土塊は、被熱していない生の状態であり、現代の陶芸家が窯の構築に用いるものに似ている。昇炎壁の高さは20～25cm程度であり、d部分は欠損している。昇炎壁の下には、焼成室同様に被熱しない白色粘土がみられる。

このトレンチの堆積土からは、角材（16×14cm）やそれよりやや小振りな角材（11×10cm）、断面の直径約7cmの小分炎柱の一部がみられる。円柱形の小分炎柱は自然釉がかかり、これら角材には礫が混じるスサ入り粘土を使用しており、礫やスサが混じらない粘土で作られる桃山期の大窯の小分炎柱とは異なる。また、一辺約10cmの断面形が隅丸方形をした小分炎柱もあり、16cm×9.0cmのクレと呼ばれる窯材もみられる。これらにも礫が混じり、桃山期の大窯の窯材としてはみられないものである。

9-1及び9-2トレンチの検出状況から、この窯跡は桃山期のものではないと考えられた。記録や聞き取りによると、荒川豊蔵がこの地で最初に窯を造った場所は現在の窯の南側にあり、昭和8年12月に一度だけ焚いた後、今の位置に築き直したといわれている。この窯の被熱が弱いのは一度しか焼いていないからであり、床面に置かれた構築材や焚口付近の石と構築材の列、白色の生の粘土などは桃山期にみられず、豊蔵が2度目の窯焚きに向けて補修を行った痕跡と考えると、整合性がとれる。検出された桃山期の遺物は、山側からの流れ込みと考えられる。

荒川豊蔵は大窯の調査を行い、これを参考にして自身の窯を築いたといわれている。この窯の下部に桃山期の大窯の残存がある可能性を考え、床面が欠損している部分においてサブトレンチを空けたが、下層で別の床面は検出できなかった。

#### 遺物 図31

9トレンチでは播鉢が多く出土しているが、全体的に点数は少ない。2・6・7は播鉢であり、口縁部を下方に引き出すものと（2・7）と下方に垂れる（6）がみられる。3は瀬戸黒筒形碗であり、体部中央付近で内傾する。4は志野菊花形皿であり、内外面は削りにより整形される。5は無釉の灯明皿であり、体部は直線的に開き、口縁部はやや尖る。8は鉄釉の茶入であり、底部から体部にかけて直立する。口縁部は残存していないが、肩衝形になると思われる。9は豊蔵作の志野小杯である。外面に下絵があり、色見で使用するため成形後に底部を穿孔している。二次被熱を受けているため外面は荒れており、釉薬もかけられているが、はがれている。

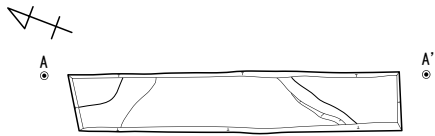


図 22 7 トレンチ平面図 (S=1/60)

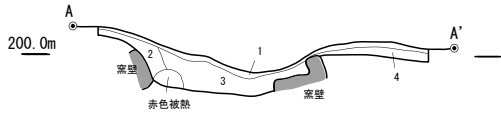


図 23 7 トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

- 1 腐葉土及び表土〔遺物・匣鉢等窯道具を含む〕
- 2 褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い φ5～20mmの礫をわずかに含む〔窯壁片を含む堆積土〕
- 3 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い φ5～10mmの礫をわずかに含む〔窯壁片を含む窯内埋土〕
- 4 褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い φ5～10mmの礫をわずかに含む〔堆積土〕
- 5 褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い φ5～10mmの礫をわずかに含む〔窯の構築面〕
- 6 褐色 砂質土 しまり弱い 粘性あり φ5～400mmの礫をわずかに含む〔堆積土〕
- 7 暗褐色 砂質土 しまり弱い 粘性あり φ5～60mmの礫をわずかに含む〔窯壁片・匣鉢を含む崩落層。全体的に赤みを帯びる〕
- 8 褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり φ5～40mmの礫を含む〔堆積土〕
- 9 灰白色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い φ5～40mmの礫を少量含む〔崩落層。部分的に10の土が混じる。〕
- 10 黒褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い φ5～10mmの礫をわずかに含む〔焼土層〕
- 11 褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり φ5～20mmの礫をわずかに含む〔窯道具含む堆積土〕
- 12 褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い φ5～20mmの礫をわずかに含む〔地山〕
- 13 褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い φ5～40mmの礫を含む〔遺物を含む崩落後の堆積土〕
- 14 褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い φ5～20mmの礫をわずかに含む〔窯壁の細かい破片が入る崩落層〕
- 15 暗灰褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い φ5mm前後の礫をわずかに含む〔床の硬化面がはがれて堆積した層〕
- 16 灰白色 粘土層 しまり強い 粘性弱い φ5mm前後の礫を含む〔豊蔵遺物含む。補修用の粘土か〕
- 17 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い φ5～50mmの礫を多く含む〔窯道具を含む崩落後の堆積土〕
- 18 灰白色 粘土層 しまり強い 粘性弱い φ5mm前後の礫を含む〔被熱していない。補修用の粘土か〕
- 19 赤褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い φ5～40mmの礫を含む〔窯壁片含む崩落層〕
- 20 赤褐色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い φ5mm前後の礫を少量含む〔地山が被熱を受けた層〕
- 21 黄褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い φ5～20mmの礫を少量含む〔地山の土と窯壁片が混じる〕

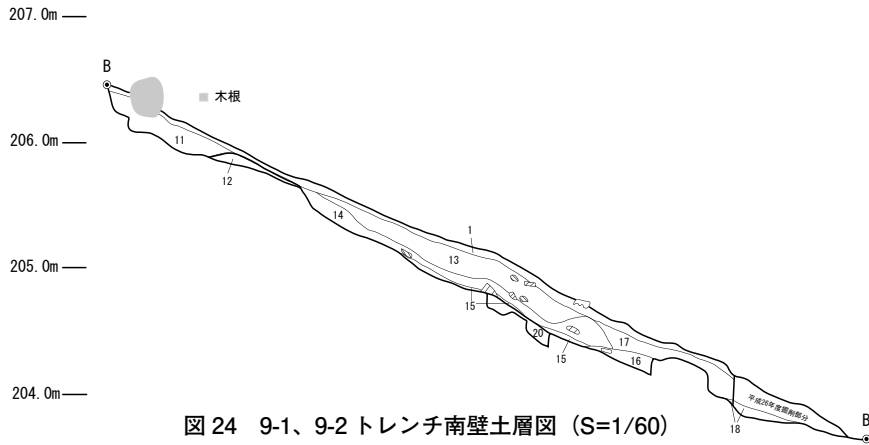


図 24 9-1、9-2 トレンチ南壁土層図 (S=1/60)

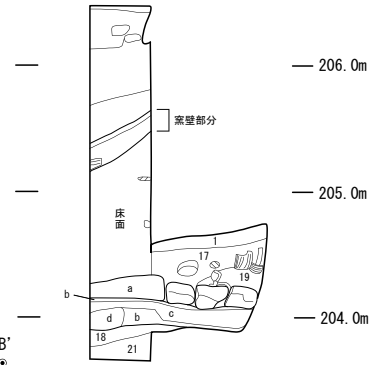


図 27 9-1、9-2 トレンチ  
立面図 (S=1/60)

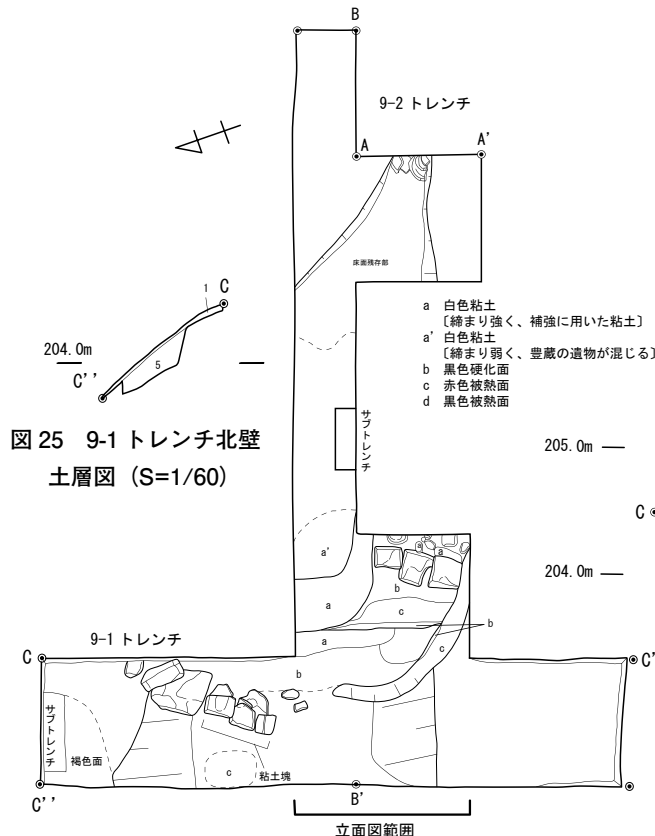


図 25 9-1 トレンチ北壁  
土層図 (S=1/60)

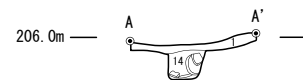


図 28 A-A' 土層  
断面図 (S=1/60)

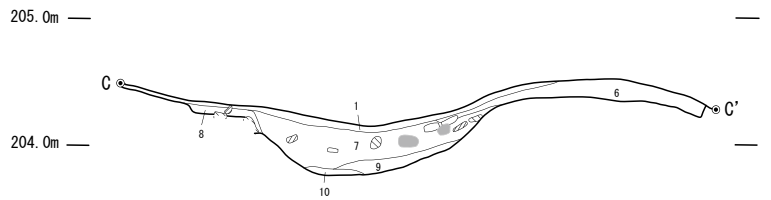


図 29 9-1 トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

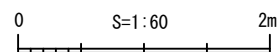
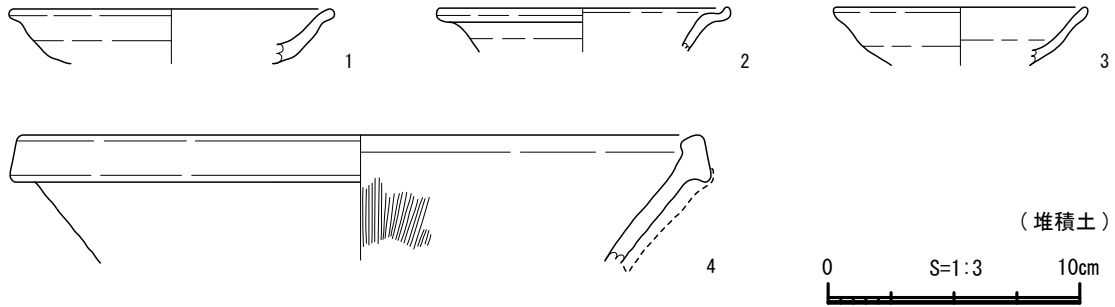


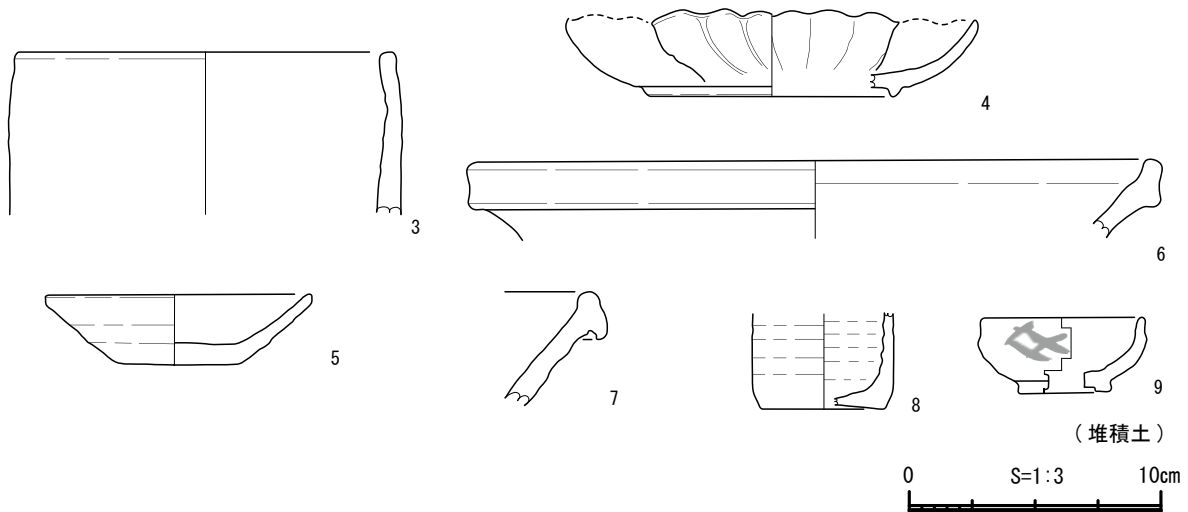
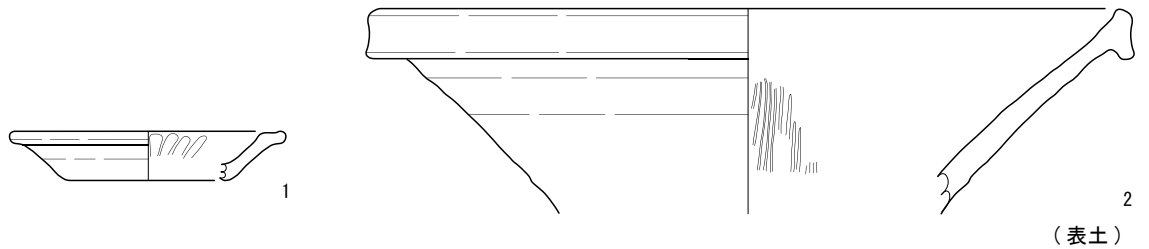
図 26 9-1、9-2 トレンチ平面図 (S=1/60)





番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		堆積土	不明	端反皿	(12.5)	(2.1)		発色不良。
2		堆積土	灰釉	折縁皿	(11.3)	(1.7)		
3		堆積土	錆釉	灯明皿	(9.9)	(2.3)		
4		堆積土	錆釉	播鉢	(26.8)	(5.1)		内面に櫛目あり。

図30 牟田洞7トレンチ出土遺物 (S=1/3)



番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		表土	灰釉	折縁皿	(10.6)	1.9	(6.2)	ソギ入り。
2		表土	錆釉	播鉢	(29.4)	(8.1)		1単位11本以上の櫛目あり。
3		堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(14.6)	(6.4)		
4	4	堆積土	(志野)	菊花形皿	(16.1)	3.3	(9.6)	付高台。
5	5	堆積土		灯明皿	(10.3)	2.8	4.8	底部外面回転糸切痕。
6	6	堆積土	錆釉	播鉢	(26.6)	(3.1)		
7		堆積土	錆釉	播鉢	—	(4.5)		内面に櫛目あり。
8	8	堆積土	鉄釉	茶入	—	(3.8)	4.8	底部外面回転糸切痕。
9	9	はずした粘土層	長石釉	小杯	6.3	3.0	3.7	外面に下絵あり。豊蔵作。

図31 牟田洞9トレンチ出土遺物 (S=1/3)

### 第3節 作業場の調査

#### 8トレンチ 図32~34

8トレンチは、3号窯の北側にやや平坦面があり、磁気探査で反応があったため、設定した。表土より下は遺物や窯壁片、窯道具を伴う堆積土であり、北側はなだらかな斜面であるが、南側の窯よりの部分で2.2mほどの平坦面を切土により造成した面がみられる。また、窯よりの部分、トレンチの南端で匣鉢や天目茶碗などの遺物が集中してみられ、その部分は赤色被熱している。焼土はみられず、3号窯の熱の影響を受けた可能性が考えられる。3号窯の右側は急斜面であるため、製品の出し入れの際に使用された作業面と思われる。

#### 遺物 図35

碗は天目茶碗が多数を占め、皿類は折縁皿が丸皿よりも多くみられ、出土遺物全体の中で志野が20%近くを占める。

1～5は天目茶碗であり、1～3は削り出し輪高台となる。口唇部は直線的で、口縁部はやや外反し、丸く収める。6は無釉の灯明皿であり、体部から口縁部にかけて外側に開く。7は志野菊花形皿であり、内外面を削り菊花形にしている。内面に他の陶器片が溶着する。8は志野の向付であり、外面に珠文が2つみられ、底部には半環足が2つみられる。発色不良であり、下絵があるかは不明である。9は志野の筒向付であり、外面に草文が描かれる。13は皿と皿の溶着を防ぐために用いられるハサミ皿である。

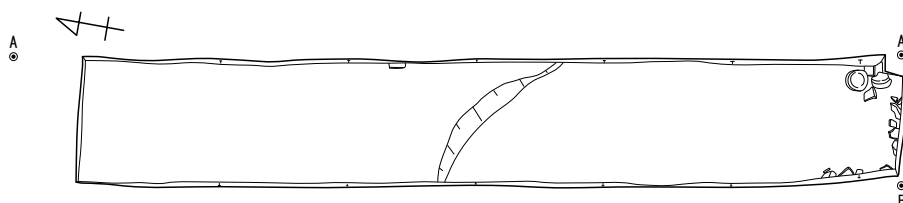


図 32 8トレンチ平面図 (S=1/60)

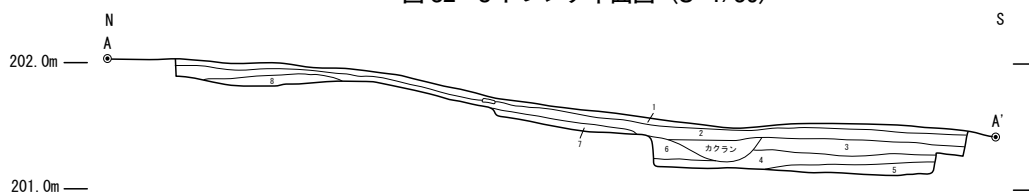


図 33 8トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

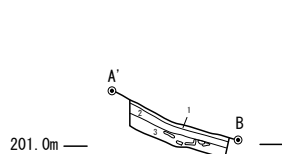
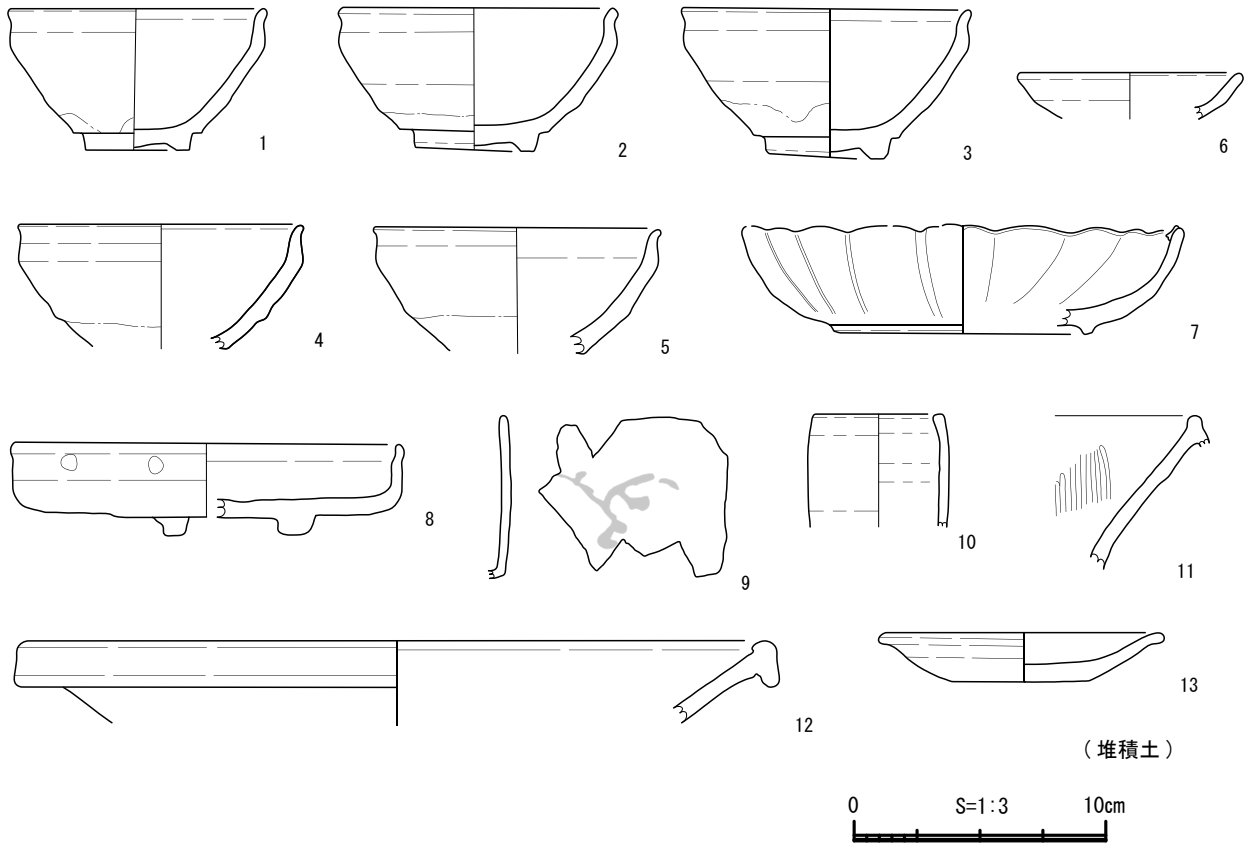


図 34 8トレンチ南壁土層図 (S=1/60)

- |   |         |       |      |                                    |
|---|---------|-------|------|------------------------------------|
| 1 | 腐葉土     |       |      |                                    |
| 2 | 暗褐色 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5mm 前後の礫を少量含む〔遺物を含む堆積土〕           |
| 3 | 褐色 砂質土  | しまりあり | 粘性あり | Φ5～10mm の礫を少量含む〔遺物や窯壁片を含む堆積土〕      |
| 4 | 褐色 砂質土  | しまりあり | 粘性あり | Φ5mm 前後の礫を少量含む〔遺物や窯道具を含む堆積土〕       |
| 5 | 黄褐色 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5mm 前後の礫を少量含む〔遺物や窯道具を含む堆積土〕       |
| 6 | 明褐色 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5～20mm の礫を少量含む〔黄色の粘土ブロックを多く含む堆積土〕 |
| 7 | 褐色 砂質土  | しまりあり | 粘性あり | Φ5～50mm の礫を多く含む〔堆積土〕               |
| 8 | 明褐色 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5～50mm の礫を少量含む〔堆積土〕               |



番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.1)	5.6	4.2	
2	2	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.1)	5.7	4.7	
3	3	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.5)	5.9	4.6	
4	4	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.1)	(5.0)		
5	5	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.4)	(4.9)		
6		堆積土		灯明皿	(8.8)	(1.8)		無釉。
7	7	堆積土	(志野)	菊花形皿	(17.2)	4.3	(9.8)	削り出し高台。口縁部内面に他の陶器片が溶着。
8	8	堆積土	(志野)	向付	(15.6)	3.8		底部に脚が2カ所、体部に珠紋が2つ。
9	9	堆積土	(志野)	向付	—	(6.5)		側面に草文が描かれる。
10		堆積土	灰釉	香炉	(5.0)	(4.5)		
11		堆積土	錆釉	櫛鉢	—	(6.2)		櫛目は1単位12本。
12	12	堆積土	錆釉	櫛鉢	(29.0)	(3.3)		
13	13	堆積土		ハサミ皿	11.3	2.0	5.0	

図 35 牟田洞 8 トレンチ出土遺物 (S=1/3)

## 6 トレンチ 図36

荒川豊蔵氏の窯の東側の尾根付近に南北9.0m、東西1.5mの6 トレンチを設定し、調査を行った。遺構は確認されなかった。

図36は6 トレンチの東壁の土層堆積状況である。北壁は①②③層の順に、南壁は①③の順に堆積をみせる。なお、③④層は礫を多く含んでいることから、地山の可能性がある。

(伊藤真央・半場千晴)

## 遺物 図37～39

6 トレンチから出土した大窯製品は、碗類35個体、小皿類61個体、中皿・向付類21個体、調理鉢類4個体、その他7個体で、計128個体である。以下、図化したものについて器種ごとに概要を述べる。

### 1. 碗類

碗類には天目茶碗・筒形碗・小碗などがある。

#### (1) 天目茶碗 (1～5)

天目茶碗はa～c類の3類に分類した(註)。a類(1～3)は削り出し輪高台である。体部はほぼ直線的に開き、口縁部は下方が一旦直立するが端部は外反しS字状になる。なお、1は口縁端部が玉縁風に仕上げられており、2には高台端部に糸切り痕が残る。b類(4)は削り出し内反高台である。体部はほぼ直線的に開き、口縁部は下方が一旦直立するが端部は外反しS字状になる。c類(5)は高台部を欠くが、やや大形である。体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。溶着資料からみて天目茶碗は、後述する丸底匣鉢に輪ドチを敷いて1個ずつ焼成されている。(森秀人)

(註) 形状によりa類(1～3)が天目茶碗D類、b類(4)が天目茶碗E類、c類(5)が天目茶碗F類に比定される(藤澤2002)。

#### (2) 筒形碗 (6～11)

筒形碗は全形を知る資料はないが、半筒形のA類と切立形のB類に大別できる。A類(11)は付高台である。B類(8～10)のうち、8は高台脇が水平方向に開き、体部はほぼ直立し、口縁部は緩やかに外反する。9は断面形が長方形の付高台を有する。体部下方は直線的に開き、上方はほぼ直立する。10は高台脇が水平方向に開き、体部下端は丸みを持ち、上方はほぼ直立するようである。その他(6・7)は体部上方の破片であり、B類と思われる。6～9は、体部外面には縦方向にヘラ削り調整される。7には口縁部にはさみ痕が残っており、焼成中に窯から引き出されたものと思われる。(石浜莉那)

#### (3) 小碗 (12・13)

12は体部は全体的に丸みを持って立ち上がり、口縁端部も丸く仕上げられる。13は体部下方は丸みを持つが上方の立ち上がりは強く、口縁端部は丸く仕上げられる。両者とも削り出し輪高台である。(宮田実歩)

### 2. 小皿類

器高2.0cm、口径10cm程度の小皿類には丸皿・内禿皿・折縁皿などがある。

#### (1) 丸皿 (16～37)

丸皿には付高台のA類、削り込み高台のB類、削り出し輪高台のC類がある。A類(16～18)は体部は全体にやや丸みを持って開き、口縁端部は丸く収まる。なお17の底部外面には輪ドチに付着した匣鉢の痕跡があり、上面には匣鉢蓋が付着している。B類(20～24)は、

体部が全体に丸みを持つもの(20~22)、やや丸みを持って開くもの(23・24)がある。なお21・24には底部外面に輪ドチの痕跡が認められる。C類(25~37)は体部の丸みが強いもの(25・31・35・36)、口縁部が僅かに外反するもの(26・28)、体部下方が僅かに丸みを帯び上方が直線的に伸びるもの(29・30・32)、高台の幅が狭く先端が尖り気味で、体部の丸みが弱く口縁部が僅かに外反するもの(33・34・37)などに分類できる傾向がある。体部下端に円錐ピンの痕跡を残し重ね焼きされたとと思われるB類の20・22を除くと、A~C類とも底部外面に輪ドチの痕跡を残すものが主体であることから、後述する小形の匣鉢に輪ドチを敷き1個焼き(単独で焼成)された可能性が高い。(山本駿)

#### (2) 内禿皿(19・38~40)

6トレンチ出土の内禿皿は全て削り込み高台で、体部内面にソギのないI類とソギのあるII類とに大別される。内禿皿I類(19・38・39)は高台幅が広く体部がほぼ直線的に開くもの(39)、高台幅が狭く口縁部が僅かに外反するもの(19)、高台の先端が尖り器厚が全体的に薄いもの(38)がある。内禿皿II類(40)は体部下方には明瞭な稜が入り、口縁部は指で押さえによる輪花風に仕上げている。輪花にした後、体部内面には丸ノミ状工具によりソギを入れられている。なお38を除くと、底部内面凸部の釉薬は拭い取られており、輪ドチを挟んで重ね焼かれたものと推定される。(森秀人)

#### (3) 折縁皿(43~55)

折縁皿は、体部内面にソギのないI類とソギのあるII類とに大別される。折縁皿I類(43~48・55)は、削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類とに分類される。B類(43~46)は高台の幅が広く体部下端に稜が入るもの(44)、高台の先端が尖り体部がほぼ直線的に開くもの(43・45)、体部が扁平なもの(46)がある。C類(47・48・55)は高台に一定の幅を持ち、断面形は逆台形を呈し、体部が直線的に開くもの(47・48)と、高台の幅が狭く先端が尖り底部内面に凸部が形成されないもの(55)がある。後者には串状工具により二重線が引かれ、印花手法により草花文が施される。折縁皿II類(49~54)も削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類とに分類される。B類(49~51)は高台に幅をもつものが主体である。体部下方に稜が入るもの(49)、小形で扁平な体部を有するもの(50)、体部が直線的に開くもの(51)がある。C類(52~54)は高台に幅を持つもので、体部はほぼ直線的に開く。底部内面に凸部が形成されていない55を除くと、内面凸部の釉薬は拭い取られ、底部内外面に輪ドチの痕跡を残すものが多いことから、輪ドチを挟んで重ね焼かれた可能性が高い。(垣見太郎)

### 3. 中皿・向付類

上記の器高2cm、口径10cm程の一般的な小皿類に対して、それ以外の供膳用の皿・鉢類を「中皿・向付類」として一括した。また、形状が小皿類と類似するものを「中皿類」とし、小皿・中皿類とは形状が異なるものを「向付類」とした。

#### (1) 灰釉中皿(56~58)

56は削り出し輪高台で、体部は僅かに丸味をもって開く。内面にはボロが付着する。57は削り出し輪高台で、体部はほぼ直線的に開く。底部内面には凸部が形成されている。58は削り出し輪高台で、体部は僅かに丸味をもって開く。内面凸部の釉薬は拭い取られている。

#### (2) 志野中皿(59)

志野中皿は付高台で、体部は全体に丸みを持って開く。

#### (3) 黄瀬戸向付(63・65・66)

63は削り出し輪高台で、体部下方は直線的に開くが、中央付近で丸みを帯び上方はほぼ直立する。全面に灰釉が施される。65は付高台で、体部下方は直線的に開いており、上方は直立するようである。底部内面にはヘラ状工具により草葉文が描かれ、葉の部分には所々「胆礬（タンパン）」手法が認められる。66は付高台で、体部下方はほぼ水平方向に開いており、上方は直立するようである。底部内面にはヘラ状工具により草花文が描かれる。

#### (4) 志野向付 (60~62・64)

60は付高台を有し、内面には鉄絵による草文が描かれる。61は削り込み高台で、体部下方は直線的に開く。内面には鉄絵で草花文が描かれる。62は皿形態の向付で、付高台で体部下方は水平方向に開く。体部中央にも稜が入り口縁部は大きく外折する。口縁端部をヘラでカットし輪花風に仕上げている。内面には丸ノミ状工具によるソギが入り、口縁部上面には鉄絵が描かれる。64は「角向付」で、削り込み高台で、体部下方は直線的に開く。体部外面には鉄絵による草花文が描かれる

### 4. 調理鉢類

「中皿・向付類」とした供膳用の皿類や鉢類に対して、播鉢・片口など調理用の鉢を「調理鉢類」として一括した。

#### (1) 播鉢 (67~73)

大窯段階の播鉢は、口縁部の外側に縁帯が形成されるⅠ類と、口縁部が内側に折り返されるⅡ類とに大別されるが、6トレンチではⅠ類のみが確認されている。底部は糸切り痕未調整の平底で、体部は直線的に開く。口縁端部がやや膨らむa類、口縁端部に膨らみを持つb類、口縁端部が角張るc類に分類した。a類(67・68・70)では、縁帯下方に稜が入るもの(67・68)と、縁帯下方が体部に対して垂直方向に延びるもの(70)がある。b類(69・73)では、縁帯下方が摘み出され先端が尖るもの(69)と、縁帯下方が丸みを持つもの(73)がある。c類(71・72)では、71は縁帯下方に稜が入るもの(71)と、底部に対してほぼ垂直方向に縁帯が形成されるもの(72)がある。(片山尚樹)

### 5. その他

その他の器種として香炉・灯明皿・徳利などがある。

#### (1) 香炉 (14・15)

削り込まれた内反高台で、体部下端の丸みは強く、体部はほぼ垂直に立ち上がり筒形になる。14は口縁端部を内側に挽き出し、15は口縁端部は角張っている。なお、15には体部下端に輪ドチが付着しており、2次的な使用が想定される。(宮田実歩)

#### (2) 灯明皿 (42)

法量的には小皿類の範疇に含められるが、糸切り痕未調整の平底である。内面にはコテの押圧による3条の凸線が同心円状に巡る。釉薬は施されていない。(森秀人)

### 6. 窯道具類

上記の製品の焼成用に用いられた窯道具類には匣鉢・匣鉢蓋・ハサミ皿などがある。6トレンチからは大量に出土しているが、図化した資料は極めて少ない。

#### (1) 匣鉢 (74~84)

匣鉢は底部の形状から平底匣鉢と丸底匣鉢とに大別される。平底匣鉢は糸切り痕未調整の平底で、法量によりA類・B類・その他に分類できる。A類(81)は最も多く出土している一般的な形状の匣鉢である。体部下端に稜が入り上方はほぼ直立する。B類(74~78)は体部下方はほぼ直線的に開き、上方は直立する。74・75には丸皿Cの破片が付着しており、B

類は輪ドチを敷いて丸皿を単独で焼成したものと考えられる。なお74・78の底部内面には、ヘラ状工具により「丰」の窯印が彫られている。79は平底匣鉢の中では大型の部類に含まれる。底部内部にはヘラ状工具により「才」の窯印が確認できる。80は底部内面には向付と思われる志野製品が付着している。82は体部下端には直径8cm程の焼成前の穿孔が認められる。丸底匣鉢（83・84）であり、84には底部外面に掌の痕跡が残る。内部には天目茶碗の破片が付着しており、輪ドチを敷いて天目茶碗を単独で焼成したものと考えられる。（加藤友也）

## （2）匣鉢蓋（41・85・88～97）

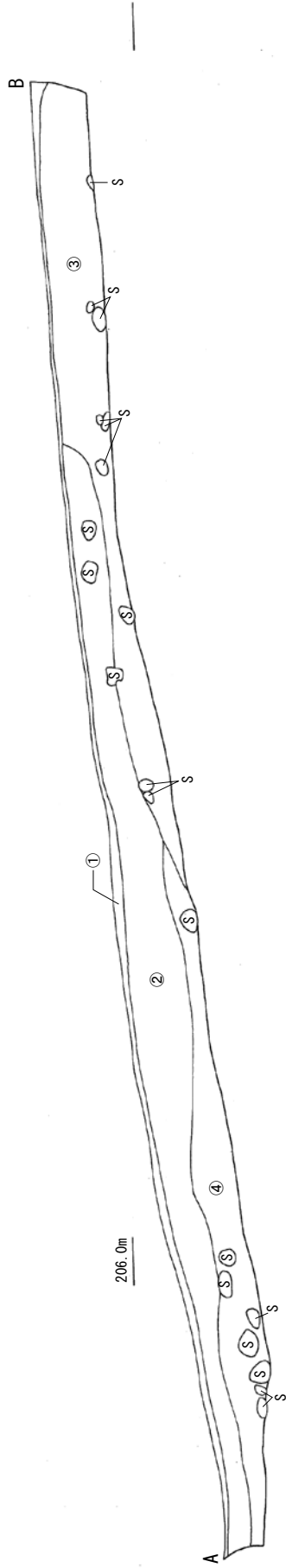
凶化したものは糸切り痕未調整の平底で、口径が15cm程度のA類と口径11cm程度のB類とに大別される。A類（85）は体部は扁平で口縁端部は薄く仕上げられる。内外面に自然釉やボロが付着するため、内面の調整は不明である。B類（41・88～97）は、形状によりa類・b類・その他に分類した。a類（90～92・95・96）は、体部はほぼ直線的に開き、器厚は全体的に厚い。b類（41・88・94・97）は形状はa類に類似するが、底部内面はコテの押圧により同心円状の段や凸線が形成される。その他、89は底部が突出し体部は全体にやや丸みを帯びる。93は高台径がやや広く体部は直線的に開き、器厚は全体的に薄い。なお、胎土や法量から平底匣鉢B類に被るものと考えたが、底部内面に輪ドチの痕跡が認められるものが多いことからハサミ皿である可能性もある。

## （3）ハサミ皿（86・87）

体部が全体にやや丸みを持って開き、口縁端部は丸く収まる。平底で器厚が薄く、底部内面に輪ドチの痕跡が認められる。（日比野将之）

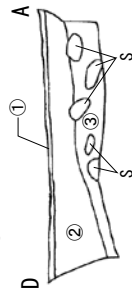
東壁セクション図

207.0m



北壁セクション図

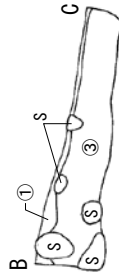
205.0m



204.5m

南壁セクション図

207.0m



206.0m

- ① 黒褐色土 (粘性○ しまり△ 腐植土)
- ② 暗赤褐色土 (粘性△ しまり△ 窯道具を含む)
- ③ 褐色土 (粘性○ しまり○ 礫5~15cm 大を含む)
- ④ 褐色土 (粘性× しまり○ 礫0.5~2cm 大を含む)

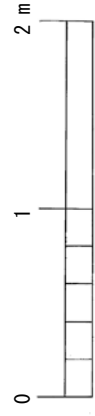


図36 6トレンチ遺構図



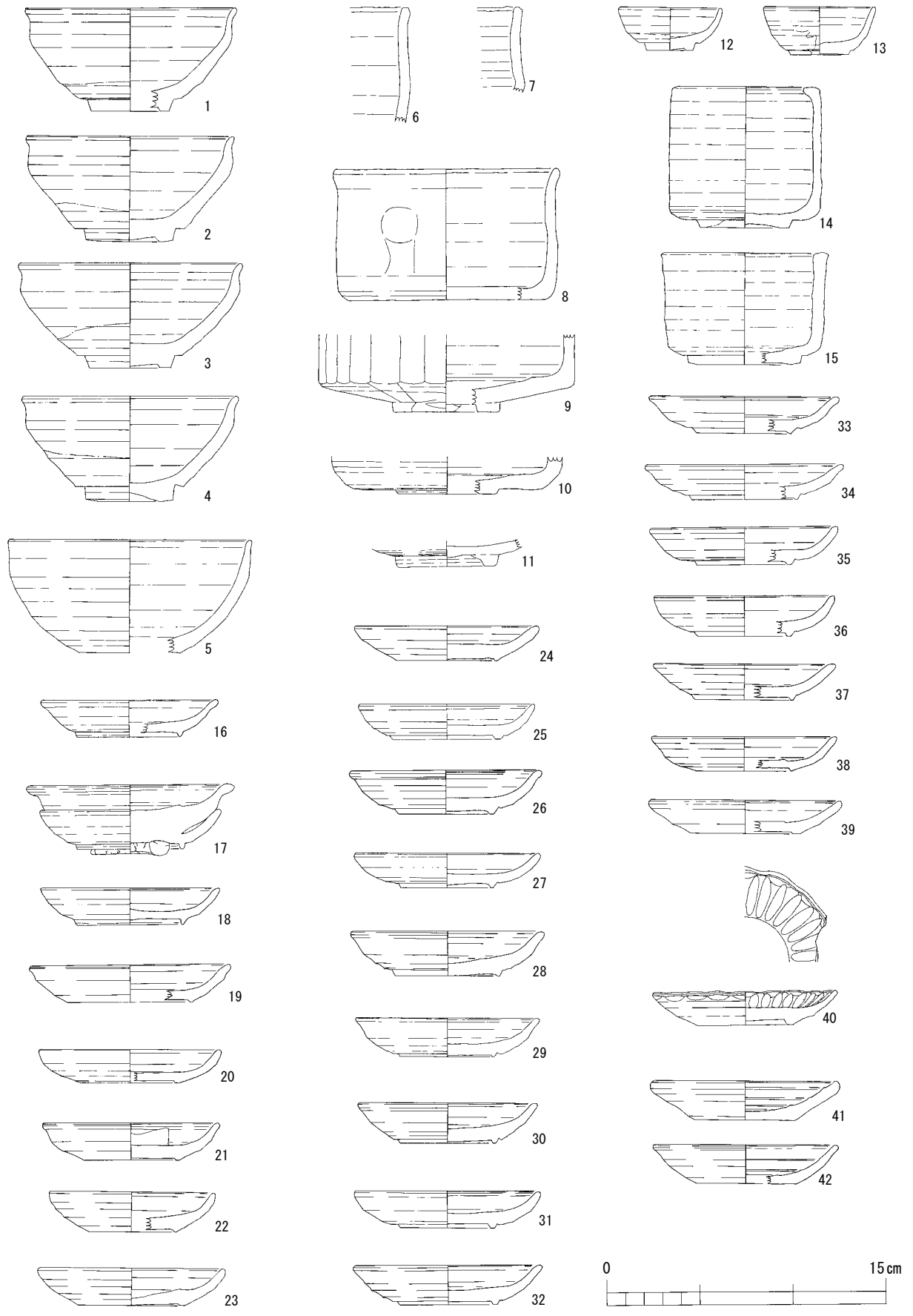


図37 牟田洞6トレンチ出土遺物1

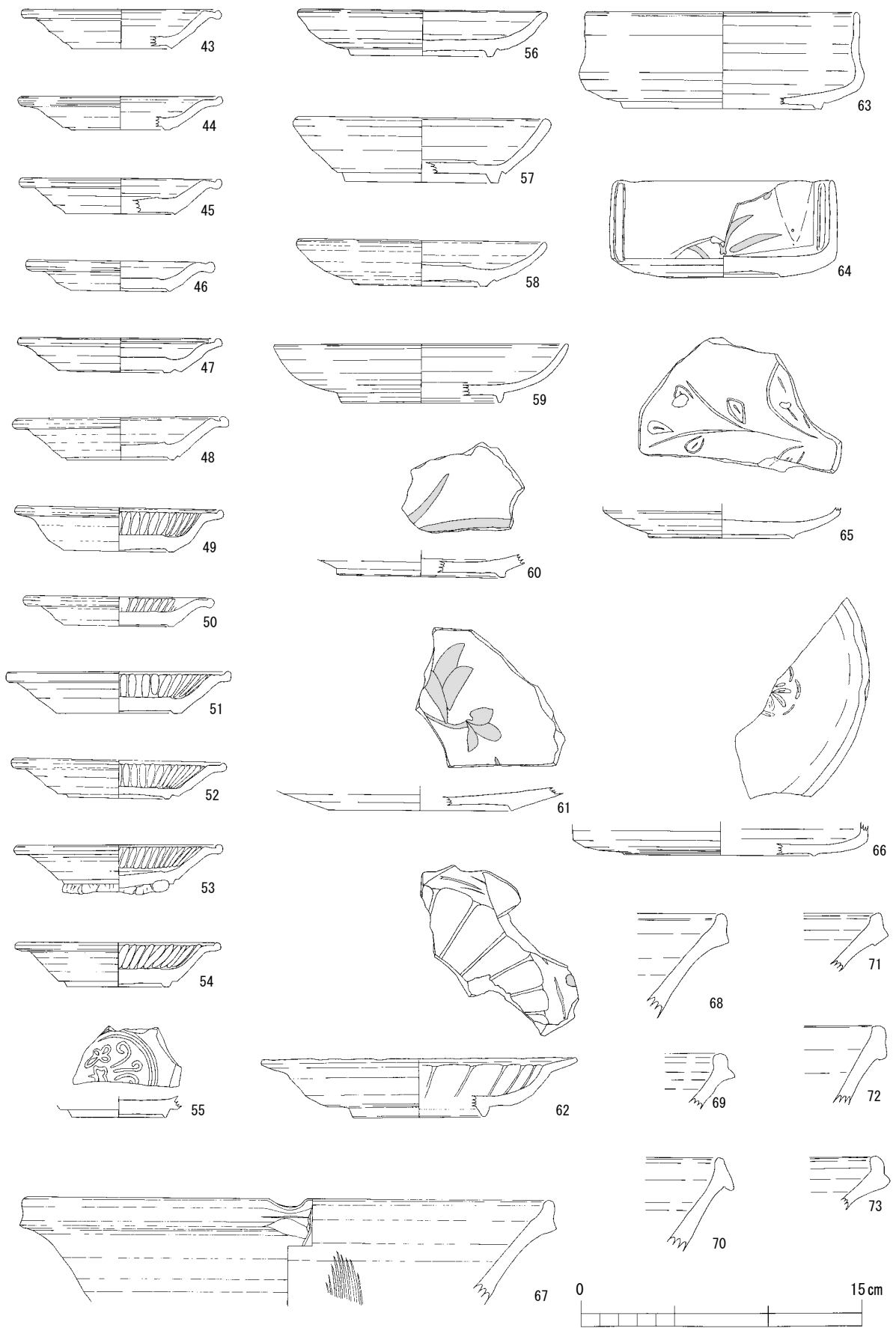


図38 牟田洞6トレンチ出土遺物2

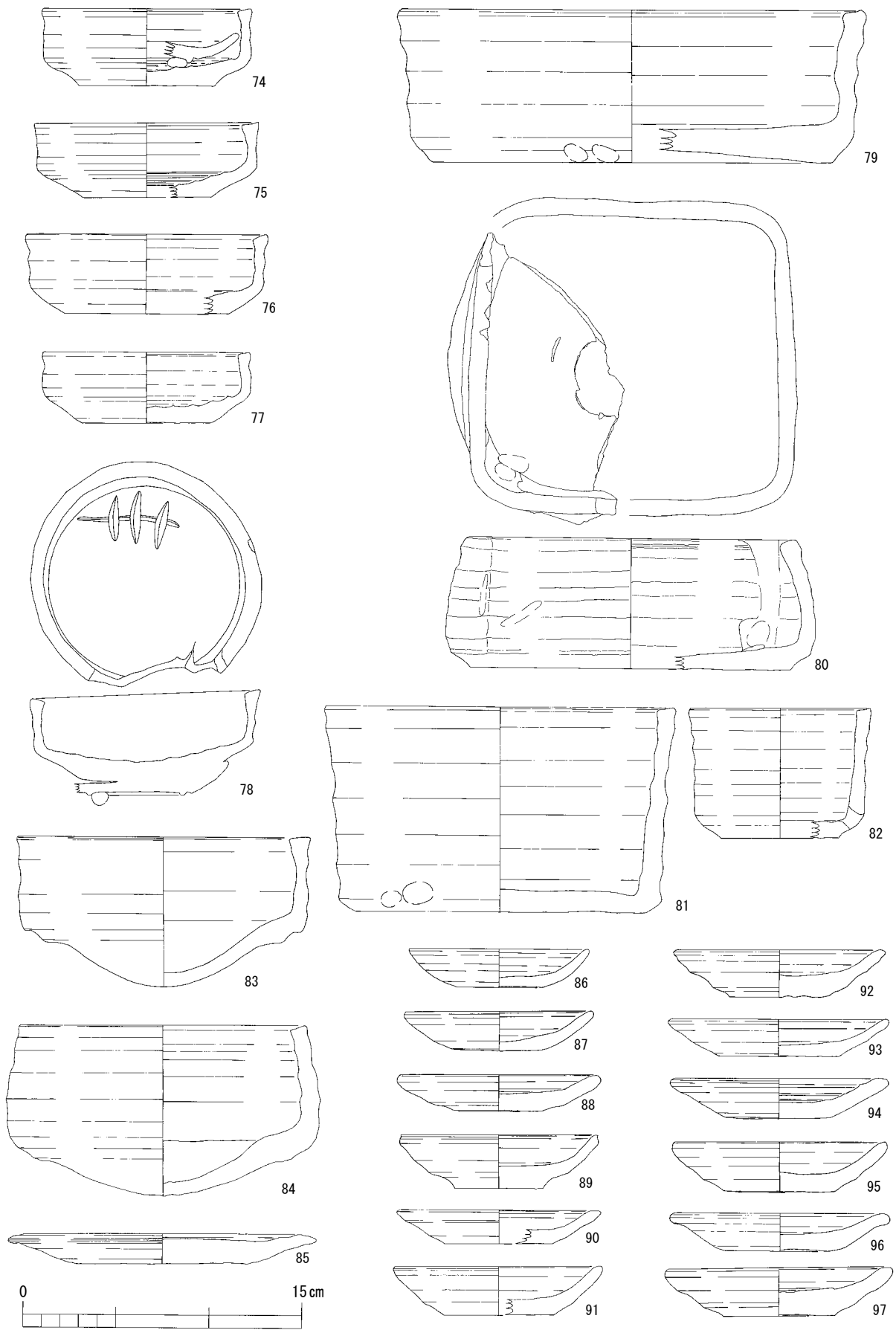


図39 牟田洞6トレンチ出土遺物3

図	器種	高台※1	法量 (cm)				口縁残存率 %	高台残存率 %	釉薬	輪ドチの痕跡	備考
			器高	口径	底径	高台径					
1	天目茶碗 D	C	5.5	11.2		4.2	15	30	鉄		ゆがみ大
2	天目茶碗 D	C	5.6	11.0		4.7	100	100	鉄		
3	天目茶碗 E	C	5.6	11.8		4.4	20	80	鉄		
4	天目茶碗 E	D	5.7	11.4		4.7	45	70	鉄+錆		
5	天目茶碗 F	—	(6.0)	13.0			50		鉄		
6	筒形碗 B	—	(6.1)						鉄		
7	筒形碗 B	—	(4.5)						鉄		
8	筒形碗 B	—	(7.1)	11.9			10		鉄		
9	筒形碗 B	A	(4.1)			5.6			鉄		
10	筒形碗 B	AかC	(2.0)			5.1			鉄		
11	筒形碗 A	A	(1.4)			5.2			鉄		
12	小碗	C	2.3	5.4		2.5	25	100	灰	外	
13	小碗	C	2.6	5.8		3.1			灰		
14	香炉	D	7.5	6.1		4.8			灰		
15	香炉	D	6.0	7.4		6.0			灰		体部下端にヨリ輪付着
16	丸皿	A	2.0	9.2		5.4			灰		
17	匣鉢蓋	E	2.6	10.6	5.4		80		無		凸部あり
18	丸皿	A	2.1	9.6		5.6			灰	外	外底に匣鉢付着
19	丸皿	A	2.0	9.4		5.6	45	45	灰	外	
20	内壳皿 I	B	2.0	10.6		6.7	30	30	灰		焼成やや不良、凸部軸拭う
21	丸皿	B	1.9	9.8		5.3	40	35	灰		体部下端に円錐ビン痕
22	丸皿	B	2.0	9.2		5.0	10	50	灰	外	内底に匣鉢付着
23	丸皿	B	2.15	8.8		4.6	25	45	灰		体部下端に円錐ビン痕
24	丸皿	B	2.0	9.9		5.8	45	55	灰か		焼成不良
25	丸皿	B	1.8	10.0		5.5	30	75	灰	外	焼成やや不良
26	丸皿	C	1.9	9.2		5.7	20	45	灰	外	窯道具付着、底部ゆがみあり
27	丸皿	C	2.3	10.0		5.1	35	35	灰	外	焼成やや不良
28	丸皿	C	1.9	9.8		5.0	45	80	灰	外	
29	丸皿	C	2.4	10.0		5.6	55	100	灰か		焼成不良
30	丸皿	C	2.1	9.6		5.0	20	30	灰		焼成やや不良、ゆがみあり
31	丸皿	C	2.2	9.2		5.0	80	100	灰		
32	丸皿	C	2.0	9.8		5.0	45	85	灰		
33	丸皿	C	2.1	9.8		5.2	80	100	灰	外	内底に窯道具付着
34	丸皿	C	2.0	9.8		5.0	35	30	灰		ゆがみあり
35	丸皿	C	1.9	10.3		5.6	30	10	灰		焼成過多
36	丸皿	C	2.0	10.0		5.1	80	30	灰	外	ゆがみあり
37	丸皿	C	2.2	9.6		5.0	25	30	灰		
38	丸皿	C	1.9	9.5		5.3	30	50	灰	外	内底に窯道具付着
39	内壳皿 I	B	1.8	9.8		5.2	20	35	無		外面降灰
40	内壳皿 I	B	2.3	10.0		5.8	20	20	灰	外	凸部軸拭う
41	内壳皿 II	B	2.3	9.7		5.2	20	85	灰	外	輪花、凸部軸拭う
42	匣鉢蓋 I	E	2.1	9.6	5.3		65	65	無		内面に凸線
43	灯明皿	E	2.1	9.6	5.4		25	35	無		内面に凸線
44	折縁皿 I	B	2.1	10.2		5.2	30	25	灰	外	凸部軸拭う
45	折縁皿 I	B	1.8	10.4		5.2	30	25	灰		凸部軸拭う、ゆがみあり
46	折縁皿 I	B	1.9	10.6		5.8	40	30	灰	外	凸部軸拭う
47	折縁皿 I	B	1.6	9.6		5.2	30	50	灰	内	凸部軸拭う、ゆがみ大
48	折縁皿 I	C	1.8	10.4		5.3	40	100	灰	内外	凸部軸拭う
49	折縁皿 I	C	2.3	10.8		5.6	10	75	灰	内外	凸部軸拭う、ゆがみ大
50	折縁皿 II	B	2.3	10.7		5.8	50	75	灰	外	凸部軸拭う、鉄釉内壳皿付着
51	折縁皿 II	B	1.6	9.8		5.8	15	25	灰	内外	凸部軸拭う、ゆがみ大
52	折縁皿 II	B	2.2	11.6		5.7	60	100	灰		凸部軸拭う
53	折縁皿 II	C	2.0	11.0		5.4	70	80	灰	外	凸部軸拭う
54	折縁皿 II	C	2.1	10.6		5.8	30	40	灰	内外	凸部軸拭う
55	折縁皿 II	C	2.4	11.0		5.5	50	100	灰	外	凸部軸拭う
56	中皿	C	2.4	13.0		7.6	70	100	灰	外	印花文と串描き
57	内壳中皿	C	3.4	13.1		8.1	20	40	灰か		ゆがみ大、内面ボロ付着
58	内壳中皿	C	2.4	13.1		7.1	30	50	灰	外	焼成やや不良、黄瀬戸か
59	志野中皿	A	3.1	15.6		8.2	10	10	長石		凸部軸拭う、内外面ボロ付着
60	志野向付	A				9.0		40	長石		鉄絵
61	志野向付	B				9.9		25	長石	外	鉄絵
62	志野向付	A	3.1	16.6		7.1	10	10	長石		輪花、鉄絵
63	黄瀬戸向付	C	5.1	14.4		10.6	10	20	灰		外底に団子トチ付着、高台痕
64	志野向付	B	5.1	13.5		6.1	5	75	長石		鉄絵、ヘラ掻き上げ、内底に円錐ビン痕
65	黄瀬戸向付	A				7.6		65	灰		ヘラ描き、緑釉付着 (タンパン)
66	黄瀬戸向付	A				10.0		25	灰		ヘラ描き
67	擂鉢 I	—		27.6			5		錆		
68	擂鉢 I	—					5		錆		
69	擂鉢 I	—					5		錆		67と同じもの
70	擂鉢 I	—					5		錆		
71	擂鉢 I	—					5		錆		
72	擂鉢 I	—					5		錆		
73	擂鉢 I	—					5		錆		
74	匣鉢	E	4.1	11.2	7.2		5	100	無		内底に刻文、内部に丸皿C付着
75	匣鉢	E	5.0	12.0	6.0		10	35	無		内底に灰釉小皿付着
76	匣鉢	E	4.2	12.8	8.8		40	30	無		
77	匣鉢	E	3.8	11.0	6.8		100	100	無		
78	匣鉢	E	5.2	12.2	5.5		80	100	無		ゆがみあり、内底に刻文、丸皿C付着
79	匣鉢	E	8.1	24.4	21.2		30	50	無		内面に「オ」の印
80	匣鉢	E	7.0	17.2	17.0		30	30	無		内底に長石釉の製品が付着
81	匣鉢	E	11.0	18.6	15.5		35	100	無		
82	匣鉢	E	6.9	9.6	6.3		20	10	無		体部下端に穿孔
83	匣鉢	丸底	8.1	15.4	12.9		100	100	無		内底に天目茶碗付着
84	匣鉢	丸底	9.1	15.2	13.8		50	70	無		天目茶碗を焼成
85	匣鉢蓋 I	E	1.6	14.6	9.0		45	50	無		
86	ハサミ皿	E	2.1	9.5	5.0		50	50	無	内	ゆがみあり
87	ハサミ皿	E	2.1	10.0	5.0		100	100	無	内	ゆがみ大
88	匣鉢蓋 I	E	1.9	10.4	4.8		80	100	無		
89	匣鉢蓋 I	E	2.9	10.4	4.6		30	100	無	内	ゆがみ大
90	匣鉢蓋 I	E	1.8	10.4	5.4		20	20	無		
91	匣鉢蓋 I	E	2.6	11.0	5.8		20	30	無	内	
92	匣鉢蓋 I	E	2.5	11.0	5.4		100	100	無		
93	匣鉢蓋 I	E	2.0	11.2	6.3		75	100	無	内	
94	匣鉢蓋 I	E	2.1	11.0	5.6		35	100	無	内	内面に凸線
95	匣鉢蓋 I	E	2.7	9.2	6.0		30	75	無	内	
96	匣鉢蓋 I	E	2.0	11.6	5.6		40	100	無	内	ゆがみあり
97	匣鉢蓋 I	E	2.1	11.8	6.0		75	100	無		

※1：A. 付高台 B. 削り込み高台 C. 削り出し輪高台 D. 削り出し内反高台 E. 平底

表6 牟田洞6トレンチ遺物観察表

## 11トレンチ 図40

荒川豊蔵の窯の南東側に確認される平坦面に設定されたトレンチである。6トレンチの西側に南北6.0m、東西1.5mのグリッドを設定し、調査を行ったところ、北側に平坦面が確認されたため、北側のみ東に拡張を行った。拡張部は東に1.7m、南北4.0mを新たに設定し、調査を行ったところ、SD01・SK01・SP01が検出され、さらに南東に急な傾斜及び横倒しにされた粘土円柱が確認された。また、SK01の土層断面を確認するために南北3.7m、東西0.2mのサブトレンチを入れた。

11トレンチでは南側の堆積層は薄く地山まで約0.6mであった。南側では特に遺構は検出されず、礫や根が地山に多く見られることから、平坦面は北側のみに造られていたと思われる。SD01はその北側の平坦面を北東から南西に横断する形で確認された。幅は上端が25～50cmで、下端が10～25cmで、北東から南西へ約3.3m伸び、溝の中には⑬黄褐色土が堆積しており、礫や遺物も含んでいた。

SD01の伸びた南西側には南北1.8m、東西0.9mのSK01が検出された。SK01は西端に位置しており、西は崖になっていることから、盛土をした痕跡である可能性が推測される。

拡張部の南東端では強い傾斜が確認され、その上部に平坦面がみられる。上部の平坦面と傾斜の境からは横倒しとなった粘土円柱及び窯道具が検出された。そのすぐ北西側では、南北50cm、東西47cm、深さ18cmの円形をSP01が確認された。底がすばまるようにSP01は検出され、中央で段が付いて地上へと広がる。  
(加藤友也・宮田実歩・上田悠太)

## 遺物 図41～44

11トレンチから出土した大窯製品は、碗類39個体、小皿類45個体、中皿・向付類35個体、調理鉢類1個体、その他9個体、計129個体である(表)。

### 1. 碗類

碗類には天目茶碗・筒形碗・小碗をはじめ、図化していないが志野茶碗・丸碗・小天目がある。

#### (1) 天目茶碗(1～8)

天目茶碗は6トレンチの分類とは異なるが、a～cの3類に分類した。a類(1～3・5)は、体部はほぼ直線的に開き、口縁部は下方が一旦直立するが端部は外反しS字状になる。削り出し輪高台で、断面形は外側が内傾、内側が低く僅かに外傾するもの(3)と、外側がほぼ直立し、内側が深く削り込まれ外傾するもの(5)がある。b類(4・6・8)は、削り出し輪高台で、断面形は外側が僅かに内傾、内側は低く僅かに外傾する。体部は僅かに丸みを持って立ち上がり、口縁部は直立する。口縁端部が薄く仕上げられるもの(4・6)と、端部が膨らむもの(8)がある。c類(8)は志野製品であり、削り出し輪高台で、扁平な体部はやや丸みを持って開き、口縁端部は外反し玉縁状になる。  
(佐藤美鈴)

#### (2) 筒形碗(9～22)

筒形碗は半筒形のA類と切立形B類に大別できる。

A類(9)は付高台である。B類(17～22)は高台脇がほぼ水平方向に開き、体部はほぼ直立する。17は、高台周辺は回転ヘラ削り調整されるが付高台である可能性が高い。18は、付高台か削り出し輪高台か判断できない。19は付高台と思われる。20は、体部下端に稜が入り上方が直立する。21は浅い形状で、体部下端に稜が入り上方は直立する。22は付高台で、体部下端は丸みを帯び、上方の器厚は徐々に薄くなる。20には、窯から引き出した際に付いたと思われる銹み痕が体部下端に認められる。なお18・21・22には底部内面にボロが付着

している。その他(10~16)は、体部上方から口縁部にかけての破片である。口縁部の断面形状は、外反するもの(15・16)、角張るもの(10・12・14)、薄く仕上げられるもの(11・13)などバラエティーに富む。体部下方は、10・12・16には縦方向のヘラ削り調整される。14・15は釉薬が厚く掛かり不明である。12には体部内面にボロが付着している。B類の範疇に含められる。(鈴木愛実)

### (3) 小碗(23~26)

23は、体部は全体に丸みを帯びる。24は、体部下方に丸みは強く、上方はほぼ直立する。25は体部は全体にやや丸みを持って開く。26の体部は扁平である。(高野夏姫)

## 2. 小皿類

小皿類には丸皿・内禿皿・折縁皿に加え、志野丸皿が出土している。

### (1) 丸皿(41~49)

丸皿は高台の調整手法により付高台のA類、削り込み高台のB類、削り出し輪高台のC類がある。A類(49)は付高台で、体部は僅かに丸みを持って開く。施釉後焼成前に、底部内外面にはヘラ状工具により釉薬を掻き取ることによる、「丰」の窯印が認められる。B類(41~43)は高台の先端が尖るもの(41・42)と高台の幅が広いもの(43)がある。いずれも体部は僅かに丸みを持って開く。なお、42は口縁部が僅かに外反し、端部は薄く仕上げられる。C類(44~48)は、体部は僅かに丸みを持って開くものが多い。底部外面に輪ドチの痕跡を残すものが多い。

### (2) 内禿皿(50・51)

内禿皿は削り込み高台のB類で、高台の先端は尖り気味で、体部は僅かに丸みを持って開き、口縁端部は丸く収められる。底部内面凸部の釉薬は拭い取られる。底部外面には輪ドチが付着している。(佐藤美鈴)

### (3) 折縁皿(27~40)

折縁皿I類(27~32)は、削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類に分類できる。B類(27~31)は高台の先端が尖り気味で体部下端に稜が入るもの(27~29・31)と、高台の幅が広く体部が直線的に開くもの(30)がある。口縁端部が立ち上がり、後者は器厚が全体に厚く、口縁端部は丸く収まる。31の底部内面には、串状工具で釉を掻き取ることによる「丰」の窯印が認められる。C類(32)は、体部はほぼ直線的に開き、口縁部はやや上方に挽き延ばされ端部は丸く収まる。折縁皿II類(33~40)も削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類に分類できる。B類(33~36)は、I類と同様、体部下端に稜が入るもの(33・35・36)と、体部が直線的に開くもの(34)がある。なお、34には体部外面下方に2条の沈線が巡り、35・36に体部内面のソギの数は少なく、36には底部内面に菊花の印花文がみられる。C類(37~40)は高台の断面形は逆台形で、体部はほぼ直線的に開く。口縁部は水平方向に挽き延ばされ、端部は玉縁状に仕上げられる。39・40には底部内面に菊花文等の印花文が施される。底部内面に印花文が認められる36・39・40を除くと、コテの押圧による凸部が形成される。底部内面に凸部が形成されるものは、その部分の釉薬が拭い取られており、底部内外面に輪ドチの痕跡を残すものが多い。(堀内有)

### (4) 志野丸皿(54)

志野丸皿は、高台は先端が尖った逆三角形で、付高台の可能性はある。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部も丸く収まる。

## 3. 中皿・向付類

中皿・向付類には灰志野中皿・志野中皿・志野向付などがある。

(1) 灰志野中皿 (52・53)

52は、体部は全体に丸みを持って立ち上がり、口縁端部は薄く仕上げられる。53は付高台で、底部外面に円錐ピンの痕跡が3方に残っており、他の溶着資料から志野中皿の最上位で重ね焼かれている(写真 A)。

(2) 志野中皿 (55~61)

志野中皿は形状からa~cの3類に分類した。a類(55~59)は、高台の断面形が先端の尖った逆三角形を呈するもの(55・57~59)と、高台の先端に丸みを持つもの(56)がある。体部はいずれも全体に丸みを持って立ち上がるが、57~59は器厚が全体に非常に薄い。b類(60)は高台端部に丸みを持ち、体部中央の丸みも強いが、口縁部は緩やかに外反する。c類(61)は高台端部に丸みを持ち、体部が直線的に開き、口縁端部はつまみ上げられる。志野中皿は付高台で、a類には底部外面に、b・c類には体部下端に円錐ピンの痕跡が3方に残り、上部には58に同形の志野中皿、60に灰釉丸皿A類、61に灰釉丸皿B類が付着しており、それぞれ重ね焼かれたことが判る。

(3) 志野向付 (63~65)

志野向付には浅鉢形(63・64)と皿形態(65)がある。63は、体部は下方が直線的に開き、中央が丸みを帯び、上方がほぼ直立する。64は削り込み高台で体部の形状は63と類似するが、体部中央が角張り稜が入る。65は付高台で体部下方は直線的に開き上方の立ち上がりは強く、口縁部は大きく外折する。体部内面には丸ノミ状工具によるソギが入ると思われるが、型作りの可能性もある。口縁端部を指で押さえて輪花風に仕上げている。63の底部内面、65の口縁部上面には鉄絵による文様が施される。(鈴木愛実)

#### 4. 調理鉢類

調理鉢類では播鉢のみが出土している。

(1) 播鉢 (72~81)

播鉢は、口縁部の外側に縁帯が形成されるI類と、口縁部が内側に折り返されるII類とに大別される。いずれも底部は糸切り痕未調整の平底である。播鉢I類(72~80)は、口縁端部がやや膨らむa類、口縁端部に膨らみを持つb類、口縁端部が角張るc類に分類した。ただし縁帯の形状はバラエティーに富む。a類(72・75)は、縁帯下方が体部に対して垂直方向に垂れ下がる。72には19本一組の摺目が施される。b類(73・74・76・77)では、体部下方が膨らみを持つもの(73)、縁帯の幅が狭く外側に丸みを持つもの(74)、縁帯下端が丸みを帯びるもの(76)、縁帯下端がやや角張るもの(77)がある。c類(78~80)では、縁帯下方に稜が入るもの(78)、口縁端部が外側に挽き出されるもの(79)、縁帯下方が底部に対して垂直方向に垂れ下がるもの(80)がある。播鉢II類(81)は口縁部が内側に折り返され、上面はほぼ平坦である。(堀内有)

(2) 片口 (62)

片口は削り出し輪高台で、体部下端に稜が入り上方は直立し、口縁端部は角張る。体部外面から体部内面上方にかけて鉄釉が施され、体部内面から底部内面には薄い錆釉、高台周辺には濃い錆釉が施される。(鈴木愛実)

#### 5. その他

その他の器種では灯明皿・香炉・茶入・徳利・耳付水注などがある。

(1) 灯明皿 (82)

灯明皿は糸切り痕未調整の平底で、体部は全体にやや丸みを持って開く。内面にはコテの押圧により、凸線が3段に亘って巡っている。

(2) 香炉 (66~68)

66は底部周辺を欠く。体部下端が直線的に開き、上方はほぼ直立し、口縁部は内傾する。67は削り出し内反高台である。高台脇に段が形成され、体部下端が直線的に開き、上方は口縁部にかけて僅かに内傾し、口縁端部は丸く収まる。底部外面を除き全面に灰釉が施される。68は平底で、体部下方は直線的に開き上方はほぼ直立し、口縁端部は丸く膨らんでいる。全面に灰釉が施される。底部外面には輪ドチの痕跡があり内面にボロが付着していることから、匣鉢蓋の上で素焼きにされていたと考えられる。いずれも底部外面に焼成後の磨滅痕が認められる。

(3) 茶入 (69)

平底で、胴部下端は直線的に開き、胴部上方はほぼ直立する。胴部下端はヘラ状工具により削り上げられ、底部外面もフリーハンドによるヘラ削り調整され、糸切り痕が半分以上消えている。

(4) 茶入蓋 (70・71)

茶入蓋は高台は内外側とも直立した低い角高台で、体部は全体に大きく外反する。天井部中央には丸いつまみが貼り付けられる。現代遺物の可能性が高い。

## 6. 窯道具類

図化した窯道具類には匣鉢・匣鉢蓋・ハサミ皿・焼台がある。

(1) 匣鉢 (87・88)

平底匣鉢である。87はやや小型であるが6トレンチのA類である。底部内面にはヘラ状工具による「才」の窯印が認められる。88は6トレンチのB類である。糸切り痕未調整で、底部内面にはヘラ状工具による「丰」の窯印が認められる。また底部内面には灰釉が付着しており、法量からみて灰釉丸皿を1個入れて焼成したものと思われる。

(2) 匣鉢蓋 (83・85・86・89~94)

匣鉢蓋にはロクロ成形のI類と手捏ね成形のII類に大別できる。匣鉢蓋I類(83・85・86)は糸切り痕未調整の平底で、83には凸線が同心円状に巡り、85・86には円形の凸部が形成される。匣鉢蓋II類(89~94)には小判形のA類と円盤形のB類がある。A類(89~93)は、長径20cm、短径8~10cm程度の楕円形で、厚さは1.5~2.0cm。89・92には「丰」、90には「千」、91には「上」などの窯印が認められる。(91は逆向きにすると「才」であり、筆跡から「才」の可能性がある。)丸ノミ状工具による92以外はヘラ状工具が使用されている。B類(94)は、下面に板目状圧痕が認められる。なお、匣鉢蓋II類には表面に輪ドチの痕跡が認められる。

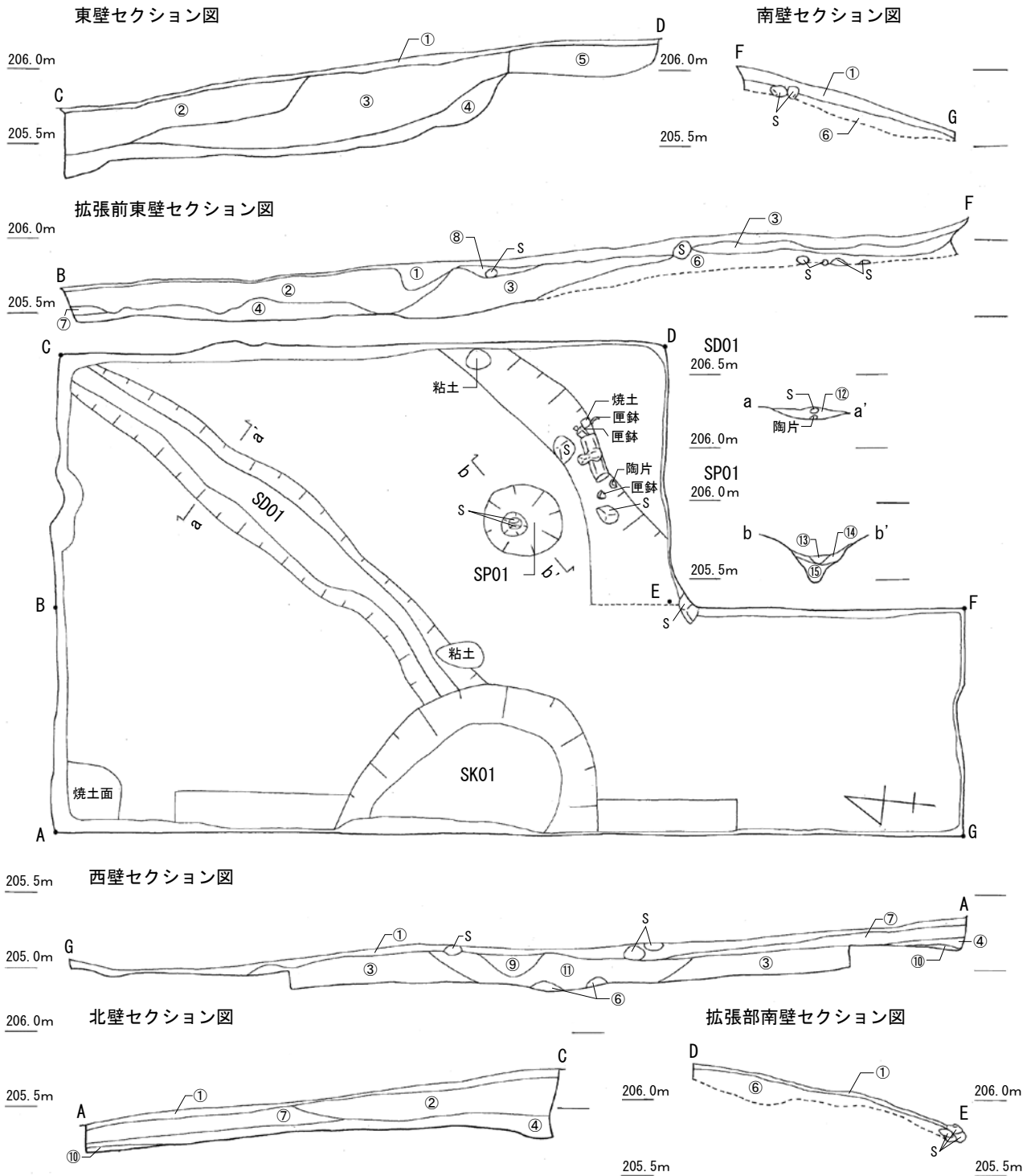
(3) ハサミ皿 (84)

ハサミ皿は糸切り痕未調整の平底で、体部は僅かに丸みを持って開き、口縁部はやや外反する。焼成による歪みが大きい。

(4) 焼台 (95)

焼台は1個体のみ図化した。円柱形で手捏ねによる成形である。上面は直径8.5cm、床面の傾斜角度は15度前後となる。上・下面ともヨリ輪の痕跡が認められ、実測図の左側は茶色を呈し、右側には緑色の自然釉が付着している。(高野夏姫)





- ①黒褐色土（粘性△ しまり△ 腐植土）
- ②暗赤褐色土（粘性○ しまり○ 窯道具を含む）
- ③褐色土（粘性○ しまり○ 礫5～10cm大を含む、窯道具を含む）
- ④褐色土（粘性△ しまり○ 遺物を含む）
- ⑤明褐色土（粘性○ しまり○ 礫5～10cm大を含む、遺物を含む）
- ⑥赤褐色土（粘性○ しまり○ 地山）
- ⑦暗赤褐色土（粘性△ しまり△ 遺物を含む）
- ⑧褐色土（粘性△ しまり△ 地山）
- ⑨褐色土（粘性○ しまり○）
- ⑩暗赤褐色土（粘性△ しまり△ 焼土層）
- ⑪明褐色土（粘性○ しまり○）
- ⑫黄褐色土（粘性○ しまり○ 礫5～10cm大を含む、遺物を含む SD01埋土）
- ⑬黄色土（粘性△ しまり○ 遺物を含む SP01埋土）
- ⑭明赤褐色土（粘性○ しまり○ 5cm大の礫を含む SP01埋土）
- ⑮橙色土（粘性○ しまり○ SP01埋土）

図40 11トレンチ遺構図

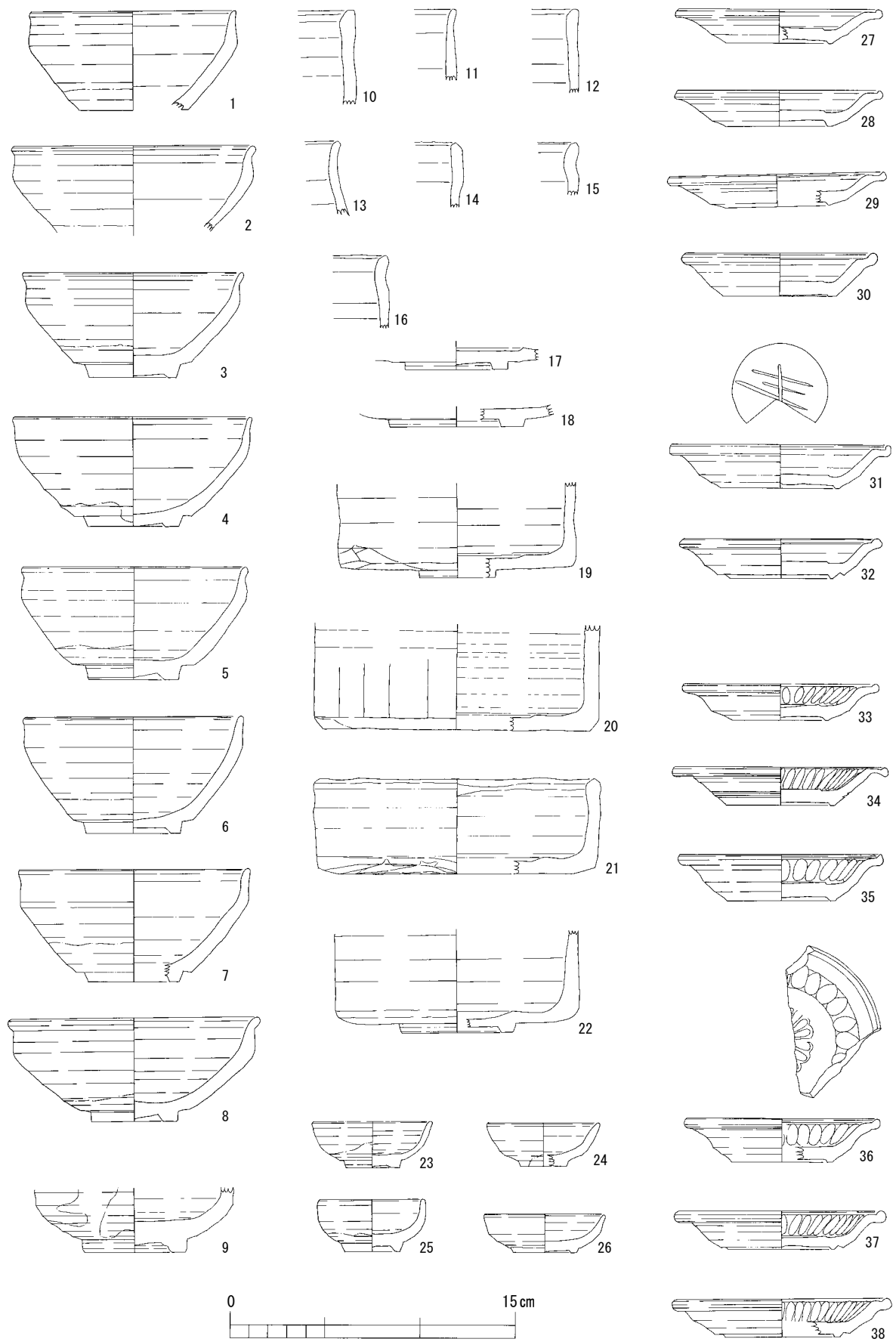


図41 牟田洞11トレンチ出土遺物1

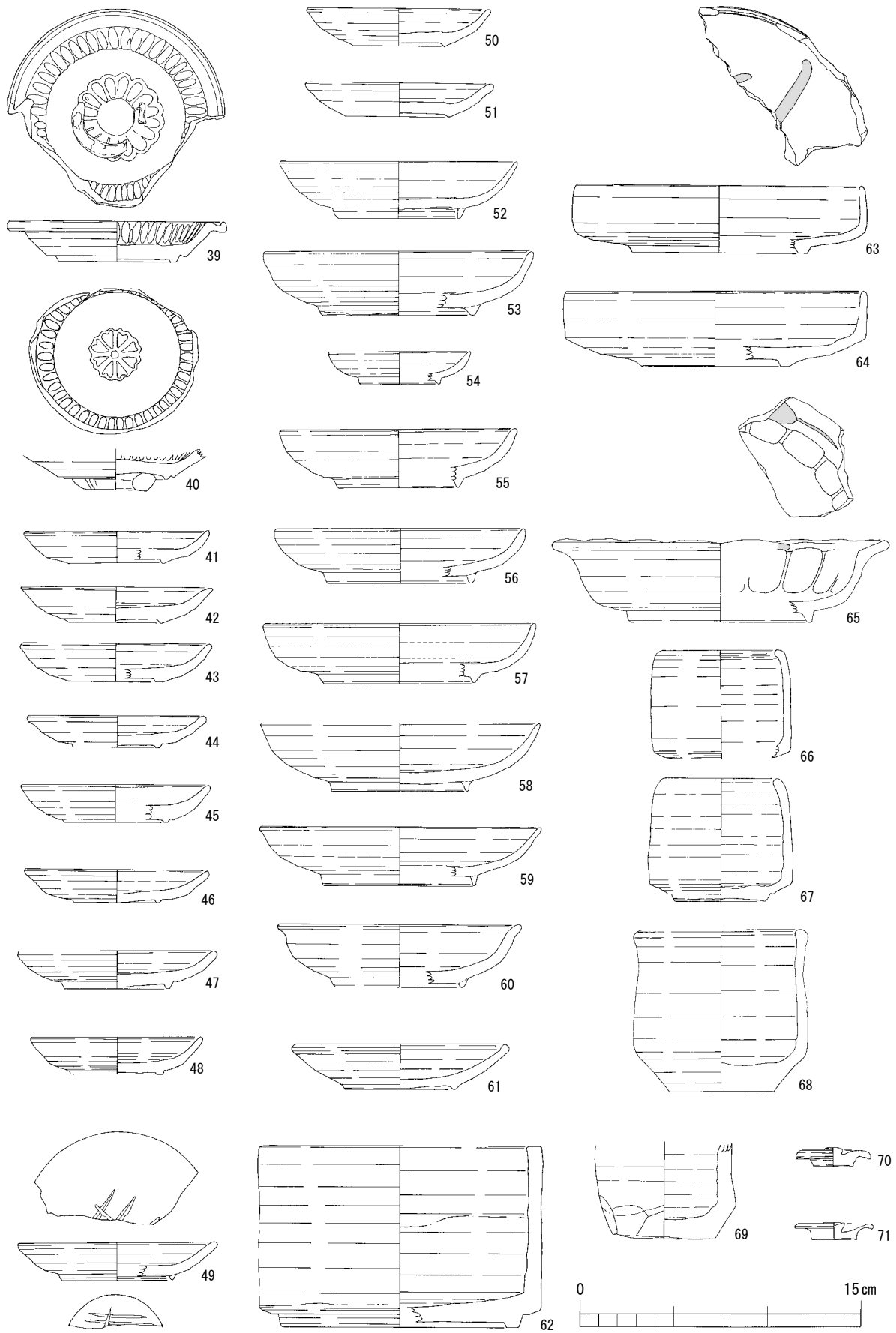


図42 牟田洞11トレンチ出土遺物2

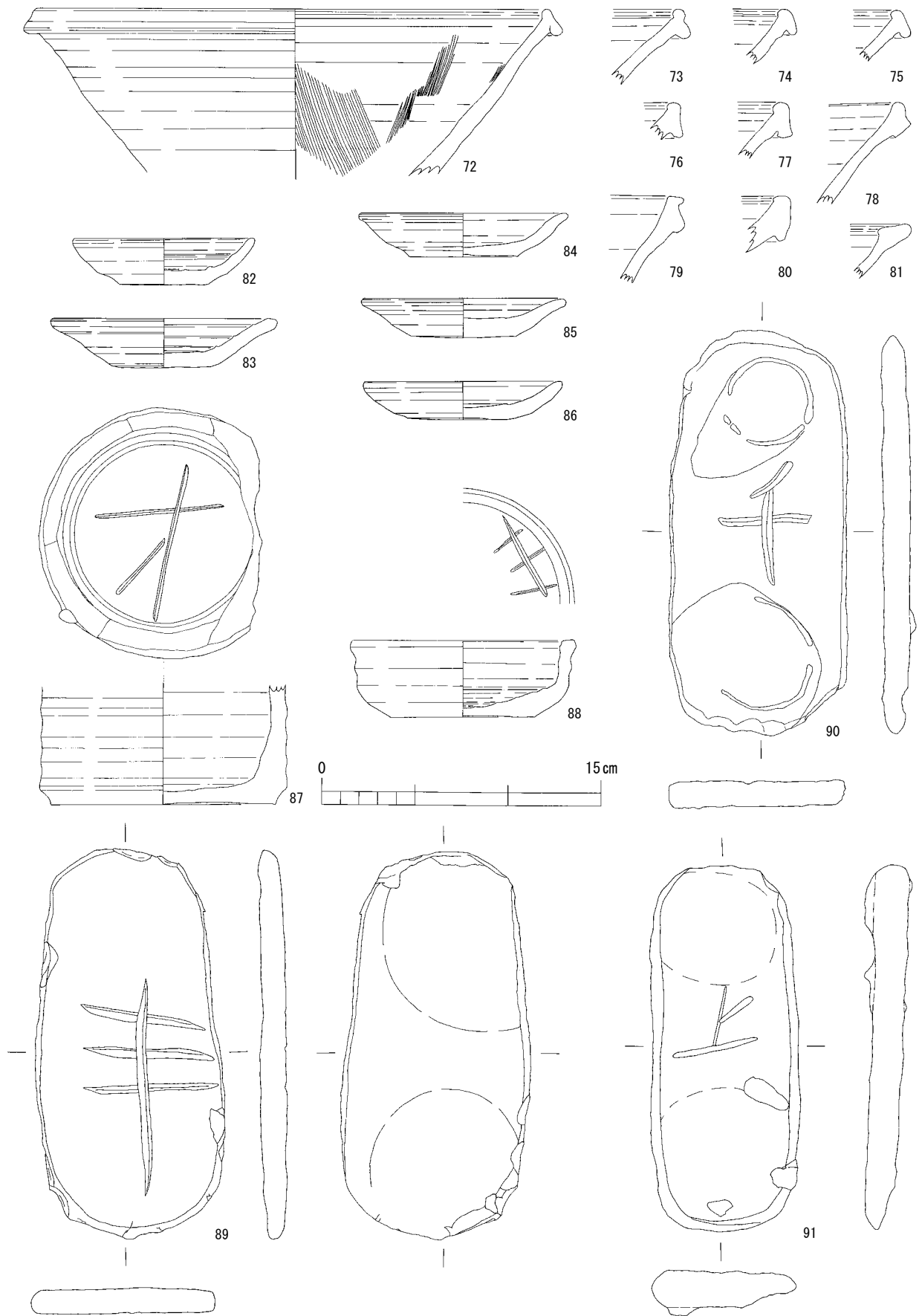


図43 牟田洞11トレンチ出土遺物3

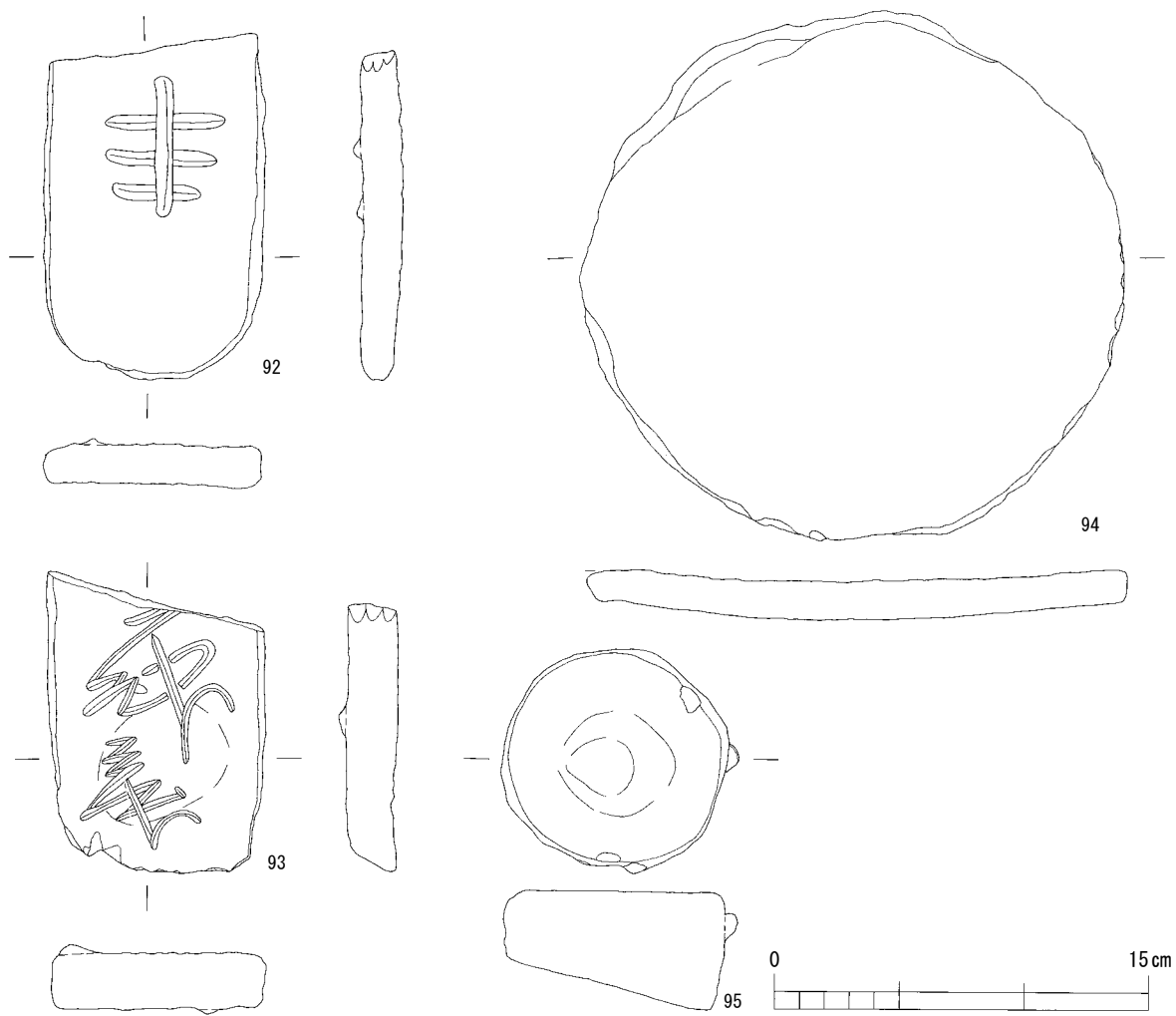


図44 牟田洞11トレンチ出土遺物4

図	器種	高台※1	法量 (cm)				口縁残存率 %	高台残存率 %	釉薬	輪ドチの痕跡	備考
			器高	口径	底径	高台径					
1	天目茶碗	—		10.7							鉄釉下に灰釉
2	天目茶碗	—	4.5	12.6			25				
3	天目茶碗 D	C	5.5	11.4		4.6	10	50			ゆがみ大
4	天目茶碗 F	C	5.7	12.4		4.8	5	50			ゆがみ大
5	天目茶碗 D	C	5.9	11.7		4.7	65	100			
6	天目茶碗 F	C	6.1	11.2		5.0	20	40			ゆがみあり
7	天目茶碗 F	C	5.9	10.0		4.8	20	40			ゆがみあり
8	志野天目 D	C	5.4	13.0		4.6		100			
9	筒形碗 A	A	(3.4)			5.2		50			
10	筒形碗 B	—	(4.9)								
11	筒形碗 B	—	(3.7)								
12	筒形碗 B	—	(4.3)								体部内面にボロ付着
13	筒形碗 B	—	(3.9)								
14	筒形碗 B	—	(3.4)								
15	筒形碗 B	—									14と同じもの
16	筒形碗 B	—	(3.8)								
17	筒形碗 B	A	(1.1)			5.4		25			
18	筒形碗 B	Aか	1.1			7.0					底部内面にボロ付着
19	筒形碗 B	AかC	(5.0)			4.0		10			
20	筒形碗 B	—	(5.6)			14.0					外面に縦方向のヘラ削り痕
21	筒形碗 B	—	5.0	14.5			15				底部内面にボロ付着
22	筒形碗 B	A	(5.3)			5.8		20			底部内面にボロ付着
23	小碗	C	2.4	6.2		2.8	50	100			
24	小碗	C	2.75	5.3		2.9		100			
25	小碗	C	2.3	5.7		2.4	20	30			焼成やや不良
26	小碗	C	2.0	6.2		3.5	35	60	灰か		焼成不良
27	折縁皿 I	B	1.8	10.6		5.6	45	55	灰	外	凸部釉拭う
28	折縁皿 I	B	1.9	10.7		5.6	70	100	灰	内外	凸部釉拭わず
29	折縁皿 I	B	1.7	11.2		5.4			灰		凸部釉拭う
30	折縁皿 I	B	2.3	9.8		6.0	15	40	灰		凸部釉拭う
31	折縁皿 I	B	2.3	11.4		6.2	50	70	灰	外	凸部釉拭う、蓋印
32	折縁皿 I	C	2.1	10.0		5.3			灰	内外	凸部釉拭う
33	折縁皿 II	B	1.9	10.0		5.1	50	65	灰	外	凸部釉拭う
34	折縁皿 II	B	2.0	11.0		5.7	15	75	灰		凸部釉拭う
35	折縁皿 II	B	2.5	10.4		5.6	15	50	灰		凸部釉拭う
36	折縁皿 II	B	2.3	10.0		5.3	20	40	灰		焼成不良、菊印花
37	折縁皿 II	C	2.0	10.5		5.6	50	65	灰	外	凸部釉拭う
38	折縁皿 II	C	2.0	11.0		6.0	35	50	灰		凸部釉拭う
39	折縁皿 II	C	2.15	11.2		6.1	45	100	灰	内外	菊印花
40	折縁皿 II	C				5.4	3	65	灰	外	印花
41	丸皿	B	1.7	9.6		5.0	40	30	灰	外	
42	丸皿	B	1.9	10.0		5.0	90	100	灰		
43	丸皿	B	2.0	10.0		5.0	30	50	灰	外	
44	丸皿	C	1.7	9.3		4.6	75	100	灰		
45	丸皿	C	2.0	9.8		5.4	30	30	灰		
46	丸皿	C	1.7	7.6		4.6	40	45	灰		
47	丸皿	C	2.0	10.4		5.6	45	70	灰		焼成やや不良
48	丸皿	C	2.0	9.0		4.9	30	60	灰		
49	丸皿	C	2.0	10.4		5.8	40	30	灰		蓋印、内外面にボロ付着
50	内肴皿	B	2	9.6		4.8	25	60	灰	内外	凸部釉拭う
51	内肴皿	B	1.8	9.6		5.6	30	60	灰	外	凸部釉拭う
52	灰志野中皿	A	3.0	12.5		6.4	15	55	灰志野		外底に円錐ビン痕
53	灰志野中皿	A	3.4	14.2		8.0	30	25	灰志野		
54	志野丸皿	Aか	1.75	7.4		4.2	40	30	長石		ゆがみ大
55	志野中皿	A	3.1	12.4		6.3	10	5	長石		
56	志野中皿	A	2.9	13.2		7.6	5	10	長石		外底に円錐ビン痕
57	志野中皿	A	3.2	14.4		8.0	20	15	長石		
58	志野中皿	A	3.6	14.8		7.2	45	50	長石		内外底に円錐ビン痕
59	志野中皿	A	3.1	14.8		8.0	10	15	長石		
60	志野中皿	A	3.3	12.7		6.6	20	10	長石		体部下端に円錐ビン痕
61	志野中皿	A	2.4	11.1		5.9	25	100	長石		体部下端・内底に円錐ビン痕
62	片口	C	9.7	14.8		12.5	25	25	鉄		
63	志野向付	A	3.6	14.9		9.2	5	25	長石	高台	鉄絵、ゆがみ大
64	志野向付	B	4.0	15.8		7.8	10	20	長石		焼成不良
65	志野向付	A	4.3	17.4		11.6	5	5	長石		鉄絵
66	香炉	—		6.2			50		灰		
67	香炉	D	6.5	6.0		4.8	15	100	灰		
68	香炉	E	8.5	8.4	5.6		55	100	灰		
69	茶入	E							鉄		焼成やや不良
70	茶入蓋	C	1.0	4.0	2.0			100	長石		焼成不良
71	茶入蓋	C	0.9	4.2	2.4		5	90	長石		
72	擂鉢 I	—		27.0			15		錆		
73	擂鉢 I	—							錆		
74	擂鉢 I	—							錆		
75	擂鉢 I	—							錆		
76	擂鉢 I	—							錆		焼成やや不良
77	擂鉢 I	—							錆		
78	擂鉢 I	—							錆		
79	擂鉢 I	—							錆		焼成やや不良
80	擂鉢 I	—							錆		
81	擂鉢 II	—							錆		
82	灯明皿	E	2.5	9.6	4.8		30	100	錆		
83	匣鉢蓋 I	E	2.65	11.0	5.3		100	100	無		ゆがみあり
84	ハサミ皿	E	2.3	10.8	5.8		45	50	無		ゆがみあり
85	匣鉢蓋 I	E	2.1	10.6	5.6		40	100	無		ゆがみあり
86	匣鉢蓋 I	E	2.1	10.2	5.8		100	100	無		
87	匣鉢	E			12.0			75	無		
88	匣鉢	E	4.1	11.8	7.8		30	100	無		
89	匣鉢蓋 II	—							無		
90	匣鉢蓋 II	—							無		
91	匣鉢蓋 II	—							無		
92	匣鉢蓋 II	—							無		
93	匣鉢蓋 II	—							無		
94	匣鉢蓋 II	—							無		
95	焼台	—							無		
写真 A	灰志野中皿	A							灰志野		底部外面に円錐ビン付着
	志野中皿	A							長石		内面に円錐ビン付着

表7 牟田洞 11 トレンチ遺物観察表

## 12トレンチ 図45

12トレンチは、豊蔵の作業場の北側に面した場所、南北2.5m、東西7.35m にトレンチを設定した。遺構はSK01・SK02・SK03・SK04・SK05・SX01・粘土土坑が検出された。土坑からは窯道具や陶片が多く出土し、ほとんどが豊蔵の作品と推定される。大窯期の遺物は全ての層に含まれるが、出土数は僅かであった。

西側の土層の堆積状況は地山まで約8cmと薄く、東に下がるにつれ堆積層が厚くなっている。中央部からSK01・02・03・04及び粘土土坑が検出された。

北側に位置するSK01は縦0.78m、横0.71m、深さ0.2mの円形の土坑である。遺物が出土した土坑の中では最も大きい。SK01西側に位置するSK02は縦0.59m、横0.57m、深さ0.3mのやや歪んだ円形の土坑である。隣のSK03は縦0.38m、横0.88m、深さ0.37mの半円形の土坑である。トレンチの北端にあるため半円形にしか検出できなかったが、他と同じく円形であると推測される。なお、SK01・SK02の付近からは粘土溜り2ヶ所が確認された。南側から検出されたSK04は縦0.35m、横0.38m、深さ0.08mの半円形の土坑である。SK03と同じく円形であると推測される。SK05は縦0.43m、横0.94m、深さ0.4mの楕円形の土坑である。SK01・02・03・04・05からは豊蔵の作品及び窯道具が多数出土しており、豊蔵の作業場に面していることから、氏の作品の廃棄穴だったと考えられる。

粘土土坑は縦78cm、横52cm、深さは東側で10cm、西側で3cmの四角形で、東側に厚みをもつ。中には⑩明黄褐色が堆積していた。他に、北東側に不明土坑が確認され、深さ40cmまで掘ったが地山まで到達していない。  
(石浜莉那・片山尚樹・三本樹純)

## 遺物 図46

12トレンチでは、大窯製品は碗類9個体、小皿類27個体、中皿・向付類8個体、調理鉢類7個体、その他4個体、計55個体出土している(表)。以下、図化したものについてその概要を述べる。

### 1. 碗類

#### (1) 天目茶碗(1)

天目茶碗は削り出し内反高台で、体部はほぼ直線的に開き、口縁端部は折り返され玉縁状になる。

#### (2) 筒形碗(2~4)

筒形碗は、高台の形状は不明であるが切立形のB類である。2は体部の破片である。体部はほぼ直立し口縁端部は角張っている。体部下方は縦方向のヘラ削り調整、口縁端部もヘラ削り調整され波打っている。残部には鉄釉が施される。3・4は底部周辺の破片である。高台脇が水平方向に開き、体部は直立するようである。体部下端は非回転のヘラ削り調整(4は縦方向)される。

### 2. 小皿類

#### (1) 丸皿(16・17)

丸皿は削り込み高台のB類で、体部はやや丸みを持って開く。底部外面には輪ドチが付着している。

#### (3) 折縁皿(6~15)

折縁皿I類(13~15)は、削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類とに分類される。B類(13・14)は高台の幅が広く体部がほぼ直線的に開き扁平なもの(13)と、高台幅が

狭く体部中央に稜が入るもの（14）がある。C類（15）は体部下方に稜が入る。折縁皿Ⅱ類（6～12）も削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類がある。B類（6～9）は体部が直線的に開くもの（8）と、体部下方に稜が入るもの（6・7・9）がある。なお、9は体部が扁平で口縁端部の膨らみは大きい。C類（10～12）は体部が扁平で口縁端部が玉縁状になるもの（10・11）と、高台幅が広く体部が直線的に開き、口縁端部が内側に折り返されるもの（12）がある。10・11には底部内面に菊花の印花文が認められる。内面に凸部を有するものは、その部分の釉薬が拭き取られ、輪ドチの痕跡を残すものが多いことから、輪ドチを挟んで同形の折縁皿を重ね焼きしたものと思われる。したがって凸部の無いものは最上位で焼成されたものと思われる。

### 3. 中皿・向付類

#### （1）灰釉中皿類（18・19）

18は削り出し輪高台で、体部は全体に丸みを持って開く。体部内面下方に沈線が一周し、丸ノミ状工具によるソギが入れられる。19は削り出し輪高台で、体部に丸みを持ち、口縁部は緩やかに外反する。内面凸部および凸帯の釉薬は拭き取られている。

### 4. 播鉢・片口

#### （1）播鉢（25～44）

播鉢はⅠ類が出土している。底部は糸切り痕未調整の平底である。口縁端部がやや膨らむa類、口縁端部に膨らみを持つb類、口縁端部が角張るc類に分類した。ただし縁帯の形状はバラエティーに富む。a類（26・28）は縁帯下方が体部に対して垂直方向に延びるものである。b類（25・27・29～39）では、縁帯の幅が狭いもの（25）、縁帯下方が挽き出され下端に丸みを持つもの（27・32・33）、縁帯下方が体部に対して垂直方向に延びるもの（29～31）、縁帯下方が挽き出され先端が尖るもの（35・36）、縁帯下端が体部上端と密着するもの（34・37～39）がある。c類（40～44）は縁帯下方が底部に対して垂直方向に延び、体部上端と密着し丸みを持つものである。（藤澤良祐）

### 5. その他

#### （1）土器皿（20）

20は糸切り痕未調整の平底で、体部は丸みを持って開き口縁部は丸く収まる。無釉で焼成はやや不良である。匣鉢蓋やハサミ皿とは形状・胎土が異なるため、土器皿と考えた。

（垣見太郎）

#### （2）筒形容器（5）

5は糸切り痕未調整の平底で、体部下端に稜が入り、上方は直立する。体部下端にはロクロから取り上げる際の指痕が残る。形状や調整技法は後述する平底匣鉢に類似する。

（伊藤真央）

### 6. 窯道具類

#### （1）平底匣鉢（24）

平底匣鉢は、糸切り痕未調整の平底で、体部下端に稜が入り、上方はほぼ直立する。体部下端にはロクロから取り上げる際の指痕が残る。

#### （2）ハサミ皿（21～23）

ハサミ皿は糸切り痕未調整の平底で、体部はほぼ直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。いずれも無釉で、焼成による歪みがみられる。21・22には底部内部に灰釉の小皿類の高台が付着しており、21の口縁部外面には3方に長脚ピンの痕跡が認められる。（垣見太郎）



図	器種	高台※1	法量 (cm)				口縁残存率 %	高台残存率 %	釉薬	輪ドリの痕跡	備考
			器高	口径	底径	高台径					
1	天目茶碗E	D	5.2	10.7		4.6	15	50	鉄		
2	筒形碗B	—	(5.6)						鉄		
3	筒形碗B	—	(1.5)			11.4			鉄		
4	筒形碗B	—	(2.3)			10.6			鉄		
5	筒形容器	E	(3.2)			12.0			錆		焼成不良
6	折縁皿Ⅱ	B	1.9	10.4		5.0	40	25	灰		凸部釉拭う
7	折縁皿Ⅱ	B	2.2	10.1		5.3	20	100	灰	内外	凸部釉拭う
8	折縁皿Ⅱ	B	2.3	10.8		6.0		50	灰	外	焼成やや不良、凸部釉拭う
9	折縁皿Ⅱ	B	1.6	10.2		5.4	40	45	灰		凸部釉拭う
10	折縁皿Ⅱ	C	2.0	10.4		5.8	30	35	灰		焼成過多、菊印花
11	折縁皿Ⅱ	C	2.0	10.0		5.3	30	50	灰		菊印花
12	折縁皿Ⅱ	C	2.4	11.6		6.1	10	55	灰	内外	凸部釉拭う
13	折縁皿Ⅰ	B	2.0	11.0		6.4	30	30	灰		焼成過多、凸部釉拭う
14	折縁皿Ⅰ	B	2.3	10.6		6.0	20	30	灰		凸部釉拭う
15	折縁皿Ⅰ	C	2.1	10.7		5.6	65	100	灰	内外	
16	丸皿	B	1.9	9.2		5.2	15	25	灰	外	
17	丸皿	B	1.8	9.8		5.2	20	15	灰	外	
18	中皿Ⅱ	C	2.8	13.2		7.3	25	65	灰	外	焼成やや不良、凸部釉拭う
19	輪秀中皿	C	3.0	13.2		7.7	45	55	灰		焼成やや不良、凸部釉拭う
20	土器皿	E	2.4	10.1	4.8		75	70	無		焼成やや不良
21	挟み皿	E	1.7	10.1	5.3		65	100	無		ゆがみ大
22	挟み皿	E	2.0	10.2	4.9		15	50	無		
23	挟み皿	E	2.2	10.6	5.5		15	50	無		
24	匣鉢	E	8.0	13.4	13.6		20	45	無		
25	擂鉢Ⅰ	—							錆		
26	擂鉢Ⅰ	—							錆		
27	擂鉢Ⅰ	—							錆		
28	擂鉢Ⅰ	—							錆		
29	擂鉢Ⅰ	—							錆		
30	擂鉢Ⅰ	—							錆		
31	擂鉢Ⅰ	—							錆		焼成やや不良
32	擂鉢Ⅰ	—							錆		
33	擂鉢Ⅰ	—							錆		
34	擂鉢Ⅰ	—							錆		焼成やや不良
35	擂鉢Ⅰ	—							錆		焼成やや不良
36	擂鉢Ⅰ	—							錆		
37	擂鉢Ⅰ	—							錆		
38	擂鉢Ⅰ	—							錆		
39	擂鉢Ⅰ	—							錆		
40	擂鉢Ⅰ	—							錆		
41	擂鉢Ⅰ	—							錆		
42	擂鉢Ⅰ	—							錆		
43	擂鉢Ⅰ	—							錆		
44	擂鉢Ⅰ	—							錆		焼成やや不良

表 8 牟田洞 12 トレンチ遺物観察表

SK01

202.0m

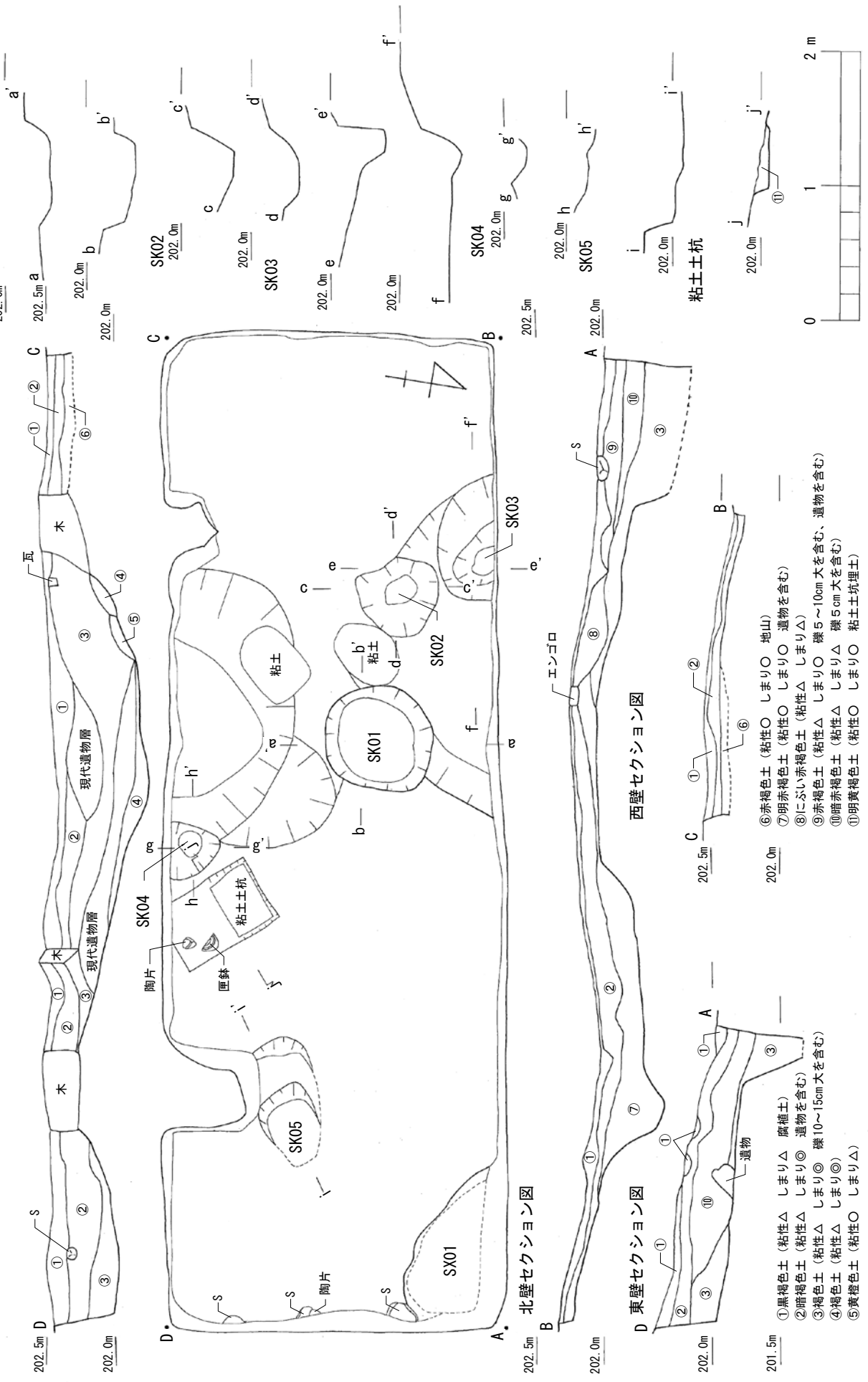


図45 12トレンチ遺構図

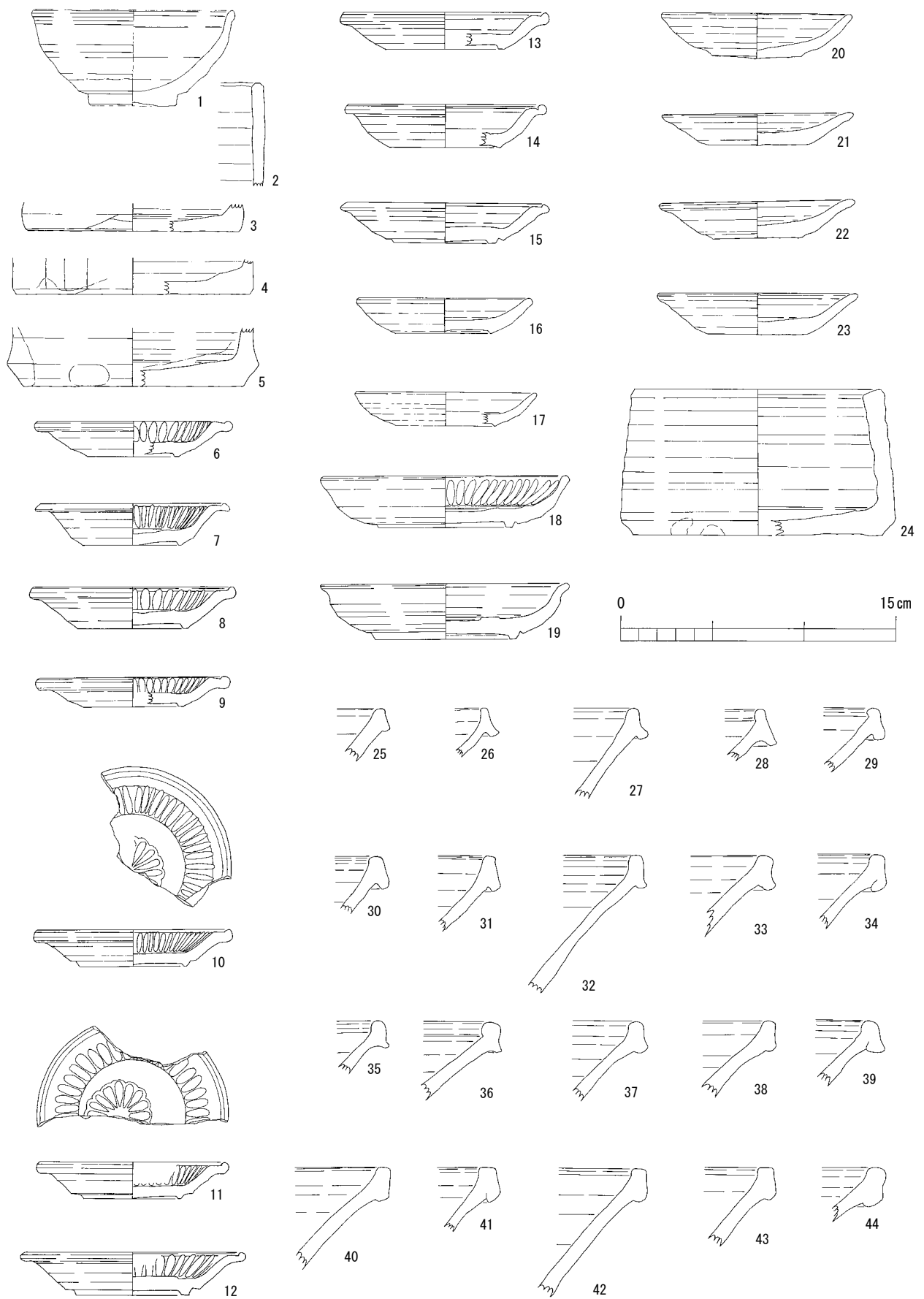


図46 牟田洞12トレンチ出土遺物

### 13トレンチ 図47

窯の北側に位置する荒川豊蔵資料館南西部の小径の平坦面に設定された調査区である。南北に4.6m、東西に2.0mのグリッドを設定し、調査を行ったところ、SD01が検出されたため、東側に拡張を行った。拡張部は中央に木があったため、北側に南北に1.5m、東西に2.0mを、南側に南北1.0m、東西に2.0mを拡張した。拡張部南側の北壁に沿って層位を確認するために南北0.5m、東西約1.4mのサブトレンチを入れた。調査区内では、SD01・SP01が検出され、また北西端に平坦面を造るための盛土が確認された。

拡張部が斜面になっており、特に南側に強い傾斜がみられる。その斜面と平坦面の境にSD01が確認された。SD01は南北に約2.8m伸びた溝で、幅は上端で約22cm、下端で約13cmである。溝の中には⑬明黄褐色の粘土が堆積しており、さらに匣鉢や輪ドチなどの窯道具が検出された。

また、北西側では地山が下がっているため、上に整地土(⑤層)を載せて平坦面を形成している。平坦面と地山の傾斜との境にSP01は確認された。SP01は縦2.6cm、横3.0cm、深さ40cmの円形のピットである。上層には⑮赤褐色、下層には⑯明赤褐色が堆積しており、柱穴かどうかは不明である。  
(森秀人・山本駿・小林万容)

### 遺物 図48

13トレンチの大窯製品は、碗類11個体、小皿類10個体、中皿・向付類12個体、調理鉢類2個体、その他1個体、計36個体出土している。

#### 1. 碗類

##### (1) 天目茶碗(1)

天目茶碗は削り出し輪高台で、体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は下方が一旦直立するが端部は外反しS字状になる。

##### (2) 筒形碗(2~4)

B類(2)は体部上方の破片で、口縁部は緩やかに外反する。A類(3・4)のうち、3は付高台であり、直線的に開く体部下方の中央に稜が入り、上方はほぼ直立する。4は削り出し輪高台であり、体部下方の丸みが強く上方はほぼ直立し、口縁端部は丸く収まる。現代遺物の可能性が高い。内面にはボロが付着しており、匣鉢に入れられずに焼成されたものと思われる。  
(伊藤真央)

#### 2. 小皿類

小皿類には丸皿・稜皿・折縁皿がある。

##### (1) 丸皿(5・6)

丸皿には付高台のA類と削り出し高台のC類がある。A類(5)は体部は全体に丸みをもって立ち上がる。全面に灰釉が施される。C類(6)は削り出し高台で、体部は僅かに丸みをもって開く。底部外面には輪ドチが付着している。

##### (2) 稜皿(7)

稜皿は削り込み高台で、体部中央に稜が入り、口縁部や緩やかに外反する。内面凸部の釉は拭い取られており、体部下方には団子トチが付着している。

##### (3) 折縁皿(8~11)

折縁皿I類(8)、折縁皿II類(9)は削り込み高台のB類でいずれも高台端部に幅を持ち、体部は直線的に開く。口縁部はほぼ水平方向に挽き出され、8は口縁端部が内側に折り返さ

れ玉縁状になるが、9は先端が尖り気味に仕上げられる。底部内面凸部の釉薬は拭い取られ、内外面に輪ドチが付着することから、輪ドチを挟んで重ね焼かれた可能性が高い。10・11は折縁皿と丸皿の溶着資料である。10には折縁皿Ⅰ類のB類が2枚重ねられ、一番上に丸皿B類がのる。11には折縁皿Ⅱ類のB類が3枚重ねられ、一番上に丸皿C類がのる。輪ドチを挟んで重ね焼かれている。(半場千晴)

### 3. 中皿・向付類

中皿・向付類には黄瀬戸向付と志野向付がある。

#### (1) 黄瀬戸向付 (12~14)

黄瀬戸向付は、筒形(12)と浅鉢形(13・14)とに分類できる。12はいずれも削り込み高台で体部下方は直線的に開き上方はほぼ直立する。なお、12には底部中央に2.4cm程の焼成前の穿孔が認められ、13には体部下端に団子トチの痕跡が3方に残る。(片岡優歩)

#### (2) 志野向付 (写真 C)

志野向付は細片であり、「平向付」が出土している。底部内面には段が形成され、外面には角柱状の足が付けられている。内面には鉄絵が描かれる。(藤澤良祐)

### 4. 播鉢

#### (1) 播鉢 (22)

播鉢は口縁部の外側に縁帯が形成されるⅠ類、糸切り痕未調整の平底で、体部は下端に稜が入るが上方は直線的に開く。底部に対してほぼ垂直方向に縁帯が形成され、口縁端部は丸みを持ち、縁帯下端は体部上端と密着する。摺目は17本一組で、底部内面には3方に、体部内面には11方向に引かれている。体部下端には紐起こし痕や起こす際の指痕が確認できる。また体部下方には4方に団子トチの痕跡、体部下端には摺目が付着することから、同形の播鉢を重ね焼きしたものと思われる。

### 5. 窯道具類

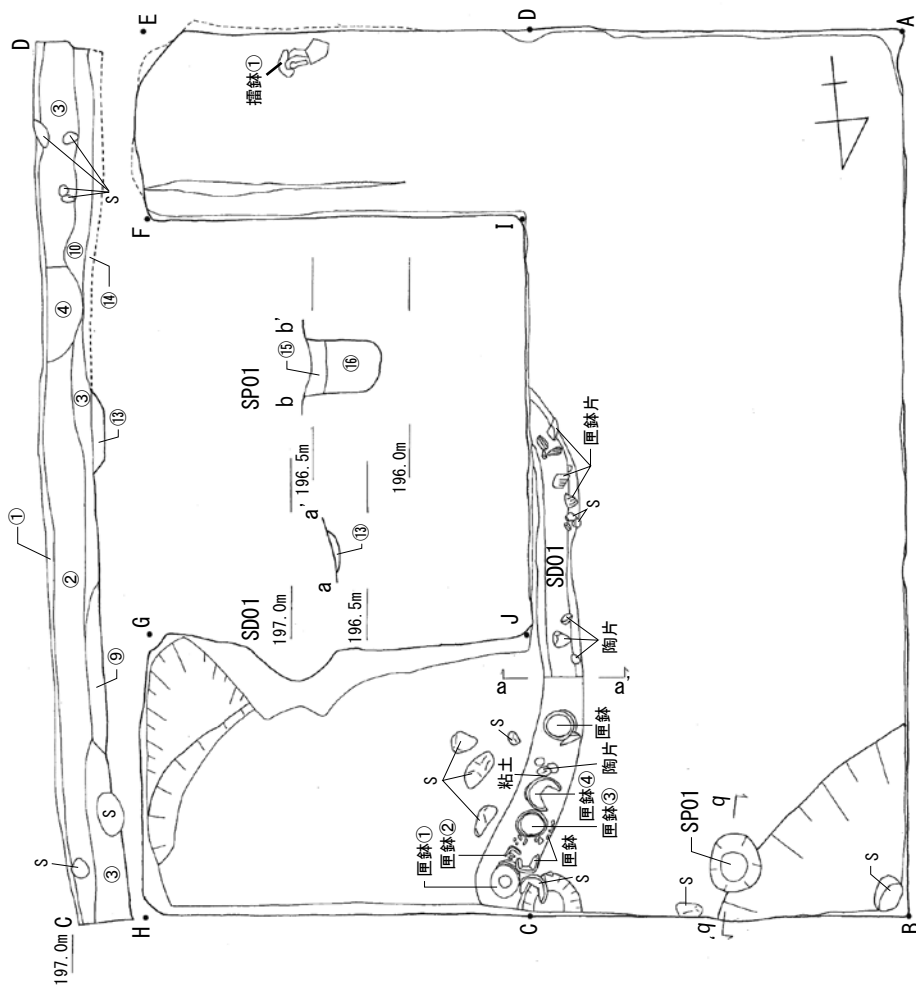
#### (1) 匣鉢類 (15~21)

平底匣鉢(15~18)は糸切り痕未調整の平底で、体部下端に稜が入り上方はほぼ直立する。15の底部内面には、ヘラ状工具により「千」の窯印が彫られており、18の底部外面にはヘラの挿入痕が認められる。丸底匣鉢(19~21)はおそらくコテの押圧により底部が丸くと出させたものである。なお、19には底部外面に掌の痕が残り、底部内部には輪ドチの痕も確認できる。(日比野将之)

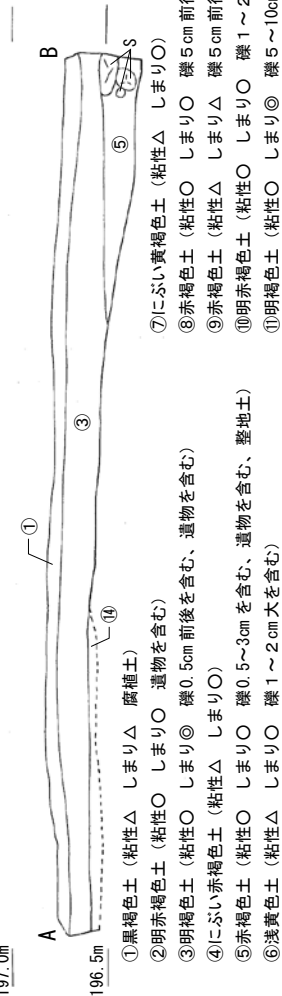
図	器種	高台※1	法量 (cm)				口縁残存率 %	高台残存率 %	釉薬	輪ドチの痕跡	備考
			器高	口径	底径	高台径					
1	天目茶碗	C	5.8	11.5		4.5	50	100	鉄		
2	筒形碗	—	(2.8)						鉄		
3	筒形碗	A	5.0			6.6		35	鉄		
4	筒形碗	C	8.2	10.4		4.6	35	100	鉄		内面ボロ付着
5	丸皿	A	1.7	9.7		6.2	35	35	灰		
6	丸皿	C	2.2	10.2		5.4	55	85	灰	外	焼成やや不良
7	稜皿	B	2.6	9.6		5.0	50	70	鉄		凸部軸拭う、体部下方に団子トチ痕
8	折縁皿	B	2.2	10.6		5.8	25	70	灰	内外	凸部軸拭う
9	折縁皿	B	2.1	10.6		5.8	65	100	灰	内外	凸部軸拭う
10	丸皿	B					15	70	灰	外	
	折縁皿Ⅰ	B					50	100	灰	内外	凸部軸拭う
	折縁皿Ⅰ	B					25	25	灰	内外	凸部軸拭う
11	丸皿	C					15	15	灰	外	
	折縁皿Ⅱ	B					30	100	灰	内外	凸部軸拭う
	折縁皿Ⅱ	B					75	100	灰	内外	凸部軸拭う
12	黄瀬戸向付	B				6.2		55	灰		外底に穿孔
13	黄瀬戸向付	B	2.5	9.3		5.2	5	100	灰		体部下端に団子トチ痕
14	黄瀬戸向付	B	3.1	11.7		8.0	20	55	灰		
15	匣鉢	E	9.4	17.4	15.4		40	40	無		内面に「千」の印
16	匣鉢	E	10.4	14.8	13.2		40	40	無		図17-匣鉢②
17	匣鉢	E	10.0	15.2	13.7		100	100	無		図17-匣鉢③
18	匣鉢	E	7.8	14.0	12.4		30	50	無		
19	匣鉢	丸底	8.5	16.6	13.2		40	55	無		図17-匣鉢④
20	匣鉢	丸底	8.3	15.7	13.7		90	100	無		図17-匣鉢①
21	匣鉢	丸底	7.8	15.0	13.0		50	100	無		
22	播鉢Ⅰ	E	11.8	28.9	11.2		10	100	錆		図17-播鉢①
写真B	匣鉢	E							無		菊印花
写真C	志野向付	—							長石		角柱状の足、内面木口付着

表9 牟田洞13トレンチ遺物観察表

197.5m 東壁セクション図



西壁セクション図

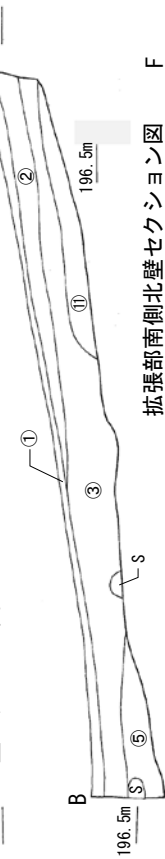


- ①黒褐色土 (粘性△ しまり△ 腐植土)
- ②明赤褐色土 (粘性○ しまり○ 遺物を含む)
- ③明褐色土 (粘性○ しまり◎ 礫0.5cm前後を含む、遺物を含む)
- ④にぶい赤褐色土 (粘性△ しまり○)
- ⑤赤褐色土 (粘性○ しまり○ 礫0.5~3cmを含む、遺物を含む、整地土)
- ⑥浅黄色土 (粘性△ しまり○ 礫1~2cm大を含む)
- ⑦にぶい黄褐色土 (粘性△ しまり○)
- ⑧赤褐色土 (粘性○ しまり○ 礫5cm前後を含む)
- ⑨赤褐色土 (粘性△ しまり△ 礫5cm前後を含む、遺物を含む)
- ⑩明赤褐色土 (粘性○ しまり○ 礫1~2cm大を含む、遺物を含む)
- ⑪明褐色土 (粘性○ しまり◎ 礫5~10cm大を含む)

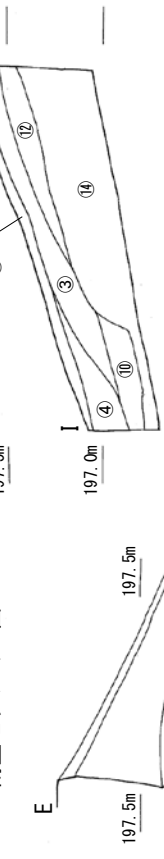
拡張部東セクション図



北壁セクション図



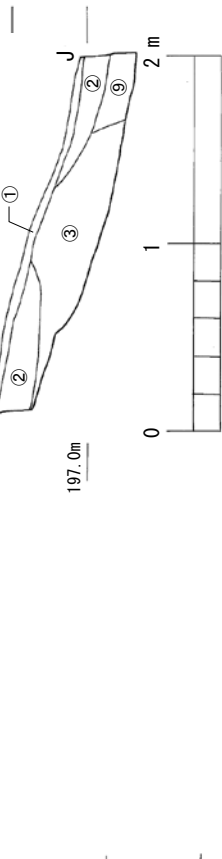
南壁セクション図



拡張部南側北壁セクション図



拡張部北側南壁セクション図



- ⑫明褐色土 (粘性○ しまり○ 礫0.5~3cm大を少量含む)
- ⑬明黄褐色土 (粘性○ しまり○ SD01埋土)
- ⑭赤褐色土 (粘性○ しまり○ 地山)
- ⑮赤褐色土 (粘性○ しまり○ 礫0.5~1.0cmを含む、遺物を含む SP01埋土)
- ⑯明赤褐色土 (粘性○ しまり○ 礫0.5cm前後を含む、遺物を含む SP01埋土)

図47 13トレンチ遺構図

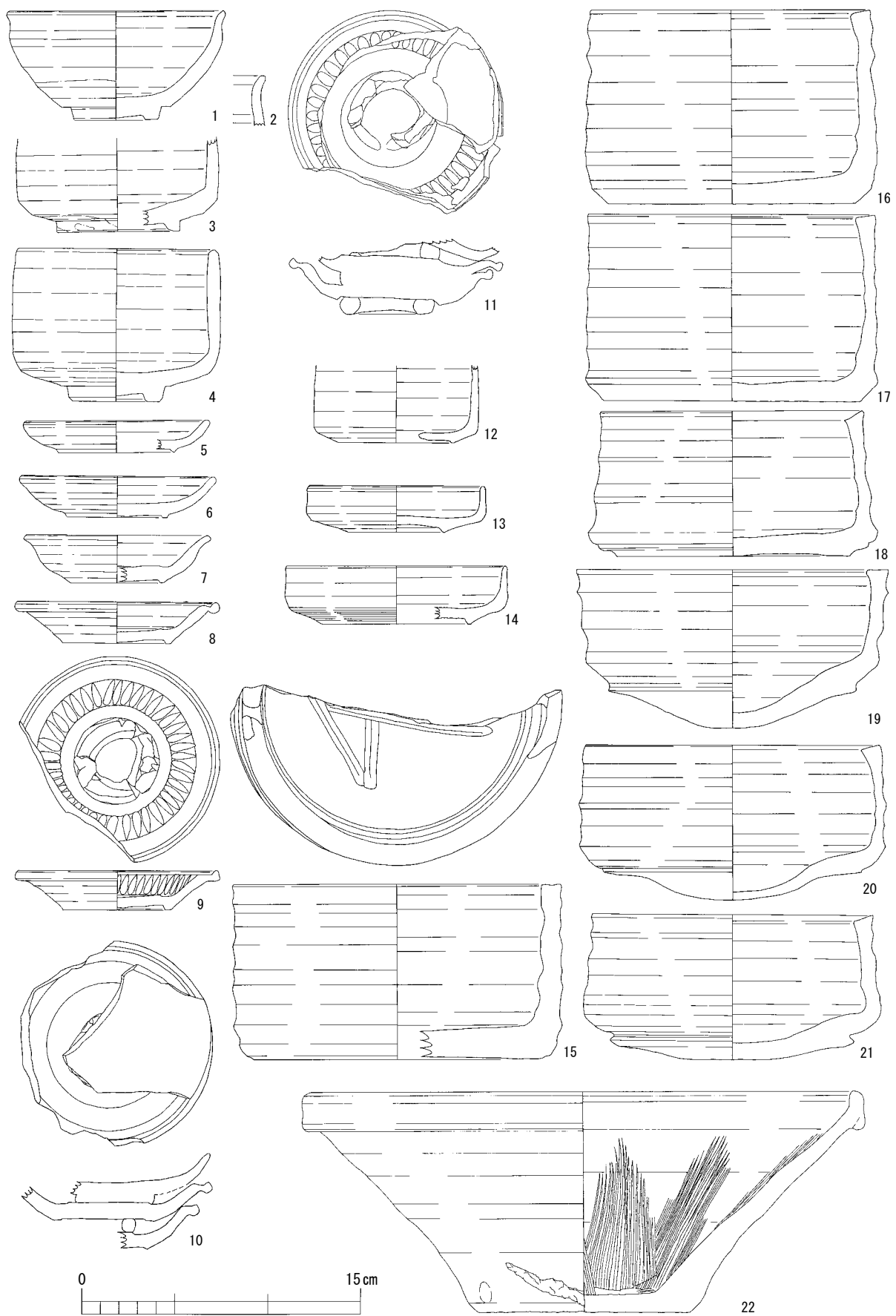


図48 牟田洞13トレンチ出土遺物

## 第4節 物原の調査

物原の範囲確認のために、北側に3本、南側に2本、計5本のトレンチを設定した。(図9参照)

### 1 トレンチ 図49～51

1 トレンチは、掘削深度20～30cmで地山面となる。堆積土は、平行堆積で遺物や窯道具、窯壁片を含んでいる。トレンチ内では、平面や断面に遺構は検出されなかった。

### 遺物 図65

1 トレンチの出土遺物は点数が少なく、灰釉の皿類が多くを占める。

1は天目茶碗で、歪みがみられる。2の丸皿は、口縁部がやや肥厚し内反りとなる。3は内禿皿で、口縁部が肥厚し、高台は付高台である。5は灰釉の向付で、外面にソギが入り、口縁部が襞状となる。6の播鉢は口縁部下方が引き出され、内面に櫛目がみられる。

### 2 トレンチ 図52～54

2 トレンチは、掘削深度約30cmで地山面を検出した。7層は、黒褐色土に遺物や窯道具が含まれる。1号窯の灰層と考えられ、南から北へ向かって下がっていく。トレンチ内では、平面や断面に遺構は検出されなかった。

### 遺物 図66・67

2 トレンチの北側では遺物が多く出土しており、天目茶碗と丸皿の比率が高く、前者が25%程度で、後者が30%程度である。

3の播鉢は、口縁部が縁帯を形成し下方に垂れる形態である。4は、蓋であり焼成不良のため釉薬は発色していない。外面に自然釉がかかり、壺や香炉の蓋とみられる。5は口縁部内面には線刻が、底部には刻印がみられる。7は、発色不良であり黄灰色を呈す。口縁部が外反する黄瀬戸の鉢と思われる。8は内面に波状文がみられ、底部内面の釉薬を拭った痕跡がみられる。天目茶碗は、10のような削り出し内反り高台と、11のような削り出し輪高台のものがみられる。17の折縁皿は、内面に波状文をみる。21は、外面にソギが入る向付である。1 トレンチでも、灰釉で同様の形態のものが出土している。22は口縁部が下方に垂れ、23は口縁部下方が斜めに延びる形態の播鉢である。24は壺であり、錆釉の施釉後に鉄釉をかける。25の茶入は肩衝形、26は球形に近い胴部で頸部は無い。高根窯沢古窯跡で同様のものが出土している。

### 3 トレンチ 図55～57

3 トレンチは、掘削深度40～60cmで地山面に達する。堆積土は等高線に沿って平行堆積し、遺物や窯壁片が含まれるが、窯壁片が含まれる量は1・2トレンチに比べて少ない。すぐ西側に崩落防止の石垣が造られているため、改変が入っていることも想定される。平面や断面に遺構は見られない。

### 遺物 図68

3 トレンチでは、天目茶碗と丸皿の割合が高い。1・2は天目茶碗であり、1は削り出し内反り高台、2は削り出し輪高台である。3は瀬戸黒筒形碗であり、体部下方が丸く、上方はほ



ば直立する。

#### 4 トレンチ 図58～61

4 トレンチは、掘削深度約90cm で地山面に達する。堆積土は平行堆積し、遺物や窯道具、窯壁片を含む。トレンチ内では、平面や断面に遺構は検出されなかった。

#### 遺物 図69・70

4 トレンチは、播鉢が45%程度と割合が高く、皿類では折縁皿の割合が高い。向付や瀬戸黒の数は北側のトレンチに比べて多い。

1・2は灰釉の丸皿であり、付高台と削り込み高台がみられる。形態は、1は体部が直線的に伸び、2は口縁部がやや外反する。3は、内面にソギが入る内禿皿である。4・14は播鉢で、4は口縁部下方が丸みを帯び、14は口縁部下方が引き出される。4は1単位12本程度、14は1単位14本の櫛目がみられる。6～9は瀬戸黒筒形碗である。6はやや小振りであるが、口縁部が肥厚し、体部下方が丸くなる形態と考えられる。他の瀬戸黒は、高台が扁平で体部下方が水平に開き、稜がみられる。体部には削りなどの調整はみられない。10は、鉄絵を描く志野の菊花形皿である。11は志野の向付であり、外面にわずかに鉄絵がみられるが、全体に焼成不良である。12は黄瀬戸の鉢であり、口縁部と体部の下方に線刻がみられる。13は片口鉢、16は水指または建水であり、両者ともに外面は全面施釉されるが、内面は口縁部付近のみ施釉される。

#### 5 トレンチ 図62～64

5 トレンチは、荒川豊蔵の造園により改変が入っている。掘削深度が深くなったため、二段掘りのような形で、北側のみを深掘りした。地表面から1.8m 下で地山となる。17層には荒川豊蔵の遺物も含まれるが桃山期の窯道具（主に匣鉢）を大量に含む。20、21層は灰とみられる黒色の土を部分的に含む。

#### 遺物 図71～74

5 トレンチから出土した遺物では、折縁皿の割合が約33%と多く、次いで丸皿、天目茶碗の順となる。桃山陶では、瀬戸黒、黄瀬戸は他のトレンチと比べて多く出土しており、志野もトレンチ内の出土遺物全体の約14%と高い割合を占める。ただ、志野には荒川豊蔵の作品もいくらか混じっている。また、器種としては向付などの鉢類の比率が高く、数としては100点近い点数が見られた。丸碗が多くなることや襷皿を含むことも、このトレンチの遺物の特徴である。

#### 碗類

1～9は天目茶碗である。体部が口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口唇部がS字状になるもの（1～3・7）と、直立し外反するもの（5・6・8・9）がみられる。4は、口縁部が直立し端部が丸く収まる。高台は、削り出し輪高台と削り出し内反り高台がみられる。10～12は丸碗である。10は体部から口縁にかけてやや内湾気味に立ち上がり、11は直線的に開く。3点とも高台は削り出し輪高台である。10・11は鉄釉、12は灰釉が施釉される。13～17は、瀬戸黒筒形碗である。13は体部から口縁部にかけて内傾し、14～17は直線的に立ち上がり、16は体部に段がみられる。いずれも、体部にケズリ等の調整はみられない。黒の発色は様々である。

## 皿類

18～21は丸皿である。釉薬には灰釉、鉄釉、長石釉がみられるが、灰釉が大多数を占める。底部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がり、高台には削り込み高台と削り出し高台がみられる。20は外面に円錐ピンが溶着し、25は内面にソギが入る。26・27は灰釉の内禿皿である。高台はともに削り出し高台である。28は丸皿の溶着資料であり、灰釉と鉄釉の皿を重ねて焼いている。また、上の鉄釉の皿には底部内面に高台の痕と灰釉がみられるため、灰釉製品を更に重ねていたことが伺える。29は端反皿で体部中央付近から外反する。30は、灯明皿で内面に3条の凸線が同心円状に巡る。32～46は折縁皿であり、内面にソギが入るものと、入らないものがみられるが、器形に差異はみられない。高台は削り込み高台と削り出し高台があり、付高台はみられない。器形は器高が高いものと扁平なタイプがあり、多くの個体に輪ドチの溶着や痕がみられる。32・33は8葉の方喰、印花がみられる。40は、外側に別個体の折縁皿、内面に他の陶器片が溶着し、内面には16葉の菊花の印花がみられる。41は折縁皿が2枚溶着しており、内面には蔓草様の印花がみられる。43は折縁皿が溶着しており、上の折縁皿の内面には4葉の方喰の印花と線刻がみられる。また、内面に輪ドチが溶着し、外面にはトチン痕がある。47・48は口縁部に襷を成形する襷皿である。48は内面にソギが入り、菊花形となる。49～51は菊花形皿である。49・50は内面にソギが入る。49は焼きが甘く、釉薬は不明である。51は、口縁部は水平に引き出し輪花形になり、内面にソギが入る。大萱窯下古窯跡の過去採集資料には、同形の鼠志野がみられる。52～55は大皿であり、52は灰釉が施釉され口縁部が折縁状となる。53・54は鉄釉が施釉され、高台は削り出し高台で口縁部が外折する。55は、黄瀬戸の大皿であり、底部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、玉縁状の口縁部の下には沈線が入る。内面には線刻と胆礬がみられる。56～58は、志野の皿類である。56・57は内面に鉄絵がみられるが、何を描いたかは不明である。

## 鉢類

59・60は黄瀬戸の向付であり、高台は削り込み高台である。59は内面に葉の線刻がみられる。60は底部から稜をもって直線的に立ち上がり、口縁部付近でやや内傾する。61は黄瀬戸の鉢であり、内面に線刻と胆礬がみられる。62～66は志野の鉢類。62は筒向付であり、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。65は体部が丸みを帯び、口縁部が肥厚する鉢である。66は体部から直線的に立ち上がる鉢である。62～66は破片であり、鉄絵はみられない。67は鉄釉の鉢である。体部下方に稜が入り、口縁部は外反し折縁状になる。68～72は、口縁部外面に縁帯を形成する播鉢である。口縁部が下方に垂れ丸みを帯びるものが多く、70のように面をもつものがみられる。73は口縁部が内側に折り返され、端部が丸みを帯びる。

## 茶入他

75～77は茶入である。75・76は肩衝形、77は大海形である。78は口縁が直立する壺と思われる。発色不良であるが灰釉が施釉されている。79～82は香炉である。口縁部が丸く内湾するもの(79・81)、内傾するもの(80)、内折し受け部をもつもの(82)がみられ、すべて灰釉が施釉される。83・84は水指または建水であり、84は削り出し高台である。85～94は徳利である。85は受け口状となり、86～88は口縁部が大きく外反する。85・92は釉薬の発色具合から、黄瀬戸の可能性も考えられる。95は、皿を一枚焼くための小型の匣鉢である。96は輪ドチ、97は団子トチである。



図 49 1 トレンチ平面図 (S=1/60)

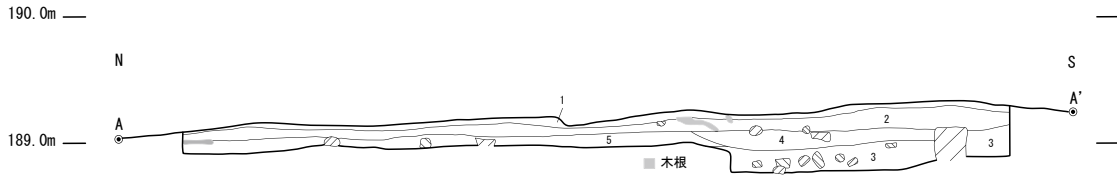


図 50 1 トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

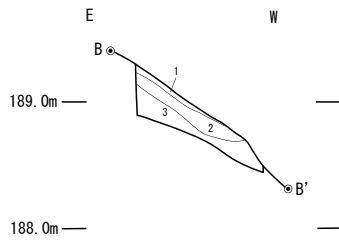


図 51 1 トレンチ南壁土層図 (S=1/60)

- 1 腐葉土及び表土〔遺物・匣鉢等窯道具を含む〕
- 2 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~80mmの礫をわずかに含む〔遺物・窯道具を含む堆積土〕
- 3 褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~280mmの礫を多く含む〔地山〕
- 4 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~180mmの礫を少量含む〔上層のみ遺物を含む堆積土〕
- 5 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~140mmの礫をわずかに含む〔4層よりやや暗い。上層のみ遺物を含む堆積土〕
- 6 褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~120mmの礫を少量含む〔上層に一部遺物が混じる地山〕
- 7 黒褐色 砂質土 しまり弱い 粘性あり Φ5~60mmの礫をわずかに含む〔1号窯の灰層。遺物を多く含む〕
- 8 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~30mmの礫をわずかに含む〔遺物や窯壁片を含む堆積土〕

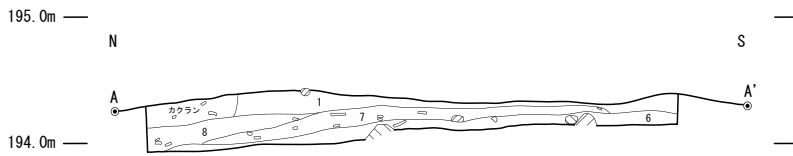


図 52 2 トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

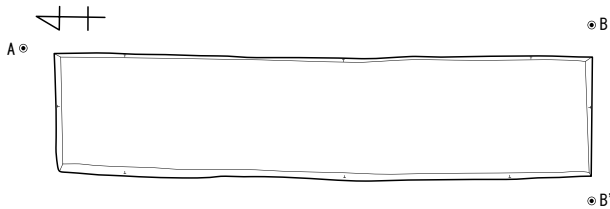


図 53 2 トレンチ平面図 (S=1/60)

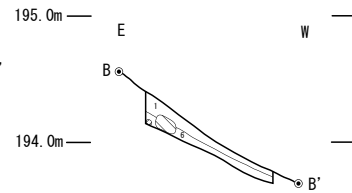


図 54 2 トレンチ南壁土層図 (S=1/60)

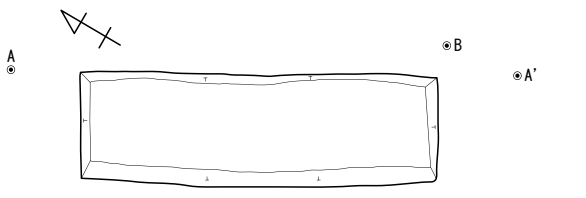


図 55 3 トレンチ平面図 (S=1/60)

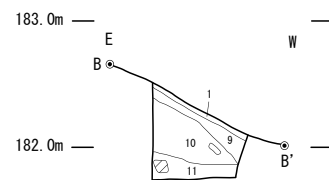


図 56 3 トレンチ南壁土層図 (S=1/60)

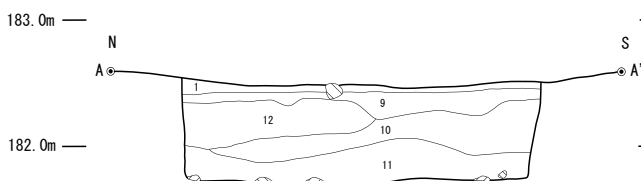
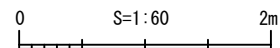


図 57 3 トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

- 9 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~20mmの礫をわずかに含む〔遺物や窯道具を含む堆積土〕
- 10 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~20mmの礫をわずかに含む
- 11 褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~30mmの礫を含む〔地山〕
- 12 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5~40mmの礫をわずかに含む〔遺物含む堆積土。9層より明るく10層より褐色が強い〕



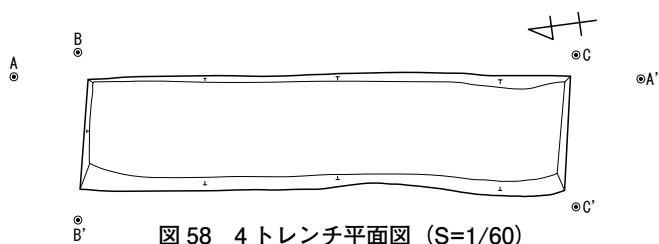


図 58 4 トレンチ平面図 (S=1/60)

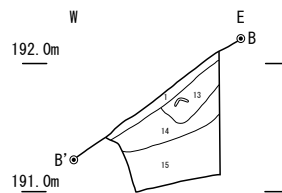


図 59 4 トレンチ北壁土層図 (S=1/60)

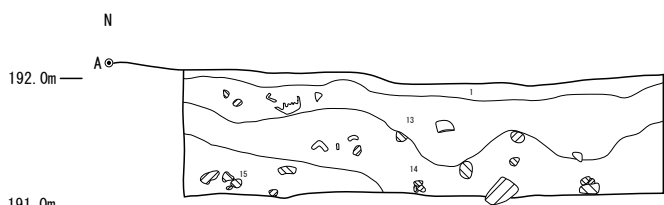


図 60 4 トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

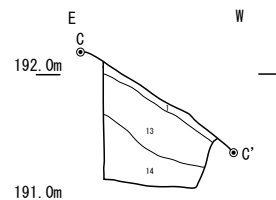


図 61 4 トレンチ南壁土層図 (S=1/60)

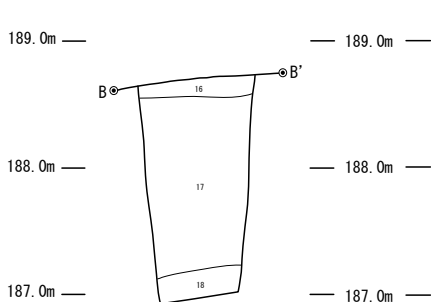


図 62 5 トレンチ北壁土層図 (S=1/60)

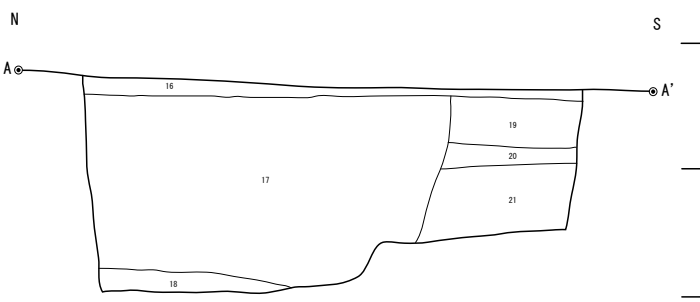


図 63 5 トレンチ東壁土層図 (S=1/60)

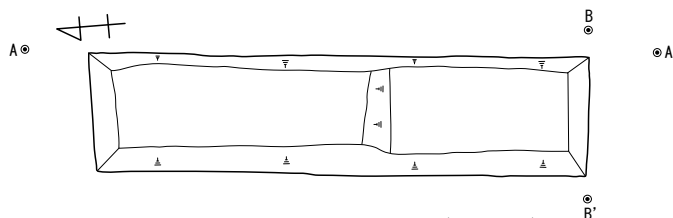
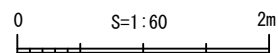
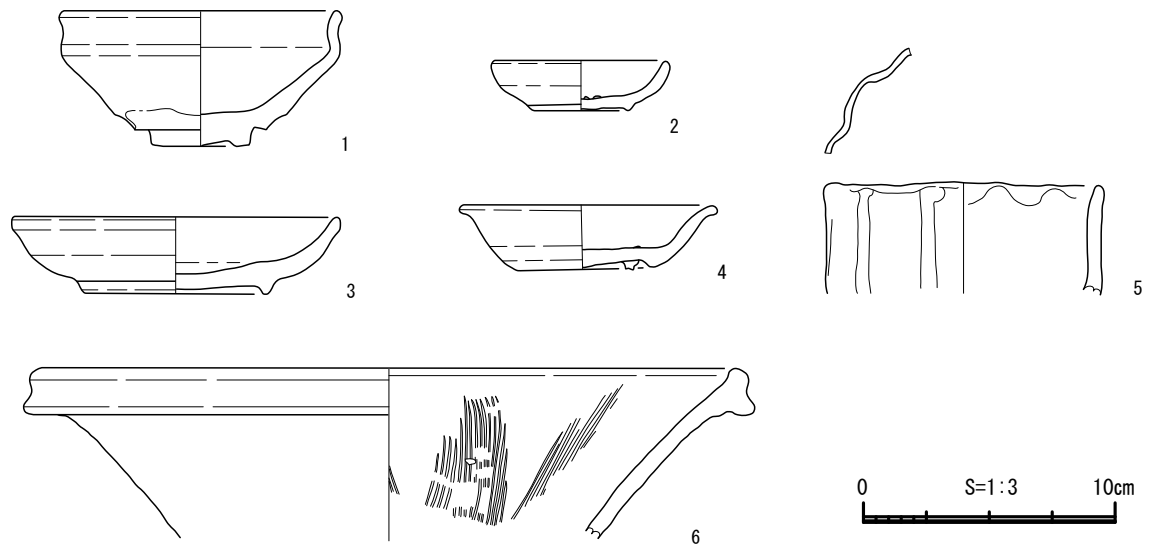


図 64 5 トレンチ平面図 (S=1/60)

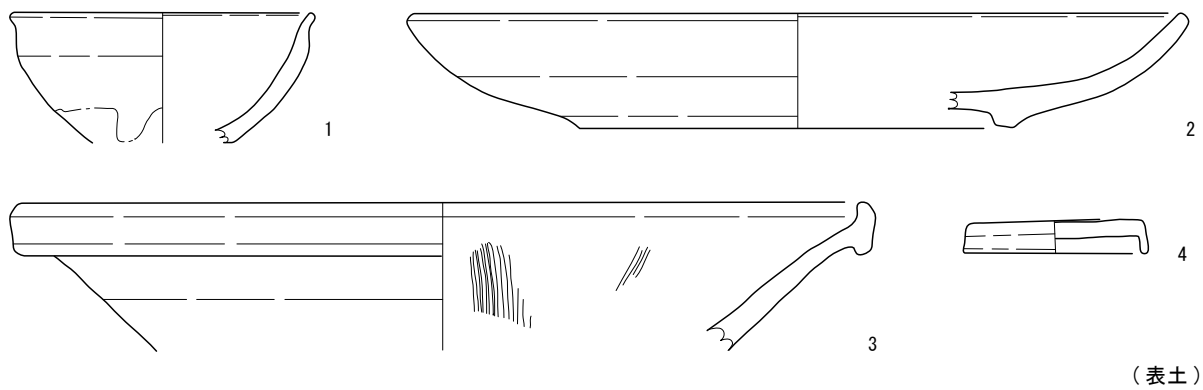
- |    |     |     |       |      |  |
|----|-----|-----|-------|------|--|
| 13 | 暗褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5 ~ 60mm の礫を少量含む [遺物を含む堆積土]                   |
| 14 | 褐色  | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5 ~ 120mm の礫を少量含む [遺物や窯壁片を含む堆積土]              |
| 15 | 褐色  | 粘質土 | しまりあり | 粘性強い | Φ5 ~ 100mm の礫を少量含む [遺物や窯壁片を含む堆積土]              |
| 16 | 褐色  | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5 ~ 60mm の礫を少量含む [遺物や窯道具を含む庭造成土]              |
| 17 | 暗褐色 | 砂質土 | しまり弱い | 粘性あり | Φ5 ~ 50mm の礫を少量含む [遺物や豊蔵の作品と思われる現代の遺物を含むカクラン土] |
| 18 | 灰褐色 | 砂質土 | しまり弱い | 粘性弱い | Φ5 ~ 20mm の礫を少量含む [遺物は少ないが、窯道具を含む堆積土]          |
| 19 | 褐色  | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5 ~ 20mm の礫を少量含む [遺物や窯道具を含む堆積土]               |
| 20 | 暗褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5 ~ 40mm の礫を少量含む [遺物や窯道具を含む堆積土。部分的に黒色土を含む]    |
| 21 | 褐色  | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | Φ5 ~ 20mm の礫をわずかに含む [遺物や窯道具を含む堆積土。部分的に黒色土を含む]  |



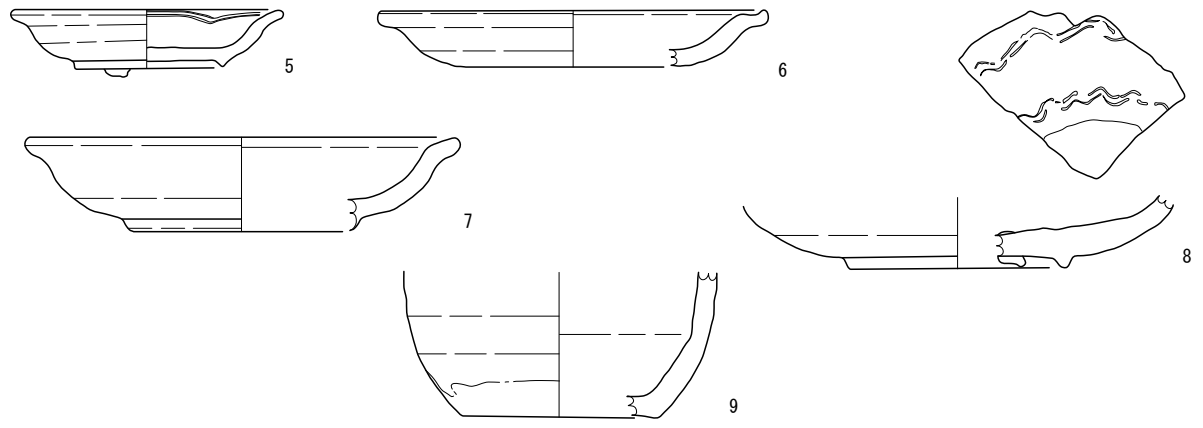


番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	表土	鉄釉	天目茶碗	(10.7)	5.4	(3.8)	ゆがみあり。
2	2	表土	灰釉	丸皿	(6.8)	2.0	(3.7)	付高台。
3	3	表土	灰釉	内禿皿	(12.8)	3.1	(7.2)	付高台。
4	4	堆積土	鉄釉	稜皿	(9.8)	2.5	(5.3)	削り込み高台。
5	5	堆積土	灰釉	向付	(10.6)	(4.4)		
6	6	堆積土	錆釉	擂鉢	(27.4)	(6.7)		

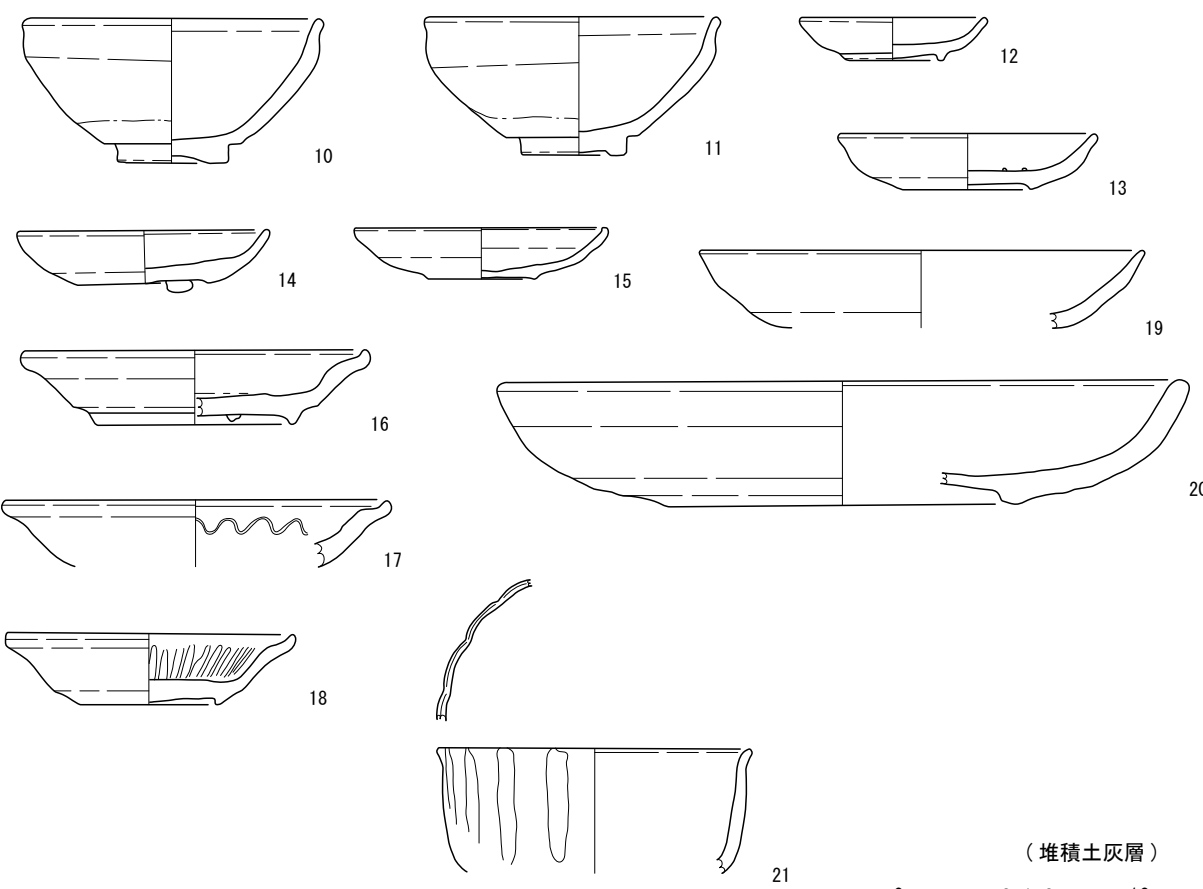
図 65 牟田洞 1 トレンチ出土遺物 (S=1/3)



(表土)



(堆積土)



(堆積土灰層)

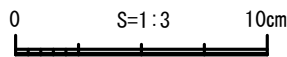
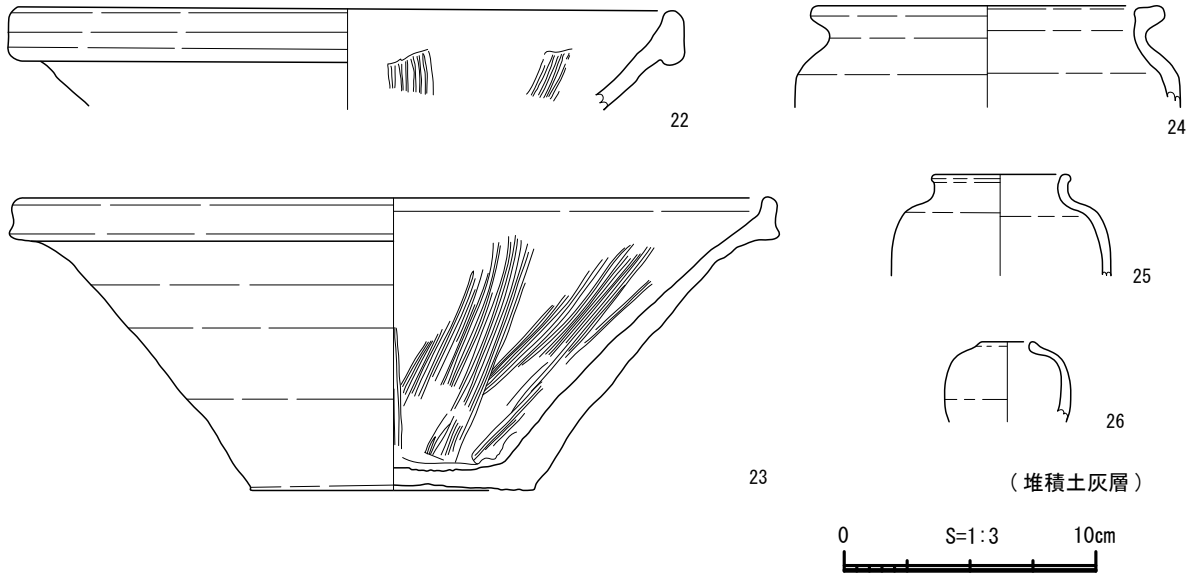
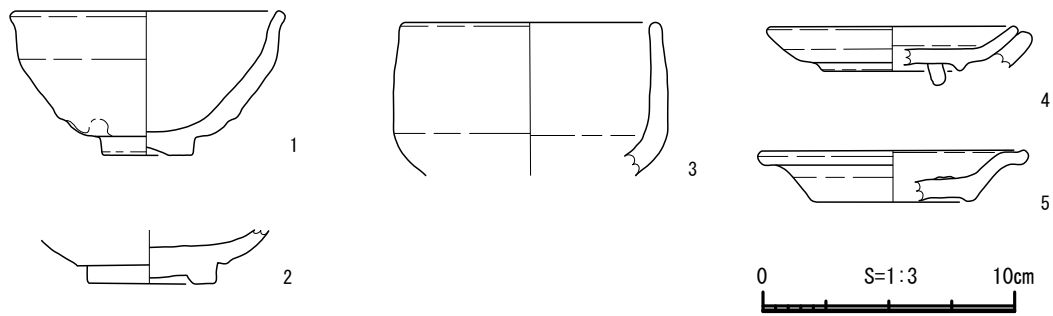


図 66 牟田洞 2 トレンチ出土遺物 1 (S=1/3)



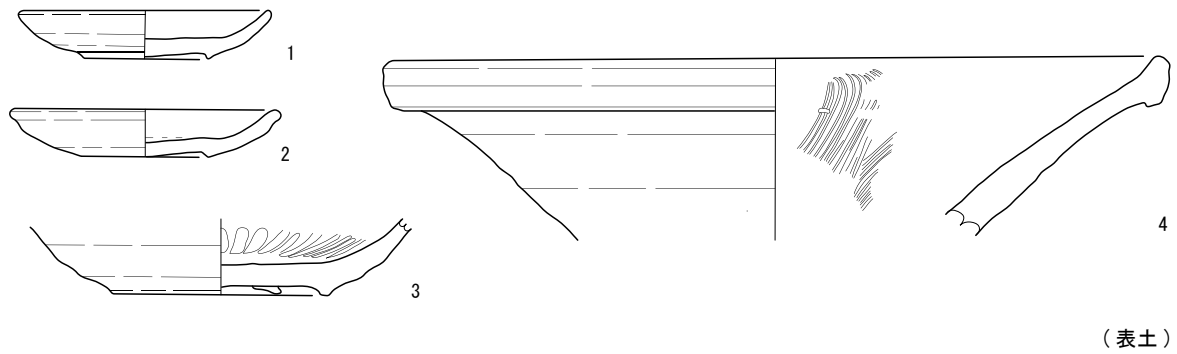
番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		表土	鉄釉	天目茶碗	11.7	5.2		
2		表土	錆釉	大皿	(30.3)	4.5	(17.1)	削り込み高台。
3		表土	錆釉	播鉢	(29.5)	11.6	(11.0)	櫛目の1単位15本。
4	4	表土		蓋	7.0	1.4		外面に自然釉。
5	5	堆積土	灰釉	端反皿	10.4	2.3	(5.8)	削り込み高台。底部内面に線刻と刻印。底部外面にトチン痕。
6		堆積土	灰釉	折縁皿	(15.1)	(2.3)		底部内面に重ね焼きの痕。
7		堆積土	灰釉	鉢	(16.8)	3.8	8.6	削り込み高台。黄瀬戸の発色不良。
8	8	堆積土	(黄瀬戸)	大皿	—	(2.8)	(8.5)	削り出し高台。底部内面にはがれ痕。底部外面にトチン痕。
9		堆積土	錆釉 / 鉄釉	徳利		(5.8)	(7.8)	
10	10	堆積土 (灰層)	鉄釉	天目茶碗	11.5	5.7	4.3	内面にはがれ痕、ボロが付着。
11	11	堆積土 (灰層)	鉄釉	天目茶碗	11.3	5.4	4.0	
12		堆積土 (灰層)	灰釉	丸皿	(7.2)	1.7	3.6	削り出し高台。内面にボロが付着。底部内面にはがれ痕。
13	13	堆積土 (灰層)	灰釉	内禿皿	(10.0)	2.2	5.1	削り込み高台。底部内面にはがれ痕。
14	14	堆積土 (灰層)	鉄釉	内禿皿	(9.7)	2.1	5.2	削り込み高台。底部外面に輪ドチが溶着。
15	15	堆積土 (灰層)		灯明皿	(9.9)	2.0	4.2	
16		堆積土 (灰層)	灰釉	折縁皿	(13.2)	3.0	(7.6)	削り出し高台。内ハゲ。発色不良。
17	17	堆積土 (灰層)	灰釉	折縁皿	(15.0)	(2.7)		内面にボロが付着。内面に波状の線刻。
18		堆積土 (灰層)	灰釉	折縁皿	11.3	2.8	(5.4)	削り込み高台。ソギ入り。
19		堆積土 (灰層)	鉄釉	中皿	(17.4)	(3.1)		
20	20	堆積土 (灰層)	錆釉	大皿	(26.7)	4.9	(13.7)	削り込み高台。
21	21	堆積土 (灰層)	鉄釉	向付	(12.3)	(4.9)		外面にソギが入る。
22		堆積土 (灰層)	錆釉	播鉢	(26.0)	(4.1)		櫛目は1単位6本以上
23	23	堆積土 (灰層)	錆釉	播鉢	(33.2)	(5.9)		櫛目は1単位8本以上
24	24	堆積土 (灰層)	錆釉 / 鉄釉	壺	13.4	4.0		
25	25	堆積土 (灰層)	鉄釉	茶入	(5.1)	(4.0)		
26	26	堆積土 (灰層)	灰釉	壺	(2.0)	(3.1)		断面にも釉がかかり、焼成中に欠損している。

図 67 牟田洞 2 トレンチ出土遺物 2 (S=1/3)

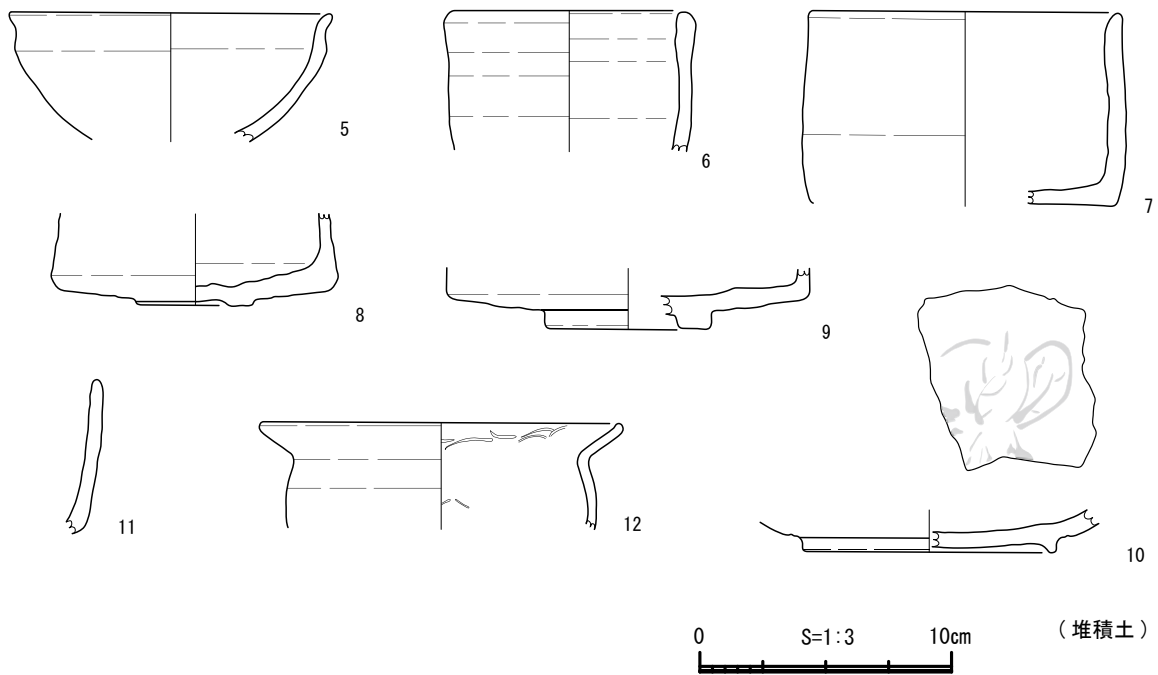


番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		表土	鉄釉	天目茶碗	—	(2.1)	5.2	内面にホロが付着。
2	2	表土	鉄釉	天目茶碗	(10.5)	5.7	(3.4)	
3	3	表土	(瀬戸黒)	筒形碗	(9.9)	(6.1)		
4	4	表土	灰釉	丸皿	(9.7)	1.8	(5.3)	付高台。外面にハサミ皿片、輪ドチが溶着。
5		表土	灰釉	折縁皿	(10.4)	2.0	(.6.2)	削り込み高台。

図 68 牟田洞 3 トレンチ出土遺物 (S=1/3)



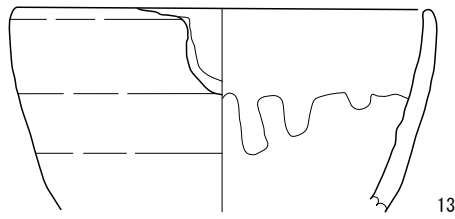
(表土)



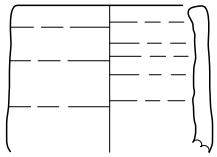
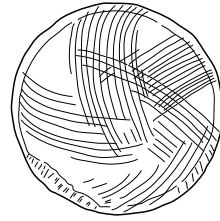
(堆積土)

図 69 牟田洞 4 トレンチ出土遺物 1 (S=1/3)

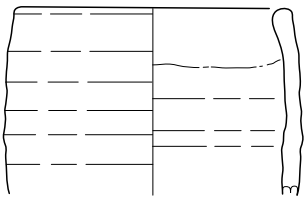




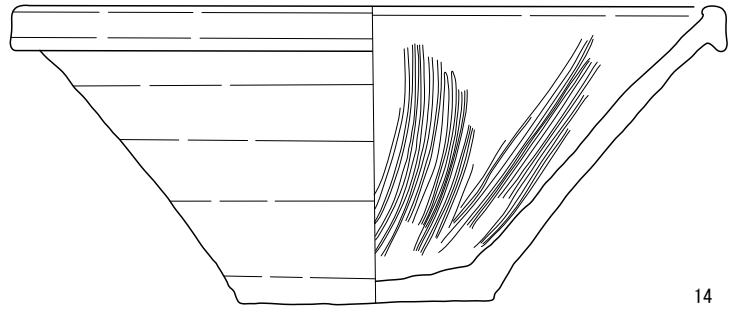
13



15

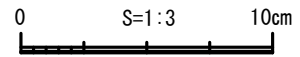


16



14

(堆積土)



番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	表土	灰釉	丸皿	9.7	1.9	4.9	
2	2	表土	鉄釉	丸皿	(10.3)	1.9	4.9	削り込み高台。底部内面にはがれ痕。
3	3	表土	灰釉	内禿皿	—	(3.0)	(8.4)	削り出し高台。ソギ入り。
4		表土	錆釉	搦鉢	(30.0)	(7.0)		
5		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.6)	(5.2)		
6	6	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(9.2)	(5.5)		
7	7	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(12.0)	(7.7)		
8	8	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	—	(3.6)	(4.0)	
9		堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	—	(2.3)	(6.2)	
10	10	堆積土	(志野)	菊花形皿	—	(1.7)	(9.7)	付高台。
11	11	堆積土	(志野)	向付	—	(6.2)		発色不良。鉄絵がわずかにみられる。
12	12	堆積土	(黄瀬戸)	鉢	(14.1)	(4.2)		
13	13	堆積土	鉄釉	片口鉢	(16.1)	(8.0)		
14	14	堆積土	錆釉	搦鉢	(27.1)	11.8	9.8	
15		堆積土	灰釉	香炉	(7.2)	(5.8)		
16	16	堆積土	鉄釉	水指・建水	(10.3)	(7.4)		

図70 牟田洞4トレンチ出土遺物2 (S=1/3)

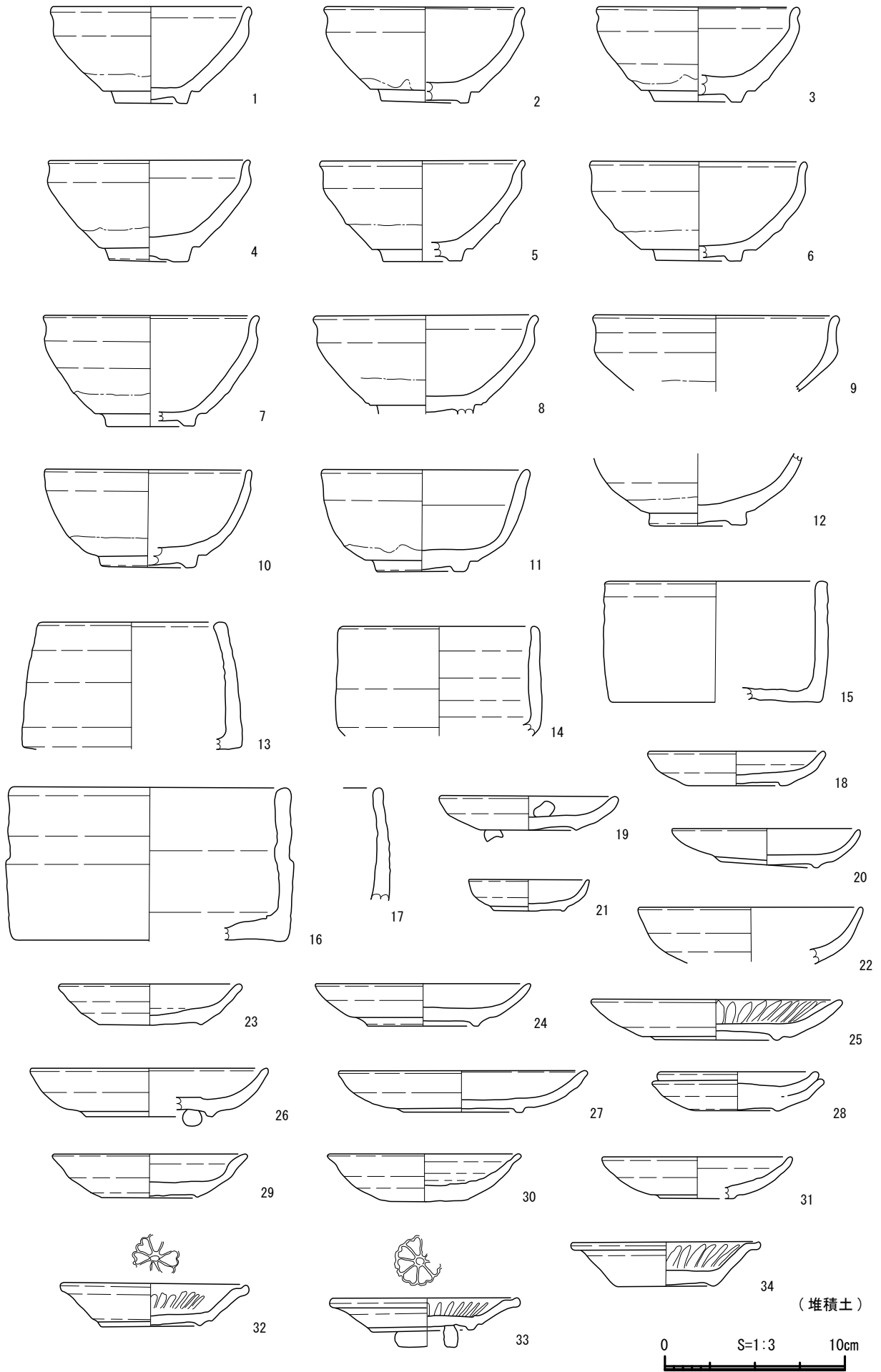


図 71 牟田洞 5 トレンチ出土遺物 1 (S=1/3)

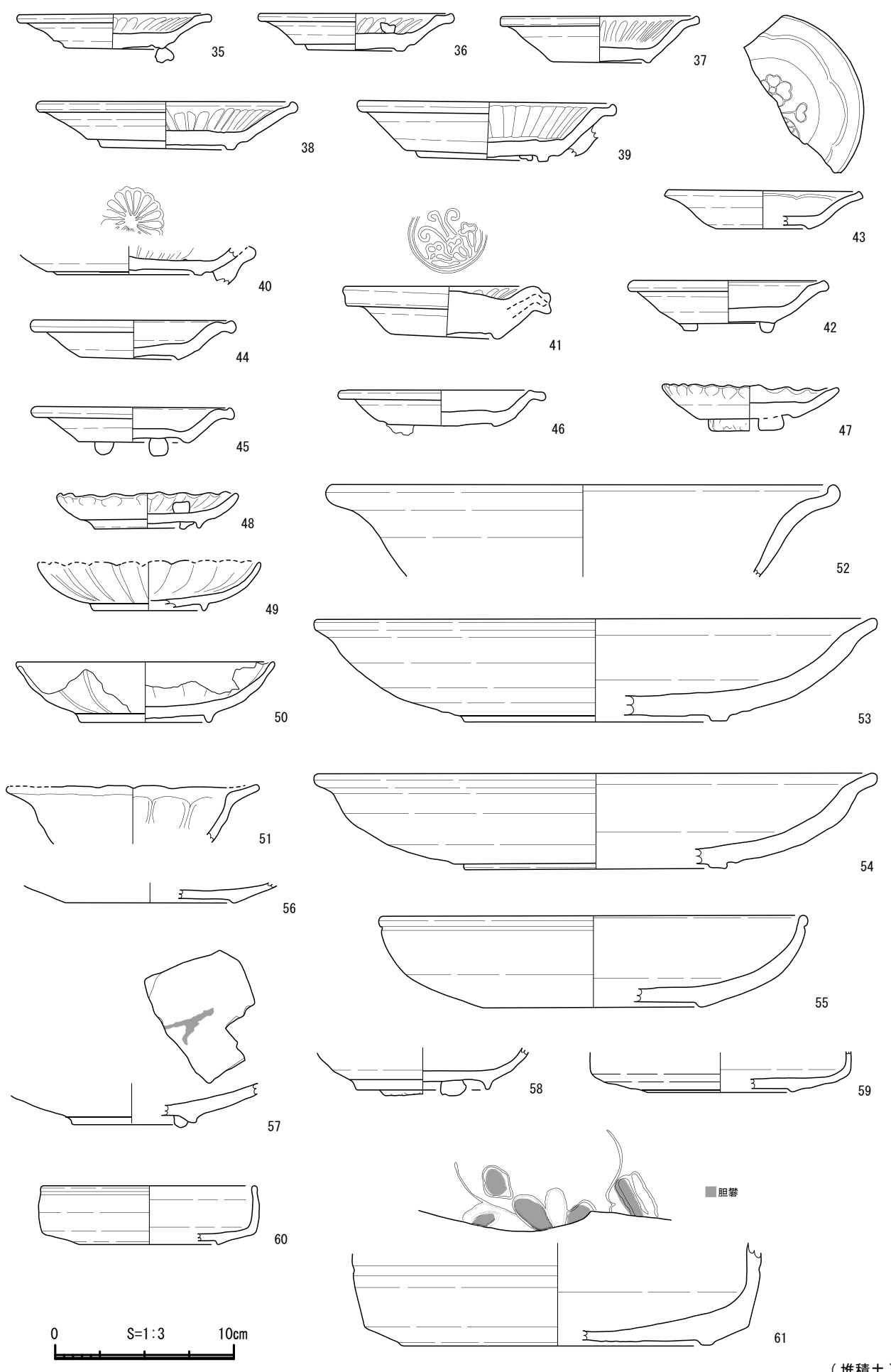


図 72 牟田洞 5 トレンチ出土遺物 2 (S=1/3)

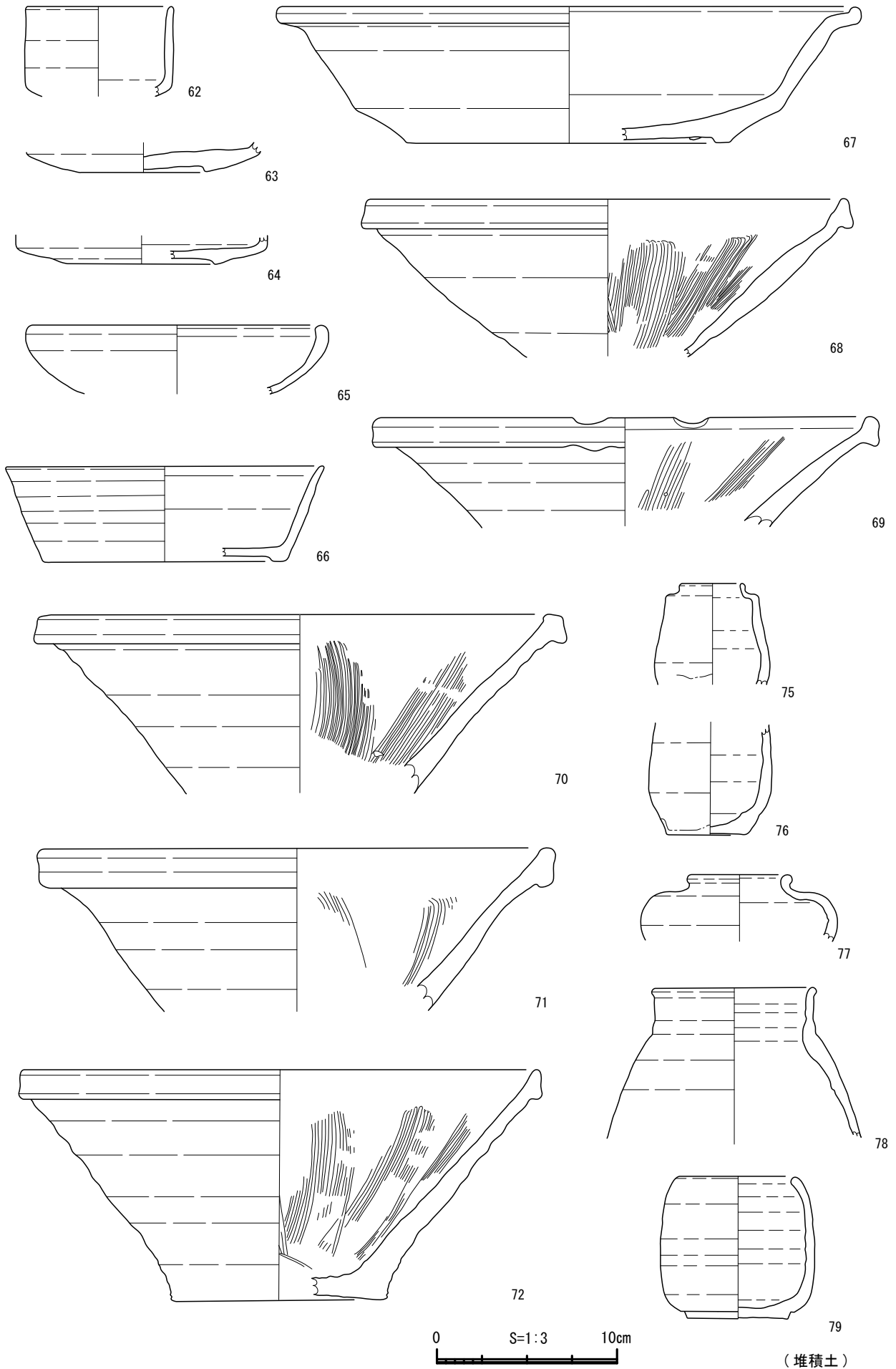


図 73 牟田洞 5 トレンチ出土遺物 3 (S=1/3)

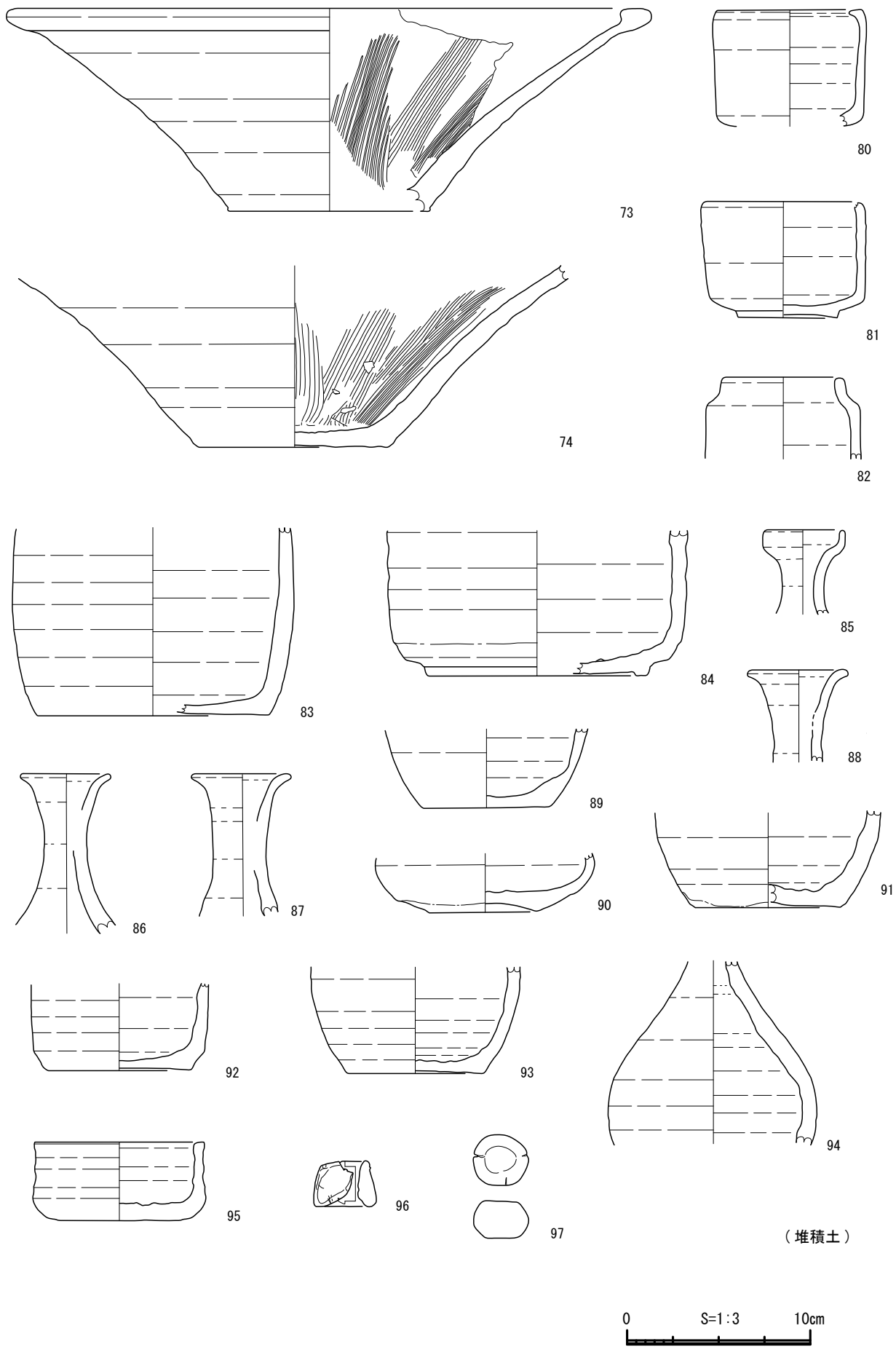


図 74 牟田洞 5 トレンチ出土遺物 4 (S=1/3)

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.9)	5.3	(4.0)	
2	2	堆積土	鉄釉	天目茶碗	10.9	5.3	4.8	匣鉢の破片が中に溶着。
3		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.0)	5.3	(4.6)	
4	4	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.0)	5.6	4.2	
5		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.2)	5.6	(4.4)	
6	6	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.7)	5.5	(4.7)	
7		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.7)	6.1	(4.8)	
8		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.1)	(5.5)		
9		堆積土	(志野)	天目茶碗	(13.3)	(4.2)		
10		堆積土	鉄釉	丸碗	(11.2)	5.4	(5.0)	
11	11	堆積土	鉄釉	丸碗	11.3	5.6	4.9	外面に他の陶器片のものがれ痕。
12	12	堆積土	灰釉	丸碗	—	(3.9)	(5.2)	
13	13	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(9.9)	(7.0)		
14		堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(10.5)	(6.1)		内外面にわずかにボロが付着。
15	15	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(11.6)	(6.8)		
16	16	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(15.0)	(8.5)		内面にボロが付着。
17		堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	—	(6.2)		内外面にボロがわずかに付着。
18	18	堆積土	灰釉	丸皿	(9.6)	1.9	(5.3)	削り込み高台。底部外面にトチンのがれ痕あり。外面や口縁部にはがれ痕。
19		堆積土	灰釉	丸皿	9.8	1.9	5.4	削り込み高台。内外面に輪ドチが一部溶着。
20		堆積土	灰釉	丸皿	(10.5)	2.1	5.3	削り出し高台。底部外面に円錐ピンが溶着。
21	21	堆積土	(志野)	丸皿	(6.6)	1.8	(3.7)	削り込み高台。
22		堆積土	(志野)	丸皿	(12.2)	(3.0)		
23		堆積土		丸皿	(10.2)	2.3	(5.6)	削り込み高台。灰釉だと思われるが発色不良。
24	24	堆積土	鉄釉	丸皿	(11.8)	2.2	6.2	削り出し高台。内外面に輪ドチ痕。
25	25	堆積土	灰釉	丸皿	(13.8)	2.3	(6.6)	削り出し高台。ソギ入り。
26		堆積土	灰釉	内禿皿	(13.0)	2.7	(7.0)	削り出し高台。底部外面に輪ドチが溶着。
27	27	堆積土	灰釉	内禿皿	(13.6)	2.3	6.6	削り出し高台。内外面に他の陶器片が溶着。外面にはボロも付着。
28	28	堆積土	鉄釉・灰釉	丸皿	上(8.8) 下9.1	下1.7	4.4	底部内面にトチン痕。
29	29	堆積土	鉄釉	端反皿	(10.6)	2.4	(5.3)	内ハゲ。底部外面にトチン痕。
30	30	堆積土	錆釉	灯明皿	10.4	2.6	4.3	
31		堆積土	錆釉	灯明皿	(10.4)	2.3	(4.1)	
32	32	堆積土	灰釉	折縁皿	(10.1)	2.4	5.4	削り出し高台。内ハゲ。ソギ入り。印花あり。
33	33	堆積土	灰釉	折縁皿	(10.2)	1.9	5.4	削り出し高台。ソギ入り。印花あり。底部外面にトチンが溶着。
34	34	堆積土	灰釉	折縁皿	(10.3)	2.5	5.3	削り込み高台。内ハゲ。ソギ入り。外面にトチン痕。
35		堆積土	灰釉	折縁皿	(10.5)	1.9	5.3	削り出し高台。内ハゲ。ソギ入り。外面に一部トチンが溶着。
36	36	堆積土	灰釉	折縁皿	10.6	2.0	5.1	削り出し高台。内ハゲ。ソギ入り。内面に一部トチンが溶着。
37		堆積土	灰釉	折縁皿	10.7	2.6	5.2	削り込み高台。内ハゲ。ソギ入り。内外面にトチンが溶着。
38	38	堆積土	灰釉	折縁皿	14.0	2.7	7.4	削り出し高台。内ハゲ。ソギ入り。体部外面にはがした他の陶器片が溶着。
39	39	堆積土	灰釉	折縁皿	(14.1)	3.2	6.8	削り出し高台。ソギ入り。他の陶器片が溶着。底部外面にトチンが溶着。
40	40	堆積土	灰釉	折縁皿	—	(1.7)	(8.1)	削り出し高台。印花あり。底部内外面にトチンのはがれ痕。
41	41	堆積土	灰釉	折縁皿(溶着資料)	上部11.1	3.8		削り込み高台。上の内面に印花、ソギあり。
42		堆積土	灰釉	折縁皿	10.6	2.3	5.3	削り込み高台。内ハゲ。内面にトチン痕、外面に輪ドチが溶着。
43	43	堆積土	灰釉	折縁皿	(10.6)	2.2	(5.2)	削り込み高台。印花、線刻あり。外面にトチン痕あり。内面にわずかにボロが付着。
44		堆積土	灰釉	折縁皿	11.1	2.1	5.1	削り込み高台。内ハゲ。内外面にトチン痕がみられる。
45	45	堆積土	灰釉	折縁皿	11.0	2.0	6.0	削り出し高台。内ハゲ。外面に輪ドチが溶着。
46		堆積土	灰釉	折縁皿	11.1	1.9	6.2	削り込み高台。内ハゲ。底部と体部外面にトチンが溶着。底部外面にトチンのはがれ痕。
47	47	堆積土	灰釉	襲皿	9.5	1.9	5.2	削り込み高台。内ハゲ。底部外面にトチンが溶着。
48	48	堆積土	灰釉	襲皿	(9.9)	2.0	(5.8)	付高台。ソギ入り。内外面にトチンが溶着。
49	49	堆積土		菊花形皿	(12.3)	2.8	(6.4)	付高台。
50		堆積土	(志野)	菊花形皿	(14.2)	3.3	7.1	付高台。底部外面3カ所にピン痕。
51	51	堆積土	(志野)	菊花形皿	(13.8)	(3.2)		
52		堆積土	灰釉	大皿	(28.0)	(5.1)		内外面にわずかにボロが付着。
53		堆積土	錆釉	大皿	(31.0)	5.3	(14.4)	削り出し高台。
54	54	堆積土	錆釉	大皿	(31.2)	5.7	(14.6)	削り出し高台。内面にボロが付着。
55	55	堆積土	(黄瀬戸)	大皿	(23.4)	5.1	(12.0)	内面に1カ所トチン痕あり。内面に線刻。
56		堆積土	(志野)	鉢か皿		(1.1)	(9.3)	削り込み高台。内面に鉄絵と円錐ピン痕。
57	57	堆積土	(志野)	皿類	—	(2.1)	(7.0)	底部外面にトチンが溶着。底部内面に絵付け。
58		堆積土	(志野)	皿類	—	(2.3)	(7.2)	底部内面にピン痕。焼成中に割れた灰釉製品が溶着。
59	59	堆積土	(黄瀬戸)	向付		(2.2)	(8.0)	

表 10 牟田洞 5 トレンチ遺物観察表 1

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
60	60	堆積土	(黄瀬戸)	向付	(11.7)	3.3	(3.3)	
61	61	堆積土	(黄瀬戸)	鉢	—	(5.6)	(17.2)	底部内面に線刻と胆礬あり。内面にわずかにボロが付着。底部外面にはがれ痕。
62	62	堆積土	(志野)	向付	(8.0)	(5.0)		
63		堆積土	(志野)	向付	—	(1.6)	(6.8)	
64		堆積土	(志野)	向付	—	(1.6)	(8.2)	削り込み高台。
65	65	堆積土	(志野)	鉢	(15.8)	(3.8)		削り込み高台。
66	66	堆積土	(志野)	鉢	(17.5)	5.3	(13.0)	削り込み高台。口縁部、底部など所々に火色。
67	67	堆積土	鉄釉	浅鉢	(31.8)	7.4	(17.9)	底部内外面にトチンのはがれ痕。
68	68	堆積土	鉄釉	擂鉢	(26.2)	(8.7)		櫛目は1単位16本。
69		堆積土	鉄釉	擂鉢	(27.1)	(6.1)		口縁部内面に凹みあり。櫛目は1単位11本
70	70	堆積土	鉄釉	擂鉢	(27.5)	(9.8)		櫛目は1単位16本。
71		堆積土	鉄釉	擂鉢	(27.7)	(9.0)		櫛目は1単位8本以上。
72		堆積土	鉄釉	擂鉢	(28.4)	12.7	(11.2)	底部内面に刷目あり。櫛目は1単位14本以上。
73		堆積土	鉄釉	擂鉢	(33.4)	11.1	(10.0)	外面に一部ボロが付着。底部内面付近にトチンが溶着。櫛目は1単位13~15本。
74		堆積土	鉄釉	擂鉢	—	(9.9)	(10.2)	櫛目は1単位12本。底部内面にも櫛目あり。内面にボロがわずかに付着。
75		堆積土	鉄釉	茶入	(3.2)	(5.6)		胴部最大径 (6.4)。
76	76	堆積土	灰釉	茶入	—	(6.1)	(4.3)	外面にヘラケズリの痕。
77	77	堆積土	鉄釉	茶入	(5.2)	(3.7)		胴部最大径 (10.9)。
78	78	堆積土		壺	(8.7)	(8.3)		発色不良だが、灰釉か。
79	79	堆積土	灰釉	香炉	(5.9)	7.8	5.5	
80		堆積土	灰釉	香炉	(7.5)	(6.3)		
81		堆積土	灰釉	香炉	(8.3)	6.3	(5.3)	
82		堆積土	灰釉	香炉	(6.1)	(4.4)		内外面に一部ボロが付着。
83	83	堆積土	鉄釉	水指・建水	—	(10.2)	(12.6)	内外面に施釉。外面に他の陶器片のはがれ痕。
84	84	堆積土	鉄釉	水指・建水	—	(7.9)	(11.6)	
85	85	堆積土	灰釉	徳利	(4.1)	(4.6)		黄瀬戸の徳利か。
86		堆積土	鉄釉	徳利	(4.5)	(8.6)		
87		堆積土	鉄釉	徳利	(4.8)	(7.8)		
88	88	堆積土	鉄釉	徳利	(4.9)	(5.0)		
89		堆積土	鉄釉	徳利	—	(4.3)	6.7	
90		堆積土	鉄釉	徳利	—	(3.2)	5.8	焼成中にゆがんだと思われる。
91	91	堆積土	鉄釉	徳利	—	(5.2)	(8.0)	
92	92	堆積土	灰釉	徳利	—	(4.8)	7.7	
93		堆積土	鉄釉	徳利	—	(5.7)	(7.5)	外面にボロがわずかに付着。
94		堆積土	鉄釉	徳利	—	(10.0)		胴部最大径 (11.4)。内面と断面に自然釉がかかるため、焼成中に割れたと考えられる。
95	95	堆積土	窯道具	匣鉢	(9.2)	4.3	(6.2)	底部外面に回転糸切痕。
96	96	堆積土	窯道具	輪ドチ	2.4×3.0×2.5			
97	97	堆積土	窯道具	団子トチ	2.8×3.0×2.1			

表 11 牟田洞5 トレンチ遺物観察表 2

## 第5節 過去採集資料 図75～82

昭和5年に荒川豊蔵が牟田洞古窯跡で志野の陶片を発見し、昭和7年にこの地に居を構えて以降、牟田洞古窯跡では敷地内での採集や庭などの整備が行われており、種々多数の焼成品が出土している。

平成元年発行の『(財)豊蔵資料館研究紀要1』の中で、齊藤基生が豊蔵が採集した過去の資料(荒川豊蔵資料館所蔵)の紹介を行っており、許可を得てそれらの資料図面を再トレースし掲載する。それに合わせ、遺物写真も撮り直した。また、『可児市史』第1巻(通史編)考古・文化財の中で紹介されている資料の一部や未報告の資料も加え、合計170点を掲載する。遺物のレイアウトについて、紀要では図面の左側に写真が掲載されているが、断面図の位置にあわせ、外面の写真は右側に掲載した。

遺物の詳細説明は、『(財)豊蔵資料館研究紀要1』や『可児市史』第1巻に記載されているため、本書では図面と写真、観察表のみを掲載する。観察表には、前掲の文献に掲載されている頁と番号も掲載し、遺物の並び順は『紀要1』の順を尊重するとともに、その後に『市史』の掲載資料、未報告の資料を置いている。なお、遺物の名称は基本的に紀要の記載のものを使用するが、一部は本報告と整合性をとっている。



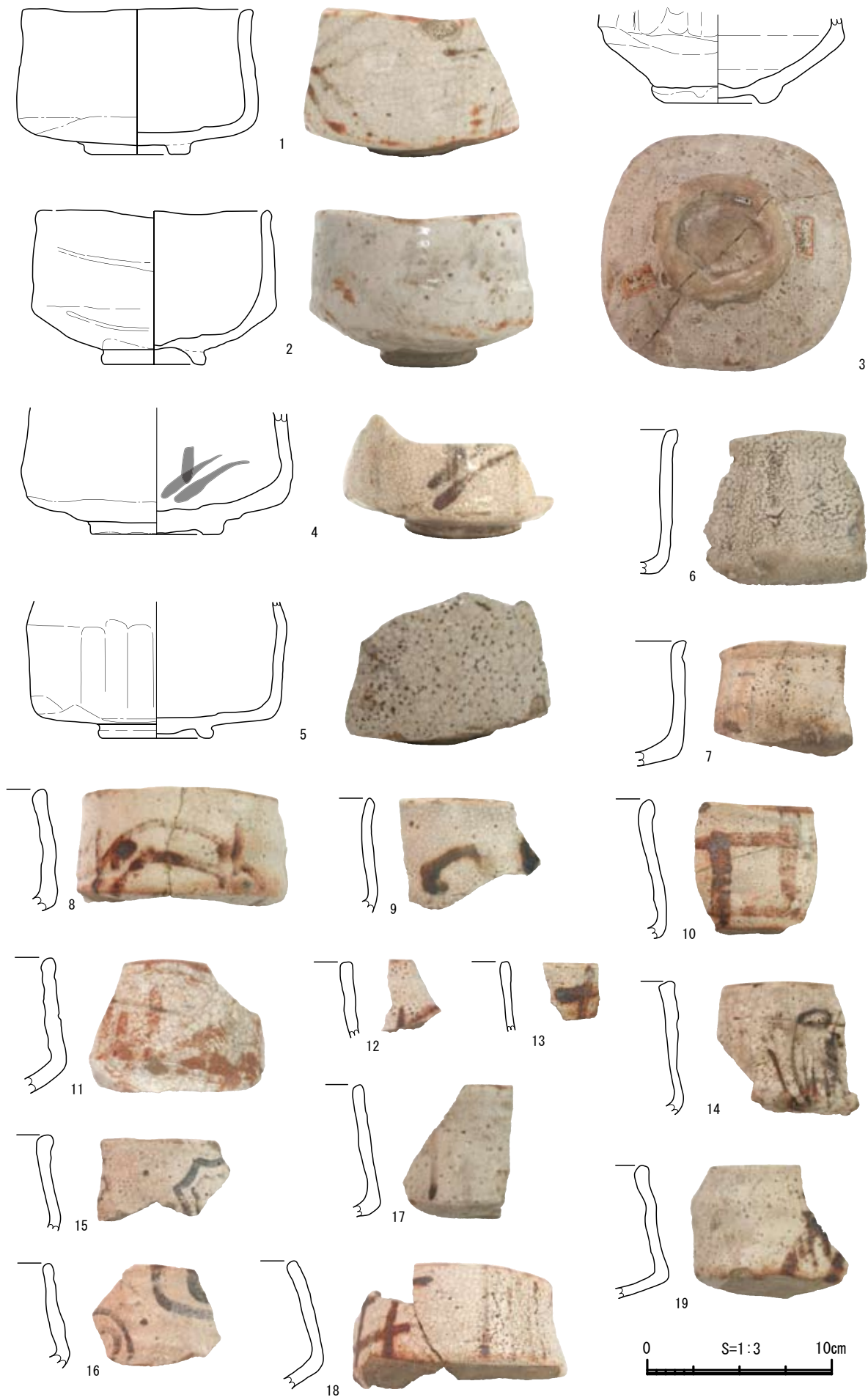


图 75 牟田洞過去採集遺物 1 (S=1/3)



图 76 牟田洞過去採集遺物 2 (S=1/3)

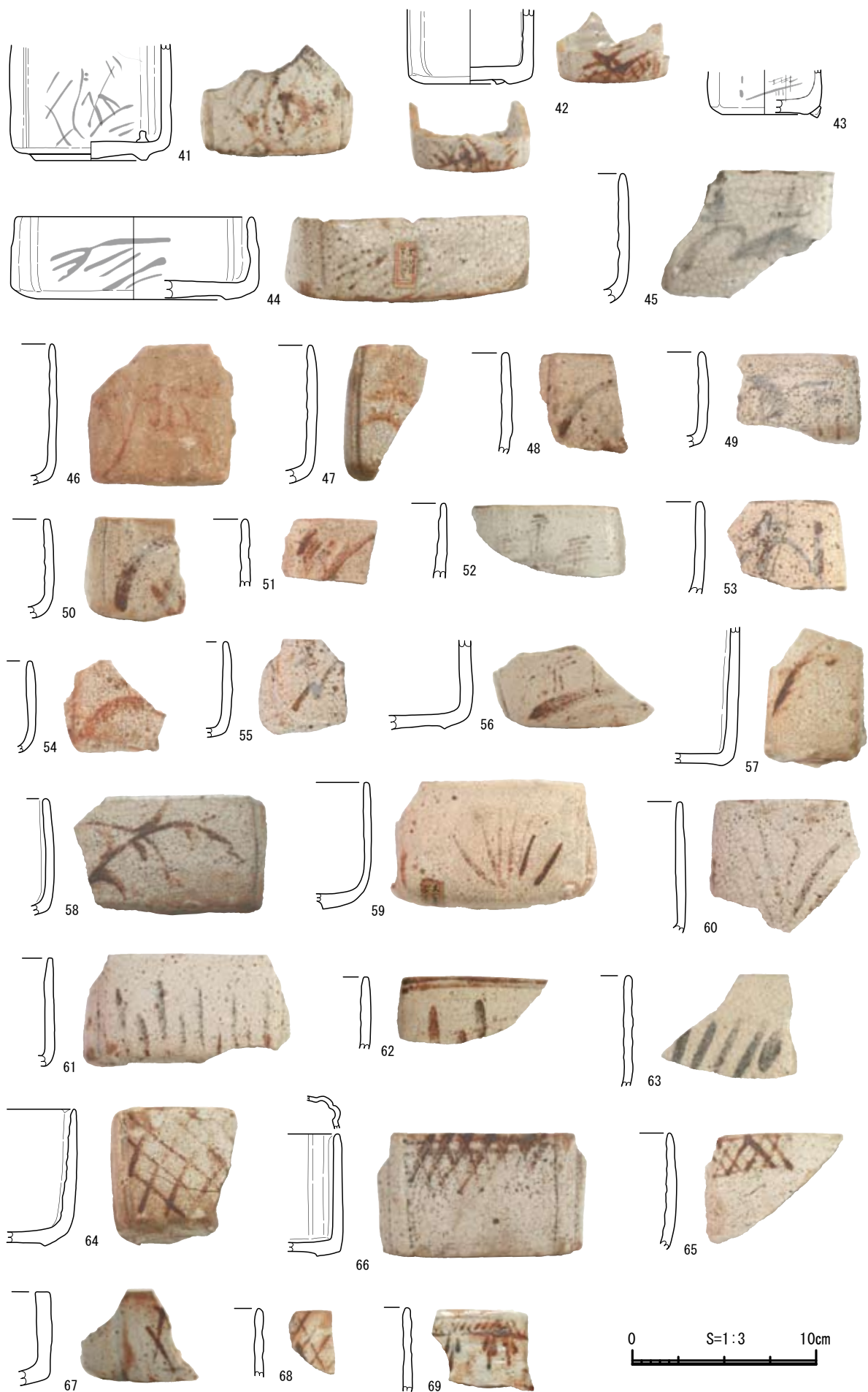


图 77 牟田洞過去採集遺物 3 (S=1/3)



图 78 牟田洞過去採集遺物 4 (S=1/3)



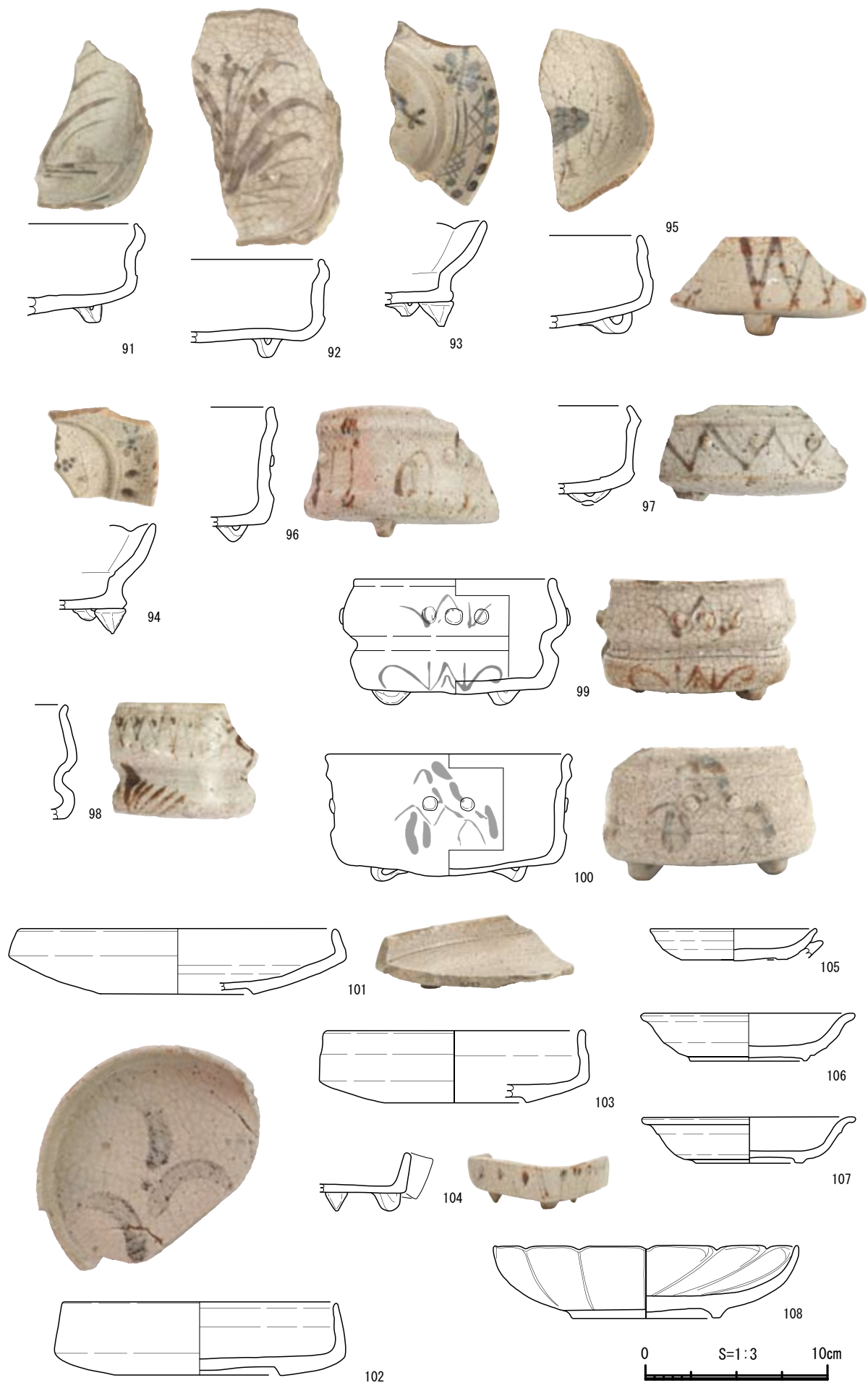


图 79 牟田洞過去採集遺物 5 (S=1/3)

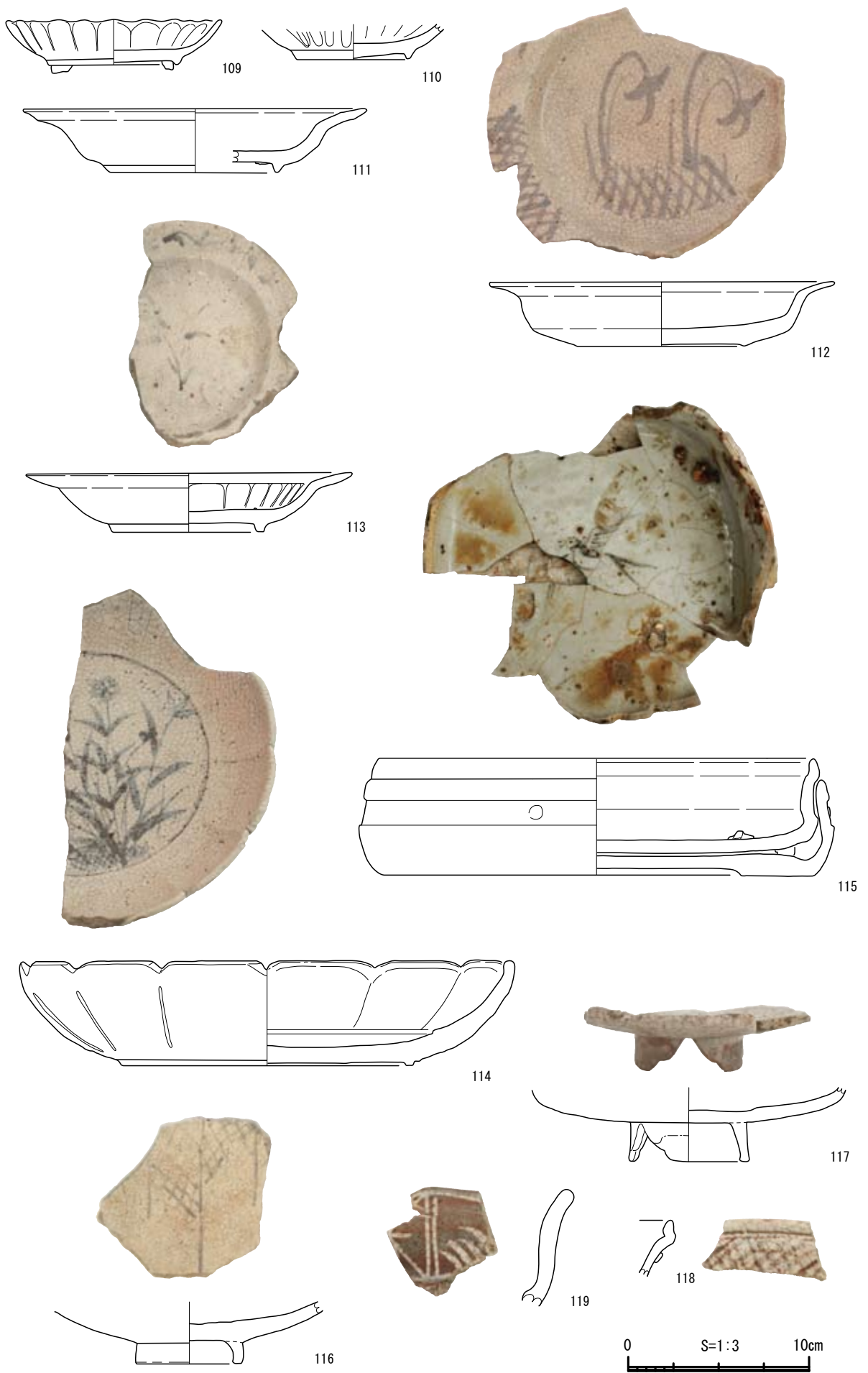


图 80 牟田洞過去採集遺物 6 (S=1/3)

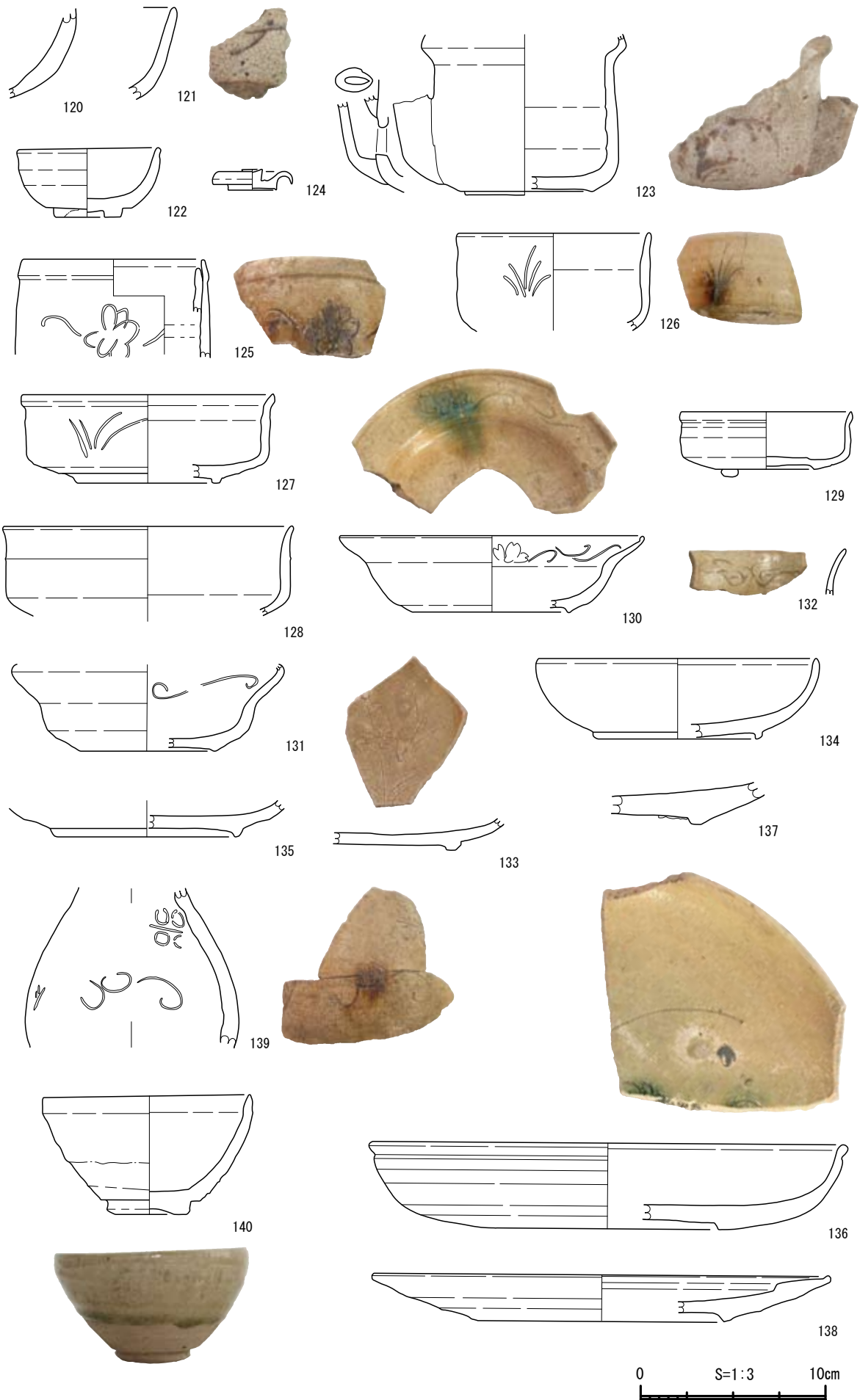


图 81 牟田洞過去採集遺物 7 (S=1/3)



图 82 牟田洞過去採集遺物 8 (S=1/3)



番号	釉薬等	器種	口径	器高	底部	備考	掲載番号
1	(志野)	茶碗	(12.5)	(7.9)	5.2	外面に下絵あり。付高台の可能性あり。底部はヘラケズリ調整。底部内面に円錐ビン痕が3カ所。	紀18頁 1
2	(志野)	茶碗	(12.5)	8.0	5.1~5.6	外面に下絵あり。底部はヘラケズリ後、付高台。底部内面に円錐ビン痕が1カ所。	紀18頁 2
3	(志野)	茶碗	13.0×13.0	(5.2)	6.7~7.4	外面に下絵あり。隅丸方形を呈し、高台は削り出し後ナデ。	紀18頁 3
4	(志野)	茶碗	—	(6.5)	7.0	外面に下絵あり。高台は削り出して二重高台風、ヘラ記号あり。底部内面に円錐ビン痕が1カ所。	紀18頁 4
5	(志野)	茶碗	—	(9.4)	(14.2)	外面に下絵あり。胴部、底部ヘラケズリ調整。高台は削り出し後ナデ。	紀18頁 5
6	(志野)	茶碗	—	(7.8)	—	外面に下絵あり。	紀18頁 6
7	(志野)	茶碗	—	(6.8)	—	外面に下絵あり。底部ケズリ調整。	紀18頁 7
8	(志野)	茶碗	13.0~14.0	(6.5)	—	外面に下絵(住吉手)あり。	紀18頁 8
9	(志野)	茶碗	—	(6.0)	—	鉄絵は釉の上に描かれ、流れている。	紀18頁 9
10	(志野)	茶碗	—	(7.5)	—	外面に下絵あり、卯花塙と同一手法。	紀18頁10
11	(志野)	茶碗	—	(7.2)	—	外面に下絵(草文?)あり。ロクロ後ケズリ調整。	紀18頁11
12	(志野)	茶碗	—	(4.2)	—	外面に下絵(住吉手の橋)あり。	紀18頁12
13	(志野)	茶碗	—	(3.8)	—	外面に下絵あり。	紀18頁13
14	(志野)	茶碗	—	(7.2)	—	外面に下絵(草花文)あり。	紀18頁14
15	(志野)	茶碗	—	(5.1)	—	外面に下絵(亀甲風)あり。	紀18頁15
16	(志野)	茶碗	—	(5.8)	—	外面に下絵(重圍文風)あり。	紀18頁16
17	(志野)	茶碗	—	(7.0)	—	外面に下絵あり。	紀18頁17
18	(志野)	茶碗	—	(7.0)	—	外面に下絵(格子目と平行縦線)あり。底部ケズリ調整。	紀22頁 1
19	(志野)	茶碗	—	(7.1)	—	外面に下絵(住吉手)あり。底部ヘラケズリ調整。	紀22頁 2
20	(志野)	茶碗	—	(6.0)	—	外面に下絵あり。	紀22頁 3
21	(志野)	茶碗	—	(4.9)	—	外面に下絵あり。	紀22頁 4
22	(志野)	茶碗	—	(6.9)	—	底部ヘラケズリ調整。	紀22頁 5
23	(志野)	茶碗	—	(7.1)	—	内外面に下絵あり。底部ヘラケズリ調整。	紀22頁 6
24	(志野)	茶碗	—	(6.1)	—	外面に下絵あり。胴部下半ヘラケズリ調整。	紀22頁 7
25	(志野)	茶碗	—	(5.6)	—	外面に下絵(波状)あり。	紀22頁 8
26	(鼠志野)	茶碗	—	(6.1)	—	—	紀22頁 9
27	(志野)	茶碗	—	(6.2)	—	内外面(外面 斜格子)に下絵あり。高台は削り出し後、ナデ。	紀22頁10
28	(志野)	茶碗	—	(2.4)	—	外面に下絵あり。	紀22頁11
29	(志野)	茶碗	—	(3.6)	—	赤志野風で掻落としにより文様が描かれる。底部はヘラケズリ調整。	紀22頁12
30	(志野)	茶碗	—	(2.8)	6.7	高台は削り出し後ナデで二重高台風、三角形のヘラ記号あり。灰釉丸皿が内面に一部溶着。	紀22頁13
31	(志野)	茶碗	—	(3.0)	4.8	底部内面に下絵あり。付高台で丸十のヘラ記号あり。	紀22頁14
32	(志野)	茶碗	—	(2.1)	6.8	高台は削り出し後ナデ。底部内面に円錐ビン痕が3カ所。	紀22頁15
33	(志野)	茶碗	—	(2.4)	6.7	高台は削り出し後ナデ、二重高台風。	紀22頁16
34	(志野)	茶碗	—	(4.4)	5.5	高台は削り出し後ナデ。内面に3カ所の目痕。	紀22頁17
35	(志野)	天目茶碗	(12.0)	(6.0)	(5.0)	外面に下絵あり。内面は口縁部内面のみ長石釉をかけ、鉄釉を重ねるようにかける。	紀22頁18
36	(志野)	天目茶碗	(11.0)	(5.0)	(3.5)	削り出し高台。	紀22頁19
37	(志野)	天目茶碗	(12.0)	(4.8)	—	昭和51年出土と注記。	紀22頁20
38	(志野)	向付	(12.0)	6.3	4.2	隅入四方、ロクロ後型打ち整形。底部内面に円錐ビンらしき目跡。	紀24頁 1
39	(志野)	向付	(9.8)	5.3	3.3	外面に下絵(草様、山に松)あり。隅入四方、ロクロ後型打ち整形。底部内外面にビン痕。	紀24頁 2
40	(志野)	向付	8.8	7.6	6.0	外面に下絵(斜格子、かたくりの花?)あり。隅入四方、ロクロ後型打ち整形。内面に布目がみられ、底部内面に溶着した部分がある。底部外面に輪ド子痕。	紀24頁 3
41	(志野)	向付	—	(6.3)	6.1	外面に下絵(草文?)あり。隅入四方、ロクロ後型打ち整形。底部内面に円錐ビン痕が3カ所。	紀24頁 4
42	(志野)	向付	—	(4.0)	4.2	外面に下絵あり。隅入四方、ロクロ後型打ち整形。底部内面に円錐ビン痕が3カ所、外面にトチン痕。	紀24頁 5
43	(志野)	向付	—	(2.4)	(3.1)	外面に下絵(草文と山に松)あり。四方。底部外面に円錐ビンが1つ溶着。	紀24頁 6
44	(志野)	向付	(13.5)	4.5	(5.0)	外面に下絵(草文)あり。隅入四方。底部外面に輪ド子痕。	紀24頁 7
45	(志野)	向付	—	(7.0)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁 8
46	(志野)	向付	—	(7.6)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁 9
47	(志野)	向付	—	(7.5)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁10
48	(志野)	向付	—	(5.5)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁11
49	(志野)	向付	—	(5.2)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁12
50	(志野)	向付	—	(5.4)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁13
51	(志野)	向付	—	(3.6)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方と思われ、外面に沈線様の凹みあり。	紀24頁14
52	(志野)	向付	—	(4.0)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁15
53	(志野)	向付	—	(5.0)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁16
54	(志野)	向付	—	(5.0)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁17
55	(志野)	向付	—	(5.2)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。	紀24頁18
56	(志野)	向付	—	(4.8)	—	外面に下絵(山に松)あり。隅入四方。底部外面に輪ド子痕。	紀24頁19
57	(志野)	向付	—	(7.5)	—	外面に下絵(草文)あり。隅入四方。底部外面に輪ド子痕、外面に重ね焼きの溶着痕。	紀24頁20
58	(志野)	向付	—	(6.4)	—	外面に下絵(草文)あり。隅入四方。底部外面に輪ド子痕、内外面に重ね焼きの溶着痕。	紀24頁21
59	(志野)	向付	—	6.9	—	外面に下絵(草文)あり。隅入四方。底部外面に輪ド子痕。	紀24頁22
60	(志野)	向付	—	(7.1)	—	外面に下絵(草文)あり。隅入四方。内面に布目がみられる。	紀24頁23
61	(志野)	向付	—	(5.9)	—	外面に下絵(草文?)あり。隅入四方。	紀24頁24
62	(志野)	向付	—	(3.9)	—	外面に下絵(2本の横線、草文)あり。	紀24頁25
63	(志野)	向付	—	(6.0)	—	外面に下絵(草文?)あり。	紀24頁26
64	(志野)	向付	—	(7.4)	—	外面に下絵(斜格子、草文?)あり。隅入四方。	紀28頁 1
65	(志野)	向付	—	(6.4)	—	外面に下絵(斜格子)あり。隅入四方。	紀28頁 2
66	(志野)	向付	—	6.6	—	外面に下絵(斜格子)あり。隅入四方。底部外面に輪ド子痕。	紀28頁 3
67	(志野)	向付	—	(5.1)	—	外面に下絵(斜格子)あり。隅入四方か、向付でない可能性あり。	紀28頁 4
68	(志野)	向付	—	(3.7)	—	外面に下絵(斜格子)あり。隅入四方。	紀28頁 5
69	(志野)	向付	—	(4.6)	—	外面に下絵(2本の横線、斜格子、しずく様)あり。隅入四方。	紀28頁 6
70	(志野)	向付	—	(5.4)	—	外面に下絵(亀甲文)あり。隅入四方。	紀28頁 7
71	(志野)	向付	—	(5.1)	—	外面に下絵あり。隅入四方。内面に布目がみられる。	紀28頁 8
72	(志野)	向付	—	(5.7)	—	外面に下絵あり。隅入四方。	紀28頁 9
73	(志野)	向付	—	(3.5)	—	外面に下絵あり。四方。	紀28頁10
74	(志野)	向付	—	(4.0)	—	外面に下絵(2本の平行線の組み合わせ)あり。隅入四方。	紀28頁11
75	(志野)	向付	—	(5.7)	—	外面に下絵(丸を串刺し)あり。隅入四方。	紀28頁12
76	(志野)	向付	—	2.7	—	外面に下絵(丸と線の組み合わせ)あり。隅入四方。底部外面に輪ド子痕。	紀28頁13
77	(志野)	向付	—	(4.3)	—	外面に下絵(住吉手)あり。隅入四方。	紀28頁14
78	(鼠志野)	向付	—	(3.6)	—	刻線が象嵌。隅入四方。	紀28頁15
79	(志野)	向付	—	(5.6)	—	外面に下絵(草文)あり。隅入四方。底部内面に円錐ビン痕、外面に輪ド子痕。	紀28頁16
80	(志野)	向付	—	(6.0)	—	外面に下絵(斜線、松)あり。隅丸四方。内面に溶着痕。	紀28頁17
81	(志野)	向付	—	(4.7)	—	外面に下絵あり。隅丸四方。播座は2個1組で配する。	紀28頁18
82	(志野)	向付	—	(6.7)	—	外面に下絵あり。筒形で、削り出し高台。推定胴部径9.2cm、胴紐が巡る。	紀28頁19
83	(志野)	向付	—	(3.8)	—	外面に下絵(斜格子)あり。筒形。	紀28頁20
84	(志野)	向付	—	(4.9)	6.4	外面に下絵(草、花)あり。隅丸四方、腰部は突帯風に削り出し。底部内面に円錐ビン痕が3カ所。	紀28頁21
85	(志野)	向付	—	(6.0)	6.6	外面に下絵(菊、山に松、玉川と同じ文様構成)あり。筒形。底部内面に円錐ビン痕が3カ所。	紀28頁22
86	(志野)	向付	(8.0)	9.0	7.2	外面に下絵(草文)あり。筒形で削り出し高台。	紀28頁23
87	(志野)	向付	(8.4)	7.8	6.1	外面に下絵あり。筒形で削り出し高台。底部内面に円錐ビン痕が2カ所、外面に輪ド子痕。	紀28頁24
88	(志野)	向付	(11.0)	7.1	(8.4)	外面に下絵(斜格子)あり。筒形で削り出し高台。底部内面に円錐ビン痕が1カ所、外面に輪ド子痕。	紀28頁25

表 12 牟田洞過去採集遺物観察表 1

番号	釉薬等	器種	口径	器高	底部	備考	掲載番号
89	(志野)	向付	(9.8)	5.5	(6.0)	外面に下絵(斜格子、草文?)あり。筒形で削り込み高台。底部外面に円錐ビンが1カ所溶着。	紀28頁26
90	(志野)	向付	(16.0)	(4.8)		内面に下絵(胴部に平行線と斜格子、底部に流水、あやめ?)あり。脚付四方、脚は3カ所に付く。口縁部外面には3個1単位の播座あり。内面に他の陶器片が溶着し、底部に円錐ビン痕が2カ所。	紀34頁 1
91	(志野)	向付	—	5.3		内面に下絵(胴部に平行線と斜格子、底部に流水、あやめ?)あり。脚付四方。	紀34頁 2
92	(志野)	向付	—	5.4		内面に下絵(胴部に平行線と斜格子、底部に流水、あやめ?)あり。脚付四方。底部内面に円錐ビン痕が2カ所、外面に溶着痕があり、3段重ね焼きされている。	紀34頁 3
93	(志野)	向付	—	5.2		内面に下絵(点と線)あり。脚付。底部内面に円錐ビン痕が1カ所、外面に円錐ビンが1つ溶着。	紀34頁 4
94	(志野)	向付	—	5.3		内面に下絵(点、花か?)あり。脚付。底部内面に円錐ビン痕が1カ所、外面に円錐ビンが1つ溶着。	紀34頁 5
95	(志野)	向付	—	5.4		下絵が内面(草文?)と胴部外面(銘文?)にあり。脚付。底部外面に溶着痕。	紀34頁 6
96	(志野)	向付	—	7.3		胴部外面に下絵あり。脚付隅丸四方、外面に播座あり。	紀34頁 7
97	(志野)	向付	—	(5.2)		胴部外面に下絵(銘文?)あり。脚付。外面に3点1単位の播座あり。	紀34頁 8
98	(志野)	向付	—	(6.3)		胴部外面に下絵(線描き)あり。脚付隅丸四方、外面に播座あり。内面に溶着痕あり。	紀34頁 9
99	(志野)	向付	(11.0)	6.8		胴部外面に下絵(四面とも同じ草文?)あり。脚付隅丸四方、脚は3カ所につく。3点1単位の播座が各辺につく。底部内面に円錐ビン痕が3カ所。	紀34頁10
100	(志野)	向付	(13.5)	7.0		外面に下絵あり。脚付隅丸四方。脚は4カ所につく。外面に2点1単位の播座がつく。	紀34頁11
101	(志野)	向付	(17.0)	3.6	(8.4)	削り込み高台。底部外面に溶着痕。	紀34頁12
102	(志野)	向付	(15.0)	4.0	9.0	内面に下絵(草文?)あり。脚付。底部内面に円錐ビン痕が2カ所、外面に輪ド子痕。	紀34頁13
103	(志野)	向付	(14.0)	4.0	(7.8)	削り込み高台。	紀34頁14
104	(鼠志野)	向付	—	(3.2)		脚付扇形。底部外面に円錐ビンが2つ溶着。	紀34頁15
105	(志野)	丸皿	(9.0)	1.7	5.8	削り込み高台。底部外面に他の陶器片が溶着。底部外面には円錐ビン痕が3カ所。	紀37頁 1
106	(志野)	端反皿	(11.8)	2.4	5.9	削り出し高台。底部内面に円錐ビン痕が2カ所、外面には輪ド子痕。	紀37頁 2
107	(志野)	端反皿	(11.8)	2.6	6.4	削り出し高台。胴部はヘラケズリ調整。	紀37頁 3
108	(志野)	菊花形皿	(16.8)	4.0	8.0	削り出し高台。外面ヘラケズリ後沈線を施し、内面を丸彫り。底部外面に輪ド子痕。	紀37頁 4
109	(志野)	菊花形皿	(12.0)	2.5	7.2	削り出し高台。外面に沈線を施し、内面を丸彫り。底部外面に輪ド子痕が一部溶着。	紀37頁 5
110	(志野)	菊花形皿	—	1.9	6.2	削り出し高台。外面に沈線を施し、内面を丸彫り。底部内面に円錐ビン痕が3カ所、外面に輪ド子痕。	紀37頁 6
111	(志野)	中皿	(19.0)	3.5	9.2	削り出し高台。稜の外周に線描きがある。底部外面に円錐ビン痕が1カ所、口縁部内面にトチンが溶着。	紀37頁 7
112	(志野)	折縁皿	(19.0)	5.6	9.2	内面に下絵(斜格子、花)あり。削り込み高台。底部外面に置き土痕が3カ所。大窯製品か疑問あり。	紀37頁 8
113	(志野)	折縁皿	(18.0)	3.3	8.3	内面に下絵(つる草、草文)あり。削り出し高台、内面を丸彫り。内面に溶着痕、高台に輪ド子痕。	紀37頁 9
114	(志野)	菊花形大皿	(27.2)	5.8	16.0	内面に下絵(草花文)あり。削り出し高台、内面を丸彫り。底部外面に置き土痕が3カ所。	紀37頁10
115	(志野)	大鉢	上(24.0) 下(24.2)	上5.2 下5.4	下8.0	内面に下絵(ツバメ)あり。二個体が溶着し、上の鉢は円柱状の脚が3~4個あり、底部内面に置き土痕が3カ所。溶着資料であるが、生地の色や釉調が異なる。	紀37頁11
116	(志野)	盤?	—	3.4	5.8	内面に下絵あり。付高台。ロク口後ヘラケズリ	紀37頁12
117	(志野)	盤?	—	(4.2)	6.3	内面に下絵あり。付高台。ロク口後ヘラケズリ	紀37頁13
118	(志野)	向付?	—	(3.1)		内面に下絵(斜格子)あり。外面に2点の播座。	紀37頁14
119	(鼠志野)	鉢?	—	(6.5)		内外面に象嵌あり。	紀37頁15
120	(志野)	丸碗?	—	(5.9)		下絵が内面(斜格子)、外面(線)あり。	紀37頁16
121	(志野)	小碗	—	(5.0)		外面に下絵あり。	紀37頁17
122	(志野)	小天目茶碗	7.6	3.7	3.6	削り出し高台。	紀37頁18
123	(志野)	汁次	—	(8.4)	7.2	底部外面に板状?のトチンが一部溶着。	紀37頁19
124	(志野)	茶入蓋	—	(1.2)	4.4	受部径4.3cm。	紀37頁20
125	(黄瀬戸)	向付	(10.0)	(5.2)		胴部外面に線刻(花とつる)あり。内面に向付の一部が溶着し、鉄釉が飛ぶ。	紀40頁 1
126	(黄瀬戸)	向付	(10.4)	(5.3)		胴部外面に線刻、胆礬。	紀40頁 2
127	(黄瀬戸)	向付	(13.8)	4.8	(7.7)	胴部外面に線刻、胆礬。	紀40頁 3
128	(黄瀬戸)	向付	(17.6)	(4.8)		胴紐が一条巡る。「昭和19年5月出土」の注記。	紀40頁 4
129	(黄瀬戸)	向付	(9.2)	3.1	5.4	底部外面に置き土が2点溶着。	紀40頁 5
130	(黄瀬戸)	鉢	(16.7)	4.1	(8.5)	口縁部内面に線刻、胆礬。	紀40頁 6
131	(黄瀬戸)	鉢	(15.6)	4.6	(7.3)	「昭和54年3月10日 大萱牟田洞入口墓」の注記。	紀40頁 7
132	(黄瀬戸)	鉢	—	(4.7)	(7.4)	口縁部内面に線刻あり、胆礬は発色不良。内面に溶着痕。	紀40頁 8
133	(黄瀬戸)	皿類	—	(1.6)	11.0	底部内面に線刻、胆礬あり。削り出し高台。底部内面に小石が2カ所、外面に輪ド子痕が溶着。	紀40頁 9
134	(黄瀬戸)	鉢	(15.2)	4.4	(4.2)	底部内面に線刻、胆礬あり。削り出し高台。底部外面に輪ド子痕。	紀40頁10
135	(黄瀬戸)	皿類	—	(1.6)	(9.6)	底部内面に線刻あり。削り出し高台。	紀40頁11
136	(黄瀬戸)	鉢(大皿)	(26.0)	4.7	6.0	底部内面に線刻、胆礬あり。「大萱無田洞出土46・2・8」の注記。	紀40頁12
137	(黄瀬戸)	大皿?	—	(2.2)		底部内面に線刻あり。削り込み高台。底部内面にボロが付着し、置き土が2カ所残る。	紀40頁13
138	(黄瀬戸)	大皿	(24.8)	2.6	13.2	生焼けてあり、発色不良。	紀40頁14
139	(黄瀬戸)	徳利	—	(8.6)		胴部最大径(11.8)。胴部外面に線刻、1カ所に鉄釉がうたれる。	紀40頁15
140	(灰釉)	天目茶碗	(11.2)	6.4	3.8		紀40頁16
141	(灰釉)	筒茶碗?	—	(4.8)	(6.0)	高台は削り出しで、二重高台風。内外面釉なし。「昭和33年秋 牟田洞」の注記。	紀40頁17
142	(灰釉)	茶入	(6.8)	(6.0)			紀40頁18
143	(灰釉)	火入?	(7.4)	5.6	(5.8)	「昭和57年3月11日 大萱牟田洞左高段出土」の注記あり。	紀40頁19
144	(灰釉)	丸皿	(6.8)	1.6	3.6	削り出し高台。	紀40頁20
145	(灰釉)	小杯	(5.8)	2.4	2.8	削り出し高台。	紀40頁21
146	(灰釉)	茶入蓋	—	1.6		最大径4.2。落とし部は削り出し。	紀40頁22
147	(灰釉)	折縁皿	(11.2)	2.0	4.8	内ハゲ。内面に三連弧風の印花文。削り込み高台。底部内外面に輪ド子痕が溶着。	紀45頁 1
148	(灰釉)	折縁皿	(10.5)	2.1	5.7	内ハゲ。ソギ入り。底部内面に菊の印花。削り出し高台。底部外面に輪ド子痕が溶着。	紀45頁 2
149	(灰釉)	折縁皿	(11.4)	2.1	(6.4)	内ハゲ。削り込み高台。底部外面に輪ド子痕が2段溶着。	紀45頁 3
150	(灰釉)	折縁皿	(11.0)	2.0	5.6	削り出し高台。発色不良。	紀45頁 4
151	(灰釉)	融着資料	—	—	—	丸皿と折縁皿、3枚が輪ド子とともに溶着。丸皿は波状文と印花。	紀45頁 5
152	(灰釉)	内壳皿	(14.0)	2.7	(6.4)	ソギ入り。削り出し高台。	紀45頁 6
153	(灰釉)	内壳皿	13.0	2.6	7.5	削り出し高台。底部内面に輪ド子痕。	紀45頁 7
154	(灰釉)	内壳皿	(15.2)	3.1	(8.2)	外面に他の陶片、底部外面に輪ド子痕が溶着。	紀45頁 8
155	(灰釉)	菊花形皿	(17.8)	3.5	(9.8)	削り出し高台。底部内面にビン痕が1カ所あり、外面に板状の輪ド子痕が溶着。	紀45頁 9
156	(瀬戸黒)	筒茶碗	11.8	9.8~10.5	6.0	削り出し高台。内面に重ね焼きの痕あり。	紀45頁10
157	(瀬戸黒)	筒茶碗	9.8~14.3	7.3~8.1	4.1	削り出し高台。焼成時に歪んでいる。底部内面に重ね焼きの痕。	紀45頁11
158	(瀬戸黒)	筒茶碗	13.6	6.0	4.4	削り出し高台。焼成時に歪んでいる。底部内面に重ね焼きの痕。	紀45頁12
159	(瀬戸黒)	筒茶碗	—	(4.0)	5.8	底部、高台は削り出し。鉄釉の上に透明釉を重ねかけ、引き出されていない可能性あり。	紀45頁13
160	(瀬戸黒)	筒茶碗	—	(2.0)	6.2	底部、高台は削り出し。発色不良。	紀45頁14
161	(瀬戸黒)	筒茶碗	—	(3.0)	4.9	底部、高台は削り出し。発色不良。外面にボロが付着。	紀45頁15
162	(鉄釉)	茶入	—	(3.2)	3.2	底部を鋭くヘラケズリ。底部外面に回転糸切痕あり。発色不良。	紀45頁16
163	(鉄釉)	茶入	—	(1.6)	4.0	底部外面に回転糸切痕。底部外面に輪ド子痕あり。	紀45頁17
164	(鉄釉)	茶入	—	(5.0)	5.0	胴部、腰部をヘラケズリ。底部外面に回転糸切痕。	紀45頁18
165	(鉄釉)	茶入	—	(4.4)	(4.5)	焼成時にゆがんでいる。底部外面に回転糸切痕。	紀45頁19
166	(鉄釉)	茶入	—	(6.2)	(4.3)	底部外面に回転糸切痕。	紀45頁20
167	(鉄釉)	茶入	(3.1)	7.6	4.7	美濃唐津風。底部外面に回転糸切痕。	市図76の1
168	(鉄釉)	茶入	(3.3)	(6.9)	(6.5)	胴部に縦方向のケズリがみられ、口縁部はややひずむ。	豊246
169	(鉄釉)	茶入	(3.7)	(5.0)	(5.8)	口縁部付近のみ灰釉がかかる。	豊249
170	(鉄釉)	向付	(5.6)	3.5	(4.3)	削り出し高台。内面に灰釉も一部かかる。	豊248

紀は豊蔵資料館研究紀要、市は可見市史、豊は未掲載で荒川豊蔵の注記番号を記す。

表 13 牟田洞過去採集遺物観察表 2

## 第4章 大萱窯下古窯跡

### 第1節 踏査 図83

平成24年度に牟田洞古窯跡と同様、愛知学院大学とともに現地踏査を行った。踏査の概要をここで述べるが、ここで載せるアルファベットは地表観察によって確認した場所であり、牟田洞古窯跡と同様、平成25・26年度のトレンチ調査の位置とは必ずしも一致していない。

踏査により3カ所の窯跡らしき凹み（A～C）が確認できた。A地点は、焼成室付近と思われる硬化した床面が露出し、窯の存在を確認した。現在露出している床面より下方（燃烧室や焚口付近）は、その傾斜から見ると崩壊し流れていることが想定された。窯壁の露出はみられない。

B地点は、窯体の露出はみられないが、凹みは尾根の突端にみられ、かつその下に遺物が多く散乱している状況により窯体の可能性が考えられた。

C地点は、なだらかな谷地形の凹みとなるが、この下には多くの窯道具の破片が落ちている。A地点及びB地点と比べ、窯体である可能性は低い。

遺物の散布範囲は、現在のフェンスの中に加え東側の川付近までみられる。フェンスから川の間までは、製品に比べ匣鉢などの窯道具の破片が多くみられ、東西の遺物分布範囲は約100mとなる。南北の範囲は、南側（尾根側）はほぼフェンス内、北側（谷側）はフェンスより北側の平坦面付近までである。

平坦面は、窯より下方の部分と上側に2カ所がみられた（D・E）。D地点は、窯体が想定される部分の尾根側になり、良好な平坦面がみられる。同時期の窯跡では、窯体よりも尾根側で工房跡等の作業場の検出例があるため、作業場である可能性が考えられた。E地点は、平坦面とともに凹凸がみられる。人為的な盛土と斜面からの流れ込みによって、形成されたと考えられる。窯跡当該期の所産ではない可能性が高いと思われた。

### 表採遺物 図84・85

表採は、主に2基の窯の下で採集が行え、窯の東側及び西側には製品ではなく窯道具が多くみられた。

#### 碗類

1～8は、天目茶碗である。1はS字状口縁となり、2～5は口唇部が直立気味で立ち上がり、口縁部が外反するもの（2・3）とそのまま直立するもの（4・5）がみられる。7・8は志野天目茶碗であり、口縁部はほぼ直立する。9・10は小杯で、9は体部から直線的に立ち上がり、口縁部付近で直立し端部は丸く収める。10は高台のみであり、付高台である。11・12は瀬戸黒筒形碗である。両者とも体部は直線的であり、口縁部はやや外傾する。33は志野茶碗である。口縁部は肥厚し、丸く収める。外面にはわずかに鉄絵がみられる。13・14は志野の碗類の底部であり、高台は削り出し高台である。13は内面にトチンが溶着する。

#### 皿類

15は丸皿であり、内面に他の陶器片が一部溶着している。発色不良により釉薬は不明であるが、内外面に「才」の窯記号が彫られる。製品に記号がみられるのは、この1点のみである。16・17は内禿皿である。16は体部から口縁部にかけて直線的であり、17は丸みをもって立ち

上がる。18は灯明皿であり、内面に3条の凸線が同心円状に巡る。無釉であり褐色を呈す。19は輪禿皿であり、輪禿部分が一段張り出し、体部は丸みをもって立ち上がる。20～22は端反皿であり、長石釉が施される。高台は削り出しと削り込みがみられ、体部下方が丸みをもって立ち上がり、口縁部を水平に引き出す。22は、底部外面に円錐ピンが1つ溶着している。23・24は折縁皿であり、削り込み高台で扁平な器形である。24は底部外面に輪ドチが溶着している。25～27は、志野の菊花形皿である。付高台で、体部下方から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、内面は削りにより菊花状に整形されている。25は底部外面にトチン、26は円錐ピンが溶着している。28は志野の底部が扁平な皿類と思われる。底部から口縁部にかけてやや外傾気味に直口し、端部は角形となる。

#### 鉢類他

29は口縁部が折縁状となる大皿である。発色不良であり、釉薬は不明である。30は黄瀬戸の向付である。体部に胴紐がめぐる。31は黄瀬戸の鉢である。体部下方から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は玉縁状となる。32は灰志野の筒向付である。体部外面に鉄絵がみられる。34～39は志野の向付である。器高の低い銅鑼鉢の器形であり、口縁部は外反する。35は、底部のみが残存し削り込み高台である。37は筒向付と思われ、内面に窯壁片が付着している。38は角向付であり、外面に鉄絵がみられる。39は高台は削り出し高台で、外面に鉄絵がみられる。40は鉢である。口縁部上面には突帯がまわり、突帯の内側は引き出し、面を設ける。施釉はされず、胎土は褐色を呈す。41は播鉢であり、口縁部は縁帯が形成され、下方は斜めに延び角形となる。42・43は茶入である。口縁部は玉縁状となり、体部は大海形になると思われる。44は水指または建水であり、外面は全面施釉、内面は口縁部上部のみ施釉される。45の匣鉢は、内面に「才」の窯記号がヘラ状工具により彫られる。



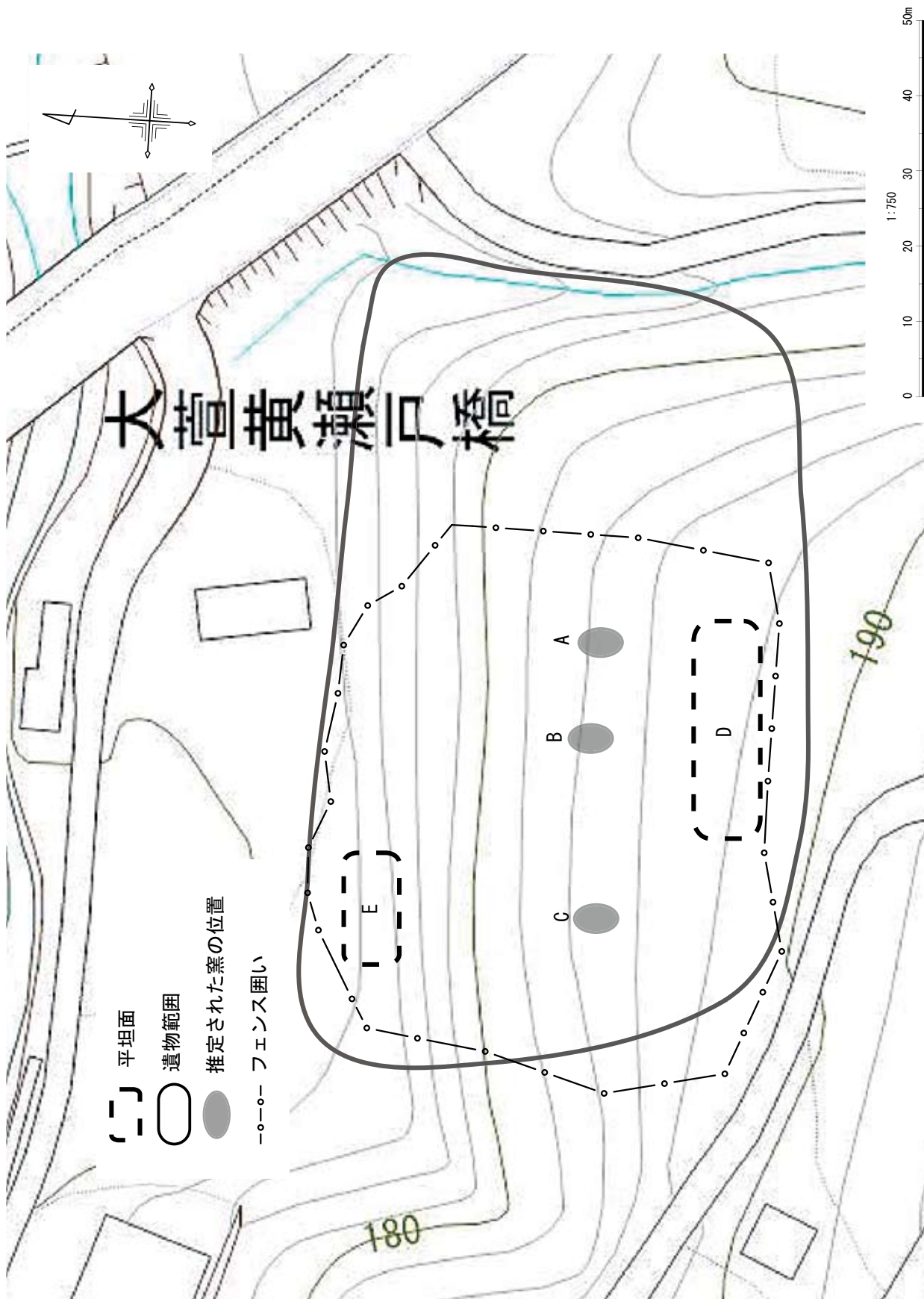


図 83 大萱窯下古窯跡 踏査概要図 (S=1/750)

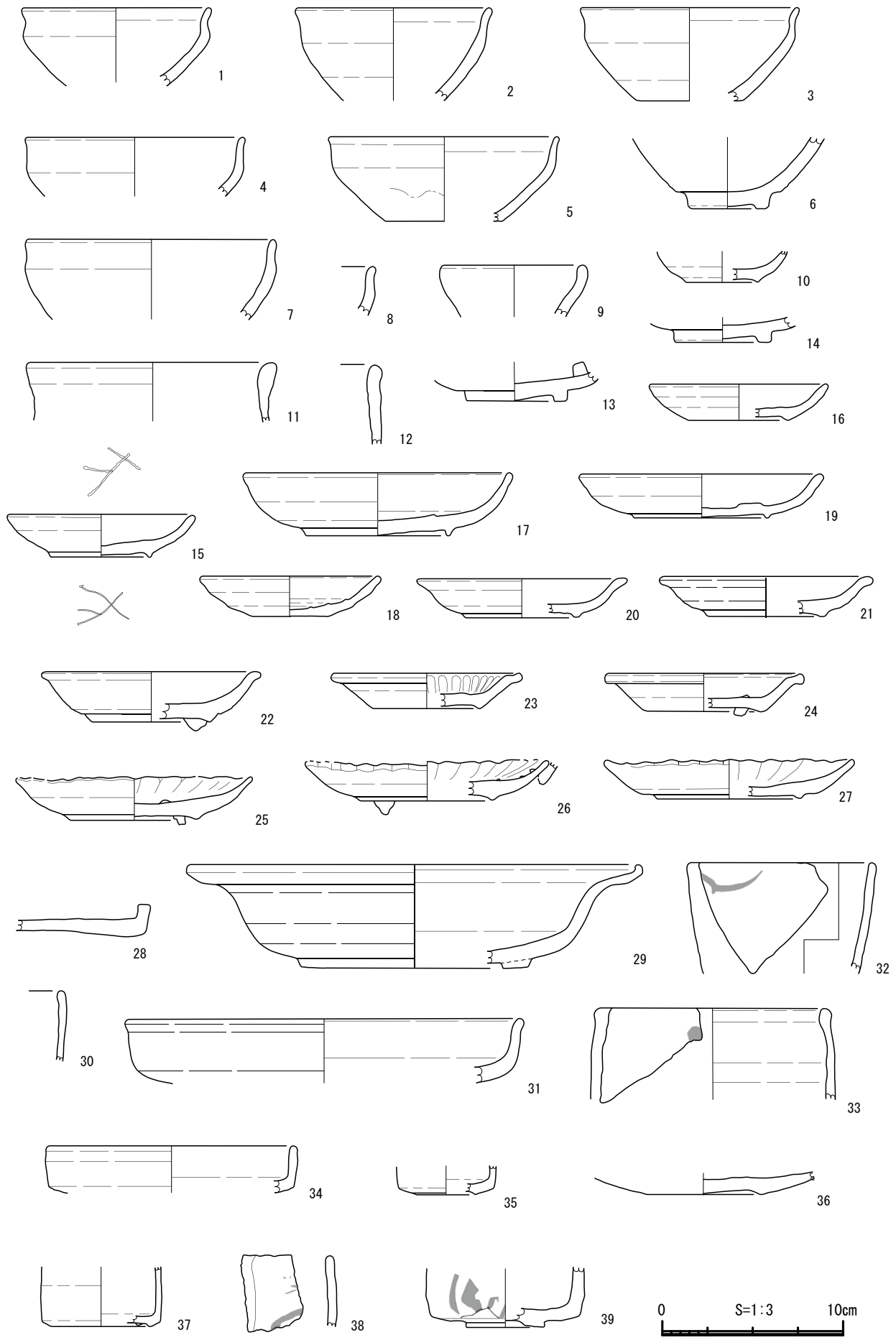
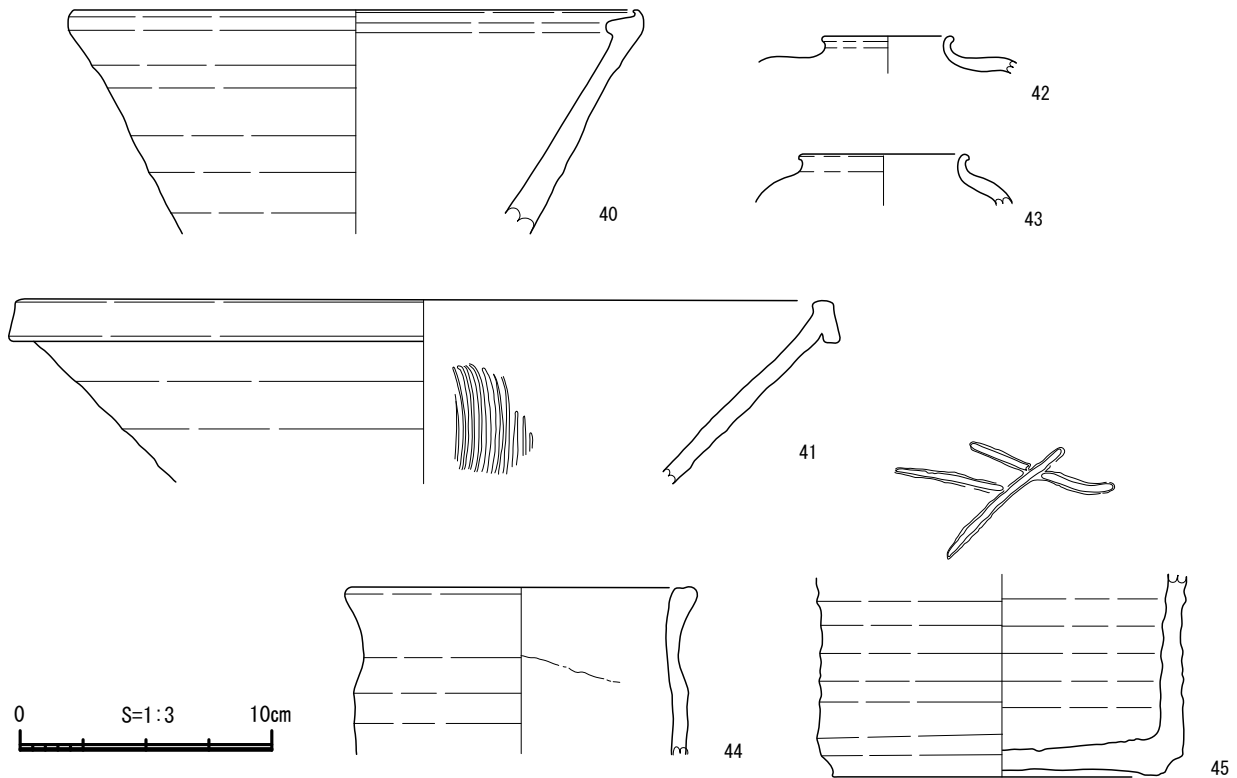


图 84 大萱窰下古窰跡表採遺物 1 (S=1/3)



番号	写真	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		鉄釉	天目茶碗	(10.1)	(4.3)		外面に釉もしくは他の陶器のはがれ痕。
2		鉄釉	天目茶碗	(10.5)	(5.1)		口縁部に灰釉。
3		鉄釉	天目茶碗	(11.8)	(5.2)		
4		灰釉	天目茶碗	(11.9)	(3.3)		灰被。
5		鉄釉	天目茶碗	(12.4)	(4.7)		口縁部上部外面に灰釉。
6		鉄釉	天目茶碗	—	(3.9)	(4.3)	
7	7	(志野)	天目茶碗	(13.5)	(4.4)		
8		(志野)	天目茶碗	—	(2.8)		
9		灰釉	小杯	(7.6)	(2.8)		
10		灰釉	小杯	—	(1.7)	(3.9)	付高台。
11		(瀬戸黒)	筒形碗	(13.4)	(3.1)		
12		(瀬戸黒)	筒形碗	—	(4.3)		
13		(志野)	茶碗	—	(1.5)	(5.5)	
14		(志野)	碗類	—	(1.3)	5.3	高台削り出し後、未調整。
15	15	不明	丸皿	(10.0)	2.4	5.4	付高台。底部内外面に線刻。
16		灰釉	内壳皿	(9.6)	(2.0)	(5.4)	削り込み高台。発色不良。
17		灰釉	内壳皿	(14.6)	(3.5)	(7.9)	付高台。底部外面にトチ痕。外面に陶器片溶着。
18	18		灯明皿	(9.6)	2.2	(4.1)	内面にポロが付着。
19	19	灰釉	輪壳皿	(13.0)	(2.5)	(7.3)	削り出し高台。底部内面に凸部が輪状にまわる。
20		(志野)	端反皿	(11.2)	(2.1)	(6.0)	削り出し高台。
21		(志野)	端反皿	(11.2)	2.2	(6.4)	削り出し高台。
22	22	(志野)	端反皿	(11.4)	(2.8)	(6.4)	削り込み高台。底部内面にピン跡。
23		灰釉	折縁皿	(10.2)	(2.0)	(5.8)	削り込み高台。
24	24	灰釉	折縁皿	(10.6)	2.1	(6.4)	削り込み高台。底部内面に陶器のはがれ痕。
25	25	(志野)	菊花形皿	(12.8)	2.3	(6.9)	付高台。内面に自然釉がかかる。底部外面にトチン痕。
26	26	(志野)	菊花形皿	(13.2)	(2.1)	(7.3)	付高台。
27		(志野)	菊花形皿	(13.6)	(2.1)	(7.8)	付高台。
28	28	(志野)	皿類	—	(1.8)		
29	29	不明	大皿	(24.7)	5.7	(12.4)	付高台。底部内面にトチンがわずかに溶着。発色不良。
30		(黄瀬戸)	向付	—	(3.9)		胴紐がめぐる。外面にポロが付着。
31	31	(黄瀬戸)	鉢	(20.6)	(3.5)		発色不良。
32	32	(灰志野)	向付	(10.1)	(6.1)		体部外面に鉄絵。
33	33	(志野)	向付	(12.2)	(5.0)		鉄絵あり。
34		(志野)	向付	(13.4)	(2.6)		
35	35	(志野)	向付	—	(1.5)	(3.3)	削り込み高台。
36		(志野)	向付	—	(1.2)	(6.2)	削り込み高台。底部外面にトチンが一部溶着。
37		(志野)	向付	—	(3.3)	(5.4)	底部外面にポロが付着。
38		(志野)	向付	—	(4.3)		外面に鉄絵。
39	39	(志野)	向付	—	(3.3)	(4.2)	外面に鉄絵。底部外面にトチ痕。
40	40		鉢	(22.2)	(8.9)		
41		錆釉	播鉢	(31.4)	(7.3)		
42		灰釉	茶入	(4.9)	(1.4)		
43		鉄釉	茶入	(6.4)	(2.0)		
44	44	鉄釉	水指・建水	(13.4)	(6.6)		外面は全面施釉。内面は口縁部上部のみ施釉。口縁部にはがれ痕。
45			匣鉢	—	(8.0)	(13.1)	底部内面に記号。底部外面に回転糸切痕。

図 85 大萱窯下古窯跡表採遺物 2 (S=1/3)

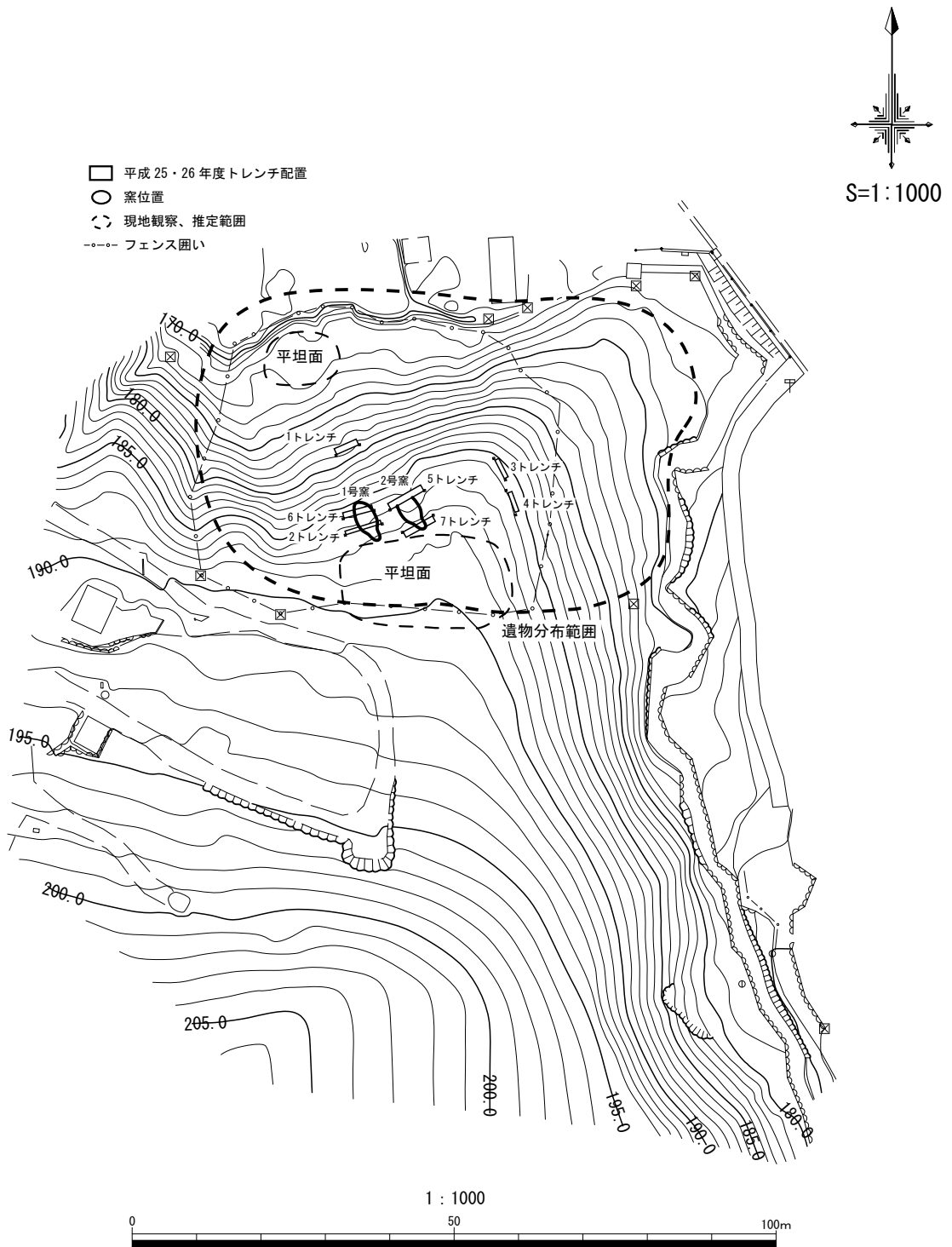


図86 大萱窯下古窯跡 調査範囲図



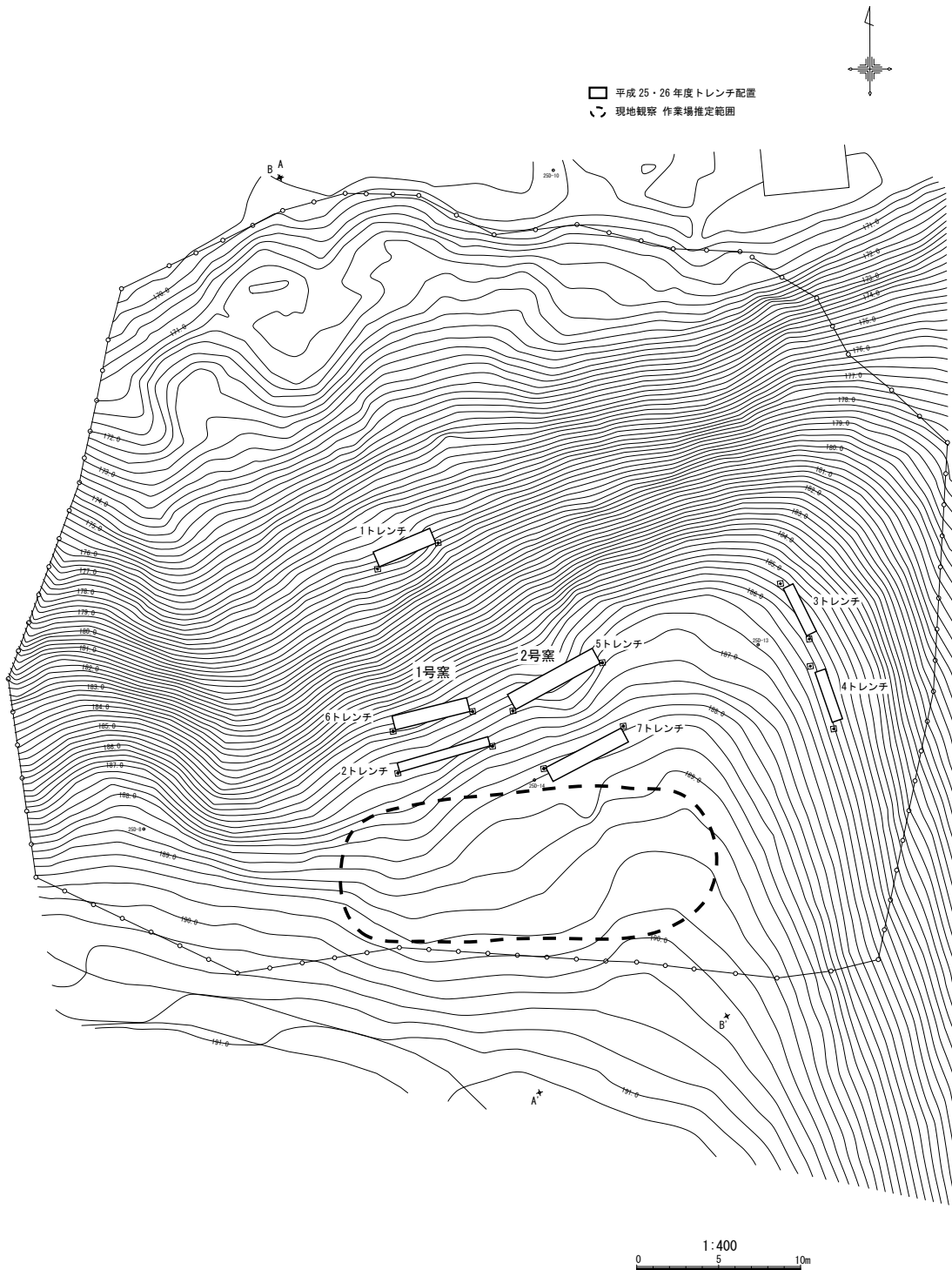


図87 大萱窟下古窟跡地形測量図

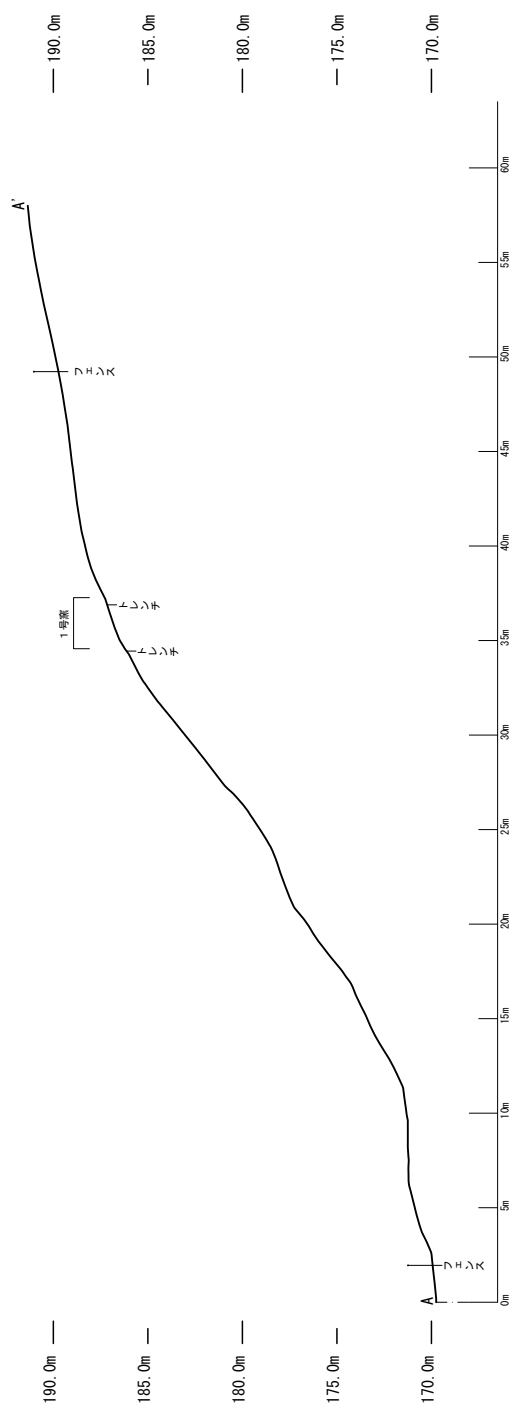


图 88 大萱窯下古窯跡 A-A' 縦断面図 (S=1/400)

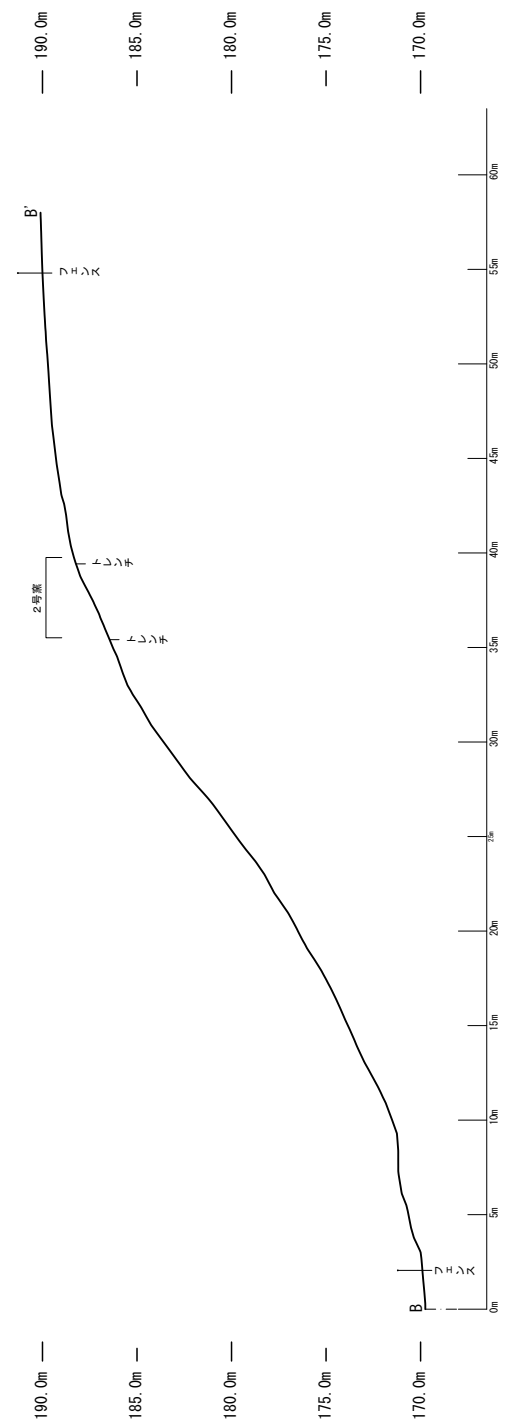


图 89 大萱窯下古窯跡 B-B' 縦断面図 (S=1/400)

## 第2節 窯体の調査

### 1号窯

#### 2トレンチ 図90・91

磁気探査で反応があった部分に2トレンチを設定し、窯体の有無を確認した。調査の結果、大萱窯下1号窯の焼成室床面が検出された。床面までの堆積土は厚さ約40cmであり、床面に近い2層では部分的に赤味を帯びた土も見られ、窯壁の破片を含む崩落層と考えられる。

窯の壁は右側で35cm程度、左側で25cm程度残存しており、トレンチ内で検出された焼成室の幅は3.15mを測る。この焼成室の幅はトレンチ内の数値であり、窯の主軸に直交するものではない。また、床面は東から西へ向かって下がっているが、これもトレンチ設定が窯の主軸に直交していないためと思われる。窯の床面には焼台の痕跡や自然釉で硬化している部分も見られず、灰色を呈している。床面直上には、折縁皿(14)と逆向きになった匣鉢(15)がみられた。窯の外側の構築面から床面までは、西端で約35cmの深さがある。

#### 遺物 図97

2トレンチは、折縁皿の出土が最も多く、志野、瀬戸黒も1点出土している。

1は天目茶碗であり、体部下方から口縁部にかけて直線的に開き、口唇部はS字状となる。高台は、削り出し内反り高台である。2・3は丸皿であり、3は底部外面に円錐ピンが3つ溶着している。4・5は匣鉢蓋である。4の内面には、横線3本を入れた後に縦線をヘラ状工具で入れた「丰」の窯記号がみられる。また、内面にトチンやボロが溶着し、外面にも匣鉢の口縁のはがれた痕跡があることから、両面が使われたと考えられる。5は円形の匣鉢蓋であり、下面に記号のような痕がみられる。6・7は瀬戸黒筒形碗である。6はやや小振りであり、直立した体部から口縁部がわずかに外反する。8は志野の茶碗である。体部下方に稜があり、口縁部にかけて内傾し、口縁端部には面がみられる。外面には鉄絵がみられる。11は黄瀬戸の筒向付であり、体部は直立し、口縁部は丸く収める。緑灰色を呈す。10は灰釉の大皿であり、口縁部は折縁状となる。12・13は焼台であり、上下面にトチンが溶着している。14は折縁皿である。内面は内禿でソギが入る。底部外面には輪ドチが一部溶着している。

15の匣鉢は、内面の痕跡から高台径10.3cm程度の灰釉製品を焼くのに用いたと思われる。

#### 6トレンチ 図92～96

6トレンチは、2トレンチの下方の傾斜の緩やかな場所に位置し、大萱窯下1号窯の構造の一部を解明するために設定した。現地表面から床面までの堆積層は厚さ約40cmであり、7層は多くの窯壁片や窯道具を含む壁や天井の崩落層である。8層は窯の外側にあたるが、7層と同様に天井や壁の崩落を伴う層と考えられる。8、9層の東側には、昇炎壁等の被熱を受けた地山がみられる。

トレンチ内では、焼成室、燃焼室、昇炎壁が検出されている。床面は自然釉が多くかかり、明青灰色を呈す。溶着した匣鉢や焼台などが見られるほか、折縁皿や水注、歪んだ天目茶碗などの遺物が検出された。遺物が残存する状況から判断すると焼成中に天井が崩落したことが推測される。焼成室には、分炎柱が欠損した痕跡があり、欠損部分の幅は15cmを測る。この部分を中心とし、推定される焼成室の最大幅は2.8mになる。東側で残存している壁の高さは約10cmである。窯の外側から床面までの高さが約30cmであることから、同程度を掘り込んで窯が造られている。

昇炎壁の高さはc-c'断面から約20cmであり、昇炎壁も同様に自然釉が多くかかり、明青灰色を呈す。昇炎壁から約10cm 燃焼室側へ離れて、小分炎柱の根元部分が2カ所検出されている。小分炎柱は円形で粘土のみで作られており、直径12cm、残存する高さはそれぞれ10cm、20cm程度である。燃焼室は、トレンチ内で幅約1.7m、長さ約0.5mが検出されており、この部分は自然釉がかからず褐色を呈す。

なお、崩落層や床面に残存した遺物には、黄瀬戸や瀬戸黒、志野はみられない。

## 遺物 図98・99

6 トレンチは、折縁皿が多く出土しており、天目茶碗も多い。

1は表土、9～13は堆積土、31は崩落層、37～38は床面直上から出土した丸皿である。いずれも体部から口縁部に丸みをもって立ち上がり、高台は削り込み高台や付高台がみられる。10は口縁部に折縁皿片と匣鉢片が溶着している。2～5は堆積土、35・36は床面直上から出土した天目茶碗である。口唇部がS字状となり、口縁部が玉縁状になるものが多い。4のように、薄手で口縁部がやや外反するものもみられる。7・8は丸碗である。7は体部下方から口縁部まで丸みをもって立ち上がり、8は直線的に外側に開く形態である。前者は鉄釉、後者は灰釉を施釉する。14は内禿皿であり、底部内面の釉薬を拭っている。高台は削り出し高台で、やや大型である。15～17は堆積土、32～34は崩落層、39～41は床面直上から出土した折縁皿である。高台は削り込み高台と削り出し高台であり、付高台はみられない。口径は10.5～10.8cmに収まるものが多い。ソギが入るものと入らないものがみられ、ソギが入るものの方が少ない。両者の器形は同一であり、全体的に扁平で、器高の高いものはみられない。33には底部外面に輪ドチが溶着し、底部内面には削りによる2本の線がみられるほか、輪ドチ痕もみられる。34はやや大型であり、底部外面に輪ドチ痕がみられる。発色不良であり、器面は荒れている。18は志野の皿であり、内面に鉄絵がみられる。20～24は黄瀬戸の向付・鉢である。20・21は体部下方が丸みを帯び、上方はほぼ直立し、体部中ほどに緩やかな凹みがみられる。21には円錐ピンの使用が認められる。22は体部下方に稜を有し、口縁部にかけて直立し、口縁端部は玉縁状になる。23は口縁部下方がやや肥厚し、口縁端部が外反する。25は大皿であり、体部下方に稜がみられ、口縁部は折縁状となる。27は手付の水注であり、把手部分は欠けている。頸部は内傾し、口縁端部は玉縁状となる。28は茶入であり、頸部は短く口縁部はやや外反する。29は水指または建水である。口縁部は外側に引き出され、上面には緩やかな凹みを有する。30は輪ドチであり、皿の重ね焼きの際に使用されたと考えられる。43～45は匣鉢である。43には上面にヨリ輪が残る。45は内面に高台の痕と鉄釉がみられ、天目茶碗を焼くのに用いたと思われる。また、底部外面には灰釉製品のはがれ痕がみられる。46・47は匣鉢蓋である。46は円形であり、上下面に自然釉がかかる。47も同様に上下面ともに自然釉がかかるため、両面が使用された可能性が考えられる。

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	表土	鉄釉	天目茶碗	11.6	5.5	5.0	
2		表土	灰釉	丸皿	9.7	2.0	5.1	削り込み高台。底部外面にトチンが溶着。
3	3	表土	灰釉	丸皿	9.8	1.9	6.0	削り込み高台。底部外面に円錐ピンが3カ所溶着。
4	4	表土		匣鉢蓋	13.9	2.3		上面径6.8。
5		表土		匣鉢蓋	14.0	1.6		上面、下面ともに回転糸切痕。
6	6	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(10.8)	(7.9)		
7		堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(14.5)	(4.9)		
8	8	堆積土	(志野)	茶碗	(10.4)	(6.2)		鉄絵あり。
9		堆積土		内禿皿	—	(1.3)	(7.8)	削り込み高台。発色不良。内外面にトチンが溶着。
10		堆積土	灰釉	大皿	(26.6)	(4.2)		ソギ入り。発色不良
11	11	堆積土	(黄瀬戸)	向付	(6.5)	(4.5)		発色不良。
12	12	堆積土		焼台	8.1×8.5×5.5			上面7.6×7.9。上面・下面に溶着物あり。
13		堆積土		焼台	9.7×9.8×6.5			上面8.3×8.4。上面・下面に溶着物あり。
14	14	床面直上	灰釉	折縁皿	11.3	2.5	5.3	削り込み高台。内ハゲ。ソギ入り。
15	15	床面直上		匣鉢	19.5	8.6	17.0	底部外面回転糸切痕。

表 14 大萱窯下2トレンチ遺物観察表

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		表土	灰釉	丸皿	(9.8)	2.0	(5.4)	付高台。底部外面にトチン痕。
2	2	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.8)	(4.9)		
3		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.9)	5.6	(4.7)	
4		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.4)	(4.9)		外面に他と陶器片が溶着。
5		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.6)	(5.5)		
6		堆積土	鉄釉	天目茶碗	—	(3.1)		
7		堆積土	鉄釉	丸碗	(11.6)	(4.8)		
8		堆積土	灰釉	丸碗	(12.7)	(4.0)		
9		堆積土	灰釉	丸皿	(9.1)	(2.1)	(4.4)	付高台。底部外面にトチン痕。
10	10	堆積土	灰釉	丸皿	9.5	1.9	5.2	削り込み高台。底部外面にトチン痕。底部内面にトチンが一部溶着。
11	11	堆積土	灰釉	丸皿	9.5	(2.0)	5.0	削り込み高台。底部外面にトチン痕。
12		堆積土	不明	丸皿	(9.6)	1.6	(5.1)	削り込み高台。底部外面にトチン痕。発色不良。
13		堆積土	不明	丸皿	—	(1.2)	(7.6)	付高台。発色不良。
14	14	堆積土	灰釉	内禿皿	(14.0)	2.5	(8.2)	削り出し高台。底部外面にトチン痕。
15	15	堆積土	灰釉	折縁皿	(10.5)	2.3	(4.9)	削り込み高台。内ハゲ。ソギ入り。外面にトチンが溶着。
16		堆積土	灰釉	折縁皿	(10.5)	2.4	(5.6)	削り込み高台。底部内外面に輪ドチが溶着。
17	17	堆積土	灰釉	折縁皿	(11.3)	(2.3)	(6.2)	削り出し高台。歪みあり。内外面にトチンが溶着。高台と体部が一部はがれる。
18	18	堆積土	(志野)	皿類	—	(1.2)	(13.0)	付高台。底部内面に鉄絵。
19	19	堆積土	不明	大皿	(28.2)	(1.4)		ソギ入り。発色不良
20	20	堆積土	(黄瀬戸)	向付	(10.3)	(3.1)	(5.3)	
21	21	堆積土	(黄瀬戸)	向付	(11.5)	3.3	(7.2)	他の陶器片が溶着。外面に溶着物あり。
22	22	堆積土	(黄瀬戸)	鉢	(16.1)	(3.8)		
23	23	堆積土	(黄瀬戸)	鉢	(16.6)	4.4	(8.3)	底部内面にピン痕あり。底部外面に匣鉢片が陶器片が溶着。
24		堆積土	(黄瀬戸)	鉢	—	(2.8)		
25	25	堆積土	鏝釉	大皿	(29.2)	6.3	(16.4)	削り出し高台。内面に一部ボロが付着。
26	26	堆積土	鉄釉	德利	(5.2)	(4.7)		同一個体の破片が焼成中に割れて溶着。
27	27	堆積土	鉄釉	水注	(4.7)	(4.2)		胴部径 (10.4)。外面のみ鉄釉がかかる。
28	28	堆積土	内面鉄釉／ 外面灰釉	茶入	(4.7)	(1.9)		
29		堆積土	鉄釉	水指・建水	(15.8)	(2.4)		
30	30	堆積土		輪ドチ	4.8×4.5×1.1			
31		崩落層	灰釉	丸皿	(10.6)	1.8	(5.4)	削り込み高台。
32	32	崩落層	灰釉	折縁皿	(10.2)	2.0	(6.2)	削り込み高台。内ハゲ。別個体の折縁皿と輪ドチが溶着。内面に輪ドチ痕。
33	33	崩落層	灰釉	折縁皿	(10.8)	(2.0)	(5.6)	削り込み高台。内ハゲ。ソギ入り。内面にケズリによる記号。
34		崩落層	灰釉	折縁皿	(12.3)	(2.0)	(6.7)	削り出し高台。内ハゲ。ソギ入り。
35		床面直上	鉄釉	天目茶碗	(10.8)	(4.3)		部分的に灰釉がかかり、歪みがみられる。口縁部がはがれている。
36	36	床面直上	鉄釉	天目茶碗	(10.9)	(5.0)	(4.6)	全体的に歪みあり、口縁部がはがれている。
37		床面直上	灰釉	丸皿	(9.7)	(1.7)	(5.3)	削り込み高台。
38		床面直上	灰釉	丸皿	(9.8)	2.0	(5.0)	削り込み高台。底部外面にトチン痕。
39	39	床面直上	灰釉	折縁皿	10.6	2.0	5.6	削り出し高台。底部外面に輪ドチが溶着。内面に他の陶器片のはがれ痕。
40	40	床面直上	灰釉	折縁皿	10.7	2.0	6.1	削り込み高台。底部内外面に輪ドチが溶着。
41	41	床面直上	灰釉	折縁皿	(10.8)	2.2	5.9	削り出し高台。内外面にトチンが溶着。
42	42	床面直上	灰釉	丸皿、折縁皿	上9.7 下10.9	下2.4	下4.9	削り込み高台。
43		床面直上		匣鉢	(13.0)	5.0	(9.2)	外面に自然釉がかかり、付着物がみられる。
44		床面直上		匣鉢	(15.0)	9.3	(13.6)	上部にヨリ輪が溶着。外面に自然釉がみられ、何度も焼かれ良く焼けている。
45	45	床面直上		匣鉢	(15.9)	7.5	14.1	底部外面と体部外面にボロが付着。底部外面に回転糸切痕。
46		床面直上		匣鉢蓋	(18.6)	1.6		上下面に回転糸切痕。上下面に自然釉がかかる。
47	47	床面直上		匣鉢蓋	12.7	2.0		上面径 (6.2)。上面に回転糸切痕。
48	48	床面直上		焼台	9.8×10.2×5.4			匣鉢の設置部分は径7.5cm。前面には自然釉がかかり、後面には鉄釉がかかる。上面は7.4×7.8。

表 15 大萱窯下6トレンチ遺物観察表

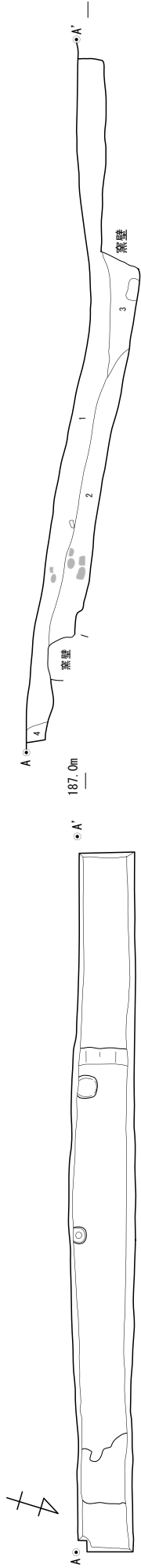


図 90 2 トレンチ平面図 (S=1/50)

図 91 2 トレンチ南壁土層図 (S=1/50)

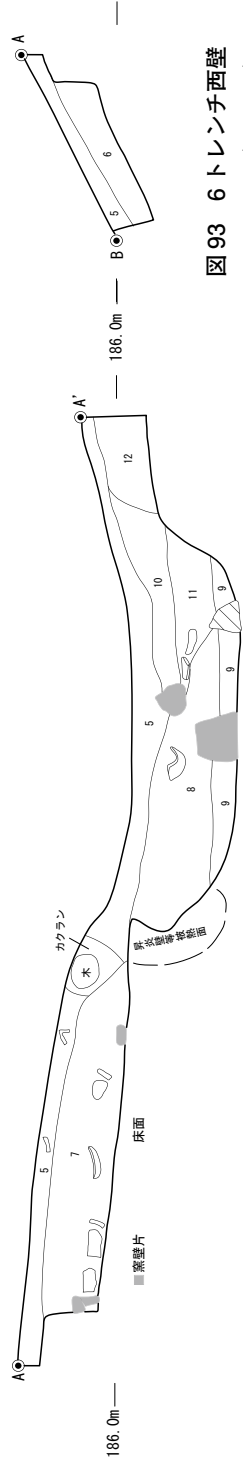
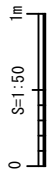


図 92 6 トレンチ南壁土層図 (S=1/40)

図 93 6 トレンチ西壁土層図 (S=1/40)

- |    |      |       |      |  |
|----|------|-------|------|--|
| 1  | 暗褐色  | しまり強い | 粘性弱い | φ5~20mmの礫を少量含む〔黄土、窯壁片や遺物を含む〕           |
| 2  | 褐色   | しまり弱い | 粘性弱い | φ5~10mmの礫をわずかに含む〔窯壁片が多く混じる〕            |
| 3  | 暗褐色  | しまり強い | 粘性あり | φ5~20mmの礫を少量含む〔⑨より窯壁片を多く含む前落層の一部〕      |
| 4  | 暗黄褐色 | しまり強い | 粘性あり | φ5~40mmの礫を少量含む〔堆積土〕                    |
| 5  | 黒褐色  | しまり強い | 粘性あり | φ5~10mmの礫を少量含む〔黄土、窯壁片や遺物を含む〕           |
| 6  | 褐色   | しまり強い | 粘性あり | φ5~10mmの礫をわずかに含む〔窯壁片の内側の赤色燃熱部分を含む〕     |
| 7  | 暗褐色  | しまり弱い | 粘性あり | φ5~30mmの礫を少量含む〔窯壁片や窯道具、遺物含む天井や壁の前落層〕   |
| 8  | 黒褐色  | しまり弱い | 粘性弱い | φ5~50mmの礫を少量含む〔窯壁片や窯道具、遺物含む堆積土、前落層の一部〕 |
| 9  | 褐色   | しまり弱い | 粘性弱い | φ5~30mmの礫を少量含む〔窯道具を含む砂層〕               |
| 10 | 暗褐色  | しまり強い | 粘性あり | φ5~50mmの礫を少量含む〔窯壁片、窯道具を含む堆積土〕          |
| 11 | 暗褐色  | しまり強い | 粘性あり | φ5~200mmの礫を少量含む〔窯壁片、窯道具を含む堆積土〕         |
| 12 | 黄褐色  | しまり強い | 粘性あり | φ5~300mmの礫を多く含む〔遺物を部分的に含む堆積土〕          |

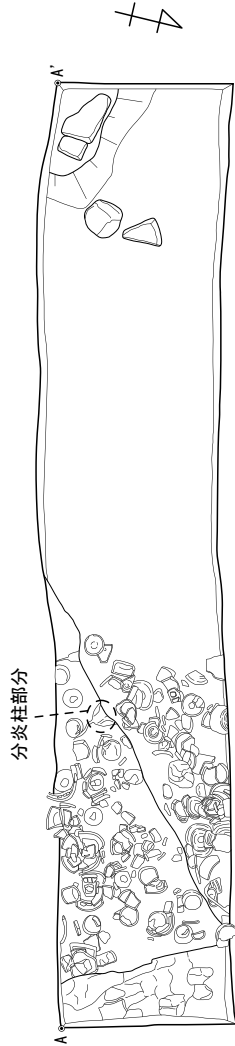


図 94 6 トレンチ平面図 (S=1/40)

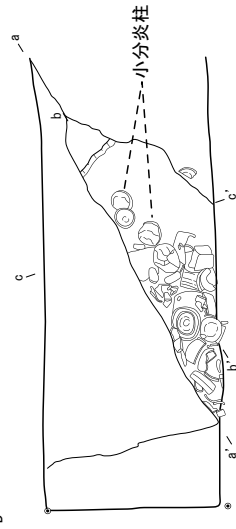


図 95 6 トレンチ平面図 (焼成室遺物除去後) (S=1/40)

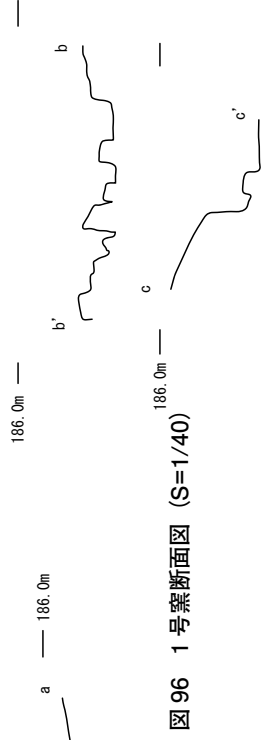
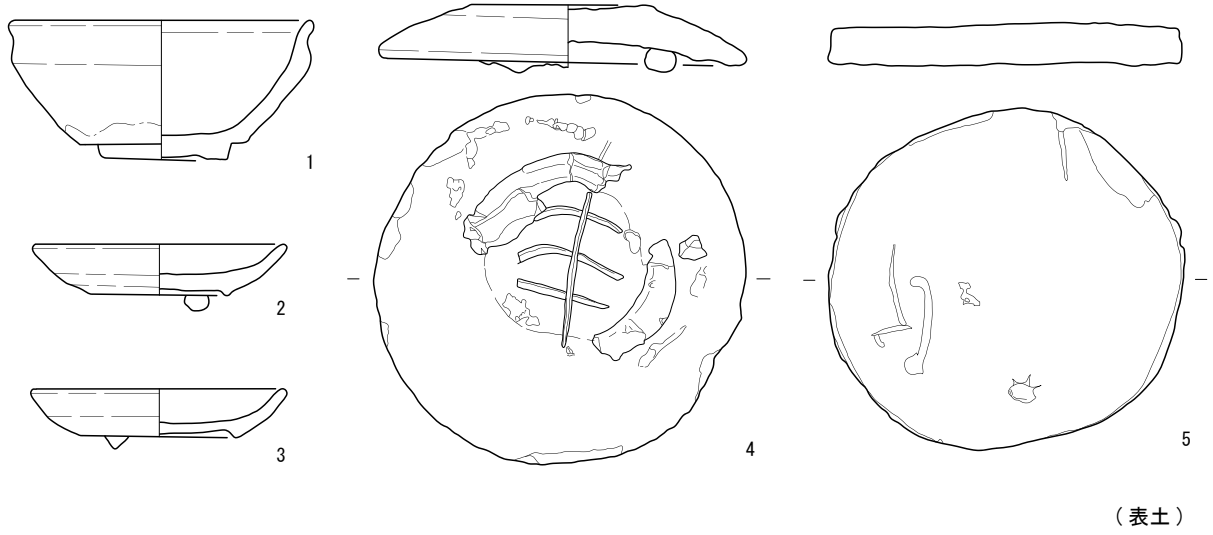
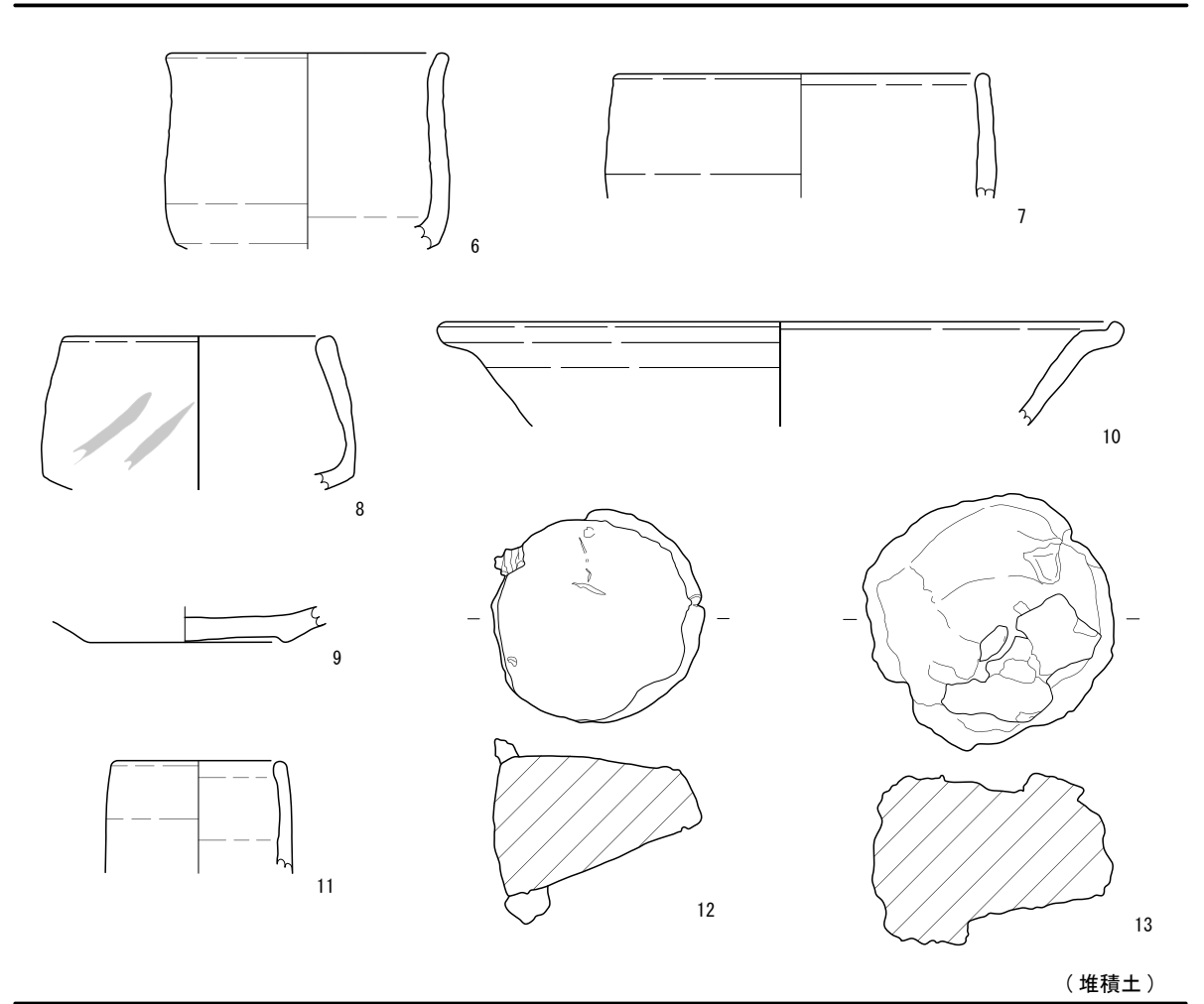


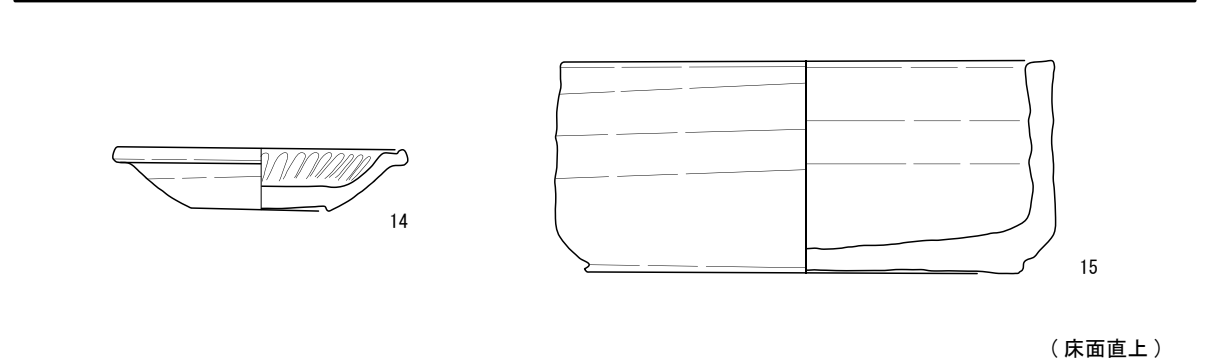
図 96 1 号窯断面図 (S=1/40)



(表土)

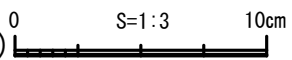


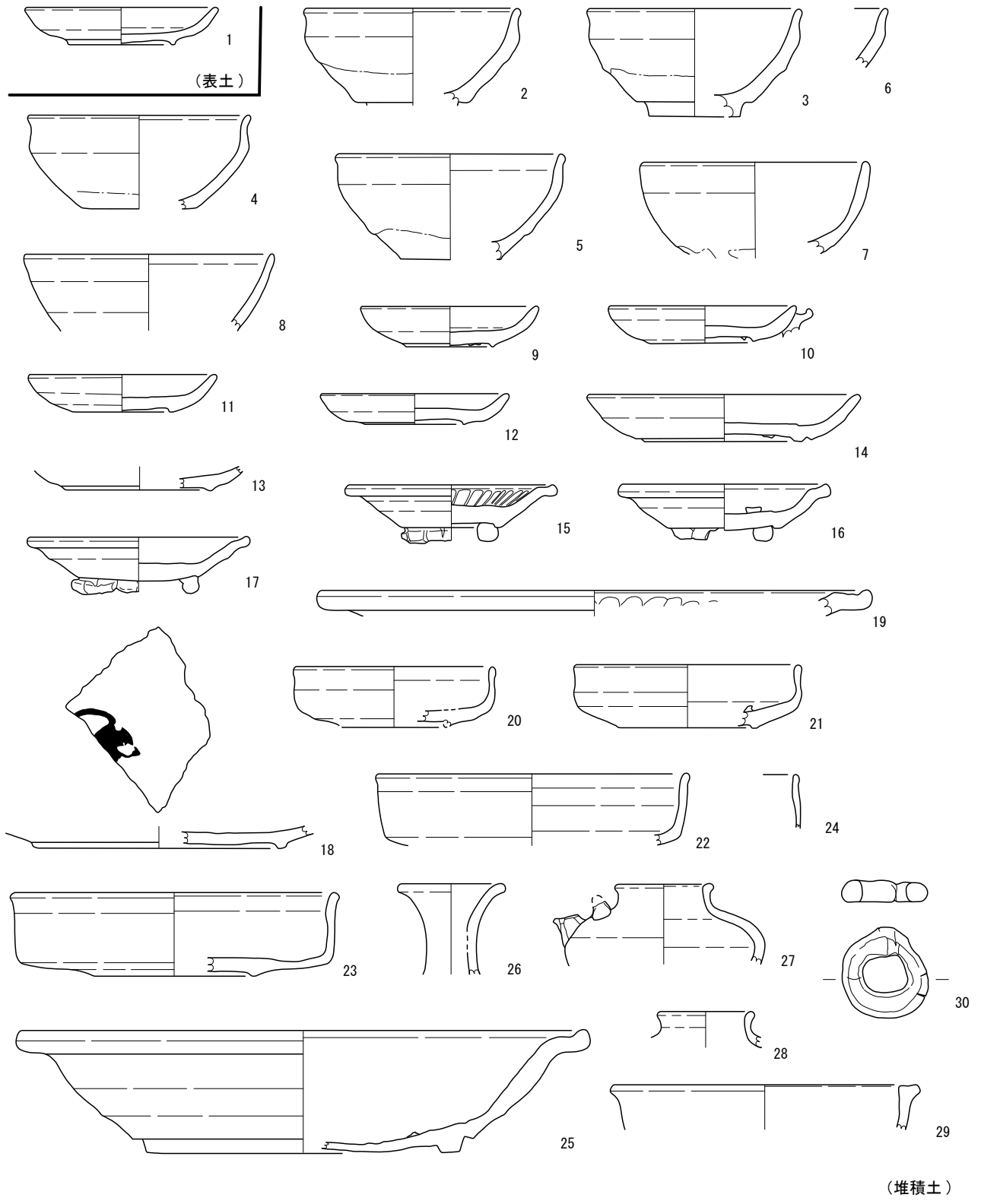
(堆積土)



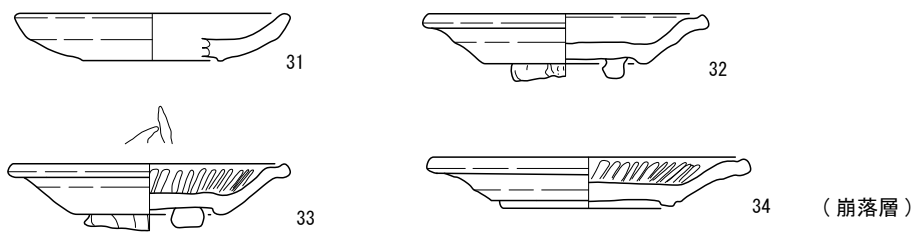
(床面直上)

図 97 大萱窯下 2 トレンチ出土遺物 (S=1/3)



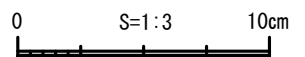


(堆積土)



(崩落層)

図 98 大萱窠下6トレンチ出土遺物1 (S=1/3)





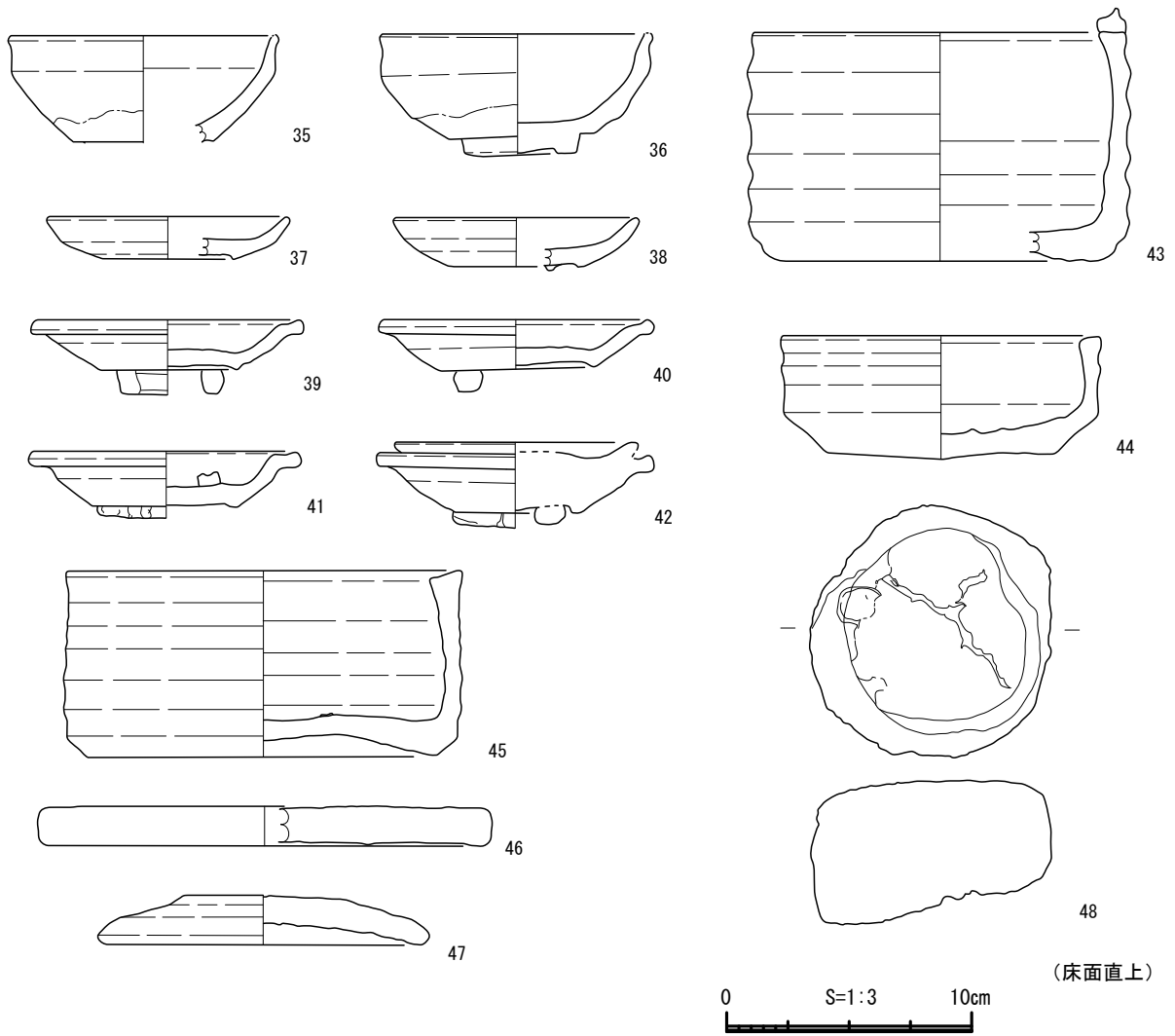


図 99 大萱窠下 6 トレンチ出土遺物 2 (S=1/3)

## 2号窯

### 5トレンチ 図101～104

5トレンチの場所は、窯体の床面が露出している場所であり、床の残存状況を調べるために設定した。なお、トレンチ以外の部分でも薄い表土の下に部分的に床面が観察でき、貼床が割れている部分も見られる。

16層は硬化した床面であり、厚さは10～15cmである。青灰色の部分と赤褐色の部分認められ、所々に自然釉が付着している。床面には、部分的に焼台の痕跡が見られる。17層は地山であり、赤色被熱している。地山中には、部分的に砂を充填している部分も見られた。床面は東から西へ向かって下がっているが、これはトレンチの設定が窯の主軸に直交していないためである。検出された壁の高さは25cm程度であり、左側の壁の幅は約10cm、右側では約5cmを測る。壁には自然釉がかかり硬化している。床面の裏には、40cmほどのトチン片を含む貼り付け粘土の18層が見られ、18層は熱により赤味を帯びている。5・7トレンチから主軸を推定し、測った窯の幅は3.4mであり、焼成室の最大に近い数値と思われる。西側の地山面と床面の関係から、2号窯は約60cm掘り込んで造られていることがわかる。

5トレンチ内では床面が割れ、その下方は地山がみられることから、大萱窯下2号窯の燃焼室や焚口は滅失していると思われる。

### 遺物 図100

5トレンチからは出土数は少ないが、堆積土から瀬戸黒、黄瀬戸、志野がみられた。

1は瀬戸黒筒形碗で、口縁部がやや外反する。3は志野の丸皿であり、口縁部は外側に直線的に開き、端部は丸く収める。4は志野の向付であるが、残存部分に鉄絵はみられない。5は播鉢であり、口縁部は下方に垂れ、角張る。6は小杯、7は削り出し内反り高台の小天目茶碗であり、両者とも鉄釉が施釉される。9は志野の向付である。外面に突起が1点みられ、体部に草文が描かれる。

### 7トレンチ 図105・106

7トレンチは、2号窯の煙道部を調査するために設定したトレンチである。26層は赤色に被熱した層であり、層中には赤く焼けた礫を含むが遺物は含まない。21～25層は、遺物や窯壁片を含み被熱を受けていないことから、後世の堆積土である。つまり、25層の下のラインが煙道部の床面を表している。ただ、26層は被熱を受けているが土のしまりが弱く、25層と26層の間には硬化した面はみられない。この部分の床面の幅は1.4mであり、煙道部の中央あたりになる可能性が高い。

このトレンチからは播鉢が多く出土しており、煙道付近では播鉢を多く焼いていた可能性がある。

### 遺物 図107

7トレンチからは、播鉢が多く出土している。

1～3は、天目茶碗である。1は、口唇部がわずかなくぼみを有し直立する。鉄釉施釉後に灰釉を施釉する。2は口唇部がS字状となる。3・4は灰釉、5は鉄釉の丸碗である。5は体部下方が丸みを帯び、上方はほぼ直立する。

6は志野の丸皿であり、体部中央付近から口縁部にかけて外反する。7・8は、無釉の灯明

皿である。9は皿類であるが、底部が内面から外面にかけて焼成前に穿孔されており、色見として使用されたと考えられる。

10は黄瀬戸の向付であり、高台は削り込み高台である。底部内面に12葉となる菊文の印花がみられる。11~18は播鉢である。11・12は口縁部が内側に折り返され、端部が丸みを帯びる。13~18は口縁部の外側に縁帯が形成され、下方が垂れるもの(13・18)、下方が引き出されるもの(14~17)がみられる。播鉢は錆釉がかけられるが、14は施釉されず胎土が青灰色を呈す。17は、内面にトチンが溶着している。19は播鉢用の団子トチであり、片面に回転糸切痕がみられることから、播鉢を重ねて焼いたことが伺える。

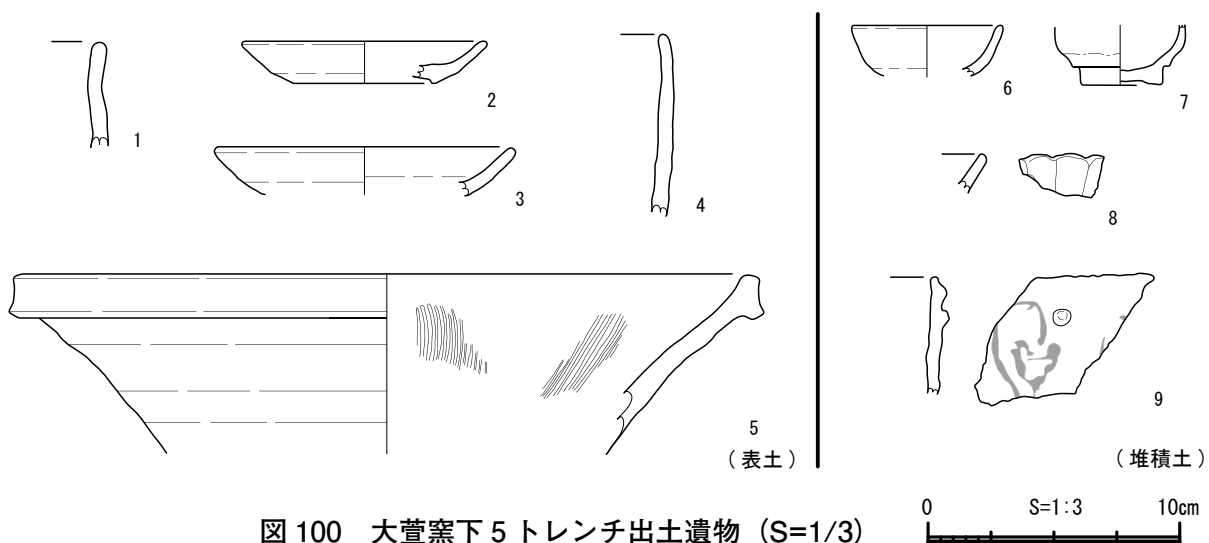


図 100 大萱窯下5 トレンチ出土遺物 (S=1/3)

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	表土	(瀬戸黒)	筒形碗	—	(4.2)		
2	2	表土	灰釉	丸皿	(9.5)	(1.7)	(5.6)	
3	3	表土	(志野)	丸皿	(11.6)	(1.9)		削り込み高台。口縁部に火色。
4	4	表土	(志野)	向付	—	(7.2)		外面全体に自然釉がかかる。
5	5	表土	錆釉	播鉢	(28.6)	(7.2)		楕目は1単位13本以上。
6	6	堆積土	鉄釉	小杯	(5.9)	(2.0)		
7	7	堆積土	鉄釉	小天目茶碗	—	(2.3)	(3.4)	
8	8	堆積土	(志野)	菊花形皿	—	(1.5)		
9	9	堆積土	(志野)	向付	—	(4.6)		外面に鉄絵。突起が1点。口縁部が一部はがれる。

表 16 大萱窯下5 トレンチ遺物観察表

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.8)	(4.2)		鉄釉の上に灰釉。
2	2	堆積土	鉄釉	天目茶碗	10.8	5.8	4.8	
3	3	堆積土	鉄釉	天目茶碗	—	(4.3)		釉薬に灰が混じっているため、灰色を呈する。
4		堆積土	灰釉	丸碗	—	(4.0)		
5	5	堆積土	鉄釉	丸碗	(10.2)	5.6	(5.4)	口縁部付近に灰釉が一部かかる。
6		堆積土	(志野)	丸皿	—	2.2	(8.2)	付高台。高台部に釉のはがれ痕。
7		堆積土		灯明皿	(11.5)	(1.7)		
8	8	堆積土		灯明皿	—	(1.7)	(3.8)	底部外面に回転糸切痕。
9	9	堆積土	灰釉	皿類	—	(1.0)	(5.2)	付高台。色見穴径1.9。上部から下方へへら切りで焼成前穿孔。
10	10	堆積土	(黄瀬戸)	向付	—	(2.1)	(3.7)	底部内面に菊文の印花。
11		堆積土	錆釉	播鉢	(25.0)	(3.4)		
12		堆積土	錆釉	播鉢	(33.3)	(3.7)		楕目は1単位8本以上。
13	13	堆積土	錆釉	播鉢	(26.8)	14.0	(7.6)	楕目は1単位12~14本。
14		堆積土		播鉢	(27.4)	(5.4)		楕目は1単位8本以上。無釉。
15		堆積土	錆釉	播鉢	(27.9)	(5.9)		楕目は1単位10本以上。発色不良。
16		堆積土	錆釉	播鉢	(30.4)	(7.4)		楕目は1単位12本以上。
17	17	堆積土	錆釉	播鉢	(31.4)	(12.0)	(9.7)	楕目は1単位13本。内面にトチンが溶着。底部外面に回転糸切痕。
18		堆積土	錆釉	播鉢	(33.0)	(7.2)		楕目は1単位10本以上。発色不良
19	19	堆積土		団子トチ		3.8×3.5×1.8		播鉢用のトチン。外面に楕目、内面に回転糸切痕の痕がみられる。

表 17 大萱窯下7 トレンチ遺物観察表

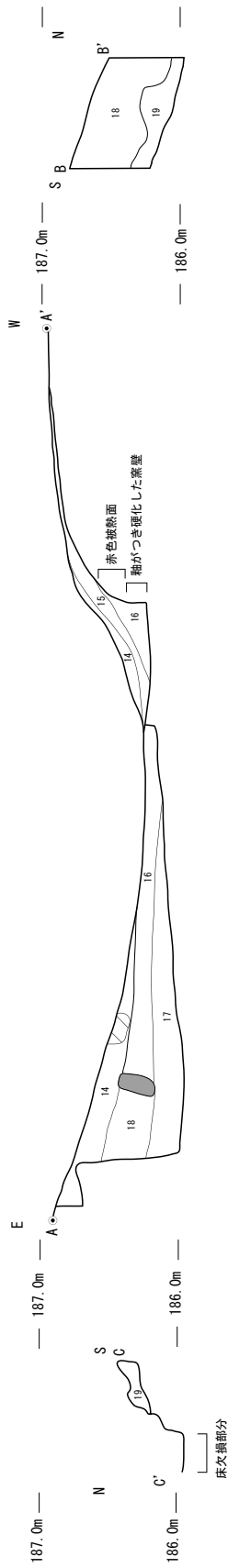


図 101 5 トレンチ東壁土層図 (S=1/50)

- 13 腐葉土混じる表土層
- 14 褐色 しまりあり 粘性弱い
- 15 赤褐色 しまり弱い 粘性弱い
- 16 貼り床面 [上面が窓の床面]
- 17 礫層 [一部砂をひいている部分のみられ、赤色被熱している部分もある]
- 18 赤色被熱部分 [壁の裏側 トチ片を含む貼付粘土]
- 19 窯壁 [自然細がかかる]
- 20 窯壁片、天井片が堆積する部分
- 21 暗褐色 しまりあり 粘性あり
- 22 暗褐色 しまりあり 粘性あり
- 23 褐色 しまりあり 粘性あり
- 24 暗褐色 しまりあり 粘性あり
- 25 暗褐色 しまりあり 粘性弱い
- 26 赤褐色 しまり弱い 粘性弱い
- 27 赤褐色 しまり弱い 粘性弱い
- 28 黄褐色 しまり弱い 粘性弱い

図 102 5 トレンチ南壁土層図 (S=1/40)

図 103 5 トレンチ西壁土層図 (S=1/40)

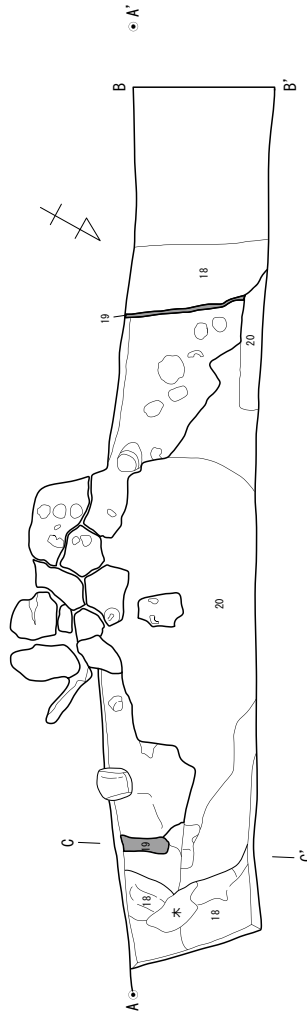


図 104 5 トレンチ平面図 (S=1/50)

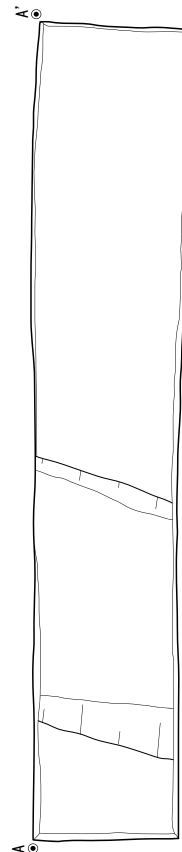
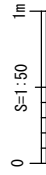


図 105 7 トレンチ平面図 (S=1/50)

189.0m

188.0m

187.0m

図 106 7 トレンチ南壁土層図 (S=1/50)

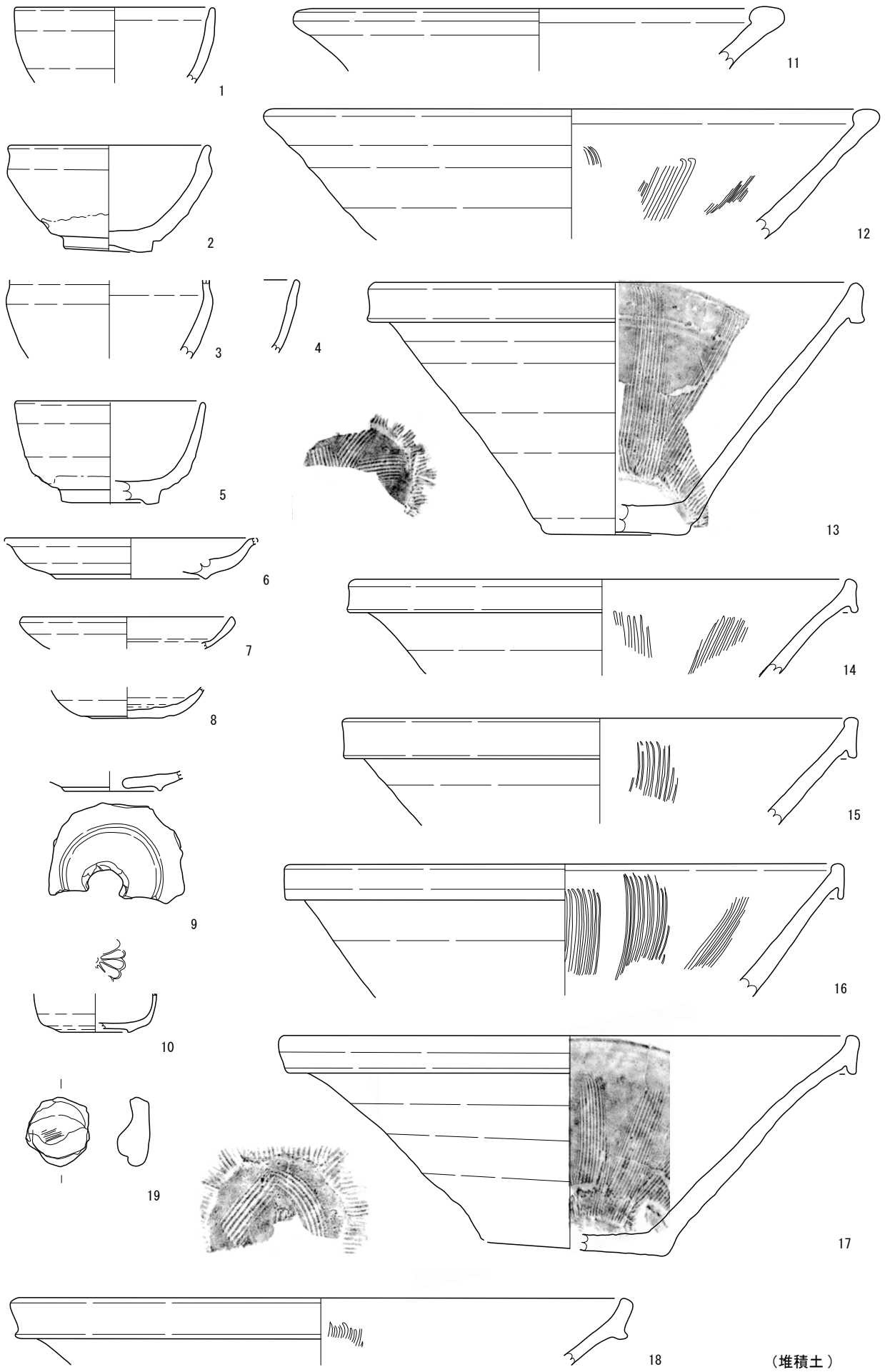


図 107 大萱窯下7トレンチ出土遺物 (S=1/3)

### 第3節 物原の調査

磁気探査の成果をもとに、緩やかな斜面がみられる部分に3本のトレンチを設定した。3本のトレンチでは窯体等の遺構は検出されなかったが、物原の堆積状況を確認することができた。

#### 1 トレンチ 図108・109

1 トレンチは、地山である36層部分まで現地表面から2m弱の深さがある。36層より上層は攪乱されている。31～33・35層は黒色味が帯びた土であり、1・2号窯の下にあることから捨てた灰や炭化物が混じっていると思われる、遺物や窯道具も多く含まれる。31層の中からは、近現代の鉄鎌が出土しており、磁気探査はこれに反応した可能性が考えられる。堆積土中からは小分炎柱も出土している。直径10cmの小分炎柱は、小さな礫が入る粘土で作られ、木芯の痕はみられない。直径13cm程度の匣鉢に、粘土を充填したものを重ねた小分炎柱も見られた。

#### 遺物 図114～119

1 トレンチは播鉢が最も多く、次いで天目茶碗が多く出土している。皿類では、折縁皿より丸皿が多く出土している。

1～5は、表土から出土している。1・2は内禿皿であり、高台は削り込み高台で、体部から口縁部にかけて直線的に伸びる。4は播鉢であり、口縁部は縁帯を形成し下方に垂れる。5は匣鉢であり、底部内面にヘラ状工具により「千」の窯記号が刻まれる。内面には、5カ所の高台径約3.5cmの痕跡が残り、小杯や小天目茶碗を焼くために使用されたと思われる。

6～127は堆積土から出土している。

#### 碗類

6～24は天目茶碗である。口唇部がS字状となり、口縁部が玉縁状になるものが多い。6・14～21・23は口唇部が直立し、口縁部が外反する。22は直線的に立ち上がり、口縁部がやや内傾する。8・13は鉄釉を施釉後、口縁部付近に灰釉を施釉している。19は高台部分に錆釉が施釉されているが、それ以外は露胎している。これらの口径は10.5～12.7cmの範囲内に収まる。25～31は丸碗であり、長石釉(25)、灰釉(26～28・31)、鉄釉(29・30)がみられる。体部下方で丸みを帯び、口縁部にかけて開き気味に立ちあがるものが多い。30は直線的に立ち上がる。30・31の高台は削り出し高台である。32・33は鉄釉の筒形碗である。32は体部下方で丸みを帯び、口縁部にかけて内傾気味に立ち上がる。口縁端部には面をもつ。高台は付高台であり、露胎している。33は高台は削り出し高台で、露胎している。34は腰折碗であり、体部下方に明瞭な稜があり、口縁部にかけて外側に開く。高台は露胎し、体部に鉄釉がかけられ、褐色に発色している。35～37は小天目茶碗である。灰釉(35・36)と鉄釉(37)がみられ、口唇部は直立し、口縁部は外反する。38は灰志野の小杯である。39～46は瀬戸黒筒形碗である。体部から口縁部にかけて直立するものが多い。体部下方は稜がみられるもの(41・44)と、丸みを帯びるもの(42)がある。体部外面に削りなどの調整はみられない。

#### 皿類

47～59は丸皿である。高台は、付高台と削り込み高台、削り出し高台がみられる。器高の高いもの(48・55)もみられるが扁平であり、体部から口縁部にかけて直線的に開くものが多い。58は口縁部を直立させる。内面にはソギがみられ、底部内面に18葉の菊花文が印花される。底部外面にはピン跡が3カ所みられ、他の陶器片も溶着している。59は2個体が溶着し、間に輪ドチがみられる。61～67は内禿皿である。高台は、付高台と削り込み高台がみられる。底部か

ら口縁部にかけて丸みをもって立ち上がるもの(61)、直線的に開くもの(62~64)、緩やかな稜をもって外側に開くもの(65~67)がみられる。68~71は、口縁部下方に稜がみられ外反する端反皿である。68は鉄釉、69~71は長石釉が施される。72~74は稜皿である。底部から口縁部にかけて直線的に開く。74は2個体が溶着し、上面の稜皿には輪ドチが溶着している。75は灯明皿であり、内面に3条の凸線が同心円状に巡る。76~82は折縁皿である。高台は、削り込み高台と削り出し高台がみられる。79は素地であり、施釉されていない。底部内面に16葉の菊文の印花がみられる。ソギが入るものと入らないものがみられ、多くの個体に輪ドチが溶着した痕がみられることから、これにより重ね焼きしている。82は、出土している折縁皿の中でも薄手のものである。

#### 鉢類他

83は黄瀬戸の大皿であり、内面に線刻がみられる。84~88は大皿である。体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁端部は丸く収める。88は口縁部が折縁状になる。89~94は、鉢・向付である。89・91は黄瀬戸であり、89は体部から口縁部にかけて直立し、口縁部が水平に引き出され、口縁部に胆礬がみられる。91は、内面に16葉の菊花の印花と線刻がみられる。92は鼠志野の鉢である。底部外面にトチンのような痕跡がみられる。93は志野の向付であり、体部には突起が1カ所みられ、半環足が1つ残る。発色不良であり、所々釉薬がはがれて露胎している部分が見られ、灰白色を呈す。94は志野の筒向付であり、外面には平行線と草絵が描かれる。底部外面には、円錐ピンが1カ所溶着している。

95~109は播鉢である。口縁部に縁帯を形成するものが多く、口縁部が内側に折り返されるもの(101・102・108)もみられる。101・102は口縁部が角張り、108は折り返しが小さく丸みを帯びる。前者は、口縁部が上方に延び端部がわずかに内傾するもの(96~99、104)、口縁部下方が垂れるもの(103)、引き出されるもの(105・106)、斜めに延びるもの(95・100・107)がみられ、バリエーションに富む。95は小型の播鉢であり、口径20cm未満の播鉢はこの1点しかみられない。110~112は徳利である。110・111は口縁部が外反し、ラップ状に開く。113は茶入であり、底部のみが残存する。肩衝形の茶入と思われる。114は壺である。口縁部は肥厚し、上面にわずかな凹みを有する。鉄釉が施釉されるが、上面には施釉されていない。115は、S字状の口縁部になり内外面が全面に施釉され、桶の可能性が考えられる。116・117は水指または建水である。116は口縁部付近でくびれがみられ、口縁部は外反する。

#### 窯道具

118~120はハサミ皿である。118は内外面に自然釉がかかるため、両面が使用された可能性が考えられる。120は内面の輪ドチから、灰釉の皿類の焼成に使用され、内面にわずかに自然釉が付着する。121~124は匣鉢である。121は小型であり、皿一枚を焼くためのものである。122は天目茶碗を焼くのに用いられている。上面に一部ヨリ輪の跡が残り、外面に一部自然釉がかかる。123は底部内面にヘラ状工具により「千」、124は「/X\」の窯記号がみられる。126は蓋である。製品か窯道具かは不明であるが、内外面に製品を置いた高台の痕跡がみられることから、窯道具とした。外面に自然釉がかかる。

### 3トレンチ 図110・111

現地表面から約60cmの深さで地山面となる。29層には多くの遺物や匣鉢がみられ、30層では遺物の量は減る。遺構は検出されていない。

## 遺物 図120

3トレンチは、天目茶碗が多く、丸皿と折縁皿は同数程度出土している。桃山陶では志野が多く出土している。

1・2は、表土から出土した匣鉢であり、底部内面に「/\」がみられる。2は内外面の一部に長石釉がかかっているため、志野製品を焼く際に使用されたと考えられる。3は、内面に菊の印花を押した匣鉢である。5～12は天目茶碗である。口唇部がS字状となり、口縁端部が丸く収めるものが多い。11のように、薄く引き延ばしたような口縁部もみられる。12は志野天目茶碗であり、口唇部は直立し、口縁部付近で外反する。13・14は灰釉丸碗である。13は体部から口縁部にかけて直線的であり、14は体部下方で丸みを帯び、口縁部付近で外反する。

16～18は丸皿である。16・17は器高が高く、体部から口縁部にかけて外側に開く。18は、素地であり施釉はされていない。19～22は折縁皿である。高台は削り込み高台で、器形は扁平である。23は襷皿で、口縁部をつまんで襷状にしている。発色不良であり釉薬は不明である。25は志野の向付であり、底部から口縁部にかけて外側に直線的に開く。26は徳利であり、口縁部は折縁状となる。28～30は窯道具の長脚ピンであり、皿を重ね焼きする際に使用される。31～33は、輪ドチである。33は器高のある輪ドチであり、小天目茶碗と溶着しているものもみられる。

## 4トレンチ 図112・113

現地表面から深さ約40cmで地山となる。3トレンチ同様の堆積状況であり、地山面に掘り込みがみられたが、根のカクランであり遺構は検出されていない。

## 遺物 図121

4トレンチからは、天目茶碗やソギの入らない折縁皿が多く出土している。

1～3は表土、12～14は、堆積土から出土した天目茶碗である。1・3・14は口唇部がS字状となり、口縁端部は丸く収める。2・12・13は口唇部が直立し、口縁部は外反する。4・5は表土、15は堆積土から出土した天目茶碗である。4は口唇部が直立し、5・15は緩やかなS字状の口唇部である。4は鉄釉、5・15は灰釉が施釉される。6は瀬戸黒筒形碗の底部であり、高台は指押さえにより整形している。

7は表土、16・17は堆積土から出土した丸皿である。いずれも灰釉が施釉され、7は底部から口縁部まで直線的に開き、16・17は底部から口縁部まで丸みをもって立ち上がる。8～10は表土、18・19は堆積土から出土した折縁皿である。器形は扁平であり、底部から口縁部まで直線的なものと、9のように底部付近でやや丸みを帯びるものが見られる。18・19は、歪みにより口縁部が開いている。11の挿鉢は口縁部に縁帯が形成され、口縁部下方がやや内側に引き出される。21は鉢であり、口縁部は折縁状となる。鉄釉施釉後に灰釉を施釉している。



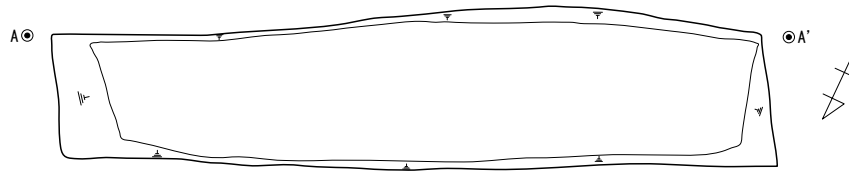


図 108 1 トレンチ平面図 (S=1/40)

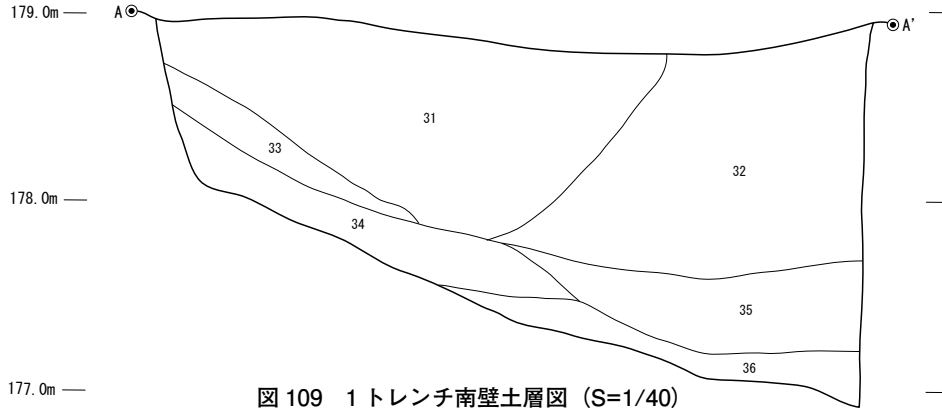


図 109 1 トレンチ南壁土層図 (S=1/40)



図 110 3 トレンチ平面図 (S=1/40)

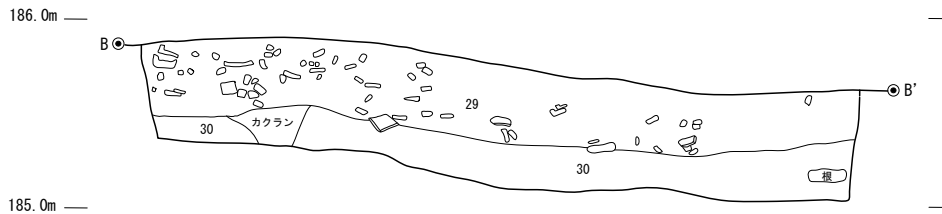


図 111 3 トレンチ西壁土層図 (S=1/40)

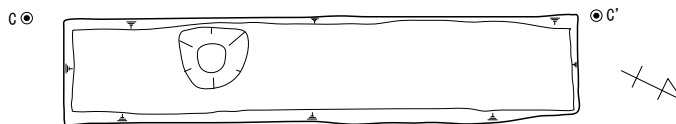


図 112 4 トレンチ平面図 (S=1/40)

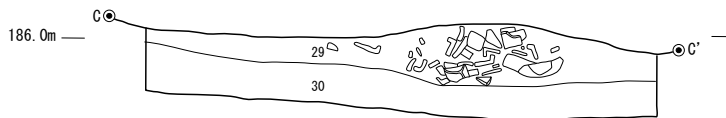
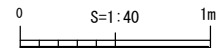


図 113 4 トレンチ西壁土層図 (S=1/40)



- |    |      |                               |      |  |
|----|------|-------------------------------|------|--|
| 29 | 暗黄褐色 | しまりあり                         | 粘性あり | Φ5～20mmの礫をわずかに含む〔竹の根のカクランをうけた表土〕                     |
| 30 | 暗褐色  | しまりあり                         | 粘性あり | Φ5～40mmの礫を少量含む〔遺物等を含む堆積土〕                            |
| 31 | 暗褐色  | しまりあり                         | 粘性あり | Φ5～30mmの礫を少量含む〔遺物、窯道具を含む堆積土〕                         |
| 32 | 黒褐色  | しまりあり                         | 粘性あり | Φ5～20mmの礫を少量含む〔西窯の灰層の土も含む堆積土。遺物、窯道具を多く含む〕            |
| 33 | 灰褐色  | しまり弱い                         | 粘性あり | Φ5～20mmの礫を少量含む〔窯の灰層の土も含む堆積土。遺物、窯道具を多く含む〕             |
| 34 | 褐色   | しまり弱い                         | 粘性あり | Φ5～20mmの礫を少量含む〔遺物、窯道具を含み、地山の土を含む堆積土〕                 |
| 35 | 暗灰褐色 | しまり弱い                         | 粘性あり | Φ5～20mmの礫を少量含む〔黒色土が混じり、カクランを受けている。窯道具を大量に含み、遺物もみられる〕 |
| 36 | 地山   | 粘土を部分的に含み、鉄分が多い。平坦ではなく、凹凸がある。 |      |  |

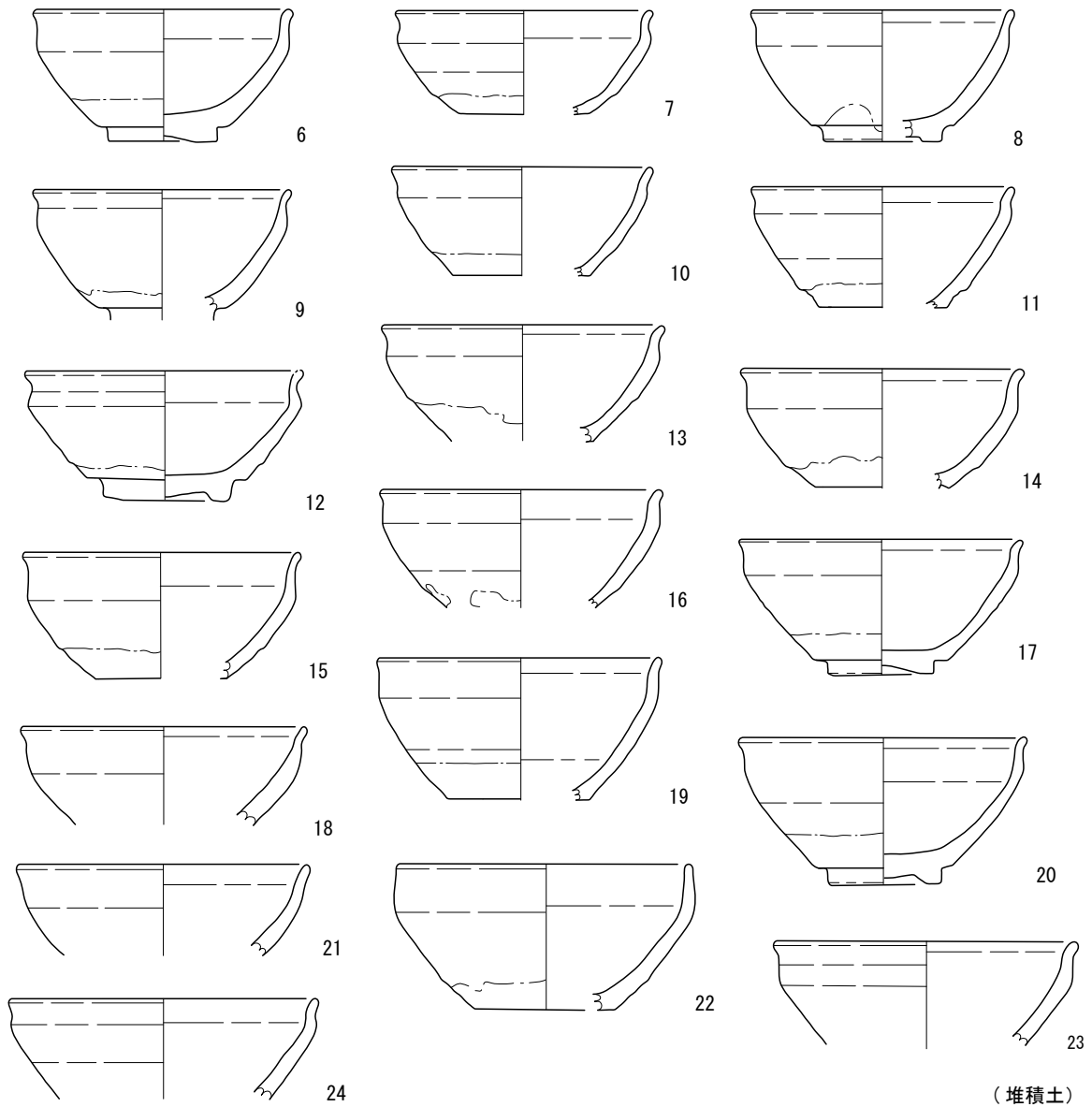
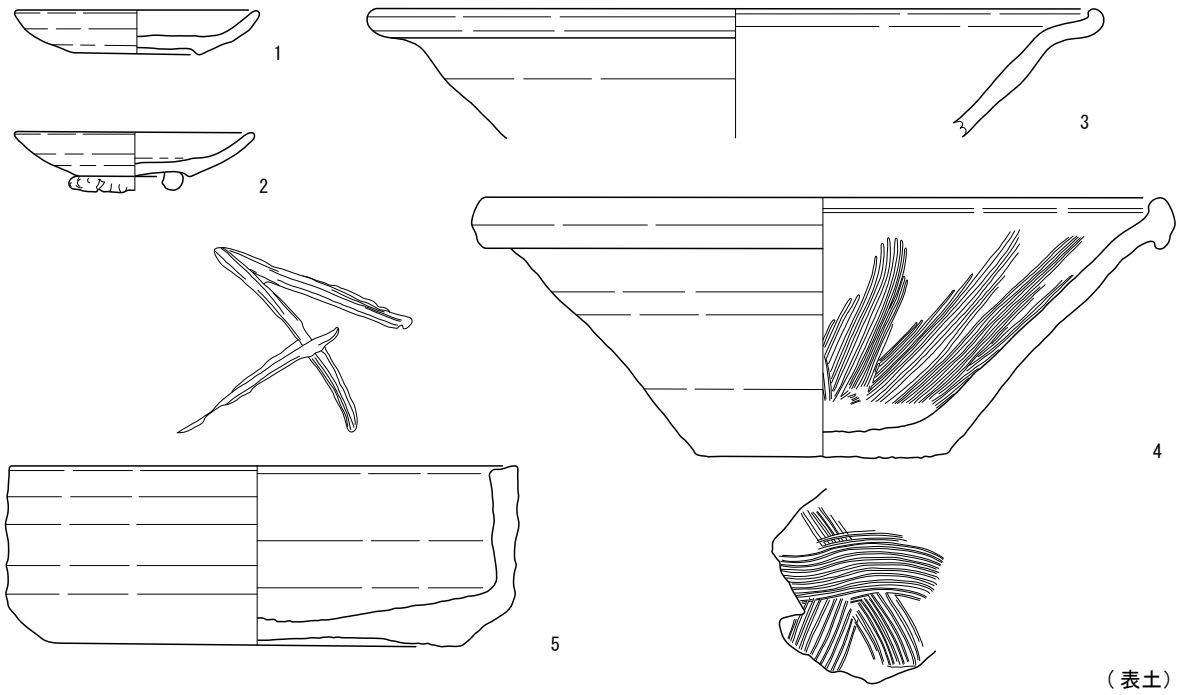


図 114 大萱寮下1トレンチ出土遺物 1 (S=1/3)

0 S=1:3 10cm

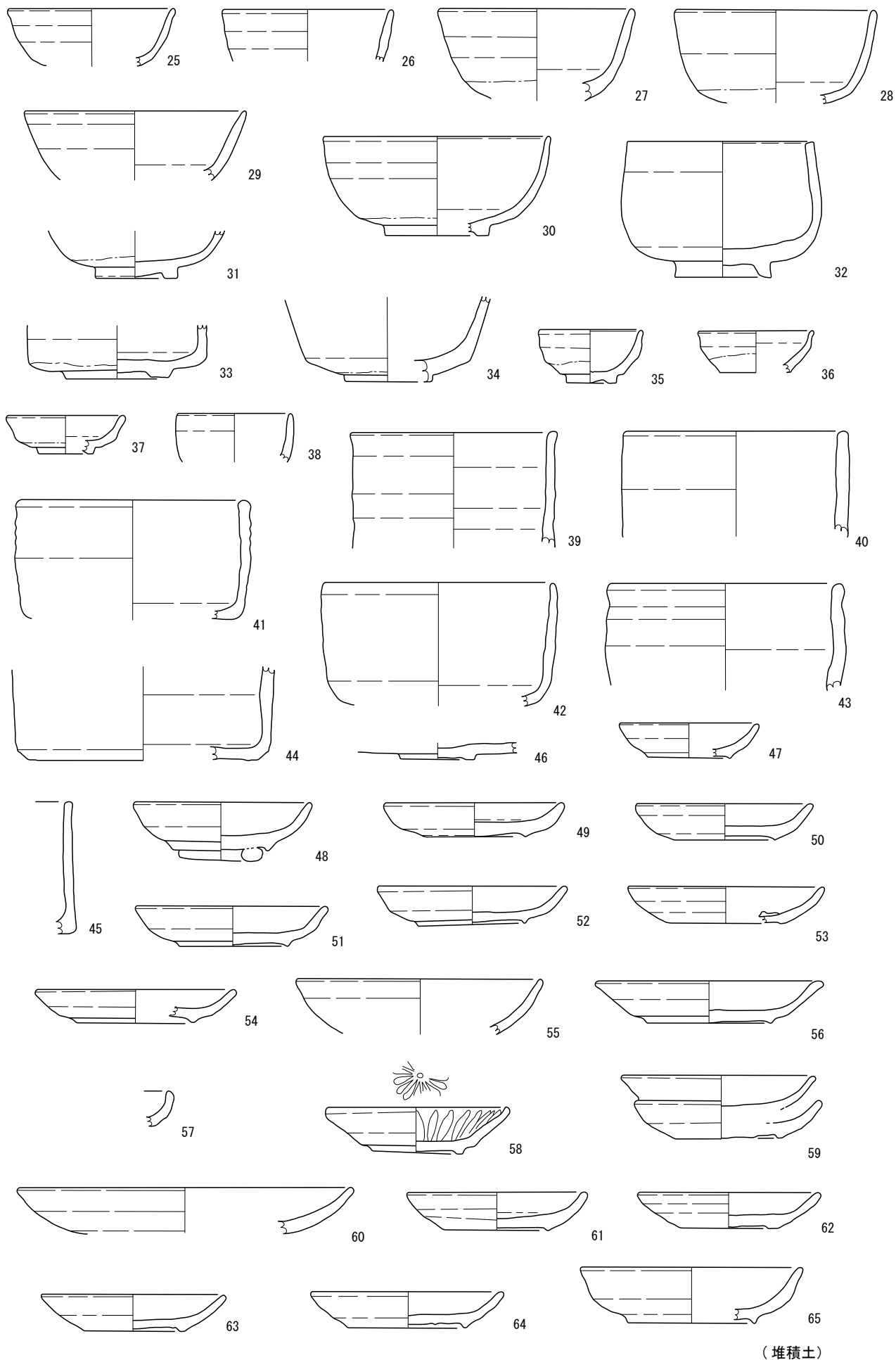
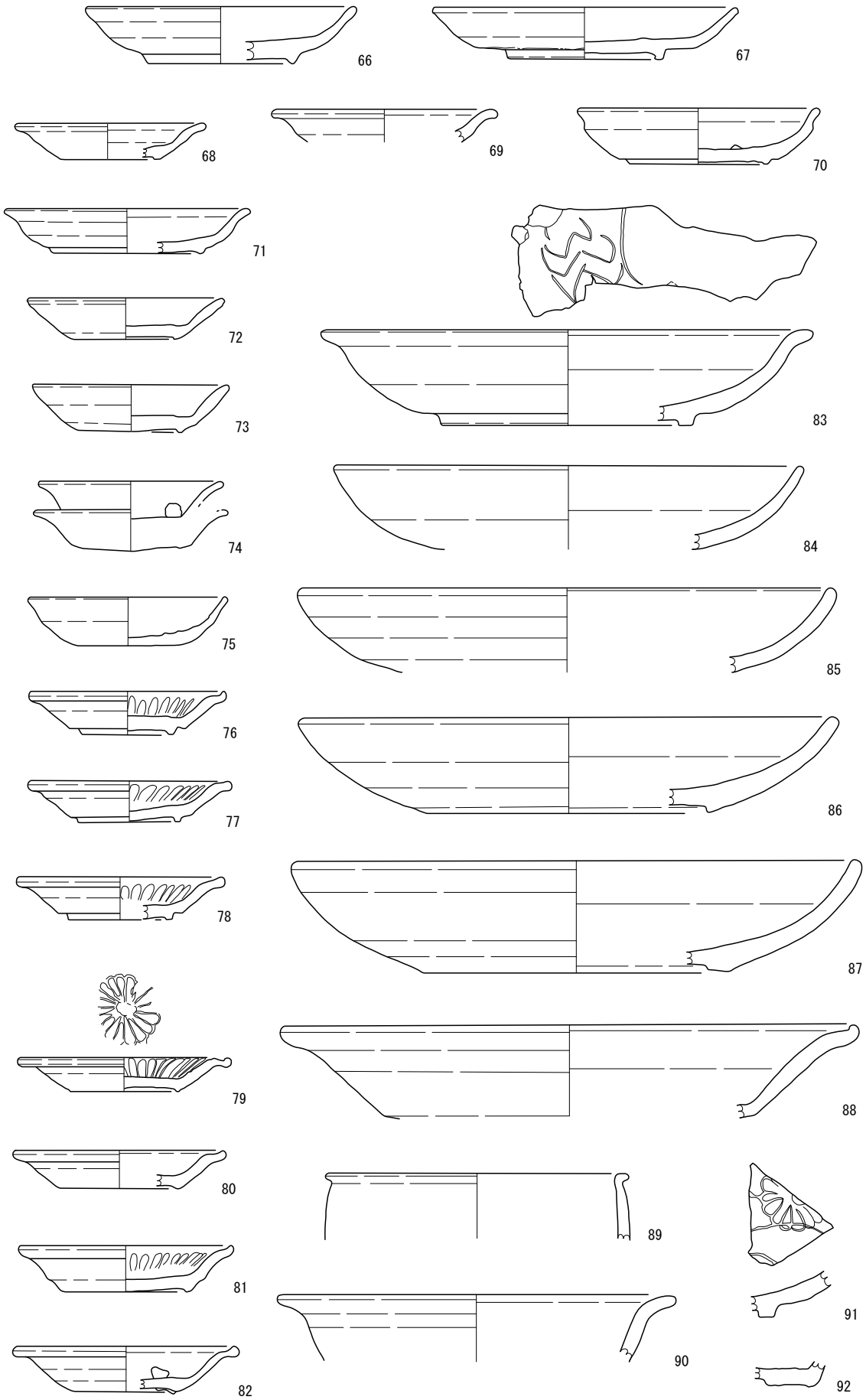


図 115 大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 2 (S=1/3)



(堆積土)

図 116 大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 3 (S=1/3)

0 S=1:3 10cm

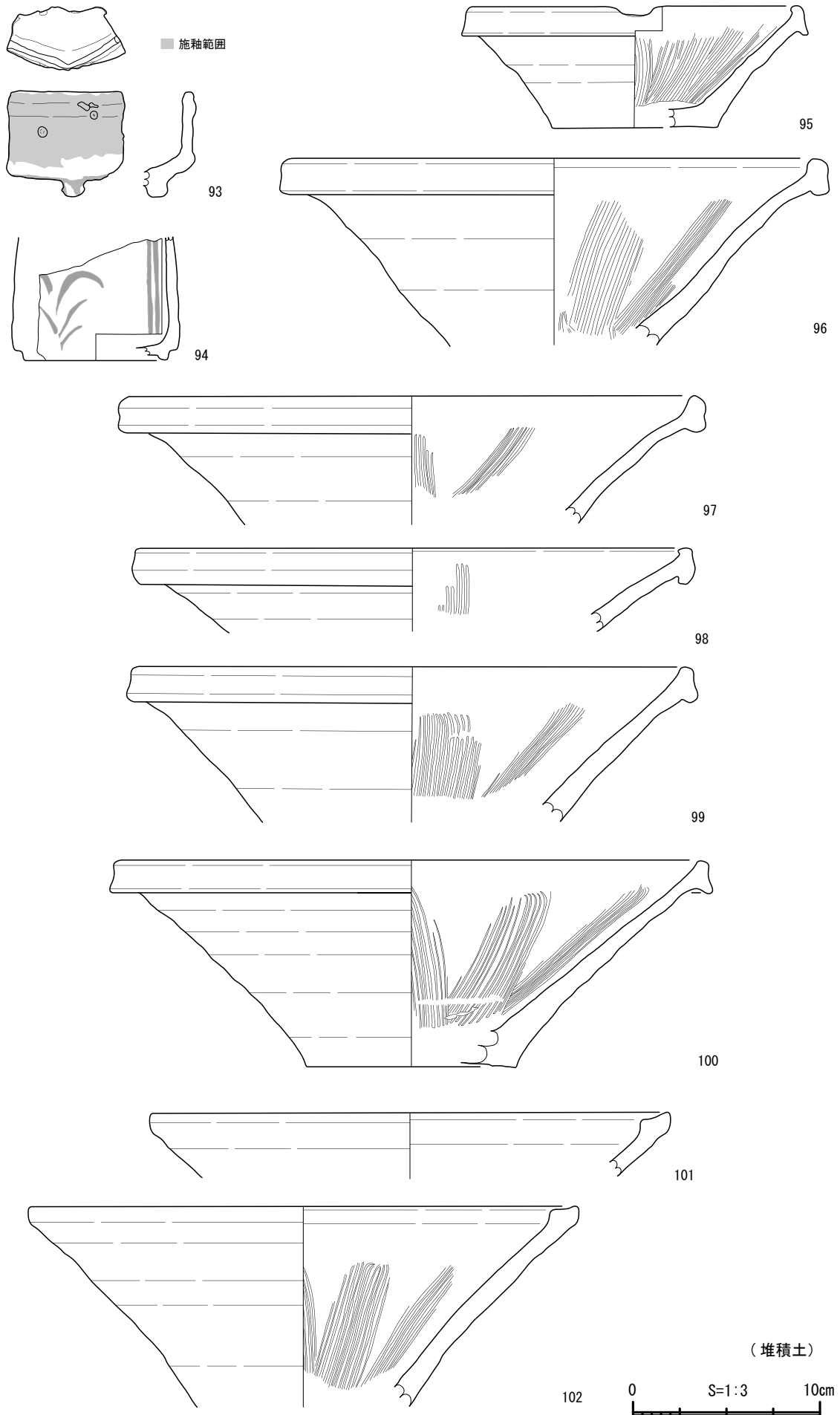


図 117 大萱窠下 1 トレンチ出土遺物 4 (S=1/3)

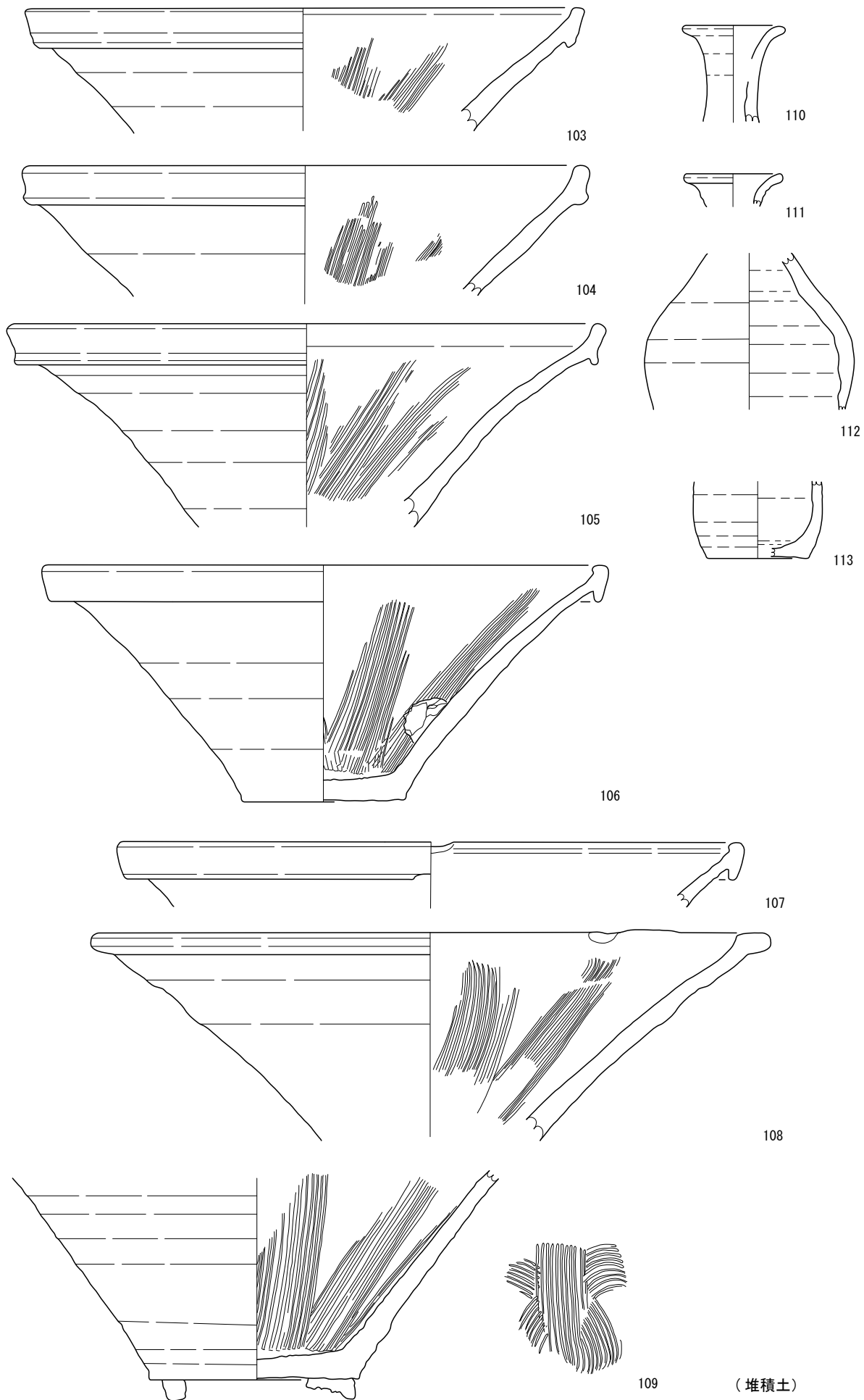


図 118 大萱窯下 1 トレンチ出土遺物 5 (S=1/3)

0 S=1:3 10cm

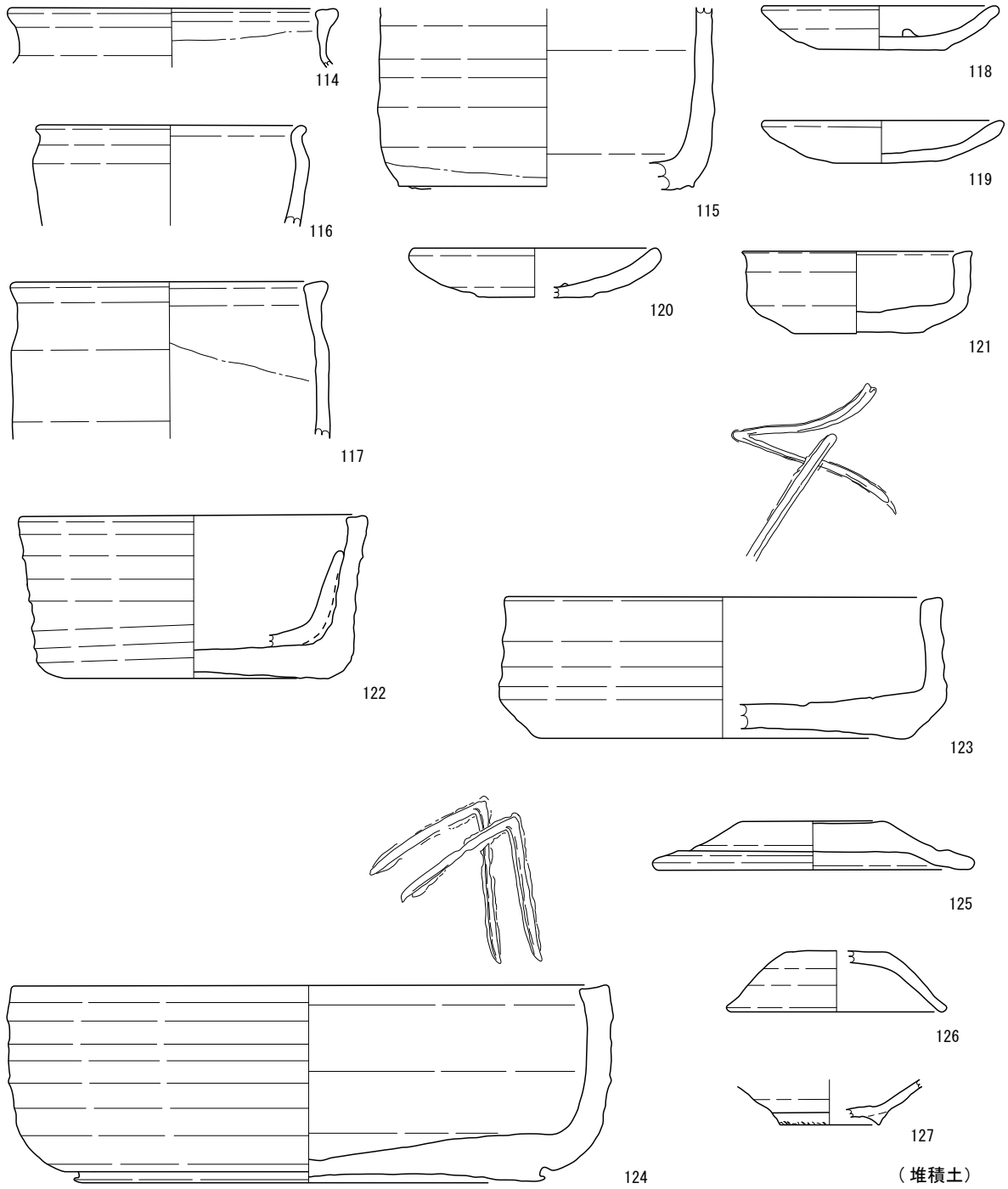


図 119 大萱窠下 1 トレンチ出土遺物 6 (S=1/3)

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	表土	灰釉	内禿皿	9.5	1.7	4.9	削り込み高台。底部外面にトチン痕。
2		表土	灰釉	内禿皿	(9.4)	1.8	4.4	削り込み高台。底部外面に輪ドチが溶着。底部内面にトチン痕。
3		表土	鉄釉	大皿	(28.4)	(5.0)		
4	4	表土	錆釉	搦鉢	(27.0)	10.4	9.5	内面に一部ボロが付着。楕目は1単位12~13本。外面にトチン痕。
5	5	表土		匣鉢	(20.1)	7.1	15.7	底部外面に回転糸切痕と灰釉製品のはがれ痕。
6	6	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.5)	5.6	4.6	
7		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.6)	(4.4)		
8		堆積土	鉄釉 / 灰釉	天目茶碗	(10.8)	5.6	(4.8)	
9		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.8)	(5.1)		
10		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.8)	(4.6)		
11		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(10.9)	(5.2)		
12		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.6)	5.5	5.0	断面に釉がかかり、焼成中に割れたと思われる。
13		堆積土	鉄釉 / 灰釉	天目茶碗	(11.6)	(5.0)		
14		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.6)	(5.0)		
15		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.6)	(5.9)		
16		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.7)	(4.9)		
17		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.9)	5.7	4.4	
18		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.9)	(4.2)		
19	19	堆積土	鉄釉 / 錆釉	天目茶碗	(11.9)	(6.1)		内面にわずかにボロが付着。
20	20	堆積土	鉄釉	天目茶碗	12.0	6.3	4.8	
21		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.1)	(3.9)		
22		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.2)	(6.2)		
23		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.4)	(4.4)		
24		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.7)	(4.2)		
25	25	堆積土	(志野)	丸碗	(9.2)	(3.3)		
26		堆積土	灰釉	丸碗	(9.4)	(2.9)		
27		堆積土	灰釉	丸碗	(10.8)	(5.1)		発色不良。
28		堆積土	灰釉	丸碗	(11.0)	(5.3)		
29	29	堆積土	鉄釉	丸碗	(12.2)	(3.9)		
30		堆積土	鉄釉	丸碗	(12.5)	5.5	(5.8)	削り出し高台。
31		堆積土	灰釉	丸碗	—	(2.7)	(4.6)	削り出し高台。
32	32	堆積土	鉄釉	筒形碗	(10.5)	7.7	5.4	付高台。高台は施釉しない。
33		堆積土	鉄釉	筒形碗	—	(3.0)	(5.8)	内面の2カ所にトチン痕あり。
34	34	堆積土	鉄釉	腰折碗	—	(4.7)	(4.8)	内面に他の碗をはがした跡あり。
35	35	堆積土	灰釉	小天目茶碗	5.7	3.0	2.8	
36		堆積土	灰釉	小天目茶碗	(6.4)	(2.4)		
37		堆積土	鉄釉	小天目茶碗	(6.5)	(2.2)	(3.0)	歪みあり。
38	38	堆積土	(灰志野)	小杯	(6.3)	(2.8)		灰志野？
39	39	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(11.2)	(6.7)		
40		堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(12.2)	(6.0)		
41	41	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(12.5)	(6.7)		
42	42	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(12.8)	(7.0)		発色不良。
43		堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	(12.8)	(6.0)		内面にボロが付着。
44		堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	—	(5.2)		
45	45	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	—	(7.4)		底部外面に他の陶器片が溶着。口縁部外面にわずかに灰釉がかかる。
46	46	堆積土	(瀬戸黒)	筒形碗	—	0.9	4.2	
47	47	堆積土	灰釉	丸皿	(7.8)	2.0	(4.6)	付高台。
48	48	堆積土	灰釉	丸皿	9.7	2.8	5.2	付高台。底部外面にトチンが溶着。
49		堆積土	灰釉	丸皿	(9.8)	1.9	(5.6)	削り込み高台。
50		堆積土	灰釉	丸皿	(9.9)	2.1	(5.6)	削り込み高台。
51	51	堆積土	灰釉	丸皿	10.5	2.3		付高台。発色不良。
52	52	堆積土	不明	丸皿	10.6	2.3	6.0	付高台。発色不良。
53	53	堆積土	鉄釉	丸皿	(10.8)	2.1	(6.2)	削り込み高台。内面にトチン痕。
54		堆積土	灰釉	丸皿	(11.1)	1.9	(6.4)	付高台。
55		堆積土	灰釉	丸皿	(13.7)	(3.2)		
56	56	堆積土	(志野)	丸皿	(12.4)	2.4	(6.9)	付高台。
57		堆積土	(志野)	丸皿	—	(2.0)		
58	58	堆積土	灰釉	丸皿	10.1	2.6	5.2	削り出し高台。変形している。ソギ入り、印花あり。
59	59	堆積土	灰釉	丸皿	上 (10.6) 下 (10.2)	下2.1	下 (5.8)	削り込み高台。下の丸皿にトチン痕。
60		堆積土	灰釉	中皿	(18.6)	(2.6)		
61	61	堆積土	灰釉	内禿皿	9.9	2.1	5.6	削り込み高台。
62		堆積土	灰釉	内禿皿	(10.2)	2.0	(5.5)	削り込み高台。
63	63	堆積土	灰釉	内禿皿	10.3	2.1	(5.4)	削り込み高台。
64		堆積土	灰釉	内禿皿	(10.8)	2.0	(6.6)	付高台。底部外面にトチン痕。
65	65	堆積土	灰釉	内禿皿	(12.4)	3.2	(7.1)	付高台。
66		堆積土	灰釉	内禿皿	(13.8)	3.0	(7.4)	付高台。底部外面にトチン痕。
67	67	堆積土	灰釉	内禿中皿	(17.6)	2.7	(7.7)	付高台。
68		堆積土	鉄釉	端反皿	(9.4)	1.9	(4.8)	削り込み高台。
69		堆積土	(志野)	端反皿	(11.0)	(1.7)		
70	70	堆積土	(志野)	端反皿	(12.2)	2.9	(6.9)	削り出し高台。
71	71	堆積土	(志野)	端反皿	(12.3)	2.3	(7.6)	付高台。底部外面にトチン痕、底部内面にピン痕。
72	72	堆積土	鉄釉	稜皿	(10.0)	2.1	(5.1)	削り込み高台。内ハゲ。
73		堆積土	灰釉	稜皿	(10.0)	(2.5)		削り込み高台。発色不良。
74	74	堆積土	鉄釉	稜皿	上9.4 下9.7	下2.2	下5.0	2個体が溶着。削り込み高台。
75	75	堆積土		灯明皿	(10.1)	2.5	5.2	底部外面に回転糸切痕。
76		堆積土	灰釉	折縁皿	(10.0)	2.2	(4.7)	削り出し高台。発色不良。内ハゲ。ソギ入り。
77	77	堆積土	灰釉	折縁皿	(10.1)	2.2	(5.0)	削り出し高台。内ハゲ。ソギ入り。
78		堆積土	灰釉	折縁皿	(10.5)	2.2	(5.3)	削り出し高台。内ハゲ。ソギ入り。発色不良。
79	79	堆積土		折縁皿	(10.6)	1.8	(5.5)	削り込み高台。素地。ソギ入り。印花あり。
80		堆積土	灰釉	折縁皿	(10.7)	2.0	(6.0)	削り込み高台。内ハゲ。
81	81	堆積土	灰釉	折縁皿	(10.8)	2.4	(6.2)	削り出し高台。内ハゲ。ソギ入り。底部内面にトチン痕。
82	82	堆積土	灰釉	折縁皿	(11.2)	2.3	5.2	削り込み高台。内面にトチンが溶着。外面にトチン痕。

表 18 大萱窯下1トレンチ遺物観察表 1



番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
83	83	堆積土	(黄瀬戸)	大皿	(25.0)	5.0	(13.0)	削り出し高台、底部内面に線刻。
84		堆積土	灰釉	大皿	(24.0)	(4.3)		発色は黄瀬戸風。
85		堆積土	錆釉	大皿	(27.3)	(4.4)		
86		堆積土	錆釉	大皿	(27.4)	4.9	(14.5)	削り込み高台。
87	87	堆積土	錆釉	大皿	(28.9)	5.7	(15.8)	削り込み高台。
88		堆積土	錆釉	大皿	(29.4)	(4.8)		
89	89	堆積土	(黄瀬戸)	鉢	(15.0)	(3.4)		口縁部に胆礬が1カ所みられる。
90		堆積土	(黄瀬戸)	鉢	(20.0)	(3.5)		黄瀬戸風。
91		堆積土	(黄瀬戸)	鉢	—	(2.4)		大皿の可能性もあり。
92	92	堆積土	(鼠志野)	鉢	—	(1.2)		向付の可能性もあり。外面にわずかに掻き落としあり。
93	93	堆積土	(志野)	向付	—	5.6		体部に突起が1カ所あり。
94	94	堆積土	(志野)	向付	—	(6.6)	7.6	外面に鉄絵あり。底部外面に円錐ピン1カ所。
95	95	堆積土	錆釉	播鉢	(17.2)	6.4	(8.8)	底部外面に回転糸切痕あり。櫛目は1単位8本以上。
96		堆積土	錆釉	播鉢	(27.8)	(10.0)		櫛目の単位は16本。外面で釉が欠けている部分がある。
97		堆積土	錆釉	播鉢	(30.4)	(6.9)		
98		堆積土	錆釉	播鉢	(29.0)	(4.4)		
99		堆積土	錆釉	播鉢	(29.0)	(8.3)		櫛目の単位は1単位15本。
100	100	堆積土	錆釉	播鉢	(30.9)	11.0	(11.3)	櫛目の1単位18本。底部外面にトチンのはがれた痕あり。内面に一部ボロが付着。
101		堆積土	錆釉	播鉢	(27.4)	(3.4)		
102		堆積土	錆釉	播鉢	(29.0)	(10.6)		櫛目の単位は11～14本程度。
103		堆積土	錆釉	播鉢	(30.0)	(6.9)		櫛目の単位は13本以上。
104		堆積土	錆釉	播鉢	(30.0)	(7.2)		櫛目の単位は1単位17本。
105		堆積土	錆釉	播鉢	(31.6)	(11.0)		櫛目の単位は10本以上。
106	106	堆積土	錆釉	播鉢	(32.0)	12.9	(8.5)	底部外面に回転糸切痕あり。内面にトチンが溶着。櫛目の単位は1単位13本。
107		堆積土	錆釉	播鉢	(33.4)	(3.6)		
108		堆積土	錆釉	播鉢	(36.0)	(11.3)		櫛目の単位は1単位16本。
109	109	堆積土	錆釉	播鉢	—	(11.3)	(11.2)	櫛目の単位は11～16本。内面に窯壁片が溶着。底部外面にトチン痕。
110	110	堆積土	灰釉	徳利	(5.2)	(5.3)		
111	111	堆積土	鉄釉	徳利	(5.2)	(1.8)		徳利ではあるが、引き出しのように黒色を呈する。
112		堆積土	鉄釉	徳利	—	(8.6)		胴部最大径 (11.6)
113	113	堆積土	鉄釉	茶入	—	(4.2)	(5.2)	
114	114	堆積土	鉄釉	壺	(15.1)			口縁部上端には釉がかかっている。
115	115	堆積土	鉄釉	桶	—	(8.5)		胴部最大径 (15.7)。内面も施釉。
116		堆積土	鉄釉	水指・建水	(12.2)	(4.7)		
117	117	堆積土	鉄釉	水指・建水	(14.6)	(7.3)		
118		堆積土		ハサミ皿	10.9	2.0	5.9	内外面に自然釉。内面にトチン痕。
119	119	堆積土		ハサミ皿	11.0	2.0	4.7	底部外面に回転糸切痕。
120	120	堆積土		ハサミ皿	(11.3)	2.3	(5.2)	内面にわずかに自然釉が付着。灰釉の皿類に使用。底部外面に回転糸切痕。
121	121	堆積土		匣鉢	10.6	3.9	6.0	底部外面に回転糸切痕。
122	122	堆積土		匣鉢	(15.8)	7.6	12.0	内面に天目茶碗の破片が3片溶着。底部外面に回転糸切痕。
123	123	堆積土		匣鉢	(20.2)	6.6	(17.2)	底部外面に回転糸切痕。内面に窯記号。
124	124	堆積土		匣鉢	(27.8)	9.2	(21.2)	内面に窯記号。
125		堆積土		匣鉢蓋	(14.4)	2.6		上面径 (6.5)。天井部外面に回転糸切痕。
126	126	堆積土		蓋	(9.9)	2.9	4.8	外面に自然釉がかかる。底部外面にトチン痕。
127		堆積土		山茶碗 碗	—	(2.1)	(4.5)	底部外面に回転糸切痕。高台に靱殻痕。

表 19 大萱窯下1トレンチ出土遺物観察表 2

番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	表土		匣鉢	(15.6)	9.8	(12.6)	底部外面に回転糸切痕。底部内面に窯記号。内・外面に釉がかかっている。
2	2	表土		匣鉢	19.9	8.7	(16.0)	底部外面に回転糸切痕。底部内面に窯記号。
3	3	表土		匣鉢	—	(5.6)	(13.5)	内面に菊模様の印花。
4		表土		匣鉢蓋	(11.8)	2.2		上面径5.7。天井部外面に回転糸切痕。
5		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.0)	(4.0)		
6		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.4)	(3.9)		
7	7	堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.7)	(5.9)		
8		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(11.8)	(3.9)		
9		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.0)	(5.3)		
10		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.8)	(4.0)		
11		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(13.4)	(4.6)		
12	12	堆積土	(志野)	天目茶碗	(12.1)	(3.2)		
13	13	堆積土	灰釉	丸碗	(12.3)	(4.9)		
14		堆積土	灰釉	丸碗	(12.6)	(4.7)		
15	15	堆積土	灰釉	小杯	(7.0)	(2.3)		
16		堆積土	灰釉	丸皿	(9.9)	2.5	(5.2)	付高台。
17	17	堆積土	灰釉	丸皿	(10.0)	2.6	(5.5)	付高台。
18		堆積土		丸皿	(11.6)	(1.5)		素地。
19		堆積土	灰釉	折縁皿	(8.7)	1.9	(4.4)	削り込み高台。内ハゲ。内外面にトチン痕。
20		堆積土	灰釉	折縁皿	(10.4)	1.8	(6.2)	削り込み高台。内ハゲ。
21		堆積土	灰釉	折縁皿	(10.6)	(2.0)	(5.4)	削り込み高台。
22	22	堆積土	灰釉	折縁皿	(11.4)	2.0	(5.6)	削り込み高台。内ハゲ。
23		堆積土	不明	嬰皿	(11.0)	2.3	(5.8)	削り込み高台。内ハゲ。発色不良。
24		堆積土	(志野)	皿類	—	(1.1)	(8.4)	削り込み高台。
25	25	堆積土	(志野)	向付	—	(3.4)		
26		堆積土	鉄釉	徳利	(6.7)	(3.5)		
27		堆積土		ハサミ皿	11.5	3.3	4.7	底部外面に回転糸切痕。
28		堆積土		長脚ピン		3.4×2.2×5.4		
29	29	堆積土		長脚ピン		3.6×5.6×2.3		
30		堆積土		長脚ピン		4.8×3.4×2.1		
31		堆積土		輪ドチ		4.0×3.4×1.0		
32		堆積土		輪ドチ		4.5×4.2×1.4		外面に布目のような痕。
33	33	堆積土		輪ドチ		3.7×3.5×3.2		外面に布目のような痕。

表 20 大萱窯下3トレンチ出土遺物観察表

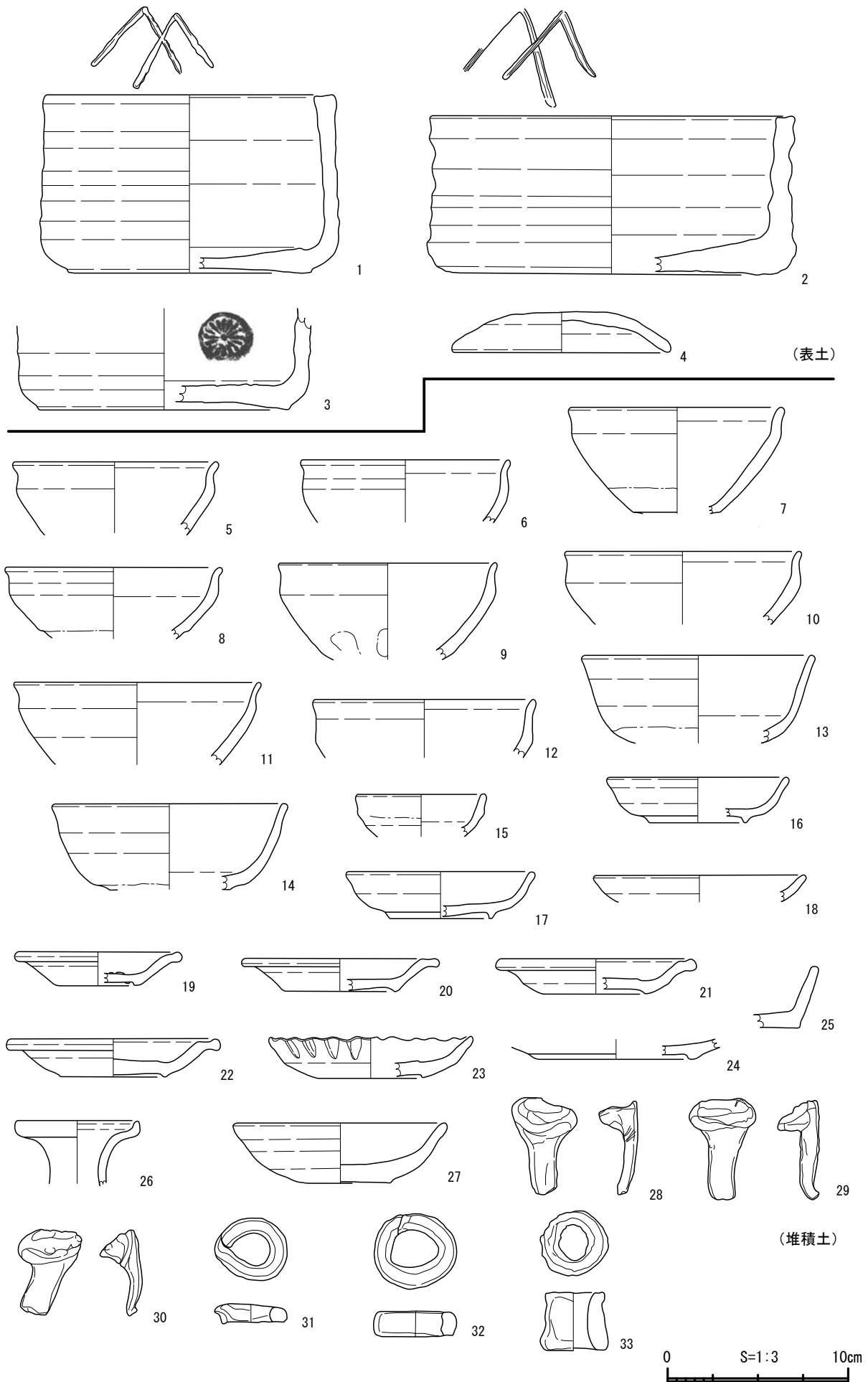
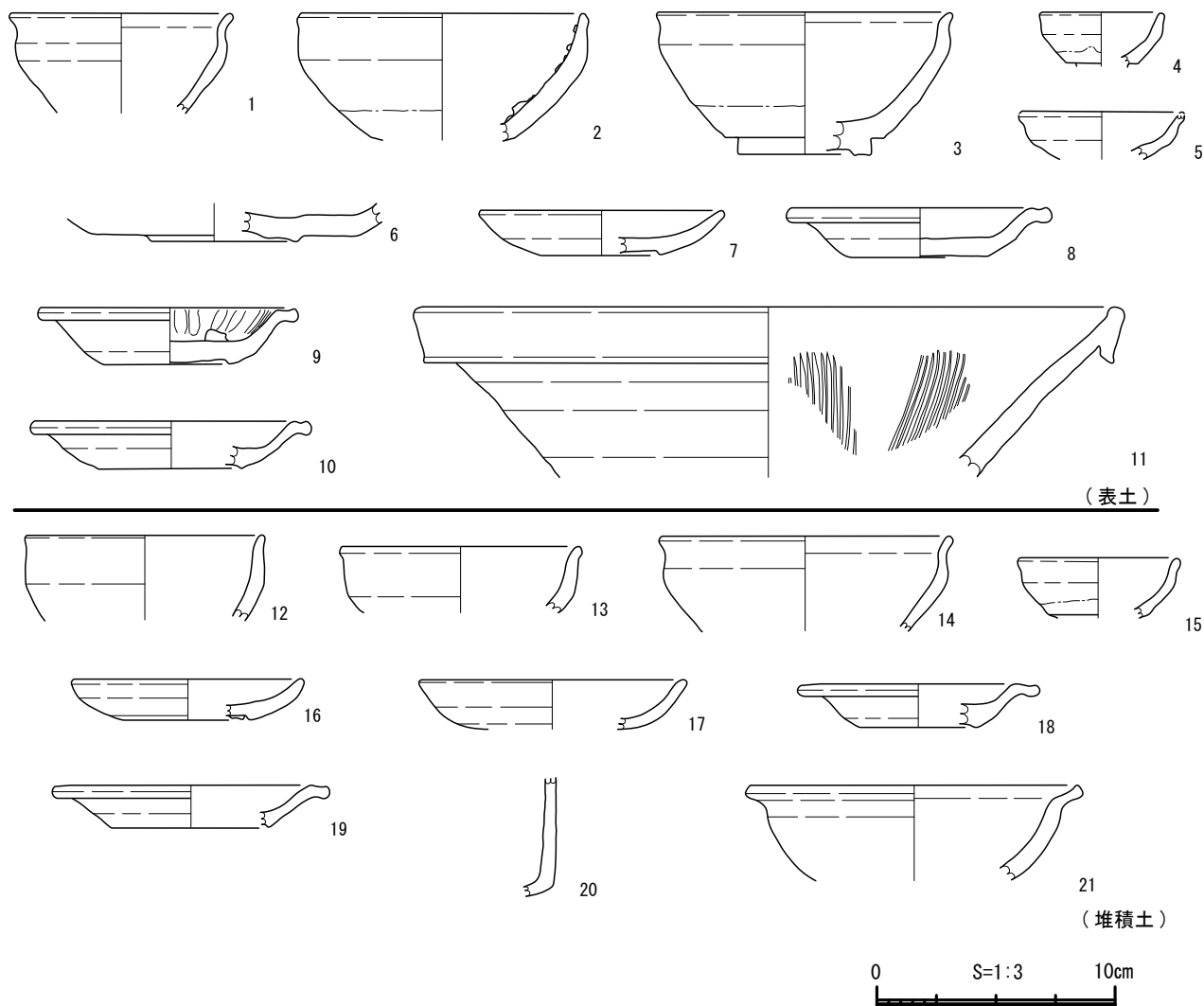


図 120 大萱窯下 3 トレンチ出土遺物 (S=1/3)



番号	写真	出土位置	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1		表土	鉄釉	天目茶碗	(9.1)	(4.1)		口縁部に一部自然釉がかかる。
2		表土	鉄釉	天目茶碗	(11.8)	(5.3)		内面にボロが付着。発色不良。
3		表土	鉄釉	天目茶碗	(12.1)	5.9	(5.6)	
4		表土	鉄釉	小天目茶碗	(4.9)	(2.2)		
5		表土	灰釉	小天目茶碗	(6.7)	(2.0)		
6	6	表土	(瀬戸黒)	筒形碗	—	(1.5)	(6.0)	歪みあり。
7		表土	灰釉	丸皿	(10.1)	(1.8)	(5.0)	削り込み高台。底部が一部変形。
8		表土	灰釉	折縁皿	(10.6)	2.0	5.5	削り込み高台。内ハゲ。底部外面にトチン痕。
9	9	表土	灰釉	折縁皿	(10.6)	2.3	(5.2)	削り込み高台。内ハゲ。ソギ入り。底部内外面にトチン痕。
10		表土	灰釉	折縁皿	(11.4)	2.0	(5.9)	削り込み高台。外面に他の陶器片が溶着。
11		表土	錆釉	播鉢	(28.9)	(7.1)		楡目は1単位10本以上。
12		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(9.8)	(3.5)		
13		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(9.9)	(2.9)		
14		堆積土	鉄釉	天目茶碗	(12.0)	(4.0)		
15		堆積土	灰釉	小天目茶碗	(6.6)	(2.5)		外面に他の陶器片やボロなどが溶着。
16		堆積土	灰釉	丸皿	(9.4)	1.7	(5.3)	削り込み高台。
17		堆積土	灰釉	丸皿	(11.0)	(2.1)		歪みあり。
18		堆積土	灰釉	折縁皿	(9.7)	1.9	(4.8)	削り込み高台。歪みあり。
19		堆積土	灰釉	折縁皿	(11.4)	1.7	(6.4)	削り込み高台。
20		堆積土	(志野)	向付	—	(4.8)		外面に自然釉がかかる。
21	21	堆積土	鉄釉	鉢	(13.7)	(4.1)		

図 121 大萱窯下4トレンチ出土遺物 (S=1/3)

## 第4節 過去採集資料

多治見工業高校が昭和6年頃に採集した大萱窯下古窯跡の資料は陶器・窯道具を含め448点に及ぶ。448点のうち、皿類が226点と半数近くを占め、桃山陶と呼ばれる瀬戸黒、黄瀬戸、志野は123点である。これらのうち、82点を図化した。また、『可児市史 第一巻』に掲載されている荒川豊蔵資料館採集の資料22点を再トレース、未掲載の資料を5点図化し合わせて掲載した。なお、窯道具は匣鉢、匣鉢蓋、輪ドチ、ハサミ皿がみられるが、今回の試掘調査で出土した資料に同様のものがみられるため、掲載していない。

これら採集資料は出土地点の詳細な記録が残っておらず、大萱窯下古窯跡のどこで採集されたものなのか1号窯か2号窯かも不明であり、現地観察においても過去に掘られたような凹みはみられない。また、採集の際に取捨選択があったことも念頭に置かなければならない。

### 碗類

碗類は、丸碗、筒形碗、天目茶碗、小天目茶碗、小碗、小杯がみられる。

丸碗は腰部から口縁部にかけて開き気味に直線的に立ちあがるものと口縁部付近でやや外反するものがみられ、高台は削り出し高台である。鉄釉製品(1)と灰釉製品(2・3)があるが、灰釉製品はわずかであり、釉薬による器形の区別はみられない。筒形碗は少なく、4は腰部から口縁部にかけて直線的に延び、口縁端部は丸みを帯びる瀬戸黒である。7・8は天目茶碗であり、口唇部が7はゆるやかなS字状となり、8は直立する。

### 皿類

皿類には、丸皿、端反皿、折縁皿、内禿皿、襷皿、菊花形皿、輪花皿、大皿、灯明皿がみられる。折縁皿が最も多く、ついで丸皿が多い。

丸皿は、口径5～6cmの小型のもの10cm前後のものが多くを占める。大きさによる形状の違いはみられず、体部から直線的に立ちあがるものと、丸みを帯びるものがみられる。釉薬は鉄釉と灰釉のものがみられ、灰釉が多くを占め鉄釉のものは少ない。

折縁皿は、口径が10～11cmのものが多く、13～14cmの大きさものと2種類がみられる。ソギが入るもの(21)と入らないもの(20・22)がみられるが、大きさによる区別はない。全て灰釉である。22は内面に4～5本の櫛で二重の円を描き、その外に五弁花を刻んで線刻文を巡らす。

襷皿には灰釉(23)と鉄釉(24)がみられる。26・27は輪花皿である。26は底部内面が輪禿げになり、内面に櫛描波状文が巡る。釉調は黄瀬戸風である。27は、体部外面に縦方向にソギが入る。体部外面にソギが入る皿は1点のみであり、土岐市隠居表1号窯では同様の折縁皿が2点出土し、隠居表の折縁皿の高台は付と削りの両方がみられる。

### 香炉・茶入

31～35は香炉である。灰釉のみであり、口縁端部が内傾する。36の鉢は、口縁部から腰部にかけて輪花にし、口縁部にはソギが入る。38・39は大海形、40は肩衝形の茶入である。

### 瀬戸黒

41～53は瀬戸黒筒形碗である。高台は削り出し高台と削り出し後に指押さえを行うものがみられる。腰部で丸みをもつ切立形と折れる半筒形がみられるが半筒形が多い。45は体部外面にヘラケズリを行い、47～50は体部を整形されている。

### 黄瀬戸

54～74は黄瀬戸である。発色により緑色を呈するもの(58・67・68)もみられるが、器形から黄瀬戸の分類の中に含める。向付は平向付と筒向付がみられ、54、68は内面に、61～65

は外面に草文の線刻がみられる。58は、口径11.2cmの一回り小さな個体を重ね焼きしている。62は、内面に重ね焼きの際に礫を使用した跡が残る。

66は、変わり黄瀬戸向付である。黒色に発色した鉄釉を施し、胴部に長石系の釉で絵を描く。絵は草のように思われるが、全体は不明である。67は内外面に釉薬が施され、香炉の可能性も考えられるが、消費遺跡内で出土する香炉と異なるため、筒形容器とした。68は内面に草花が線刻で描かれ、重ね焼きの際に礫を使用した跡が残る。70には底部内面に線刻があるが、残りが悪いため何が書いてあるか不明である。71は発色不良であるが、内面に竹の文様が描かれる。72は体部外面に縦方向にソギが入り、内面には印花と線刻がみられる。73・74は徳利の肩部に線刻文様が入る。

76・77は灰志野の向付であり、ともに削り込み高台である。76は、内面にピンの痕が3カ所みられる。

### 志野

78～102は志野である。志野天目茶碗と志野丸皿は他の釉薬同一器種との違いがみられないが、端反皿は他の釉薬では数が少ない器種であり、志野の割合が多い。83は底部内面にピンの痕が2カ所、底部外面に円錐ピンが2つ溶着し、志野を焼く際に接触面積の少ないピンを窯道具として使用していることがわかる。84は体部に縦方向のソギが入り、底部内面と口縁部内面に鉄絵が描かれる。85は内面に鉄絵が描かれ、口縁部が内側に折り返される。86～91は四方向向付であり、外面に鉄絵が描かれる。発色により、赤茶色を呈するものと青灰色を呈するものがみられる。92は筒向付であり、外面に鉄絵、播座を3つ貼付けする。93は平向付であり、底部外面に半環足がついていたと思われる。底部外面をのぞき、内外面に長石釉が施釉される。重ね焼きをはがす際に、口縁端部の釉がはがれている。94は六角形、95は筒形になる小杯である。94は、焼けすぎにより灰色を呈する。95は、体部外面に灰釉製品の破片が溶着している。96は、口縁部と底部の内面に鉄絵がみられる。100は下絵に圏線が描かれ、外面のみに長石釉が施され、色調は白色にやや灰色が混じる。上面に欠損部分がみられるため、つまみがつくと考えられる。天井部径は13.1cmであり、口径から水指または建水の蓋と考えられる。101も外面のみに下絵、施釉がみられる。口径から100と同様に水指または建水の蓋と考えられる。102は、口縁部外面に鉄絵がみられる香炉である。103～107は鼠志野である。104はやや歪みがみられ、腰部にはヘラケズリを施す。内面に長石釉の掛け残しがみられる。107は口縁部を輪花にし、内面には縦方向のソギを入れ、底部には幾何学文様を掻きとり、長石釉を総掛けしている。

### 窯道具他

108は匣鉢蓋である。大型の蓋であり、天井部側面には指押さえに調整が施され、内面には板状の工具痕がみられる。また、内面には釘状の工具で線刻した後がみられ、「彦助なり」という文字がみられる。

109は小分炎柱といわれている。下面は一部残存しているが、上面及び裏面は欠損している。表面に「三月十二日」と釘状工具で線刻される他、指押さえなどの調整痕がみられる。表面は灰色を呈するが、側面は赤色を呈する。形状は角形をしており、焼けしまるが、自然釉の付着はみられない。大萱窯下1号窯の調査では、円柱形の小分炎柱が検出されており、角形の109が大窯の構築材の可能性は低いと考えられる。

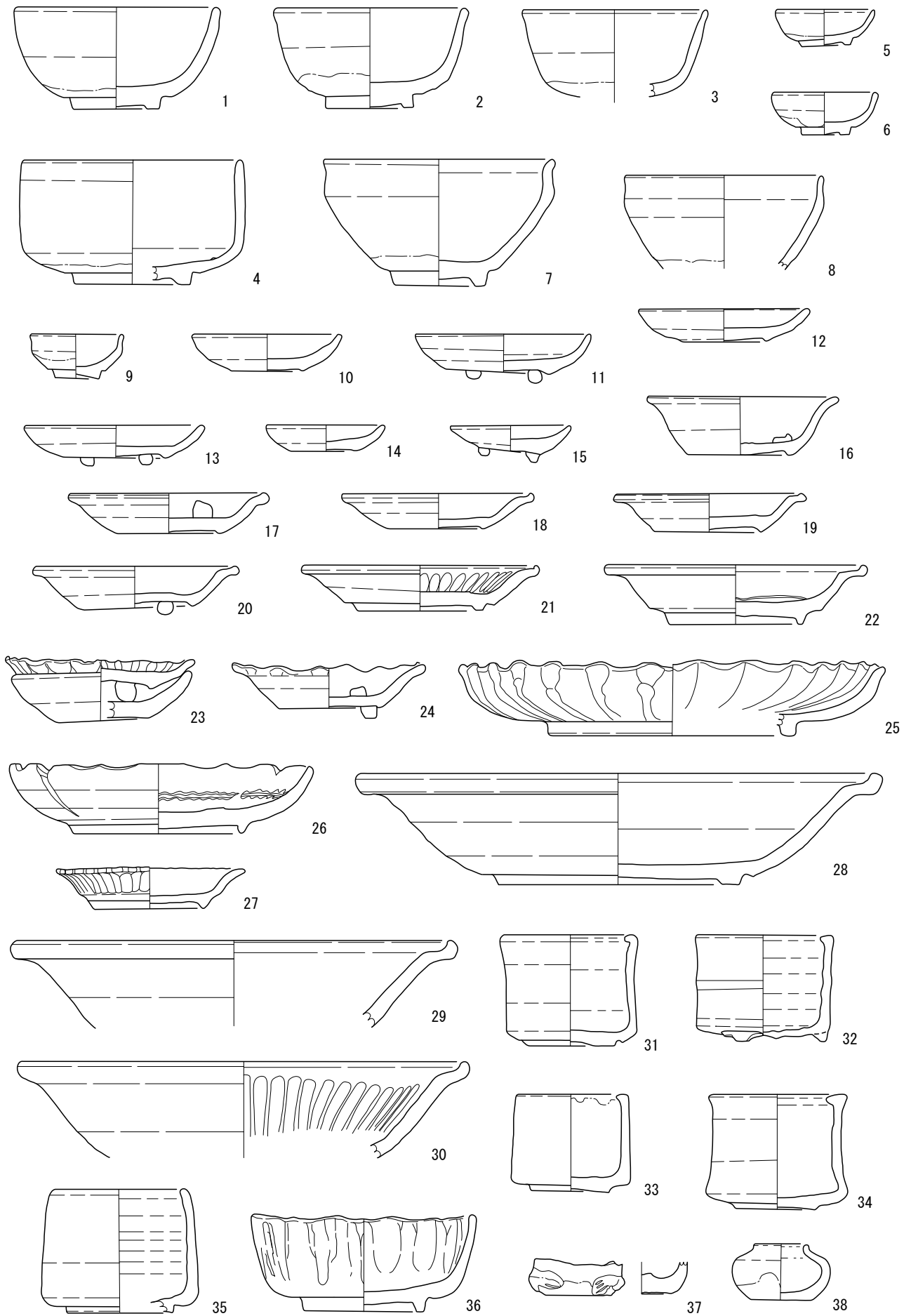


图 122 大萱窯下過去採集遺物 1 (S=1/3)

0 S=1:3 10cm

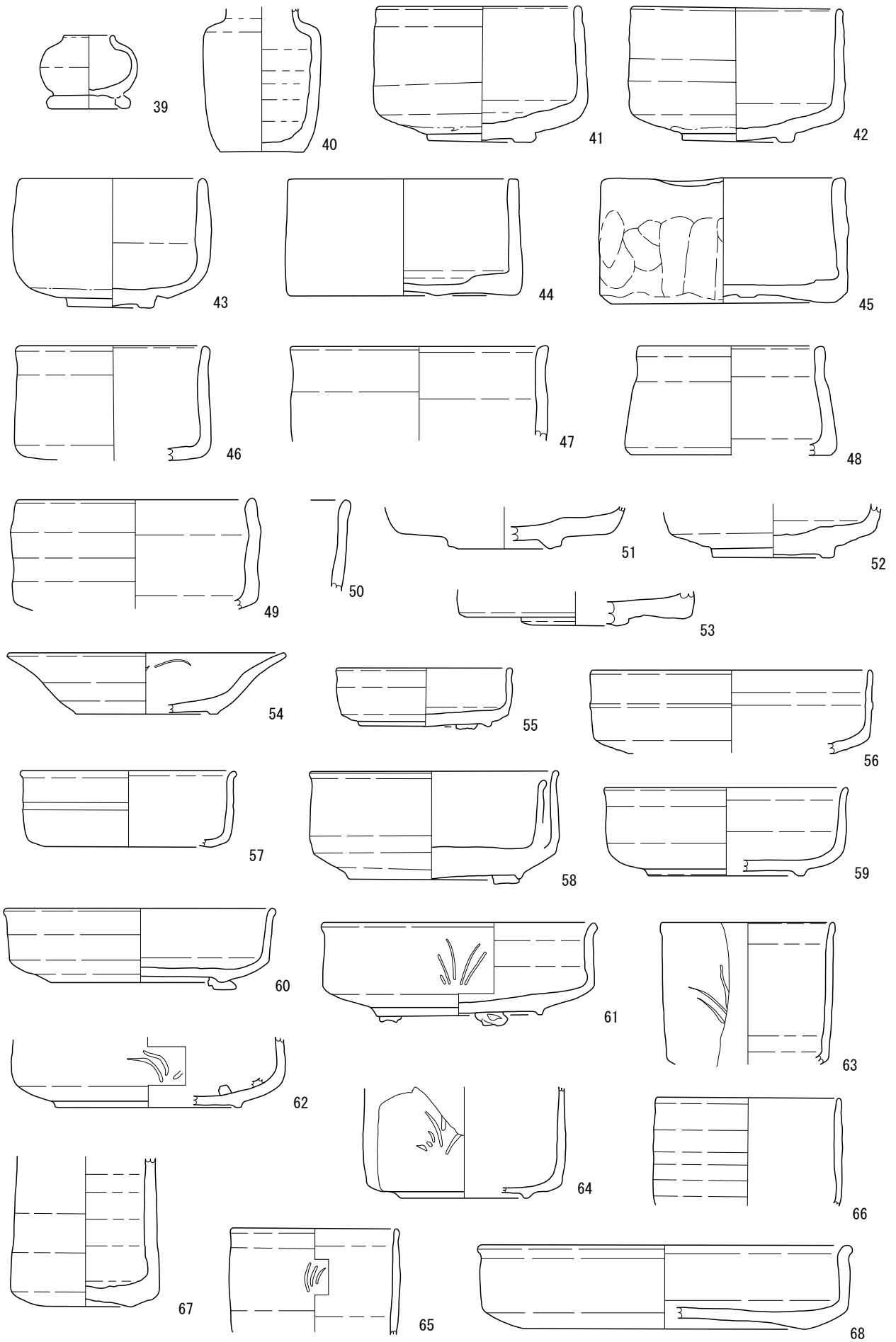


图 123 大萱窠下過去採集遺物 2 (S=1/3)

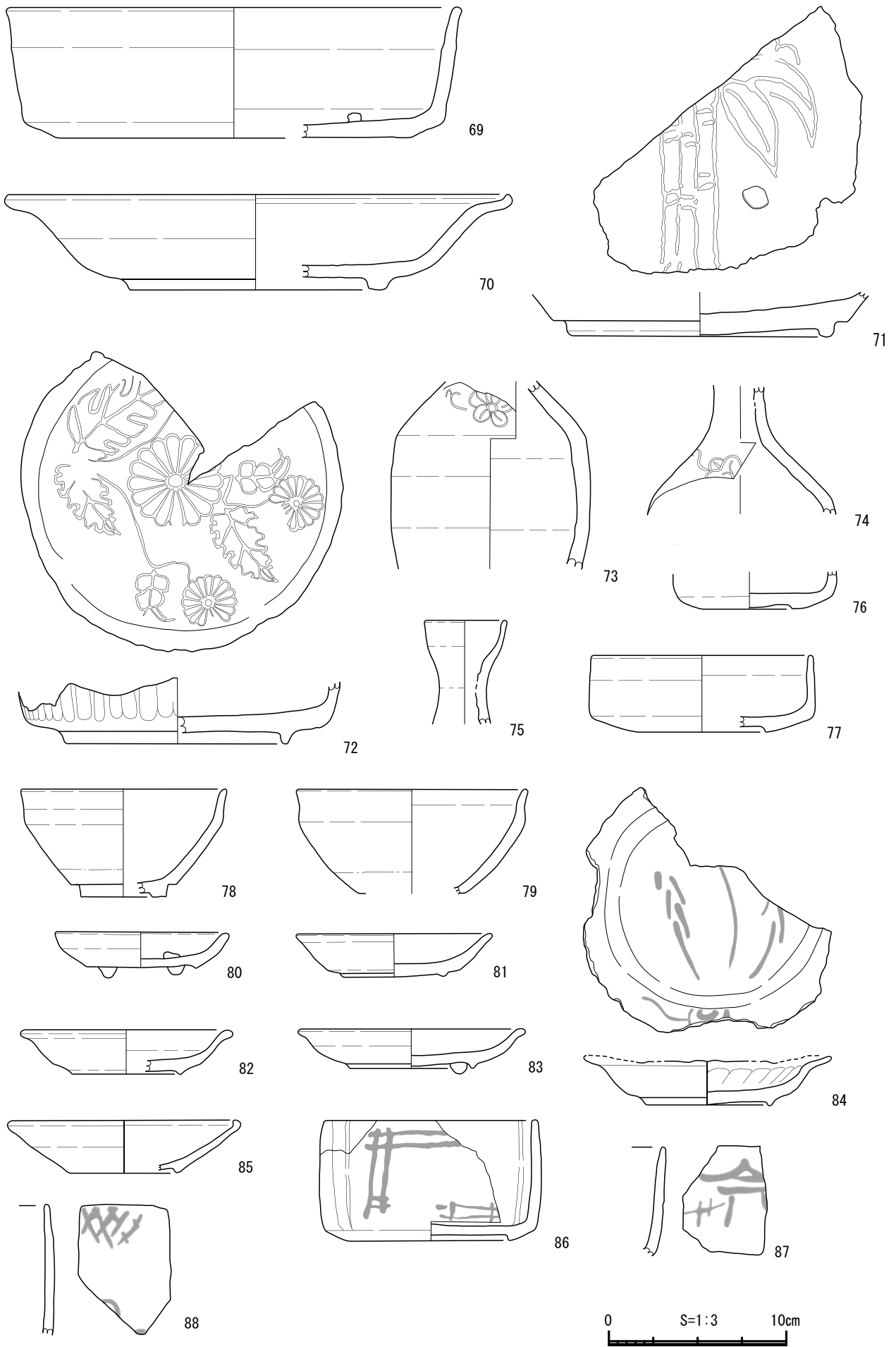


图 124 大萱窰下過去採集遺物 3 (S=1/3)



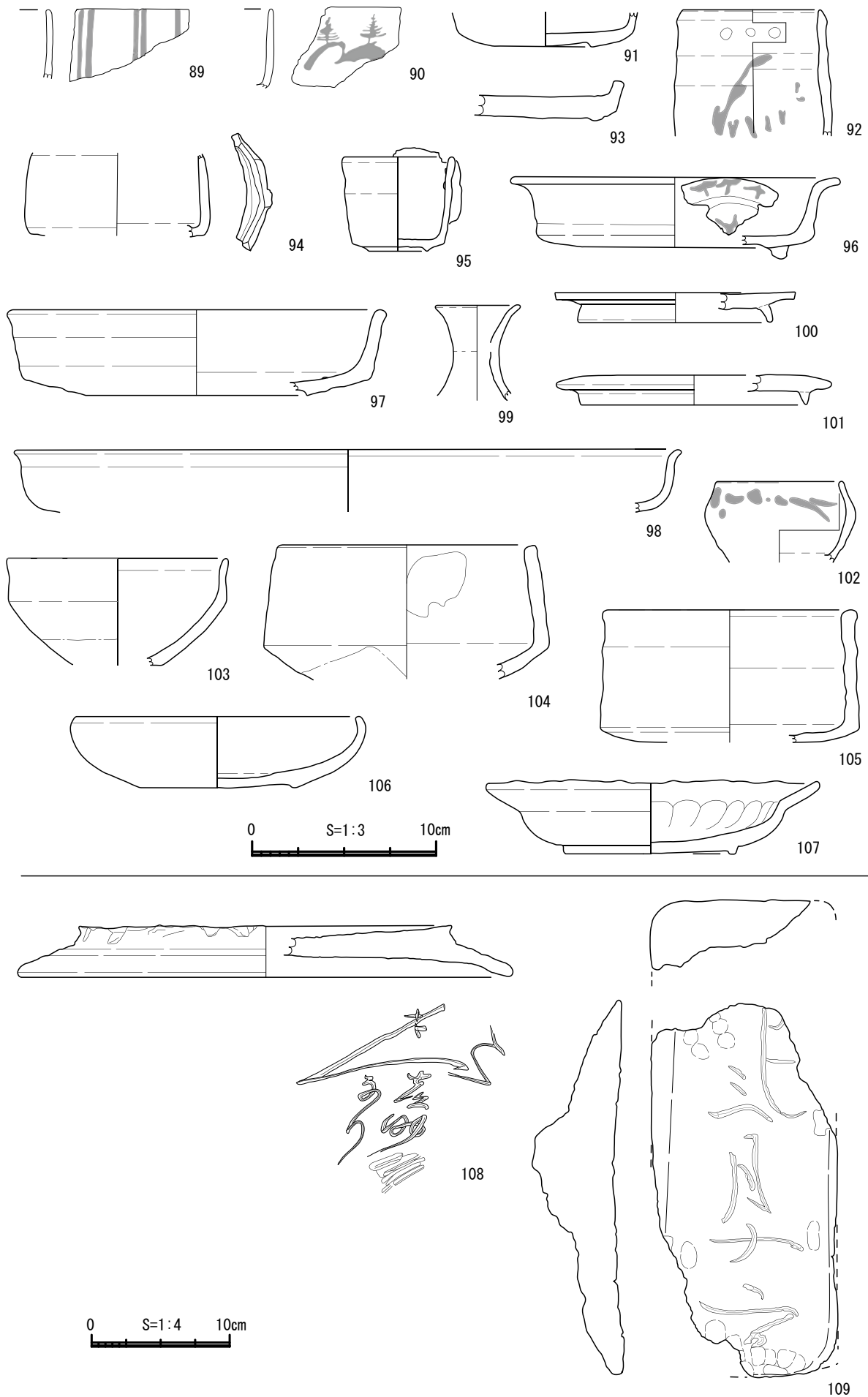


図 125 大萱窯下過去採集遺物 4 (S=1/3 108/109 のみ S=1/4)

番号	写真	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
1	1	鉄釉	丸碗	(11.1)	5.8	4.9	
2		灰釉	丸碗	(10.6)	5.7	4.9	
3		灰釉	丸碗	(10.4)	(4.9)		
4	4	鉄釉	筒形碗	(12.0)	7.0	6.5	内面にボロが付着。
5		鉄釉	小碗	5.5	2.1	2.8	
6	6	灰釉	小碗	5.7	2.4	2.6	
7	7	鉄釉	天目茶碗	(12.8)	7.2	5.1	
8		灰釉	天目茶碗	(11.0)	(5.3)		
9	9	鉄釉	小天目茶碗	5.1	2.5	2.5	
10		灰釉	丸皿	8.2	2.1	4.1	削り込み高台。
11	11	灰釉	丸皿	9.9	2.2	5.9	削り込み高台。底部外面に輪ドチが溶着。
12		灰釉	丸皿	9.5	1.8	4.8	削り込み高台。内面にボロが付着。
13	13	鉄釉	丸皿	10.0	1.9	5.5	削り込み高台。内面に輪ドチが溶着。
14		灰釉	丸皿	6.5	1.4	3.8	削り込み高台。
15	15	灰釉	丸皿	6.7	1.5	3.6	底部外面に輪ドチが溶着。
16		鉄釉	稜皿	10.6	3.3	5.7	削り込み高台。内面にピン痕が3カ所。
17	17	灰釉	折縁皿	10.8	2.3	5.6	削り込み高台。内外面に輪ドチが溶着。
18		灰釉	折縁皿	10.6	2.0	5.4	削り込み高台。内ハゲ。
19		灰釉	折縁皿	10.5	2.2	6.0	削り込み高台。内ハゲ。内外面に輪ドチ痕。
20		灰釉	折縁皿	11.4	2.4	6.1	削り込み高台。外面に輪ドチが溶着。
21		灰釉	折縁皿	13.0	2.6	7.1	削り出し高台。ソギ入り。輪剥げ。
22		灰釉	折縁皿	14.4	3.4	7.5	削り出し高台。
23	23	灰釉	嬰皿	10.2	1.6	5.3	削り込み高台。輪ドチ、ハサミ皿が溶着。
24	24	鉄釉	嬰皿	—	2.5	5.7	削り込み高台。内外面に輪ドチが溶着。
25	25	灰釉	菊花形皿	(23.7)	4.3	(13.6)	削り出し高台。
26		灰釉	輪花皿	(16.8)	4.0	(9.6)	付高台。釉調は黄瀬戸風。内面に櫛描波状文。
27	27	灰釉	輪花皿	(10.5)	2.4	6.0	底部外面に輪ドチ痕。底部内面に印花。外面にソギ入り。
28	28	鑄釉	大皿	(29.0)	6.3	13.7	削り出し高台。
29		鑄釉	大皿	(24.4)	(4.9)		
30	30	灰釉	大皿	(24.8)	(5.5)		ソギ入り。
31		灰釉	香炉	(7.2)	6.3	4.7	
32		灰釉	香炉	7.5	6.0	7.3	側面に2条の圈線がみられ、側面に沿った3カ所につまみ足(山形)を付ける。
33		灰釉	香炉	6.0	5.6	4.4	
34		灰釉	香炉	7.4	6.6	4.6	
35	35	灰釉	香炉	(7.2)	7.0	(5.9)	
36		灰釉	向付	(12.4)	5.6	(6.7)	削り出し高台。
37	37	鉄釉	水滴	—	(2.0)	3.5	底部外面に回転糸切痕。
38	38	鉄釉	茶入	(3.0)	3.2	3.4	底部外面に回転糸切痕。内外面に一部ボロが付着。
39	39	灰釉 / 鉄釉	茶入	(2.7)	3.5	3.3	外面には灰釉、内面には鉄釉。底部外面には輪ドチが溶着。外面にボロが付着。
40	40	鑄釉 / 鉄釉	茶入	—	(8.3)	4.7	底部外面に回転糸切痕。
41	41	(瀬戸県)	筒形碗	(11.1)	7.6	5.8	削り出し高台。内外面にボロが付着。
42	42	(瀬戸県)	筒形碗	(11.5)	7.4	5.8	底部に削り整形。
43		(瀬戸県)	筒形碗	(10.2)	7.3	4.7	発色不良。
44		(瀬戸県)	筒形碗	(12.5)	6.6	4.4	発色不良。
45		(瀬戸県)	筒形碗	(13.4)	7.1	3.8	体部外面にヘラによる縦横方向の削り整形。高台部分が腰部より内側にくいこむ。
46		(瀬戸県)	筒形碗	(10.3)	(6.1)		底部に削り整形。
47		(瀬戸県)	筒形碗	(14.3)	(5.3)		内外面に一部ボロが付着。
48		(瀬戸県)	筒形碗	(10.1)	(6.1)		底部外面削り整形。
49		(瀬戸県)	筒形碗	(13.6)	(5.9)		
50	50	(瀬戸県)	筒形碗	—	(5.1)		
51		(瀬戸県)	筒形碗	—	(2.4)	(5.2)	高台削り出し後、指押さえ。
52		(瀬戸県)	筒形碗	—	(3.0)	6.8	
53		(瀬戸県)	筒形碗	—	(2.0)	4.5	高台削り出し後、指押さえ。
54		(黄瀬戸)	向付	(15.3)	3.5	7.9	削り込み高台。口縁部に草文の線刻。胴部から高台まで削り整形。
55	55	(黄瀬戸)	向付	(9.5)	3.3	7.1	削り込み高台。底部外面にトチンが一部溶着。
56	56	(黄瀬戸)	向付	(15.6)	(4.7)		
57		(黄瀬戸)	向付	(12.0)	4.3		
58	58	(黄瀬戸)	向付	(13.8)	6.0	9.5	削り込み高台。内面に3カ所ピン痕と2カ所の溶着物。
59		(黄瀬戸)	向付	(13.7)	5.0	(8.8)	削り出し高台。内面に轆を使用したトチン痕と他の陶器片が溶着。
60		(黄瀬戸)	向付	(15.0)	4.2	9.5	底部内面に丸トチンが3カ所溶着。底部外面にトチンが2カ所溶着。
61		(黄瀬戸)	向付	15.0	5.3	9.2	外面に線刻あり。内面に印花、胆礬あり。重ね焼きして溶着。
62	62	(黄瀬戸)	向付	—	(3.9)	(10.2)	削り出し高台。外面に線刻あり。他の陶器片が溶着。
63		(黄瀬戸)	向付	(9.6)	(7.9)		外面に線刻。内面にボロが一部付着。
64	64	(黄瀬戸)	向付	—	(6.2)	(7.0)	外面に線刻。底部内面に石のピンの痕1カ所。
65		(黄瀬戸)	向付	9.2	(5.9)		外面に線刻。
66	66	鉄釉	向付	(10.2)	(6.0)		変わり黄瀬戸。外面に掻き落としの絵。
67	67	(黄瀬戸)	筒形容器	—	(8.3)	5.1	内面にボロが付着。
68	68	(黄瀬戸)	鉢	(20.8)	4.8	(15.4)	内外面に轆を使用したトチン痕。内面に線刻。
69		(黄瀬戸)	鉢	(25.2)	7.3	(19.7)	底部内面に石のトチンが1つ溶着。内外面に一部ボロが付着。
70		(黄瀬戸)	大皿	(28.2)	5.3	(14.4)	底部内面にトチンのはがれ痕。
71	71	(黄瀬戸)	大皿	—	(2.6)	14.3	内面に竹の絵が線刻される。
72	72	(黄瀬戸)	鉢	—	(3.7)	12.3	底部内面に線刻と印花。底部外面にトチン痕。
73	73	(黄瀬戸)	徳利	—	(10.6)		胴部最大径(11.3)。頸部外面付近に印花と線刻。内面には薄く鉄釉。
74		(黄瀬戸)	徳利	—	(7.2)		頸部外面にボロが付着。2カ所に線刻。
75	75	灰釉	徳利	(4.4)	(5.8)		徳利Ⅱ類。
76	76	(灰志野)	向付	—	(2.2)	4.6	外面に一部ケズリにより面取り。
77	77	(灰志野)	向付	(12.3)	4.3	(7.3)	底部外面に輪ドチ一部溶着。内面にピン痕が1カ所。
78	78	(志野)	天目茶碗	(11.3)	6.2	(4.8)	
79		(志野)	天目茶碗	(12.7)	(5.8)		
80		(志野)	丸皿	9.5	2.0	6.0	内面2カ所、外面3カ所に円錐ピン痕。他の陶器片が溶着。
81		(志野)	丸皿	(10.8)	2.5	5.4	底部外面及び口縁部の一部に火色。
82	82	(志野)	端反皿	(11.3)	2.5	6.1	内外面にピン痕が1カ所。
83		(志野)	端反皿	(12.4)	2.2	(6.8)	体部外面に重ね焼きのはがれ痕。
84	84	(志野)	輪花皿	(13.7)	2.8	6.9	付高台。底部外面に輪ドチ痕。

表 21 大萱窯下過去採集遺物観察表 1

番号	写真	釉薬等	器種	口径	器高	底径	備考
85	85	(志野)	皿	(12.6)	2.9	(6.0)	削り込み高台。口縁部と底部外面に火色。
86		(志野)	向付	(11.8)	6.8	(9.0)	口縁端部、腰部の屈曲部に火色。外面に円錐ピン痕。
87	87	(志野)	向付	—	(6.1)		口縁部に火色。外面に鉄絵。
88	88	(志野)	向付	—	(7.4)		口縁部に火色。外面に鉄絵。
89	89	(志野)	向付	—	(5.9)		外面に鉄絵。
90	90	(志野)	向付	—	(6.5)		外面に鉄絵。
91		(志野)	向付	—	(1.8)	5.0	底部外面に火色
92	92	(志野)	向付	(7.4)	6.8		外面に小粘土塊が3点。鉄絵。
93	93	(志野)	向付	—	2.2		角に脚が付着。底部外面に鉄絵。
94	94	(志野)	杯	—	(4.5)		外面に他の陶器片が溶着。
95	95	(志野)	杯	(5.8)	5.1	3.1	底部内面にボロが多く付着し、円錐ピン痕。
96	96	(志野)	鉢	(17.3)	(3.8)	10.2	削り出し高台。口縁部及び底部に火色、底部に円錐ピンが溶着。
97		(志野)	鉢	(19.8)	4.6	(12.0)	削り込み高台。内面にボロが付着。口縁部に火色。
98		(志野)	鉢	(35.8)	(3.4)		
99		(志野)	徳利	(4.3)	(5.2)		
100	100	(志野)	蓋	(10.4)	(1.6)		
101	101	(志野)	蓋	(12.2)	1.6		
102	102	(志野)	香炉	(6.6)	(4.4)		
103	103	(鼠志野)	天目茶碗	(11.8)	(5.8)		
104		(鼠志野)	筒形碗	(13.8)	(7.4)		
105	105	(鼠志野)	筒形碗	(13.4)	(7.2)		釉調の発色は白味をおびる。文様不明。
106	106	(鼠志野)	向付	(15.2)	3.9	8.5	削り込み高台。
107	107	(鼠志野)	輪花向付	(17.8)	4.1	(9.2)	
108	108	窯道具	匣鉢蓋	(35.7)	3.7		天井部径 (27.0)。天井部外面に回転糸切痕。内面に線刻。
109	109		小分炎柱?	(27.1) × 13.4 ×	(5.8)		「昭和八年春窯下西窯発掘」の注記あり。

表 22 大萱窯下過去採集遺物観察表 2

# 第5章 科学的調査

## 第1節 磁気・レーダー探査成果

奈良文化財研究所 金田明大

### 1. はじめに

可児市教育委員会は、桃山陶の代表的な産地である大萱古窯跡群の実態の解明と史跡の活用を目的として、愛知学院大学と連携して分布調査を実施している。その成果を基に、より詳細な窯跡の情報取得を目的として発掘調査を実施しているが、加えて非破壊的手法に基づく情報収集として探査の実施を計画した。奈良文化財研究所は、窯業生産遺跡の研究と保護に資する迅速な探査手法の確立についての研究を進めており、今回、可児市教育委員会と連携し探査を実施した。ここでは、牟田洞古窯跡および大萱窯下古窯跡の探査の成果と、発掘成果との比較について報告をおこなう。

### 2. 窯跡探査手法について

遺跡の探査手法としては複数の手法が提案、実践されているが、中でも窯跡については磁気探査、地中レーダー探査、電気探査という、代表的な探査手法のいずれにおいても実績を出している。中でも磁気探査については、遺構の探査可能深度に限界があるものの、迅速な探査が可能であり、また熱残留磁気による磁気異常という、窯が有する物理的な特性に応じた情報を取得することが可能であることから、窯跡の探査に好適な手法と考えることができる。反面、金属製の柵などの施設による影響など、外部の環境によるノイズに弱いことが課題であり、成果の検討は慎重である必要がある。

今回対象とした2つの窯跡群は、共に物原や窯壁の破片が地表に存在するなど、地表観察からそれほど深くない位置に窯体が存在することが予想された。現況は森林であり、史跡地を区画するフェンスや金属製のゴミが地表にあるなど、ノイズの存在も指摘できるが、極力除去に努め、磁気探査を実施した。磁気探査機は、フラックスゲート式磁気探査機 FM-36 (Geoscan社) を用いた。

探査は、基本的には等間隔に巻尺による測線を設定し、それに基づいて探査をおこなった。しかし、急傾斜地では測線のたるみや機器の保持の困難さにより、位置精度が低下するといった問題が存在した。このため、大萱窯下古窯跡の一部の探査においては測点を任意に設定し、トータルステーションで計測をしながら探査を進める手法をとった。計測値は、平面および高さ座標に磁気探査機器による計測値を加えた4つの値をもつ。これらのデータをGISソフトウェアに読み込み、TINによる補完後、磁気異常を示す計測値の等値線図を生成した。これにより、測線設定の煩雑さを回避し、位置精度の向上とより詳細な測定間隔による計測が可能となった。作業効率は向上したが、試験的な実施であり、更なる洗練による高速化や、得られた成果の既存成果との比較が今後課題となる。

### 3. 牟田洞古窯跡の探査 図126

牟田洞古窯跡は複数の窯の存在が想定されたが、その位置の詳細を検討する必要があった。範囲が広いこと、また伐採が広域には難しいことから、地形観察や過去の記録などで窯の存在の可能性が指摘される3箇所について、磁気探査を実施した。南よりそれぞれ、牟田洞1～3地点と呼称する。

探査区は、植生や地形に合わせて任意の座標で矩形に設定し、測定範囲の任意の点を4点計測して座標を付与した。測線間隔は1mである。牟田洞3地点では、現地の作業を開始する事前の地表の観察により既に窯が部分的に確認できたが、当該地域の磁気探査による窯の探査成果の検討と解釈をおこなう上で有益な情報を取得できると考え、探査を実施した。

この結果、1地点で1か所、2地点で2か所、3地点で3か所の異常部分を指摘することができた。このうち南北に双極子磁場がみられる地点が4箇所（1地点で1か所、2地点で2か所、3地点で1か所）指摘でき、窯の可能性が高い部分と考えることができる。可児市教育委員会がおこなった確認調査では、4基の窯の存在が確認された。1・3地点の窯の存在は、探査による成果で得られた地点に近い位置であり、探査の有効性を確認することができた。2地点の北側については、斜面の下のトレンチで窯体が確認されているものの、位置が若干ずれており、関連するものかは今後検討が必要であろう。

#### 4. 大萱窯下古窯跡の探査 図127

大萱窯下古窯跡は、より地形が急傾斜の部分がある。過去に発掘が実施され、出土した資料が知られている。測線は、地形に合わせた任意の座標で設定した。

この結果、5か所の異常部を指摘した。この内、南北に双極子磁場がみられる3箇所を窯の候補として調査対象とした。中央南側に並ぶ磁気異常の内、東側の異常部付近では、探査時に窯の底の可能性が高い硬化した被熱粘土の面がみられることから、窯であることは明確であった。発掘調査の結果、中央南側の磁気異常は共に窯であることが確認され、探査の有効性を確認することができた。北側の斜面地にも磁気異常があり、発掘調査による検証を指摘したが、発掘の結果、こちらは金属片による磁気異常であることが判明した。調査区東辺にも窯の可能性のある箇所を見出したが、探査範囲外に伸びているものと考えられ、また鉄製の柵に近いことから、探査では確認が難しいと判断し、試掘調査による確認をおこなうことがよいと考えた。ここでは窯は発掘では確認できなかった。

#### 5. まとめ

本調査においては、探査と発掘を連携することにより、迅速に窯の可能性のある個所を示し、遺構の迅速な把握に寄与することができたと考える。また、迅速化のための試行錯誤により、効率的に森林内の窯の存在を明らかにする手法の検討と技術向上に資する情報を取得することができた。今後、これらの手法を洗練、確立していきたい。

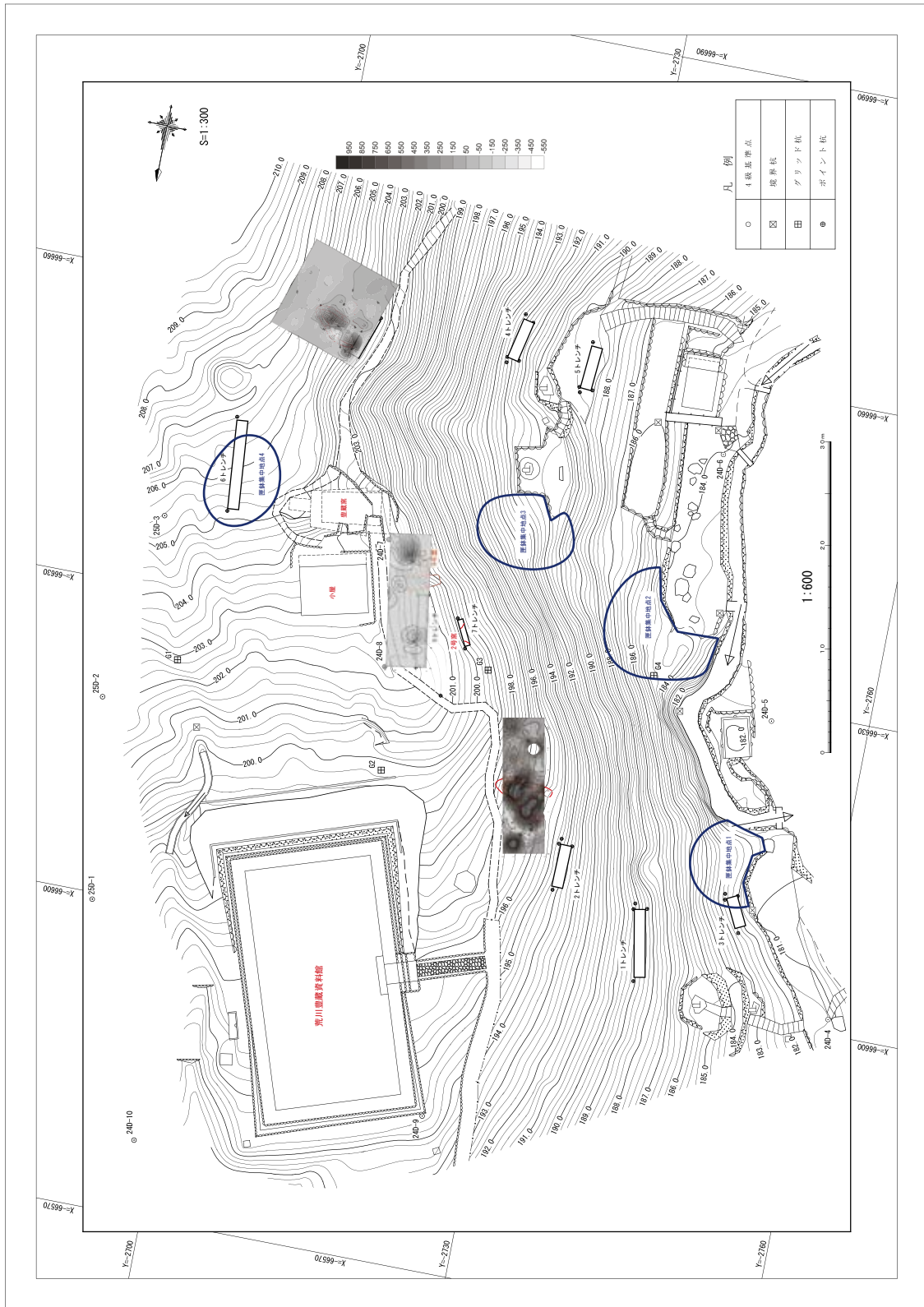


図 126 牟田洞古窯跡探索図

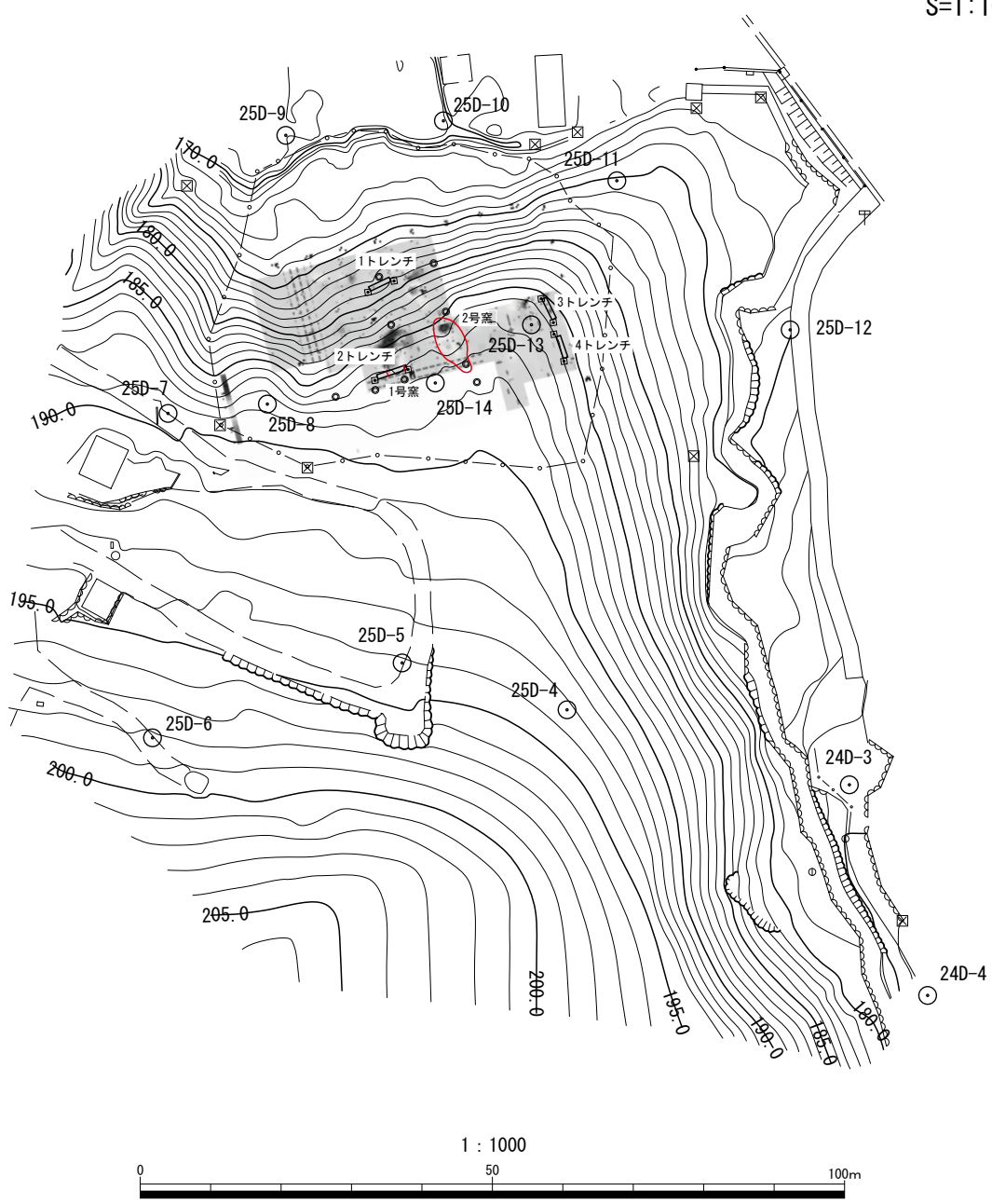


図 127 大萱窯下古窯跡探査図

## 第2節 大萱古窯跡群出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

岐阜県可児市に所在する大萱古窯跡群から出土した炭化材の樹種同定を行った。

### 2. 試料と方法

試料は、大萱古窯跡群内の牟田洞古窯跡の11トレンチ SP01から出土した炭化材1袋、10トレンチから出土した炭化材1袋、大萱窯下古窯跡の1トレンチ堆積土内から出土した炭化材1袋の、計3袋である。各袋から、大きな炭化材を各5点採取し、合計で15点の樹種同定を行った。なお、牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡は共に大窯の窯跡で、いずれも16世紀末に操業が行われていたと考えられている。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

### 3. 結果

同定の結果、針葉樹ではマツ属複維管束亜属1分類群、広葉樹ではハンノキ属ハンノキ亜属（以下ハンノキ亜属と呼ぶ）とサカキ、モチノキ属の3分類群の、計4分類群がみられた。マツ属複維管束亜属が最も多く6点で、サカキが5点、ハンノキ亜属とモチノキ属が各2点であった。同定結果を表23に、一覧を表24に記す。

表23 大萱古窯跡群出土炭化材の樹種同定結果

樹種	遺構	時期			合計
		16世紀末		合計	
		牟田洞古窯跡	大萱窯下古窯跡		
種類	SP01	10トレンチ	1トレンチ堆積土内		
マツ属複維管束亜属		燃料材		燃料材	6
ハンノキ属ハンノキ亜属		燃料材		燃料材	2
サカキ			燃料材		5
モチノキ属		燃料材			2
	合計	5	5	5	15

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

- (1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図128 1a-1c (No. 2)、2c (No.11)、3c (No.12)、4c(No.13)、5c (No.14)

仮道管と放射仮道管、放射組織、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列のものと、水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。どちらも材質は重硬だが、切削等の加工は容易である

- (2) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 図128 6a-6c (No. 3)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと集合放射組織



がみられる。

ハンノキ属ハンノキ亜属にはヤマハンノキやハンノキなどがあり、温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。ヤマハンノキは山林部に、ハンノキは平地の湿地や河川などの湿潤地に多い。材の重量は中庸で、切削加工なども中小程度である。

(3) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図128 7a-7c (No. 7)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は20~40段程度の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~3列が直立する異性で、幅1~2列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

(4) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図128 8a-8c 8No. 1)

小型の道管が、ほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は、20~40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1~3列が直立する異性で、幅1~5列となる。

モチノキ属にはモチノキやクロガネモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

#### 4. 考察

牟田洞古窯跡の11トレンチ SP01から出土した炭化材は、ハンノキ亜属とモチノキ属が各2点、マツ属複維管束亜属が1点であった。試料はピットである SP01から出土しており、出土状況から窯跡で利用された燃料材であると考えられる。また、10トレンチから出土した燃料材はいずれもサカキであった。マツ属複維管束亜属は油分を多く含み、高火力で燃焼する木材である(伊東ほか, 2011)。また、ハンノキ亜属とサカキ、モチノキ属はいずれも薪炭材として利用される樹種である(平井, 1996)。窯跡周辺の森林から燃料材に適した樹木が伐採され、利用されていたと考えられる。

一方、大萱窯下古窯跡の1トレンチ堆積土内から出土した燃料材は、いずれもマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は前述のとおり燃料材に適した樹木であり、燃焼性の高さを見込んでマツ属複維管束亜属が多く利用されていたと考えられる。

以上のように、牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡では、燃料材の樹種構成が異なっていた。両窯跡で確認されたマツ属複維管束亜属は、森林伐採をした丘陵に代替植生として生育し易い樹種で、森林の二次林化の指標となる樹種である(伊東ほか, 2011)。したがって、大萱古窯跡群周辺の森林は操業当時にはある程度二次林化していた可能性がある。立地では、牟田洞古窯跡のほうが丘陵奥部に築窯されている。大萱窯下古窯跡でマツ属複維管束亜属のみがみられたのに対して、牟田洞古窯跡でマツ属複維管束亜属のほかに広葉樹も利用されていたのは、二次林化の影響を顕著に受けていない森林奥部に築窯され、操業されていたためである可能性がある。

愛知県瀬戸市に所在し、14世紀後葉~15世紀前半に操業されていた古瀬戸後期の鶯古窯では、灰原からマツ属複維管束亜属、ヒノキなどを含むヒノキ科、モミ属、クリなどが、工房跡からのこれらの針葉樹のほかに、サクラ属やミズキ属などといった、多様な広葉樹がみられた(植田, 2005)。これは、鶯窯跡が丘陵の奥深くに築窯され、周辺森林が伐採利用されていたためと考えられており、大萱古窯跡群も同様の傾向を示す。

ただし牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡は、いずれも16世紀末に操業が行われていたとされるが、同時期に操業が行われていたか、順次操業が行われていたかは不明である。したがって、周辺森林の二次林化が窯業の影響によるのか、窯業以外の人間活動の影響によるのかは不明である。今回同定を行った試料は、いずれも微破片であり、1本の燃料材がバラバラになったものを多数同定している可能性もあるため、注意が必要である。

## 引用文献

平井信二（1996）木の百科－解説編－. 642p, 朝倉書房.

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌, 238p, 海青社.

植田弥生（2005）灰原および工房跡から出土した炭化材の樹種同定. 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター編「鶯窯跡」; 198-209, 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター.

試料No.	遺跡名	出土場所	器種	樹種	備考	時期
1	牟田洞古窯跡	11トレンチ SP01	燃料材	モチノキ属		16世紀末
2			燃料材	マツ属複雑管束亜属		
3			燃料材	ハンノキ属ハンノキ亜属		
4			燃料材	モチノキ属		
5			燃料材	ハンノキ属ハンノキ亜属		
6		10トレンチ	燃料材	サカキ		16世紀末
7			燃料材	サカキ		
8			燃料材	サカキ		
9			燃料材	サカキ		
10			燃料材	サカキ		
11	大萱窯下古窯跡	1トレンチ 堆積土内	燃料材	マツ属複雑管束亜属	一部未炭化	16世紀末
12			燃料材	マツ属複雑管束亜属	一部未炭化	
13			燃料材	マツ属複雑管束亜属	一部未炭化	
14			燃料材	マツ属複雑管束亜属		
15			燃料材	マツ属複雑管束亜属		

表 24 大萱古窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

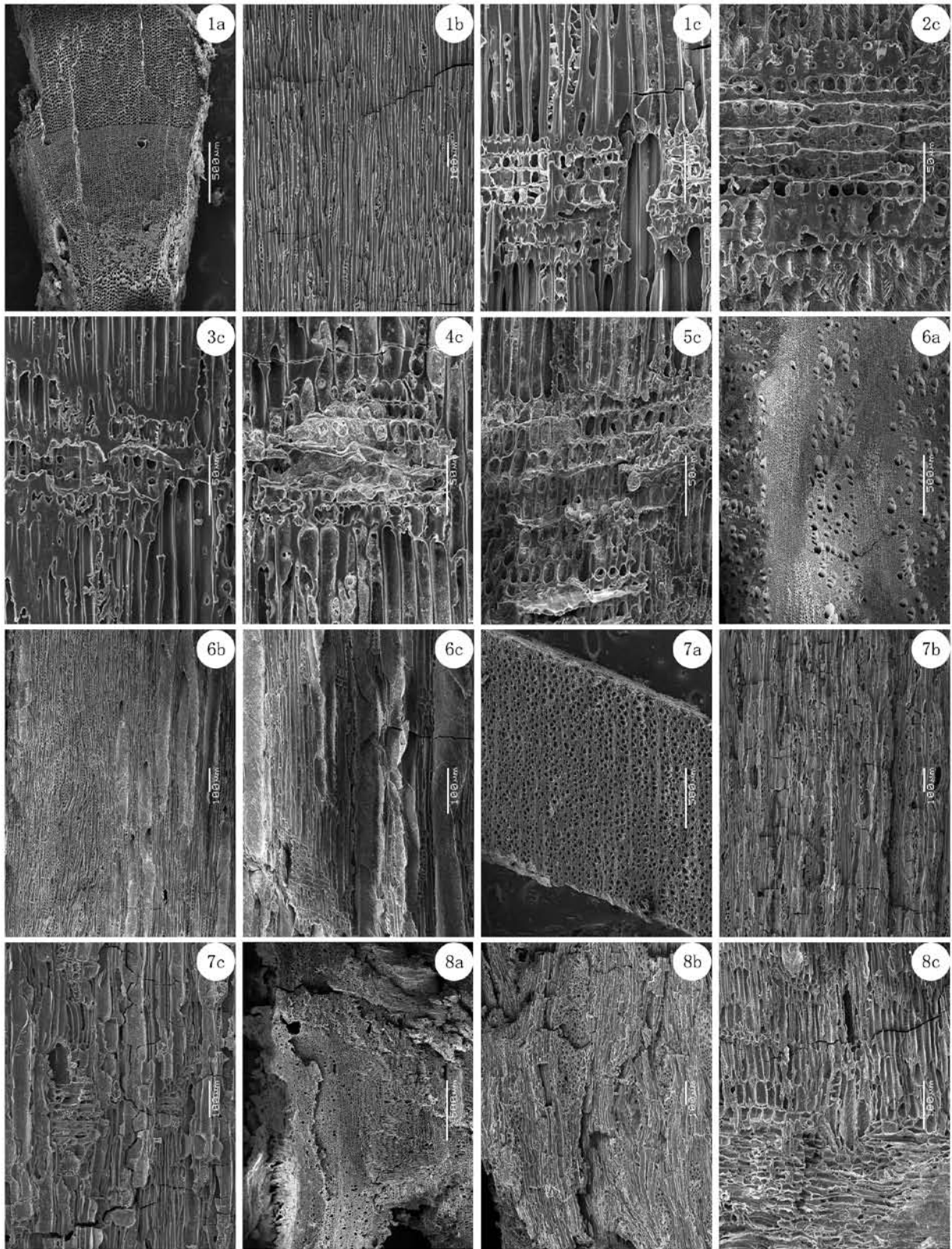


図 128 大萱古窯跡群出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 2)、2c. マツ属複維管束亜属 (No. 11)、3c. マツ属複維管束亜属 (No. 12)、4c. マツ属複維管束亜属 (No. 13)、5c. マツ属複維管束亜属 (No. 14)、6a-6c. ハンノキ属ハンノキ亜属 (No. 3)、7a-7c. サカキ (No. 7)、8a-8c. モチノキ属 (No. 1)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

### 第3節 大萱古窯跡群より出土した陶器等の胎土および釉薬分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

可見市久々利に所在する大萱古窯跡群の牟田洞古窯跡、大萱窯下古窯跡は、いずれも16世紀末頃の大窯である。ここでは、牟田洞古窯跡、大萱窯下古窯跡から出土した陶器および匣鉢、粘土について、蛍光 X 線分析装置による元素分析を行い、これら試料の胎土、釉薬の化学組成からみる材料的特徴を検討した。

#### 2. 試料と方法

分析対象は、牟田洞古窯跡、大萱窯下古窯跡から出土した陶器各4点 (No. 1～8)、匣鉢各2点 (No. 9～12) と粘土4点 (牟田洞古窯跡3点、大萱窯下古窯跡1点、(No.13～16)) の計16点である (表25)。陶器については、各古窯ごとに志野、黄瀬戸、灰釉皿、瀬戸黒を1点ずつ試料とした。分析は、陶器・匣鉢の胎土、および採取粘土の定量分析と、陶器表面の釉薬の半定量分析を行った。なお、No. 1の志野鉢は2枚が釉薬で融着していたため、分離してそれぞれ胎土分析を行った (No.1a, 1b)。また、No. 8の志野向付は絵入りだったため、釉薬の地の部分と絵の部分の2ヶ所の釉薬分析を行った。

図130に、分析対象となった土器、粘土の写真と、土器の試料採取位置を示す。

##### [胎土分析]

胎土分析には、土器・粘土からガラスビードを作製し、それを分析試料とするガラスビード法を用いた。まず、岩石カッターで土器を必要量切り取り、表面の汚れ、釉薬等の影響を排除するため表面を削った後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。なお、粘土については、表面をトリミングしたのみで洗浄は行っていない。乾燥させた試料を、アルミナ乳鉢で粉末にするつぼに入れ、電気炉で750℃、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g 秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム  $\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$  と、メタホウ酸リチウム  $\text{LiBO}_2$  を8：2の割合で調製した融剤3.6000g と十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間熔融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光 X 線分析装置 MagiX (PW2424型) を用いて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所 (NIST) の岩石標準試料計15種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム ( $\text{Na}_2\text{O}$ )、酸化マグネシウム ( $\text{MgO}$ )、酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )、二酸化ケイ素 ( $\text{SiO}_2$ )、酸化リン ( $\text{P}_2\text{O}_5$ )、酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ )、酸化カルシウム ( $\text{CaO}$ )、酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、酸化マンガン ( $\text{MnO}$ )、酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) の主成分10元素と、ルビジウ

No.	種別	遺跡	備考
1	志野鉢	牟田洞古窯跡	5トレンチ
2	黄瀬戸鉢		2トレンチ灰原
3	灰釉端反皿		2トレンチ
4	瀬戸黒茶碗		4トレンチ
5	灰釉折縁皿	大萱窯下古窯跡	1トレンチ
6	黄瀬戸大皿		1トレンチ
7	瀬戸黒茶碗		1トレンチ
8	志野向付 (絵有り)		1トレンチ
9	匣鉢	牟田洞古窯跡	小
10			大
11		大萱窯下古窯跡	小
12			大
13	粘土	牟田洞古窯跡	9トレンチ
14			11トレンチSP01
15			11トレンチ
16		大萱窯下古窯跡	1トレンチ

表25 分析対象

ム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の微量成分4元素の計14元素である。

[釉薬分析]

釉薬分析には、胎土分析で切り取った陶器の表面釉薬部分を岩石カッターで薄く切り取り、精製水で超音波洗浄を行った上で測定試料とした。

分析は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を用いて、ノンスタンダード FP 法による半定量分析を行った。なお、当装置の検出可能元素はナトリウム (Na) ~ウラン (U) であるが、ナトリウム、マグネシウム (Mg)、アルミニウム (Al) といった軽元素は、蛍光 X 線分析装置の性質上検出感度が悪く、特にナトリウムは少量ではほとんど検出できない。

3. 結果

以下に、胎土分析および釉薬分析の結果を示す。

[胎土分析]

表26に、土器胎土と粘土の蛍光 X 線分析の測定結果を示す。

分析の結果、酸化ナトリウム (Na<sub>2</sub>O) が0.03~0.09%、酸化マグネシウム (MgO) が0.27~0.42%、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が11.0~21.0%、二酸化ケイ素 (SiO<sub>2</sub>) が76.0~86.5%、酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が0.022~0.055%、酸化カリウム (K<sub>2</sub>O) が0.85~2.58%、酸化カルシウム (CaO) が0.01~0.21%、酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) が0.59~1.30%、酸化マンガン (MnO) が0.008~0.020%、酸化鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が0.93~3.13%、ルビジウム (Rb) が49~119ppm、ストロンチウム (Sr) が30~46ppm、イットリウム (Y) が17~45ppm、ジルコニウム (Zr) が180~383ppm であった。

図129に各元素の分布図を陶器 (牟田洞古窯跡、大萱窯下古窯跡)、匣鉢、粘土別に示す。

No.	出土場所	Na <sub>2</sub> O (%)	MgO (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	SiO <sub>2</sub> (%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	K <sub>2</sub> O (%)	CaO (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	MnO (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	
1a	牟田洞	志野鉢	0.09	0.29	17.8	79.9	0.032	1.80	0.06	0.76	0.013	1.02	101.8	85	40	27	326
1b			0.09	0.31	17.9	79.8	0.031	1.81	0.07	0.75	0.011	1.03	101.8	88	38	30	310
2		黄瀬戸鉢	0.06	0.38	18.6	77.7	0.026	2.49	0.02	0.82	0.012	1.31	101.4	102	37	26	303
3		灰釉端反皿	0.06	0.38	18.2	77.6	0.025	2.51	0.03	0.80	0.013	1.32	100.9	119	39	29	296
4	大萱窯下	瀬戸黒茶碗	0.06	0.41	17.5	78.8	0.028	2.14	0.03	0.71	0.020	1.75	101.4	103	33	26	290
5		灰釉折縁皿	0.07	0.38	17.8	78.8	0.035	2.58	0.03	0.76	0.013	1.23	101.7	117	41	26	309
6		黄瀬戸大皿	0.07	0.36	17.8	78.6	0.024	2.20	0.03	0.75	0.017	1.14	101.0	118	35	24	305
7		瀬戸黒茶碗	0.05	0.35	16.9	77.2	0.024	1.97	0.02	0.67	0.009	0.93	98.1	98	32	17	274
8		志野向付		0.42	18.2	77.6	0.055	1.99	0.12	0.70	0.008	1.22	100.4	103	46	45	271
9	牟田洞	匣鉢	0.04	0.40	18.1	79.5	0.042	1.92	0.06	0.74	0.008	1.50	102.3	106	35	43	260
10			0.05	0.41	19.9	79.2	0.051	2.02	0.05	0.83	0.011	1.83	104.4	113	33	37	298
11			0.05	0.30	19.0	78.2	0.029	1.45	0.06	0.87	0.017	1.65	101.6	76	37	32	344
12			0.03	0.34	21.0	76.0	0.037	0.99	0.09	1.24	0.016	2.40	102.1	57	39	40	313
13	牟田洞	粘土	0.09	0.27	12.7	83.7	0.022	1.50	0.03	0.59	0.017	2.44	101.4	62	42	18	263
14			0.03	0.29	11.0	86.5	0.031	0.85	0.01	0.72	0.011	3.07	102.5	49	30	30	180
15			0.03	0.32	12.0	84.5	0.032	0.92	0.01	0.76	0.011	3.13	101.7	54	35	23	184
16			0.42	17.7	77.5	0.025	1.07	0.21	1.30	0.013	1.85	100.1	61	44	18	383	
	最小値		0.03	0.27	11.0	76.0	0.022	0.85	0.01	0.59	0.008	0.93	49	30	17	180	
	最大値		0.09	0.42	21.0	86.5	0.055	2.58	0.21	1.30	0.020	3.13	119	46	45	383	

表 26 胎土・粘土の蛍光 X 線分析結果 (mass%)



[釉薬分析]

表27に、蛍光 X 線分析による陶器釉薬の半定量値を示す。なお、表は陶器の種別ごとに順番を並び替えてある。

分析の結果、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、二酸化ケイ素 (SiO<sub>2</sub>)、酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、酸化硫黄 (SO<sub>3</sub>)、酸化カリウム (K<sub>2</sub>O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO<sub>2</sub>)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化ニッケル (NiO)、酸化銅 (CuO)、酸化亜鉛 (ZnO)、酸化ガリウム (Ga<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化ルビジウム (Rb<sub>2</sub>O)、酸化ストロンチウム (SrO)、酸化イットリウム (Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化ジルコニウム (ZrO<sub>2</sub>)、酸化バリウム (BaO)、酸化鉛 (PbO) が検出された。

No.	出土場所	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	NiO	CuO	ZnO	Ga <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	BaO	PbO	
1	牟田洞	—	21.76	67.03	0.32	—	9.40	0.97	0.16	—	0.26	—	0.01	—	—	0.03	0.03	0.01	0.01	0.03	0.01	
8	志野地	—	22.41	67.15	0.57	—	8.46	0.86	0.06	0.03	0.38	0.01	0.02	—	—	0.03	0.01	0.01	0.01	—	—	
	大萱窯下	—	23.83	64.96	0.46	—	7.85	0.83	0.15	0.03	1.79	0.01	0.02	—	—	0.03	0.01	0.01	0.01	—	—	
3	灰釉皿	牟田洞	1.79	18.63	65.65	1.11	3.13	6.88	0.24	0.26	2.04	—	0.01	—	—	0.02	0.06	—	0.05	0.03	—	
5		大萱窯下	2.21	16.12	63.72	2.00	0.08	2.59	10.27	0.23	0.63	1.98	—	0.01	0.01	—	0.01	0.07	—	0.05	0.03	—
2	黄瀬戸	牟田洞	2.22	14.78	59.46	2.17	0.10	2.61	14.64	0.33	0.56	2.88	—	0.02	—	—	0.02	0.12	0.01	0.06	0.04	—
6		大萱窯下	2.53	14.27	58.86	2.09	0.09	2.62	15.90	0.28	0.99	2.07	—	0.02	0.01	0.01	0.01	0.15	—	0.04	0.05	—
4	瀬戸黒	牟田洞	1.98	12.87	44.58	1.86	0.06	2.40	6.52	0.56	1.15	27.59	—	0.02	0.15	—	0.03	0.09	0.01	0.07	0.05	0.02
7		大萱窯下	2.09	13.92	51.19	1.28	0.04	2.79	5.39	0.28	0.65	22.16	—	0.01	0.04	0.01	0.02	0.07	0.01	0.03	0.04	—

表 27 陶器釉薬の蛍光 X 線半定量分析結果 (mass%)

#### 4. 考察

[胎土分析]

まず、陶器の分布図 (図129の①、②) をみってみる。牟田洞古窯跡の溶着していた志野鉢である No.1a と 1b は、製作時期が極めて近い、同時性の高い試料と考えられるが、化学組成においても非常によく似た値を示した。他の陶器 (No. 2 ~ 8) を含めてみると、大萱窯下古窯の志野向付である No. 8 が酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、酸化カルシウム (CaO)、イットリウム (Y) において他の陶器とは若干異なる化学組成であったものの、その他はおおよそ似たような位置に分布していた。志野や黄瀬戸、灰釉皿、瀬戸黒といった種別ごとの差異については、今回は各窯各種別ごとに 1 点ずつであり判断できないが、おそらく胎土にそれほど違いはないとみられる。続いて、匣鉢の分布図 (図129の③、④) をみってみると、酸化マグネシウム (MgO)、酸化ケイ素 (SiO<sub>2</sub>)、酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、酸化カリウム (K<sub>2</sub>O)、酸化マンガン (MnO)、ルビジウム (Rb) 等において、牟田洞古窯跡の匣鉢 (No. 9、10) と大萱窯下古窯跡の匣鉢 (No.11、12) との間に化学組成の差異がみられた。また、陶器の分布と比較すると、大萱窯下古窯跡の匣鉢は、特に酸化カリウム (K<sub>2</sub>O) とルビジウム (Rb) において大きく異なる位置に分布しており、材料的に異なると考えられる。牟田洞古窯跡の匣鉢についても、酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) やイットリウム (Y) 等、分布が異なる傾向がみられた。

粘土の分布図 (図129の⑤) をみると、大萱窯下古窯で採取した粘土 (No.16) は、牟田洞古窯跡で採取した粘土 (No.13~15) と大きく異なる化学組成を示した。また、牟田洞古窯跡の粘土のうち、No.14と15は非常によく似た化学組成を示した。これら粘土は、今回分析した陶器や匣鉢と比較すると、化学組成が一致しているとはいえず、少なくともこれら粘土がそのまま胎土材料として使用されてはいないと考えられる。

### [釉薬分析]

志野である No. 1、8 は、酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) の少ない、白色の釉薬である。酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ ) が多いのが特徴的であった。酸化カルシウム ( $\text{CaO}$ ) が少ないため、木灰を用いた釉ではない。多量に含まれる酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ ) の存在から、藁灰釉である可能性が考えられる。また、酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) もやや多いため、長石を用いた釉である可能性も考えられる。なお、先述の通り、釉薬分析で使用した分析装置はナトリウム ( $\text{Na}$ ) の感度が悪いが、全く検出できないわけではない。にもかかわらず今回の分析では検出されなかったため、少なくとも酸化ナトリウム ( $\text{Na}_2\text{O}$ ) が酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ ) ほど多くは含まれていることはないと考えられ、長石釉だとするとカリ長石に分類される長石が使用されていると考えられる。また、酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) が多い割には、酸化ジルコニウム ( $\text{ZrO}_2$ ) が少なく、釉薬の種類を検討する上で判断材料となる可能性がある。志野向付 (No. 8) の絵入りの箇所は、地よりも酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) が多く検出されており、鉄分含有物を用いた下絵、いわゆる鉄絵が施されていると考えられる。

緑色みを帯びた釉の灰釉皿 (No. 3、5) と黄色みを帯びた釉の黄瀬戸 (No. 2、6) は、いずれも酸化カルシウム ( $\text{CaO}$ ) が多く含まれる特徴があった。酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) や酸化マグネシウム ( $\text{MgO}$ )、酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ ) も数%含まれるのが特徴的であり、いわゆる土灰等の、木灰を用いた灰釉と考えられる。緑色みや黄色みを帯びているのは酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) の影響だが、色調の違いは焼成条件に由来している。

瀬戸黒 (No. 4、7) は、酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) がかなり多く含まれていた。今回分析した試料は、若干の褐色みを帯びた艶がやや少なめの黒い釉であり、鉄釉の一種と考えられる。酸化カルシウム ( $\text{CaO}$ ) が多くて、酸化マグネシウム ( $\text{MgO}$ ) や酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ ) もやや多く、灰釉に鉄分を多量に混ぜ込んだ釉薬と考えられる。

今回分析した釉薬は、各窯各種別ごとに1点ずつであり、窯跡間の釉薬の違いは不明であるが、今後測定例を増やしていけば、時期的、地域的な材料の変化が見いだせる可能性がある。

### 参考文献

矢部良明ほか23名編 (2002) 日本陶磁大辞典. 1484p, 角川書店.

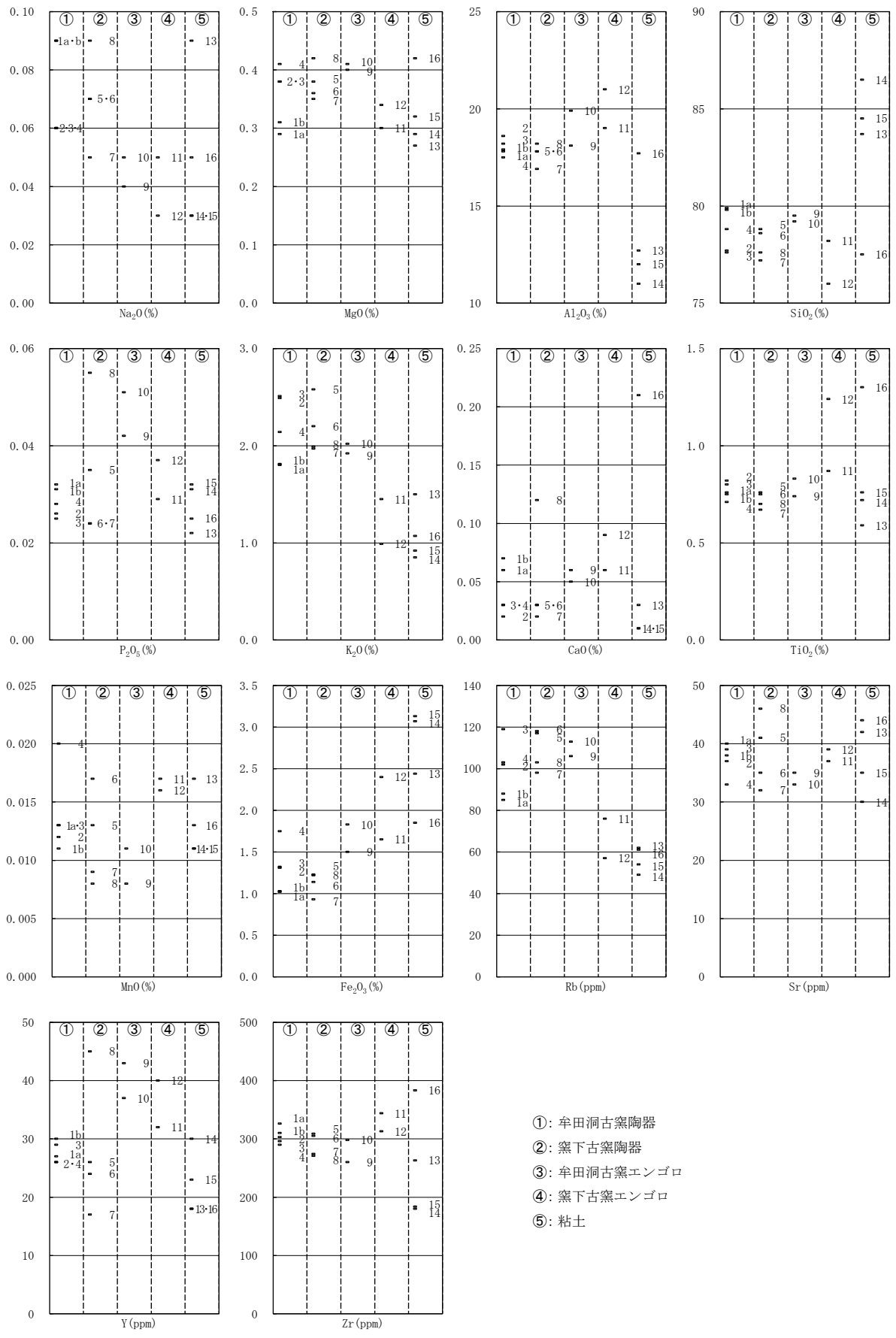


图 129 各元素分布图



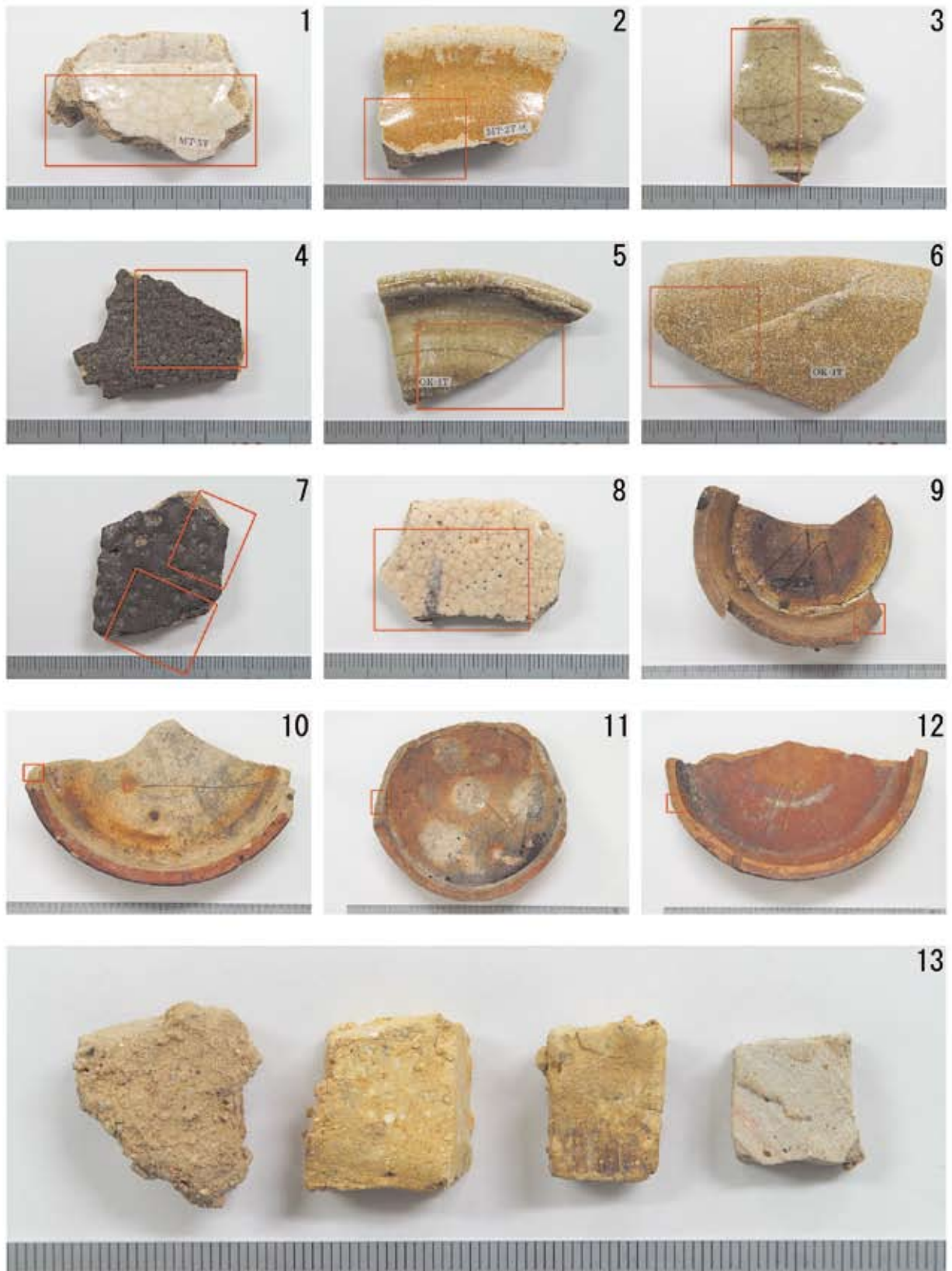


図 130 分析対象となる土器、粘土と土器の試料採取位置

1. No.1 志野鉢 2. No.2 黄瀬戸鉢 3. No.3 灰釉端反皿 4. No.4 瀬戸黒茶碗 5. No.5 灰釉折縁皿 6. No.6 黄瀬戸大皿 7. No.7 瀬戸黒茶碗 8. No.8 志野向付 9. No.9 エンゴロ 10. No.10 エンゴロ 11. No.11 エンゴロ 12. No.12 エンゴロ 13. 粘土 (左から No.13、14、15、16)

## 第6章 総括

### 第1節 遺物

遺物は、作業場や物原に該当するトレンチからは多くの遺物が出土しているが、窯体部分のトレンチからは少量しか出土していない。牟田洞・大萱窯下両古窯跡の出土遺物は、胎土・釉調ともに似ていることから器種ごとの特徴をまとめて述べ、異なる部分については列挙する。

また、両窯跡からの出土点数や出土状況の概略を記述し、各窯跡の編年・年代観にも触れる。

#### (1) 各器種概要

##### 皿類

皿類は、丸皿、端反皿、輪禿皿、内禿皿、稜皿、中皿、折縁皿、襷皿、菊花形皿、灯明皿が出土している。牟田洞で出土した皿類の中で、丸皿は約26%、折縁皿は約57%である。大萱窯下で出土した皿類の中で丸皿は約33%、折縁皿は約44%である。両窯跡では、折縁皿が量産されている様子がみられる。皿類の釉葉は灰釉が多数を占め、両窯跡とも鉄釉の皿は全体的に2%に満たない出土割合である。

丸皿は、器形として扁平な形のもが多く、器高があるものは少ない。折縁皿は、実見する限り付高台はみられず、削り込み高台か削り出し高台である。折縁皿には内面にソギが入るものと入らないものがみられ、入らないものの方が多い。内面にみられる印花は菊、カタバミがみられるが、印花が入る点数はわずかである。

襷皿は、牟田洞では鉄釉のものと灰釉のものがみられるが、大萱窯下では灰釉のみがみられ、その量は両窯跡とも10点以下であった。また、菊花形皿は灰釉と長石釉に限られ、鉄釉を施釉するものはみられない。高台は、付高台と削り出し高台がみられる。

皿類は溶着資料があり、鉄釉と灰釉の丸皿を輪ドチを用い重ねたものがみられるほか、大萱窯下の6トレンチでは、折縁皿3枚の上に丸皿1枚が溶着した匣鉢がみられる。

##### 碗類

出土した碗類のうち天目茶碗は牟田洞では約70%、大萱窯下では約60%を占め、次に多いのは瀬戸黒筒形碗である。天目茶碗は、口唇部が直立するものよりも口唇部がS字状になるものが多くを占める。高台が露胎しているものが多く、錆釉をかけているものはわずかしかみられない。また、鉄釉の後に口縁部付近にのみ灰釉をかけているものも数点みられる。匣鉢への詰め方は、1個焼き用の丸底匣鉢の使用がみられるほか、穴開き底匣鉢による焼成もみられる。

丸碗は、第3段階後半から出現する削り出し高台のものがみられ、付高台のものはみられない。底部から口縁部にかけて直線的に開くものと、丸みをもって立ち上がるものがみられる。釉葉には鉄釉や灰釉、長石釉がみられ、鉄釉を施釉するものがやや多い。大萱窯下では、瀬戸黒筒形碗の形状とは異なる、口縁部が角張り高台の高い付高台の鉄釉をかけた筒形碗や、体部下方に明瞭な稜をもつ腰折碗がみられる。一方牟田洞では、瀬戸黒筒形碗以外の筒形碗はみられない。

小天目茶碗は天目と同様の器形であり、口唇部が直立するものよりS字状が多く、高台は削り出し輪高台が多い。釉葉は牟田洞では鉄釉が多いが、大萱窯下は鉄釉と灰釉が同数程度出土している。小杯は、口縁部が直立するものと受口状にするものがみられ、釉葉は灰釉が多い。

小天目茶碗や小杯などの小型の製品は、匣鉢の中の高台の痕跡から、大きな匣鉢の中に並べて焼かれている場合と、向付などの製品の中に入れて焼成した場合がうかがえる。

### 向付・鉢類

向付・鉢類は、両窯跡とも志野が多くを占める。灰釉に分類したものには、発色次第で黄瀬戸の範疇に含まれるものもあると思われる。志野、黄瀬戸以外には口縁部が襞状になるものがあり、鉄釉と灰釉が施釉されている。

大皿は釉薬は鎔釉が大半を占め、灰釉や長石釉も少量みられる。器形は丸みをもって立ち上がるものと、口縁部が折縁状になるものがみられ、折縁状になるものにはソギが入るものがある。

挿鉢は、底部が糸切り痕未調整の平底で口縁部の外側に縁帯を形成するものが多く、内側に折り返すものは少ない。口縁部の形態はバリエーションに富んでいる。

### 黄瀬戸

黄瀬戸の器種は鉢類が多くを占め、大皿や徳利もみられる。向付は口縁部が直立する浅鉢形が多く、線刻や胆礬が施されないものが多数ある。法量は口径10～11cm前後のもの、15～16cm前後のものに分かれる。大皿は丸みをもって立ち上がるものが多く、胆礬がみられるものもある。徳利は、全体が分かるものが少ないが受口のものがみられ、胴部に線刻が入るものもみられる。

釉薬については発色不良が多くあり、科学分析の成果からは木灰を用い、色調の違いは焼成条件に由来しているという見解が得られている。

### 瀬戸黒

瀬戸黒の筒形碗では、切立形と半筒形がみられる。牟田洞では、作業場から出土したものや過去の採集資料には、体部に縦方向の削り調整を入れるものがみられる。大萱窯下では、過去採集資料でも体部に調整を入れるものはみられず、付高台と削り出し高台のものがみられる。大萱窯下の物原から、瀬戸黒の祖形と想定されるような鉄釉をかけた付高台の筒形碗が出ている。愛知学院大学の報告では、瀬戸黒茶碗は付高台の可能性が指摘されているが、大萱窯下では削り出し高台のものがみられる。

なお、科学分析の成果では、灰釉に鉄分を多量に混ぜているという見解も得られている。

### 志野

志野は、碗類、皿類、向付・鉢類と豊富な器種が出土しているが、両窯跡とも向付・鉢が主体である。菊花形皿は付高台と削り出し高台がみられる。

灰志野には向付と皿が見られ、鉄絵がかかれたものが1点みられる。大萱窯下の過去採集資料の灰志野製品の底部内面には円錐ピンの痕がみられるものがあり、灰志野は志野と同時期に焼成されていると考えられる。また、鼠志野は両窯跡からわずかな量が出土しており、輪花皿や茶碗、天目茶碗などもある。

志野の釉薬は、科学分析の成果では藁灰と長石が混合されている可能性が高い。

### 窯道具

匣鉢は、物原に多量が散乱しており、全てにおいて法量などを測れているわけではない。匣

鉢には丸底と平底のものがあり、底部に穴が開くものや平底の底部内面に櫛目が同心円で引かれているものもみられる。過去採集資料も含め、枚数を多く入れたような器高の高い匣鉢はみられない。また、皿一枚のみが入る匣鉢もあり、その中には灰釉が付着した痕跡も認められ、必ずしも志野など桃山陶を焼いた匣鉢ではないようである。

窯道具は、輪ドチの他に長脚ピン、ハサミ皿、円錐ピン等の使用も確認されており、第3段階～4段階の組成がみられる。丸皿と折縁皿の間にハサミ皿が溶着している資料があることから、第4段階までハサミ皿が使用されていたことが想定される。

匣鉢蓋には、円形のもの和小判形のものが見られる。蓋の内面には、大萱窯下では「彦助なり」、牟田洞では「□次郎平」もしくは「□免之平」と刻まれたものが見られ、陶工の名の可能性もある。

両窯跡には共通した窯記号が使われており、「/X\」、「才」、「千」、「丰」が見られる。線の太さは違うが、記号の書き順は同じである。これらは主に内面に入り、底径31cmの大型の匣鉢には内外面に「/X\」の記号が見られる。これらの記号が入った匣鉢には、長石釉や灰釉が付着しているものがあり、決まった製品を入れて焼いているわけではない。また、製品に同様の記号が入るものは、大萱窯下の表採で出土している丸皿（内外面）のみである。窯記号では「/X\」が最も多くみられ、弥七田古窯跡でも「/X\」、土岐市の高根古窯跡でも「才」の記号が確認されている。また、東京国立博物館所蔵の志野茶碗「振袖」などの高台にも同様に記号が刻まれている。匣鉢にみられる記号は陶工のサインとも言われ、同じ陶工や陶工集団が付近の窯を使用していた可能性や、注文者を判別するために記した可能性などが想定される。これらの窯道具から、大萱窯下と牟田洞、弥七田の有機的なつながりがうかがえる。

窯記号の他にも、牟田洞と大萱窯下では菊の印花を押した匣鉢が1点ずつみられた。

科学分析の成果からは、牟田洞と大萱窯下の匣鉢は胎土が異なるという見解が得られている。

## (2) 牟田洞古窯跡の遺物概要と窯の編年観

出土した遺物の割合は、折縁皿が約25%、天目茶碗が約17%、丸皿が約11%、播鉢が9%と続き、向付・鉢類は全体の約6%である。桃山陶（黄瀬戸、瀬戸黒、志野）では、器種が不明な細片も多いが、志野が最も多く出土している。1号窯の10トレンチでは折縁皿が崩落層から出土しているが、付近の1・2・3・13トレンチのうち3つのトレンチでは折縁皿より丸皿が多く出土しており、13トレンチでも1点しか差がない。この状況は、牟田洞の南側に設定した4・5トレンチとは遺物構成が明らかに異なる。また、浅鉢形で刻み文様のない黄瀬戸の出土比率が高く、志野は腐食土や堆積土から出土することから、混入の可能性が考えられる。1号窯の周辺のトレンチでは確実に第4段階後半に位置づけられる資料が認められず、時期は第3段階後半～第4段階前半に比定される。

3号窯に伴う平坦面に設定した8トレンチでは遺物量は少ないが、皿類では丸皿よりも折縁皿が多く、志野の出土数も増える。また、志野の器種構成でも向付・鉢類の比率が高い。これは、4・5・6・11・12トレンチでも同様の傾向がみられる。3号窯は、第4段階前半～後半に位置づけられる。

2号窯は、遺物の出土数は少ないため、時期の比定は難しい。鼠志野は、過去の資料で採集されているが今回の調査では出土しておらず、織部黒もみられない。

	匣集1	匣集2	匣集3	1T	2T	3T	4T	5T	6T	7T	8T	9T	10T	11T	12T	13T	豊蔵採集	総数			
碗類	鉄釉天目茶碗	227	49	10	4	62	9	5	378	26	3	17	1	1	22	3	6	823			
	灰釉天目茶碗							2						1			1	1			
	志野天目茶碗							7			1			1		1	3	6			
	灰釉丸碗							36	3		1			1		1		10			
	鉄釉丸碗	3						36	3		1			1		1		44			
	瀬戸黒筒形碗	10	6				1	11	54	4		5	3	4	7	3	3	6	117		
	志野茶碗	1							4						2		2	35	44		
	鼠志野茶碗																	1	1		
	鉄釉小天目茶碗	1				7			4			1		1	2		1		17		
	灰釉小天目茶碗								4										4		
	志野小天目茶碗																		1	1	
	灰釉小杯		1						6	2					4	2	1		17		
	鉄釉小杯		1						2										3		
	志野小杯	1												1					2		
鉄釉碗類								85										85			
皿類	灰釉丸皿	26	12	5	2	51	7	4	359	28		2		1	18	6	2	2	525		
	鉄釉丸皿	2	1			1		1	11										16		
	志野丸皿	10							6			2	1		1			1	21		
	灰釉端反皿	2	2			7													11		
	鉄釉端反皿					2			1										3		
	志野端反皿	1	4								1								2	8	
	灰釉内禿皿	5		1	1	19	1	1	46	4		2	2		3				85		
	鉄釉内禿皿	3				3				1									7		
	鉄釉稜皿				1													1	2		
	灰釉中皿								11	1					2	3			17		
	鉄釉中皿					1													1		
	志野中皿									1					11	1			1	14	
	灰志野中皿														7				7		
	灰釉菊花形皿	1			4				6										1	12	
	志野菊花形皿	1						1	8			3	1						5	19	
	灰釉折縁皿	34	12	4		3	1	12	565	19	2	8		10	11	4	3	3	691		
	灰釉折縁皿(ソギ)	15	17	3		4	2	4	442	9		10	2		12	17	4	1	542		
	志野折縁皿																		2	2	
	鉄釉裂皿	2				2			1											5	
	灰釉裂皿		1			4			4											9	
	灯明皿	7			1	3			6	14	2	3	6	3	1	1				47	
	灰釉皿類	25	2				1													28	
鉄釉皿類					1			1			2								4		
志野皿類	2	7					3	67			5	1							85		
向付鉢類	灰釉向付・鉢				1			1	8										10		
	鉄釉向付・鉢	8				2			2										1	13	
	黄瀬戸向付・鉢	1				1		2	25	4				14	2	1	10	11	71		
	志野向付・鉢	2	7	1		1		14	79	10		8	3	4	10	1	1	67	208		
	灰志野向付・鉢								1										1		
	鼠志野向付・鉢																		3	3	
	向付(釉不明)	3												1						4	
	灰釉大皿								1											1	
	錆釉大皿	44	3	1		35	1		30	1		1			1	1	1		119		
	黄瀬戸大皿								8										3	11	
	志野大皿									1					1					2	
	黄瀬戸盤														1	1				2	
	灰釉片口鉢															1				1	
鉄釉片口鉢	3						1		1		1				1				7		
錆釉摺鉢	145	11	4	1	22	1	53	156	3	3	32	19	5	1	5	2			463		
その他	灰釉茶入					1			2					1					1	5	
	鉄釉茶入	6				2			2					1	1				6	18	
	灰釉香炉	4	1					2	66	2		2			3	1			81		
	志野香炉														1	1				2	
	灰釉德利					2			15	1										18	
	鉄釉德利	57	9			2	2		56	1					1	1	1		130		
	黄瀬戸德利								2										1	3	
	志野德利								8	1					1					10	
	蓋					1														1	
	灰釉壺					1			2											3	
	鉄釉壺					1			1											2	
	鉄釉水指・建水	8					1		3											12	
	志野盤																			2	2
	志野汁次																			1	1
	灰釉茶入蓋																			1	1
	志野茶入蓋																			1	1
	灰釉火入																			1	1
鉄釉水注														1					1	2	
志野不明	24	16	3		4		4	244		2	21	1								319	
計	660	146	29	15	241	27	121	2591	125	11	110	38	42	129	55	40	165	4864			

(器種がわかるものは細片でも含める。)

表 28 牟田洞古窯跡遺物集計表

	表採	1T	2T	3T	4T	5T	6T	7T	過去採集	総数	
碗類	鉄釉天目茶碗	8	153	3	53	19	5	39	15	5	300
	灰釉天目茶碗	1				2					3
	志野天目茶碗	2	2		5					7	16
	灰釉丸碗		11		2			1	1	3	18
	鉄釉丸碗		12	1	1			10	2	1	27
	志野丸碗		1								1
	鉄釉筒形碗		2								2
	鉄釉腰折碗		1								1
	瀬戸黒筒形碗	5	37	6	3	6	6	1	6	18	88
	志野茶碗	2		1							3
	鉄釉小天目茶碗		6		2	2	2	1		4	17
	灰釉小天目茶碗	1	2		1	11				4	19
	灰釉小杯	2	1		4					1	8
	鉄釉小杯						1			3	4
	志野小杯				1					1	2
灰志野小杯		1								1	
鉄釉碗類		14						1		15	
皿類	灰釉丸皿		120	5	16	14	5	28	3	52	243
	鉄釉丸皿		4				1				5
	志野丸皿	4	5				2		1	5	17
	灰釉端反皿		2								2
	鉄釉端反皿		1								1
	志野端反皿	3	5								8
	灰釉内禿皿	2	20		1			1		17	41
	鉄釉内禿皿									5	5
	灰釉輪禿皿	1									1
	灰釉稜皿		1								1
	鉄釉稜皿		2			1				5	8
	灰釉中皿		3					1		2	6
	志野中皿	1									1
	灰志野中皿							1			1
	灰釉菊花形皿		1		7	5	5			4	22
	志野菊花形皿	3					1		1		5
	灰釉輪花皿										2
	灰釉折縁皿	4	30	9	15	50	2	37	2	65	214
	灰釉折縁皿(ソギ)		41	8	4	5	1	15	2	65	141
	灰釉裂皿		4								4
	鉄釉裂皿									3	3
灯明皿	1	4	1	2		2	1	6		17	
灰釉皿類		23						5		28	
志野皿類	4	10		1	1	4	1	8	1	30	
向付 鉢類	灰釉向付・鉢							1		3	4
	鉄釉向付・鉢					1		1			2
	黄瀬戸向付・鉢	2	7	1		3	1	6	1	40	61
	変わり黄瀬戸向付・鉢									1	1
	志野向付・鉢	11	17		6	6	2			29	71
	灰志野向付・鉢	1	4							2	7
	鼠志野向付・鉢		1								1
	向付(釉不明)			1						2	3
	灰釉大皿		1	1						10	12
	錆釉大皿		24	1	2			3		10	40
	大皿(釉不明)									2	2
	黄瀬戸大皿		1	1				1		7	10
	鉄釉片口鉢									1	1
錆釉槽鉢	5	207	3	5	10	4	11	156		401	
その他	灰釉茶入	1									1
	鉄釉茶入	1	6		3			1		4	15
	灰釉水滴		1								1
	鉄釉水滴									1	1
	灰釉香炉		5				1			34	40
	志野香炉	2								1	3
	灰釉德利		12							10	22
	鉄釉德利		35	1	3	1		2		5	47
	黄瀬戸德利									1	1
	志野德利									4	4
	志野蓋									1	1
	鉄釉壺		1							1	2
	黄瀬戸筒形容器									1	1
	鉄釉水指・建水	1	7		6			1	1		16
	灰釉水注							1			1
	鉄釉水注							1			1
志野不明	11	16		27	13	9	2	2		80	
鼠志野				1					5	6	
計	79	864	43	171	150	54	168	213	448	2190	

(器種がわかるものは細片でも含める。)

表 29 大萱窯下古窯跡遺物集計表

### (3) 大萱窯下古窯跡の遺物概要と窯の編年観

出土した遺物の割合は、播鉢が約18%、折縁皿が約16%、天目茶碗が約15%、丸皿が約15%と続き、向付・鉢類は約2%である。皿類では、丸皿と折縁皿が同数近くを占めるが、1号窯の2・6トレンチでは丸皿より折縁皿が多く、重ね焼きの溶着資料からも量産化の様子が窺える。6トレンチの床面では、瀬戸黒や黄瀬戸は少量出土するが、志野は出土せず、2トレンチでは堆積土から志野が1点出土し、混入の可能性も考えられる。このことから、1号窯は第4段階前半に主体があると考えられる。また、6トレンチの床面で出土した天目茶碗の形態や、折縁皿が全て削り出し高台で扁平な形であることから第4段階後半に比定され、1号窯は第4段階前半が主体で第4段階後半まで操業されたと考えられる。

2号窯の5・7トレンチでは、黄瀬戸、瀬戸黒、志野が少量みられる。また、7トレンチでは、多くの播鉢が出土しており、煙道部付近では播鉢を多く焼いていたことが分かる。5・7トレンチでは志野に様々な器種がみられるなど、遺物の様相からは第4段階後半が主体であると考えられる。

斜面の東側に設定した3・4トレンチでは、天目茶碗、折縁皿が多く出土する他、黄瀬戸、瀬戸黒、志野も一定量みられる。遺構に伴わないことから、尾根近くにあったと推定する作業場からの流れ込みの可能性が考えられる。

過去採集資料には、牟田洞と同様に鼠志野はみられるが、織部黒はみられない。

## 第2節 窯跡の概要

### (1) 牟田洞古窯跡

牟田洞古窯跡は、奥まった谷の西斜面に築窯されている。調査で1～3号窯の3基が確認され、1号窯は標高196～199m、3号窯は200～202mに位置する。2号窯は窯体の残りが悪いが、標高199～201m前後に位置すると考えられる。残存状況から判断するに、窯体の中軸の方位は一定ではなく、それぞれの地形にあわせて窯を構築していることが想定され、その下方には匣鉢が集中散乱する地点がみられる。

牟田洞古窯跡では、窯体の調査を行ったのは1号窯のみである。10トレンチでは、焼成室や燃焼室などが確認された。燃焼室後部（火炎室）では、小分炎柱の痕跡は見られていない。焚口付近は滅失している可能性も考えられるが、煙道部は既設の小径の下に残っている可能性が高い。現地形を含めた今回の調査から、推定全長約6.7m、最大幅約3.2mを測る。10トレンチの窯壁の状況や窯の右側に平坦面がみられることから、右側に製品の出し入れ口があり、作業場もあったと推定される。また、13トレンチでは造成された平坦面や溝が検出され、1号窯に近接する作業場あったと考えられる。1号窯と2号窯の間には小尾根があり、隔てられていることから、1号窯の物原の範囲は南北約30mと推定される。窯体及び周辺トレンチの遺物から、第3段階後半～第4段階前半に比定される。

2号窯は、窯の一部しか検出されておらず、詳細は不明である。

3号窯は、焼成室の床面が露出しており、燃焼室や焚口などは滅失している可能性がある。煙道部は、1号窯と同様に、小径の下に遺存している可能性がある。推定される残存規模は、全長約5.2m、幅約3.5mである。8トレンチでは、製品の出し入れに伴う作業場が見つかったことに加え右側が急斜面であるため、窯の出入口は左側と考えられる。周辺のトレンチも含めた遺物から、第4段階前半～後半の時期が比定される。12トレンチでは作業場が見つかった



ていないため、荒川豊蔵の小屋の周辺（小径部分含む）が2号窯や3号窯の作業場であった可能性が想定される。

3号窯は2号窯より標高の高い位置に造られ、2号窯のすぐ上方に3号窯に伴う作業場の遺構面が見られることから、2号窯よりも3号窯は新しいと思われる。3号窯の物原の範囲は、南北25m程度と想定される。

4号窯は、調査によって桃山期の大窯ではなく、荒川豊蔵が初めて造った窯であることが判明した。現在のところ、牟田洞古窯跡では3基の窯跡が見つかったということになるが、4・5トレンチは後世の改変が入っているものの、非常に多くの大窯期の遺物が出土している。3号窯より南側にはしっかりとした谷があり、3号窯の中軸方向もやや北西を向いていること、3号窯の製品の出し入れに伴う作業場が窯の左側で見つかったことも含め、3号窯の物原が4号窯の下付近まで広がっている可能性はほとんど考えられない。そのため、3号窯から9トレンチの間にもう1基窯があった可能性が容易に考えられ、今後の課題といえる。

調査の成果から牟田洞は、1号→2号→3号と移っていった可能性が推定される。

## (2) 大萱窯下古窯跡

大萱窯下古窯跡は、南斜面の丘陵突端、開けた谷に面しており、大萱地区の沖積地及び土岐から可児へ抜ける五斗蒔街道（現県道84号線）を見下ろすことができる。2基の窯体を確認され、2基ともに標高186～188mに立地する。2基の窯体の中軸の方位はほぼ同一方向を向いて立地し、物原に設定した1トレンチの調査では間層は確認されず、両窯の廃棄物が混じる状況である。また、3・4トレンチでは遺物はみられるが遺構は検出されず、出土した遺物は窯の上方の作業場と推定される部分からの廃棄物の可能性が高いと考えられる。

1号窯は崩落層が確認され、最終操業の状況が確認できた。6トレンチでは、分炎柱は欠損している状態であるが小分炎柱が2本検出され、分炎柱から推定できる窯の幅は約2.8mである。現地形と調査成果から判断すると、推定全長約7.0m、最大幅約2.8mである。床面及び崩落層では、折縁皿、丸皿、天目茶碗が主体を占め、流れ込みの可能性がある堆積土にわずかな志野がみられる。窯の年代は、第4段階前半が主体で第4段階後半まで操業されたと考えられる。なお、1号窯より西側にある谷にトチンやヨリ輪などの窯道具が多くみられることや、6トレンチの東側（窯の左側）で出し入れ口がみられないことから、製品の出し入れ口は窯の右側にあった可能性が高い。

2号窯は、『黄瀬戸』によれば「小分炎柱が12本平行し、昇炎壁が約15cmみられ、窯室の中央には大柱が1本立っている」と書かれているが、5トレンチでもそのような状況は見られないため、加藤唐九郎の調査以降に焼成室付近が滅失した可能性が高い。各トレンチと現地の状況から、推定全長約7.0m、最大幅約3.4mが求められる。遺物の様相からは、第4段階後半と考えられた。現地形から推察すると、5トレンチ付近で平坦面がみられるのは窯の右側であるため、出し入れ口は窯の右側である可能性が考えられる。

調査の成果から、大萱窯下古窯跡では1号→2号と移っていったことが推定される。両窯跡の上方、尾根近くには平坦面があり、作業場遺構がある可能性が高い。

## 第3節 まとめ

牟田洞、大萱窯下の両古窯跡は、吹き上げる風を利用したような地形上の立地ではあるが、



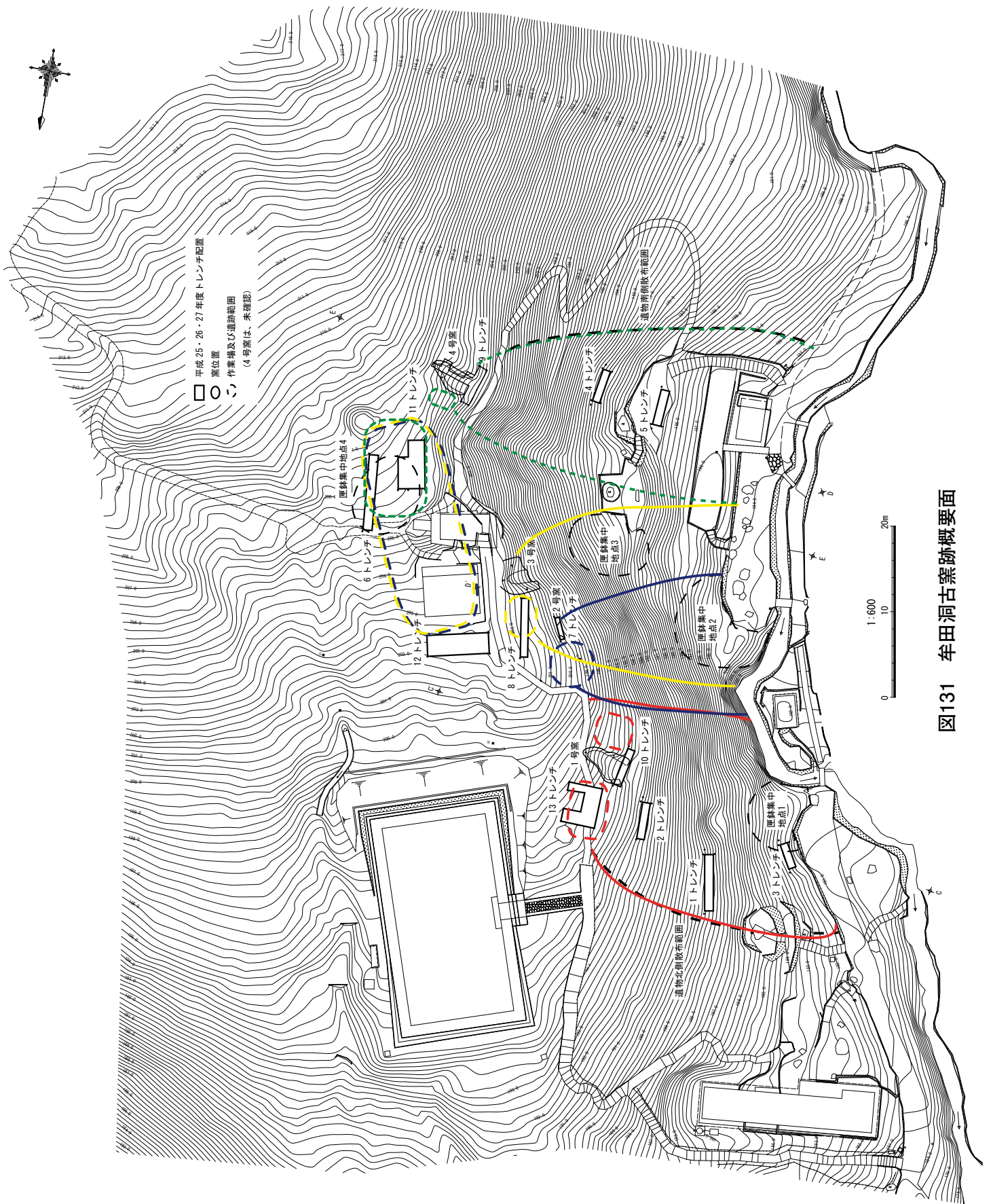


図131 車田洞古窯跡概要面

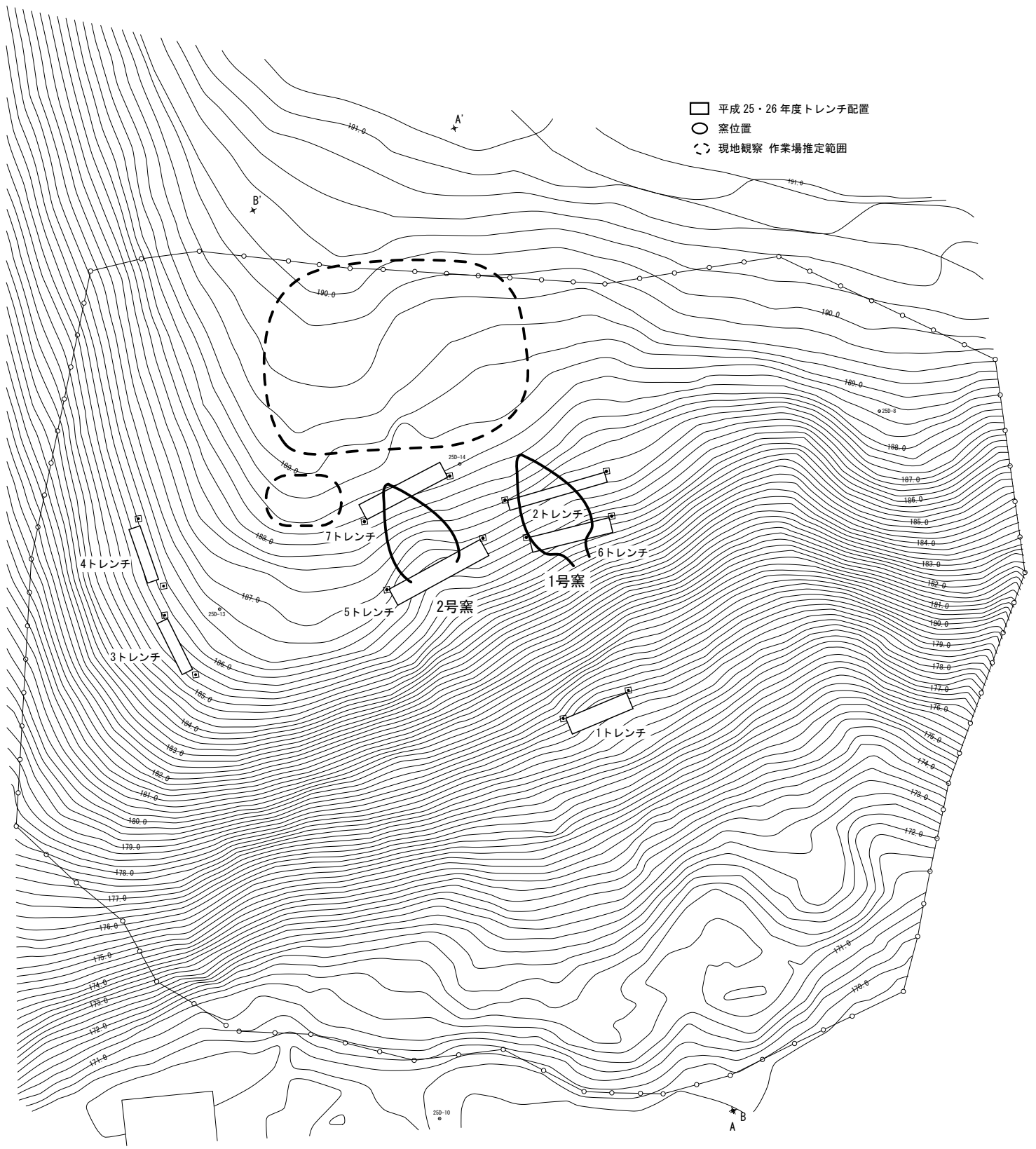
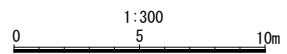


図132 大萱窯下古窯跡概要図



調査中を含め、それほど風を感じない。今回の調査により出土した遺物から、牟田洞と大萱窯下は、編年上ほぼ同時期の窯跡であることが判明した。また、同一の窯記号が入った窯道具や製品の組成、胎土、釉薬も似通っており、部分的な調査ではあるが同一グループが操業していた可能性が高い。

窯の規模は、第3段階後半にあたる多治見市尼ヶ根2号窯は、全長7.02m、最大幅は3.48m、第3段階後半～第4段階前半にあたる土岐市定林寺東洞1号窯は、全長は不明であるが最大幅は4.25mである。第4段階で規模が分かる窯は土岐市高根窯沢窯、同市隠居西窯、同市定林寺西洞1号窯、瑞浪市大川東2群2号窯が挙げられ、高根窯沢窯は全長6.2m（推定）、最大幅3.3m、隠居西窯は全長6.2m（推定）、最大幅3.0m、定林寺東洞1号窯、大川東2群2号窯は焼成室が4.0mを超える。大窯の第4段階前半まで窯の規模が拡大していき、第4段階後半以降規模が縮小する傾向が見てとれる（伊藤1989・加藤他2002）。小型化の要因は大窯生産のより一層の高級品志向や、志野や黄瀬戸などの桃山陶の燃焼効率をあげるためとも考えられている（瀬戸市1993）。牟田洞、大萱窯下も第4段階の規模が縮小する時期の窯といえるが、牟田洞3号窯や大萱窯下2号窯は、焼成室の幅がやや大きくなる傾向がみられる。

窯場による生産様相の違いとして、尼ヶ根1、3号窯は瀬戸黒や灰志野を焼成する窯跡、定林寺西洞1号窯は瀬戸黒や志野、隠居西は志野や織部黒、大富西窯は志野だけを生産する窯跡であり、焼成品の違いは第4段階前半にみられ、第4段階後半には窯ごとの生産様相の違いが鮮明となる。また、牟田洞窯は終末期の志野を生産する窯跡であることが指摘されている（土岐市2012）。しかし、牟田洞、大萱窯下ともに灰志野、瀬戸黒、黄瀬戸、志野などの多種の桃山陶が生産されている。また、桃山陶は全体の焼成製品の中では、ごく一部分であり、器種としても鉢や向付の割合が決して高くはない状況があり、茶陶や懐石具といった付加価値の高い製品は生産されているものの主要機種ではなく、主要器種は天目茶碗や皿類、挿鉢が中心である。

牟田洞と大萱窯下は、天目茶碗、向付、皿類、挿鉢と豊富な器種を生産しており、需要のある地域のニーズに応え、広い範囲に製品を流通していたと考えられる。また、桃山陶についても、発掘調査や過去採集資料から美濃古窯跡群の中でも量は多くはなくとも良好な製品を焼いていることが窺える。

両窯跡が立地する久々利大萱地区は、盆地状に沖積地が広がる。今のところ周辺で集落跡は確認できていないが、沖積地のどこかに居住域が考えられる。また、牟田洞、大萱窯下の生産は17世紀初頭に終わり、大萱地区における生産は谷の反対側にある連房式登窯の弥七田古窯跡（連房第1段階後半～2段階）に移るが、両陶工集団がどのように編成され生産を継続していくのか、岩ヶ根古窯跡など未確認で詳細が不明な3基の窯跡が第4段階末に該当するのか、今後の検討課題といえる。

#### 第4節 大萱古窯跡群の重要性

平成24～27年度に調査を行った牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡、平成28年度から試掘調査や整理作業を行っている弥七田古窯跡の3地点からなる大萱古窯跡群について、その重要性を列挙する。

- ①牟田洞古窯跡は、荒川豊蔵が昭和5年に志野の陶片を発見し、桃山陶（黄瀬戸、瀬戸黒、志野）が尾張の瀬戸で焼かれたという定説を覆した記念すべき窯跡である。この発見は「美濃」桃

山陶として再評価につながり、美濃桃山陶の研究の起点になったこと。

- ②牟田洞古窯跡では3基の大窯が発見され、うち2基は残りが良く、大窯の上方には作業場や工房が展開し、操業は編年上大窯第3段階後半から第4段階後半（16世紀第四半期から17世紀初頭）に位置づけられたこと。
- ③大萱窯下古窯跡では2基の大窯が確認され、大窯の上方には平坦面が認められることから作業場や工房もセットで遺されている可能性が高いこと。
- ④大萱窯下古窯跡では、加藤唐九郎が黄瀬戸の記年銘資料を採集していること。
- ⑤牟田洞古窯跡や大萱窯下古窯跡では、過去の出土品から国宝「卯花塙」など、この上のない名品を生産した可能性が高いこと。
- ⑥牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡の操業期間は、ほぼ同じであることが確認できた。別の陶工集団による開窯と考えられるが、同じ大萱地区で操業され、一致する窯記号を持つ窯道具が存在することから、両窯の陶工集団に深いつながりがあることが分かった。また、弥七田古窯跡にも同様の窯記号がみられることから「群」としてみた場合、面的だけではなく時間軸においてもつながりが想定されること。
- ⑦弥七田古窯跡では、「弥七田織部」と特別に称される織部を焼いており、他の織部製品と容易に区別できること。
- ⑧3カ所の窯跡とも、大きな改変が入ることなく、地形も含めて良好に遺存していること。
- ⑨編年上、土岐市元屋敷陶器窯跡の前の時期に牟田洞古窯跡と大萱窯下古窯跡が、後の時期に弥七田古窯跡が位置づけられ、美濃古窯跡群の窯体構造や陶器製品の変遷を考える中で、重要な編年的位置を占めること。

これらを踏まえ、大萱古窯跡群は美濃古窯跡群の中でも歴史的価値が高い遺跡と言える。それに加えて、荒川豊蔵が志野陶片の発見を機に居を構え、志野や瀬戸黒などを復興させて重要無形文化財保持者に認定された場所である。氏が使用した窯や陶房、居宅も残り、文化的にも価値の高い場所と言えよう。

#### 〈参考文献〉

- 荒川豊蔵 『志野』陶器全集第4巻 1959 平凡社  
伊藤嘉章 「瀬戸・美濃における大窯製品」『研究紀要第』2号 1988 岐阜市博物館  
井上喜久男 「美濃窯の研究(一)」『東洋陶磁』第15・16号 1988 東洋陶磁学会  
伊藤嘉章 「瀬戸・美濃大窯の窯体構造—その変遷と意義—」『美濃の古陶No.3』1989美濃古窯研究会  
加藤真司他 『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』2002財団法人土岐市埋蔵文化財センター  
加藤唐九郎 『黄瀬戸』1933 寶雲社  
可児市 『可児市史』第一巻 通史編 2005  
可児市 『可児市史』第四巻 自然編 2007  
可児市教育委員会 『久々利奥磯山4号窯』1988  
林順一・加藤真司 『隠居表1・2号窯跡発掘調査報告書』1992 土岐市教育委員会  
林順一・張替清司他 『高根古窯跡群発掘調査報告書—工房跡の範囲確認調査—』2009 土岐市教育委員会  
瀬戸市 『瀬戸市史』陶磁史篇四 1993

- 田口昭二・若尾正成他 『尼ヶ根古窯跡発掘調査報告書』 1987 多治見市教育委員会  
田口昭二・今井静夫他 『隠居西窯跡発掘調査報告書』 1988 土岐市教育委員会  
土山公仁 「随縁論」『荒川豊蔵展』 1993 岐阜市歴史博物館  
土岐市美濃陶磁歴史館 『特別展 三条界限のやきもの屋』 2001  
土岐市美濃陶磁歴史館 『土岐市収蔵品展Ⅱ―収蔵品にみる美濃窯の歴史―』 2004  
土岐市美濃陶磁歴史館 『第17回織部の日特別展 織部様式の成立と展開』 2005  
土岐市美濃陶磁歴史館 『第24回織部の日特別展 美濃桃山陶の生産』 2012  
檜崎彰一編 『美濃の古陶』 1976 美濃古窯研究会  
檜崎彰一・伊藤嘉章他 『高根山古窯跡発掘調査画概報』 1984 土岐市教育委員会  
藤澤良祐 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』 第10輯 2002 財 瀬戸市埋蔵文化財センター  
藤澤良祐・森まどか他 『大萱窯跡群 牟田洞窯跡第1・2次発掘調査概要報告書』 2016 愛知学院大学





牟田洞古窯跡・大萱窯下古窯跡遠景（北より）



牟田洞古窯跡（南西より）



物原状況（西より）

牟田洞古窯跡



1号窯 掘削前（北西より）



焼成室遺物出土状況（西より）

1号窯（10トレンチ）



1号窯 (10トレンチ)



完掘状況 (北より)



完掘状況 (南西より)



分炎柱と床面 (西より)



左壁検出状況 (南東より)



右壁出入口部分 (北より)



右壁検出状況 (東より)



2号窯 掘削前 (東より)



完掘状況 (北西より)

2号窯 (7トレンチ)





左壁検出状況（西より）



右壁検出状況（西より）

2号窯  
(7トレンチ)



3号窯露出床面（北西より）



3号窯露出分炎柱（西より）

3号窯



9-1 トレンチ東壁土層（西より）



9-1 トレンチ北壁土層（南より）

4号窯  
(9トレンチ)



完掘状況（西より）



9-2 トレンチ南壁土層（北より）





煙道部付近 (北西より)



焼成室、燃焼室 (北東より)

4号窯(9トレンチ)



昇炎壁と構築材 (西より)



燃焼室構築材 (東より)



東壁土層 (北西より)



南壁土層 (北より)

8トレンチ



3号窯平坦面 (西より)



平坦面被熱部分 (西より)





完掘状況（北より）



6  
ト  
レン  
チ

東壁土層断面（西より）



完掘状況（北より）



11  
ト  
レン  
チ

ロクロピット（北より）



完掘状況（西より）



12  
ト  
レン  
チ

南壁土層（北西より）



完掘状況（北西より）



13  
ト  
レン  
チ

溝検出状況（北より）





完掘状況（北西より）



1  
トレン  
チ

南壁土層（北より）



完掘状況（北西より）



2  
トレン  
チ

南壁土層（北より）



東壁土層（西より）



遺物出土状況（西より）



東壁土層（北西より）



3  
トレン  
チ

南壁土層（北より）





東壁土層（北西より）



北壁土層（南より）

4  
トレン  
チ



東壁土層（南西より）



北壁土層（南より）

5  
トレン  
チ



完掘状況（北東より）



床面遺物出土状況（北より）

大  
菅  
窯  
下  
古  
窯  
跡  
2  
ト  
レン  
チ  
(  
1  
号  
窯)



左壁検出状況（南西より）



右壁検出状況（東より）



6  
ト  
レン  
チ  
(  
1  
号  
竈  
)



南壁土層 (北西より)



東壁土層 (西より)



床面遺物出土状況 (北西より)



床面遺物出土状況 (北東より)



遺物除去後床面 (北西より)



遺物除去後床面 (南より)



調査前露出床面 (北より)



完掘状況 (西より)

5  
ト  
レン  
チ  
(  
2  
号  
竈  
)





南壁土層（北西より）



床面中央付近（北より）

5  
ト  
レン  
チ  
（  
2  
号  
窯  
）



左壁検出状況（北西より）



右壁検出状況（北東より）



完掘状況（北西より）



南壁土層〔被熱部分との境〕（北より）

7  
ト  
レン  
チ  
（  
2  
号  
窯  
）



南壁土層〔窯部分〕（北より）



北壁土層（南より）





完掘状況及び南壁土層（北東より）



天目茶碗出土状況（北より）

1  
トレンチ



西壁土層（東より）



北壁土層（南より）

3  
トレンチ



西壁土層（東より）



南壁土層（北より）

4  
トレンチ



大萱踏査風景



作業風景







8



9



9

9  
トレンチ



2



3



4

8  
トレンチ



5



7



8



9



12



13



1



2



3

1  
トレンチ



4



5



6



4



5



8

2  
トレンチ

2  
トレンチ



10



11



13



14



15



17



20



21



23



24



25



26

3  
トレンチ



2



3



4

4  
トレンチ



1



2



3



6



7



8

4  
トレンチ



10



11



12



13



14



16

5  
トレンチ



1



2



4



6



11



12



13



15



16



18



21



24



25



27



28





29



30



32



33



34



36



38



39



40



41



43



45



47



48



49



51



54



49



55



57



59











41



54



60



41



54



60



42



54



61



40



49



61



40



49



64



47



56



64



47



56



55



47



58



62



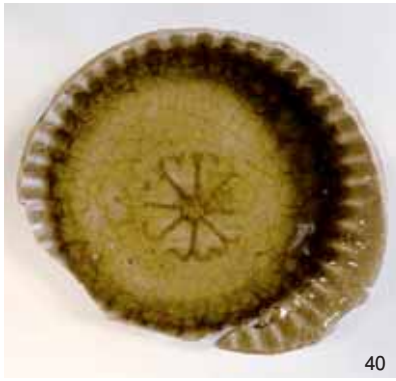
58











40



49



52



40



49



52



42



54



52



42



58



63



44



60



63



44



61



63



51



61



70



61



70



71



71





67



69



86



67



69



86



87



68



82



87



82



82



87



68



83



83



95





89



91



93



90



92



93



94



88



88



A









2  
トレンチ



1



3



4



6



8



11



12



14



15



2



10



11

6  
トレンチ



14



15



17



18



19



20



21



22



23



6  
ト  
レン  
チ



25



26



27



28



30



32



33



36



39



40



41



42



45



47



48

5  
ト  
レン  
チ



1



2



4



6



8



9

7  
トレンチ



2



3



5



8



9



10



13



17



19



1



4



5

1  
トレンチ



6



19



20



25



29



32



34



35



38



39



41



42



45



46



47



48



51



52



53



56



58



59



61



58



63



65



67



70



71



72





74



75



77



79



81



82



83



87



89



92



93



94



95



100



106



109



110



111



113



114



115

1  
トレンチ



117



119



120



121



122



123



124



126



123



1



2



3

3  
トレンチ



7



12



13



15



17



22



25



29



33

4  
トレンチ



6



9



21



7



15



15

表  
採



18



19



22



24



25



26



28



29



31



32



33



35



39



40



44







41



42



50



55



56



58



62



64



68



66



67



68



71



72



73



75



76



77



78



82



85



84



87



88



84



89



90



92



93



94



95



96



100



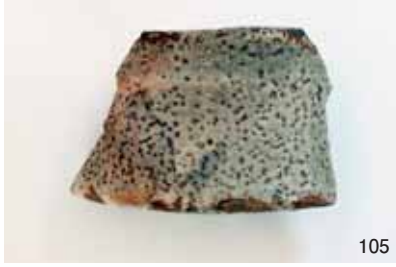
101



102



103



105



106



107



108



108



109



# 報告書抄録

ふりがな	おおがやこようせきぐんはつくつちょうさほうこくしょ いち						
書名	大萱古窯跡群発掘調査報告書 I						
シリーズ名	可児市埋文調査報告						
シリーズ番号	48						
編集・著者名	長江 真和 森 まどか 片岡 優歩 佐藤 美鈴 日比野将之 森村 知幸	藤澤 良祐 石浜 莉那 片山 尚樹 鈴木 愛実 堀内 有 山本 駿	金田 明大 伊藤 真央 加藤 友也 高野 夏姫 三ツ本樹純	竹原 弘展 上田 悠太 木藤 稜 濱崎 健 宮田 実歩	小林 克也 垣見 太郎 小林 万容 半場 千晴 森 秀人		
編集機関	可児市教育委員会						
所在地	〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地						
発行年月日	西暦2016年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号			面積	
むたぼらふるかまあと 牟田洞古窯跡	ぎふけんかにしくくり 岐阜県可児市久々利 かきしたிரりあい 柿下入会 352	21214	7548	35° 23' 58"	137° 08' 11"	20130823 ~ 20131002 20140818 ~ 20141014 20150817 ~ 20151009	遺跡の 内容確認
おおがやかましたふるかまあと 大萱窯下古窯跡	かにしくくり 可児市久々利 313-1 外	21214	4887	35° 23' 51"	137° 08' 19"	20140205 ~ 20140324 20140818 ~ 20141014	遺跡の 内容確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
牟田洞古窯跡	生産遺跡	安土桃山	窯体 作業場遺構 物原	施釉陶器 窯道具		3基の窯跡を確認。	
窯下古窯跡	生産遺跡	安土桃山	窯体 物原	施釉陶器 窯道具		2基の窯跡を確認。	

## 大萱古窯跡群発掘調査報告書 I

平成28年3月25日 印刷  
平成28年3月25日 発行

編集・発行 可児市教育委員会  
〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地  
Tel 0574-62-1111 Fax 0574-63-6751  
印刷 丸理印刷株式会社

